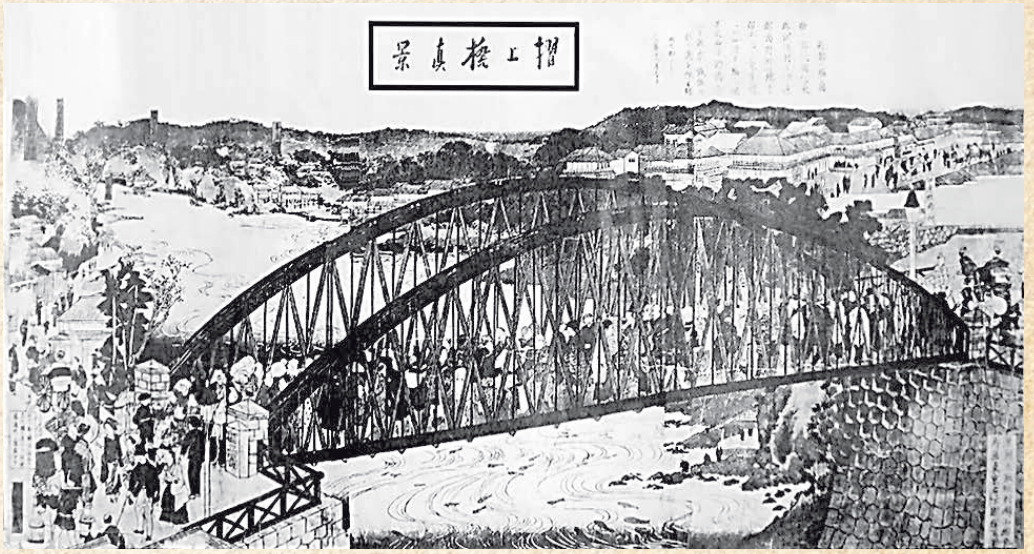
Rotary

我が郷土

飯坂の歴史を辿る

飯坂ロータリークラブ週報抜粋記録



「摺上橋真景」の図　明治６年

国際ロータリー第2530地区

飯坂ロータリークラブ創立60周年記念

ごあいさつ

佐藤 真也 ―――― 2017-2018 年度　飯坂ロータリークラブ　会長

飯坂ロータリークラブは昭和 33 年 5 月 5 日の創立以来、歴史と伝統を守りながら、今年で 60 周年の節目を迎えました。これまでの長きにわたる地域の皆様のご支援、ご協力に心より感謝を申し上げます。

当クラブでは 60 周年に向けての活動の一環として、ここ数年にわたり地元飯坂地区の歴史や文化を振り返り、様々なテーマで地域の有識者の皆様を例会にゲストとしてお招きし、継続的に会員の知識向上と歴史的価値の再認識に勉めてまいりました。この度、創立 60 周年を記念し、これまで例会でゲストの皆様にご講話いただいた内容を「飯坂の歴史を辿る」と題し一冊の本にまとめ、飯坂の歴史編纂誌として発刊させていただくこととといたしました。この本が皆様にとって地元飯坂の歴史の再認識と、次世代を担う子供たちへの伝承の一助としてご活用いただければ幸いです。

千葉 政行 ―――― 創立 60 周年記念事業実行委員会　委員長

飯坂ロータリークラブ創立 60 周年の記念事業は、日頃よりご厚情を賜ります地元飯坂の皆様へのご恩返しと、地域の未来を担う子供たちへの贈り物になるような事業を実現したいという会員一致の思いで、飯坂の歴史編纂誌を発刊し、地域の皆様に配布させていただくこととといたしました。温泉とともに発展と変化と遂げてきた我がまち飯坂の歴史を、様々なテーマでわかりやすくまとめたこの本は、飯坂の歴史に造詣の深い多数の有識者の皆様のご協力と、歴史編纂誌編集委員会の努力により、「飯坂の歴史を辿る」という名で飯坂の歴史を語る貴重な一冊として発刊が実現されました。ここに厚く御礼と感謝を申し上げるとともに、地域の皆様におかれましては、末長くご愛読、ご活用を賜り、飯坂の歴史と文化の伝承にお役立ていただければ幸いです。

我が郷土

“ 飯坂の歴史を辿る ” 編纂の想い

『未来と、そして現在は過去から繋がっている』との言葉があるとおり、日頃、私達が町で身近に接している古い建造物や遺産には、昔から伝承されている過去があり、それが現在まで継承されているものがあります。

そこには先人の知恵が働いており、今の人々の生活に文化的な幸せを与えています。飯坂ロータリークラブでは、郷土の歴史をひも解き、改めて、先人の人々の苦労を認識し、月日の経過とともに薄れていく歴史をクローズアップし、消え去ってしまう伝承を記録に残すプロジェクトを考えました。

“歴史に想いを馳せる事”によって、子供達を含む町の人々と共に過去から造られた郷土に誇りを持ち、史跡の保存や住みよい町並み造りの啓蒙を積極的に進める事業として、この本の編纂を計画したわけであります。

“歴史に想いを馳せる事”　*例えば、昔は深い谷川で崖を下り、渡し船で渡り、崖をよじ登って対岸にたどりつきました。しかし、今は近代的な橋(十綱橋)を何気なく簡単に渡ります。この近代的な橋にたどりつくまでの先人達の苦労の歴史が、また、昔の町はかやぶき屋根が多い町並み、一度出火すると何十戸が類焼する大火(明治、昭和の**飯坂大火**など)が伝承されているが、詳しくは一般的には記録に残されておりません。現代では耐火建築が普通となり、また、防火体制も充実していますが、ここ迄たどりつく人々の苦労は大変なものだったろうと考えられます。この様に歴史をひも解く事により、改めて、先人の人々の苦労を認識するとともに感謝し、主旨の啓蒙になればと思っております。*

飯坂の個々の歴史について、知識豊かに調査研究や発表をしている人々がいます。その人達の歴史観や歴史録は**飯坂の歴史を辿る**においては貴重なもので、長く記録に残すべきものであると思います。

ロータリークラブでは、その方たちをゲストスピーカーとしてお招きし、その内容を記録として残し『***飯坂の歴史を辿る***』と題して本を編纂し、各小中学校、及び各町内会に配布します。

文調はゲストスピーカーの個性を尊重し、内容は出来るだけスピーカーの表現とおりにあらわして、文を作りまとめました。

本の特長としては子供達も高齢者も含めて読みやすい文章にし、挿絵や絵の説明文を工夫する事によって今までにない切り口の歴史の冊子を目指しております。

また歴史文は堅い文脈が多く敬遠されがちの為、文章もカラーにし、既存の歴史書とは思えない本とする事をモットーに　我が郷土いいざかの『家庭の身近な歴史本』　として家庭の備本になればロータリークラブ事業として大変意義が深いと感じております。

【 編纂にご協力の方々 】

著作権アドバイザー	大滝　哲祐 氏	北海学園大学 法学部准教授(民法)	札幌市豊平区
校正ボランティア	篠木想乃子 氏	明治大学２年生	横浜市青葉区

平成 30 年　3 月　31 日

飯坂ロータリークラブ

『***飯坂の歴史を辿る***』

製本作成　編集委員会

委 員 長　篠木　勝司
副委員長　佐藤喜市郎
鈴木 義明
小松　淳
堀切　孝敏
鈴木　重忠
川又　康彦

〔 **後記**、文レイアウトの **字体**、及び **カラー**を変化させて読み易くするため、Word と画像の混載で作成したため、字間、及び行間がアンバランスのところあり、ご了解 願いたいと思います 〕

我が郷土

飯坂の歴史を辿る ～ シリーズ ～

目　次

飯坂ロータリークラブ
歴史記念誌編集委員会

シリーズ 第1回 2013. 8. 22 『刀から辿る旧湯野村三州刈谷藩陣屋の姿』…… 刀 剣 鞘 師 小野 幸一様 P-1

シリーズ 第2回 2013. 11. 14 『 赤川の 流れを辿る 』…… 飯坂史跡保存会会長 小柴 俊男様 P-5

シリーズ 第3回 2013. 3. 20 『ラジウム と 飯坂温泉』…… 元飯坂史跡保存会会長 斉藤 康夫様 P-7

シリーズ 第4回 2014. 5. 25 『花街 飯坂はいかにして表象されたか』… 東北学院大文学部歴史学科民俗学専攻 蒲倉 綾子様 P-10

シリーズ 第5回 2015. 1. 15 『飯坂のシンボル 十綱橋の歴史を語る』…… 元日本道路公団勤務 安斉 鉄夫様 P-17

シリーズ 第6回 2015. 5. 21 『Part Ⅰ 西根堰 余 話 』…… 元飯坂史跡保存会会長 菅野 栄二様 P-24

シリーズ 第7回 2015. 8. 6 『 旧13号線 万世大路の面影 』…… 大滝(中野)会 会長 木村 義吉様 P-31

シリーズ 第8回 2015. 9. 10 『Part Ⅱ 西根堰がもたらした西根郷への効用』……西根堰土改区事務局長 石川 博利様 P-37

シリーズ 第9回 2015. 11. 12 『飯坂温泉の江戸,大正,昭和,平成を辿った中村屋の想い 』…… 中村屋旅館 おかみ 高橋 武子様 P-43

シリーズ 第10回 2016. 1. 21 『 芭蕉の辿った飯坂の細道 』…… わたり福祉会 理事長 高橋 重久様 P-48

シリーズ 第11回 2016. 2. 25 『 明治、昭和の飯坂大火の真相 』…… 飯坂消防署 署長 丹治 正一様 P-55

シリーズ 第12回 2016. 3. 10 『飯坂電車 東線、西線の歴史』…… 路面電車を偲ぶ会会長 安斎 武 様 P-61

シリーズ 第13回 2016. 4. 21 『妖怪大蛇から茂庭を救った16歳の猿姫物語と茂庭の句景』…… 茂庭地区町内会連合会長 渡部 永夫様 P-68

シリーズ 第14回 2016. 5. 12 『 飯坂街道 と 坂の町 飯坂の謎 』…… 飯坂史跡保存会 理事 安斉 鉄夫様 P-74

シリーズ 第15回 2016. 9. 8 『悲劇の武将“義経”と“継信忠信”物語』…… 元大鳥中学校教頭 安達 龍雄様 P-82

シリーズ 第16回 2016. 9. 29 『八幡神社けんか祭りと太鼓屋台の歴史』…… 元第2530地区県北ガバナー補佐 佐藤喜市郎様 P-88

シリーズ 第17回 2016. 12. 1 『古き飯坂、娯楽殿堂『旭座』ものがたり』… 元福島県立北高等学校教諭 佐藤 紀和様 P-94

シリーズ 第18回 2017. 2. 16 『古文書から辿る旧湯野村、穴原温泉の姿』…福島文化センター学芸員 小野幸太郎様 P-98

シリーズ 第19回 2017. 5. 25 『今、初めて明らかになる大鳥城の面影』…… 市文化財保護指導員 但木 秀徳様 P-105

シリーズ 第20回 2017. 6. 8 『今は無き 銀杏旧農林省蚕糸試験の偉業』……福島市史編纂室 守谷 早苗様 P-111

【 附 記 】銀杏の飯坂南部区画整理事業は 100 年 200 年
の先を見つめた計画であった。……元 飯坂南部区画整理事業委員会 委員長 佐藤董一 様 P-117

WEEKLY REPORT OF IIZAKA ROTARY CLUB, DIST. 2530　広報会報委員会 謹製

飯坂ロータリークラブ 週報

創　立　昭和33年（1958）5月5日
ガバナー　渡邉公平
ガバナー補佐　紺野義人
会　長　堀切知之
幹　事　村田安啓

<地区テーマ>
未来の子供たちの
輝く笑顔のために

2014～2015年度
RI会長　ロンD. バートン
ノーマン・ロータリークラブ（アメリカ、オクラホマ）

◆ 例会日／ 木曜日１２：３０　◆ 例会場／ 飯坂温泉「伊勢屋」
事務局/960-0201 福島市飯坂町字西堀切22（伊勢屋内）☎(024)543-1433 Fax(024)543-1433

言行は此れに照らしてから
四つのテスト
1, 真実 か どうか
2, みんなに 公平か
3, 好意と友情を深めるか
4, みんなの為に なるかどうか

通　算
第７回［ 2692 ］回目 例会報告

平成25年（2013）8月22日(木)

出席委員会報告

会員総数	29名
出席会員	18名
欠席会員	11名
出席率	62.07%

例会場変更　【吉川屋】

◆開　会　点　鐘　堀切知之　会長

◆ロータリーソング　〔手に手つないで〕　畠　隆章 会員

◆四つのテストの唱和　堀江征夫　職業奉仕委員

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第１回 ～
『 刀から辿る旧湯野村三州刈谷藩 陣屋の姿 』

◆ ゲストスピーチ　刀剣鞘師　小野幸一　様　(2013. 8. 22)

ただ今、ご紹介いただきました刀剣の鞘を作っております小野幸一でございます。宜しくお願いいたします。ロータリークラブでの講演は、大体７度目ぐらいになると思いますが、一番始めは３０数年前の小笠原長史先生が会長さんの時で、お話をしたことを原稿に起こしていただいたのは徳富先生でした。いずれも故人になってしまって非常に残念に思います。さて、今まで刀に関する基礎的な話や合戦の話をしてきましたが、今回はちょっと話題を変えまして、私がどうしてこんな**刀の鞘を作るようになったのか**というお話をしたいと思います。それともう一つ、**湯野に刈谷藩の陣屋**がありました。その刈谷藩の陣屋についてもお話をしたいと思います。刀に興味を持ったのは、５０年ほど前、私が２０代の前半のときでした。たまたま刀の収集をしている方と知り合うことになりまして、その方に刀を見せてもらったり、刀の魅力についてのお話を聞いたり、本を借りて読んだりしているうちに、大変良い物であり、魅力的な物だということで、私もそれにハマっていき、刀の収集を始めました。

ゲストスピーカーを紹介する佐藤喜市郎会員

その頃はまだ刀は大変安かったのです。サラリーマンの給料で私でも１０本ぐらいは集められることがあったのです。これを集めた後に、やはりで研いでもらったり、鞘を作ったりしなくてはならないのですが、そのときちょうど泉に平原さんという刀の研ぎ師さんがおりましたので、そこに出入りするようになりました。その方はもともと新潟出身で、東京に刀研ぎの弟子に入って、そのまま東京で独立をして刀研ぎをしていたのですが戦争が始まると、その方が今度は兵隊に引っ張られまして、兵隊に行くのですが、帰ってきたら東京は焼け野原で、奥さんは疎開して居なかったそうです。その奥さんが福島市出身であっ

ゲストスピーカーの郷土の歴史に耳を傾けるクラブ会員

たために、奥さんは福島の方に疎開していました。それを頼って平原さんは福島に来て、福島での生活が始まったのです。 戦後、刀というのは一時大変廃れてしまって、刀関係の人達は誰も刀の仕事をすることができないぐらい落ちぶれてしまいました。平原さんも戦後は福島製作所の工場勤めをやっており、その後にオリンピックがあって、その手前あたりから、日本の中の景気が良くなってきて、色々な骨董品の価格も値上りして、研ぎの仕事に平原さんも戻りました。戻ってみて、福島でたった一人で研ぎをやるものの、鞘も作ってないと裸では研ぎができないのです。 それで自分の以前からの知り合いであった東京の人に刀を送って、鞘を作ってもらったり、また、仙台に鞘師が一人残っていたのですが、そこに奥さんが汽車に乗って、1本ずつ刀を抱えて行き、鞘ができたらまた汽車に乗って取りに行くというような大変な状況でした。

私も何回か出入りしているうちに、**『誰か鞘を福島で作ってくれる人がいれば助かるのだけどなぁ…』**という話を何回も聞きました。私はまだ勤めておりましたから、そんなことで食べていけるのか心配だったのですが、「いや、今は仕事がいっぱい入ってきていて、仕事はあるから食べてはいかれるよ。」ということだったのです。じゃあ、鞘を作るのをどこで覚えるのだということになり、その頃、上野の国立博物館で、日本でそういう技術が廃れてしまうということに危機感を持っていて、全く何も鞘作りを知らない人にでも見せて、ある程度話をしてくれるという講習会がありました。旅費も宿泊費も自分で負担しなくてはならなかったのですが、博物館で見ることができることとなったのです。私もそういうことがあるのでは見に行こうとしましたら、その時点で今度は代々木に刀剣専門の博物館ができました。

そこで今度は本気になってそういう職方を育てていくことになるということで、上野の博物館の場合は講習会という名前でしたが、講習会というのはあくまでもどういうふうにして作るのか見せることで、代々木の刀剣博物館で募集したのは研修員という形でした。研修員は直接指導を受け、一人一人について作ることを教えていくということです。それに採用されれば、交通費も宿泊費も全部博物館で負担するということでした。これは良い条件だと思って、すぐに応募したのですが、それだけの博物館が本腰を入れているということですから、どのくらいの技術があるのか一度見たいということなのです。私はサラリーマンをしていて作ることができなかったのですが、一応毎年コンクールがあるので、そのコンクールに一度出品してくださいということになりました。どうしようかと思っていたら、たまたま桑折の缶詰工場の工場長の久保さんという人が、やはり刀が好きで集めていて、前の赴任地の島根県の時に、そこの鞘師さんによる通って、自分でも作れるように毎日教わったというのです。ある程度自分で作ることができるというので、これはめったにない機会だし、私も通うから教えてくださいとお願いしたら快く教えてくれて、私も勤めながら夜毎日通いました。それで久保さんに、鞘の基本を教わって、**私も全国のコンクールに２年連続出品し２年連続で入選したのです。**

それで博物館は採用するということで、その時は１年で全国各地から５人でした。１週間滞在してびっちり教わるのですが、それを３年間、それが終わると研修修了証がいただけるわけです。日本で第一人者と言われた広井信一先生という先生に、直々に３年間師事しました。全くの素人で鉋(かんな)かけひとつできなかったところから、年々私も成長していって覚えたわけですが、その後研修が終わると、今度は自分の努力次第です。夢中になって私も色々やって、先生に個人的に行って教えていただいたり、研修会へ行ったり、色々な方にご教授を願いました。ちょうど私も３０歳で刀剣の外装工房を開きました。それから自分で少しずつやっていたのですが、なかなか直ぐにはお客さんが居るわけではありません。私を送り出した平原さんという研ぎ師さんの仕事を主にやっていこうと、それで何とかなるだろうと考えていたのですが、その後、コンクールが毎年ありましたので、私は私なりに出していきました。今度は３回、賞を取ることができました。**３回賞を取った時点で、全国の刀関係の機関紙**に名前が出ますから、皆に分かってしまうわけです。そうすると、刀鍛冶や研ぎ師や刀屋さんから色々な問い合わせがあって、注文が入ってくるわけです。私はそういうふうにして、特殊な人柄の仕事があるので、別に家に看板を掲げませんでした。普通の家なので何をやっているか分からないということで、ある時、そういう機関紙を見て東京から一人のお客さんが訪ねてきました。全国的な本に載っているのだから、飯坂の町の中でそういう仕事をしている人を当然知っているのだろうという考えで来たのですが、新幹線に乗って飯坂温泉駅で降りて、タクシーの

運転手さんに、「小野幸一さんという刀の鞘を作っている人のところにやってくれ」と言ったら「ええっ！飯坂に刀の鞘を作っている人が居るのですか？」と言われたというのです。その時、私が仕事して１０年ぐらい経っていたのですが、それでも周りは分からず、家に来たお客さんは、わざわざ東京から来たのに、こんなに苦労して探すとは思わなかったと言われたのです。それから、これは悪い事をしたと思い、家を通っていく人達に、せめてタクシーの運転手ぐらいには分かるようにと看板を出し始めました。今でも私は電話帳の職業別の欄には出しておりません。この商売が始まって４３年になりますが、一度も出した事はありません。ときどき文句を言われますが、特殊な仕事なので、結構皆さん、そういう刀関係の仲間内でお互い聞いて来ますので、意外に通りすがりに入ってきて、飯坂のこけしみたいな感じで買っていくわけではないし、観光客がのぞきにきても、買うわけではないので、ただ遊んで私も時間が取られるだけで、むしろ一般の家として分からない方が良いという感じなのですが、意外に飯坂の町の人にも知られないできました。私の頃はバブルがありましたし、大変良い時期だったというのもあり、沢山仕事がありまして、私は今まで割合ゆとりを持って生活をすることができましたが、これからは６０歳以上の人しか私のところにお客さんはいません。５０、４０代は時代劇も見なくなり、弟子を取れと周りからは言われているのですが、これからは食べていけない時代がきますから、無理に弟子を養成しても、何年もしないうちに悲惨な状態になることと思っていますが、現実にそういうことに今なり始めています。今まで仕事している人達もこの不景気で仕事が無くなっています。弟子は取らないで私達の代で終わっていくのじゃないかなと今は思っています。私たちも７０を過ぎていますから、そこら辺が境で一人ずつ居なくなったら終わりかなというところもあります。趣味か何かでやってくれればいいのですが、例えば、お金をたくさん持っていて、生活に困らなくて、暇があって、刀のこういうのを作るのが趣味だという人が居てくれれば、すぐにでも教えるのですが、やはり全生活を掛けて、子供を育てて、家を建ててとなると、これからは難しい話になります。刀の世界はそういうことなのです。

飯坂町湯野、西根神社入口にある三州刈谷藩分領、湯野陣屋跡地の碑

この仕事が始まったのは４０年前ぐらいですが、ちょうど始まって３年目ぐらいに、伏黒の宍戸さんという方が、短刀の鞘を作ってくれと持ってきました。その短刀の刻銘には**「刈谷藩鍛冶広重作」**と入っていました。年号は明治４年４月と入っていて、その時は大して気にもしなかったのですが、その後、保原から同じような短刀で同じような刻銘が出てきました。それから、伊達からも**「刈谷藩鍛冶広重作明治４年４月」**と彫った大刀が出てきたのです。私が今確認しているのは「刈谷藩鍛冶広重作」の刀は、短刀２本と大刀１本です。これはどういうことなのかということなのですが、刈谷藩というのが湯野にあったというのは知っていましたが、多分廃藩置県になって、向うの方に帰っていく時に、腰にさしていた武士達が刀を売って、お金に代えて帰っていったのではないか、そういう刀ではないかと思っていたのですが、よくよく考えてみたら、武士が腰にさしている時には、必ず“拵え”が付いています。というのは、「柄」や「鞘」や「鍔」が付いているのは当たり前なのですが、私が確認した３本は全く裸だったのです。何も付いていませんでした。これは武士が腰にさしていたのでは無いという判断を私はしました。それから、大小をさしていますので、かならず脇差も出ます。ところが脇差が１本も出ないのです。短刀と長い刀というのは何なのだろうということになって、私はこの刈谷藩について調べ始めました。**刈谷藩の湯野陣屋というのは、寛政４年（１７９２年）６月１５日、三河の国の刈谷藩主の土井利教の頃に、百姓一揆が**三河の国であったそうです。大変な百姓一揆だったようですが、うまく領主が抑えられなかったのですね。そのために罰として、幕府から三河の国に２万３千石あったのですが、そのうち１万石をこちらに飛ばされたのです。いわゆる**「村代え」**というものですが、１万石をここで治めろと刈谷藩にはまだ向うに１万いくらあるのですが、飛び地で２カ所納めなくてはならないのです。この伊達郡を中心に与えられた村は、今とちょっと名前が違いますが記録によりますと、伊達郡に八カ村、大波村、平沢村、成田村、板谷内村、塩の目村、下桑折村　増田村。そして信夫郡に、小倉寺村、岡部村、町大笹生村、田沢村、この１２カ村を刈谷藩で治めるということだったのです。この１２カ村を支配するために、どこに陣屋を作るかということになったのですが、この村の中で一番大きかったのが、**湯野村**だったのです。というわけで湯野村の字高畑という所に陣屋を作ることに決まりました。これは、今の西根神社が立っている場所です。そこに陣屋を設けました。後は周りとの村と交通の便も良かったのですね。

陣屋の規模は天保時代の記録によりますと、**奉行が１人、代官１人、手代が２人、目付が１人、足軽４人、門番１人、中元が４人。**だいたい**常勤は１４名**であったようです。やはりあの辺の人達に聞いて回ったのですが、うちの先祖は刈谷藩の陣屋に勤めていたという人が何人か出てきたのです。おじいさんとか、ひいおじいさんが刈谷藩の陣屋に勤めていたという話があったので、地区の人もそこで働いていたのですね。それで、雑用関係の人も入れれば、２０人以上はその陣屋に居たのではないかと思います。この陣屋は牢屋も建てられておりましたし、簡素ながらも、だいたい型通りの行政の陣屋があったようです。明治４年４月に廃藩置県が施行されましたので、刈谷藩は完全に解体することになるのですが、廃藩置県が出てから１年間余計に、刈谷藩はあそこにおりました。明治５年５月になって、刈谷藩の湯野陣屋は元**刈谷県の出張所**に名前が変わっていました。廃藩置県で藩は無くなっていましたので、刈谷県の出張所ということで牢屋を含めた建物と敷地が、入札によって払い下げられました。そして、８月になってから、建物の中の色々な家具類が入札でまた払い下げられました。この入札された物がどういう物か、これも記録が残っていますので、**大体の陣屋の大きさを**想定していただけます。畳が１００畳、板戸が６８枚、襖２１本、障子が５６本、半障子が１０本という記録が残っています。その時入札したものに対して、先ほど私がお話ししました短刀と日本刀は全く裸で出てきましたから、私のところに鞘を作りに来ているわけで、これは何に使ったのかというと、陣屋で使う備品だったのです。私はその後、江戸の刑罰ということで、江戸の小伝馬町でどういう刑罰をやっているのか調べてきました。

刈谷藩湯野陣屋跡地が在った現在の西根神社

　処刑する時は必ず首に縄をかけて、うしろで縛って処刑場に連れて行きます。そのとき処刑する前に縄を切るのが、九寸五分の短刀に決まっていたということが書いてありました。そうすると、この２本の短刀は、その時の縄を切るためだったのではないかというふうな推測ができます。それから脇差は全く出ない、じゃ伊達から出た脇差大刀は何に使おうとしたのか、これこそ首を切るための物じゃなかったかということなのです。ですが、実際に切ったのかということですが、もう廃藩置県に明治４年４月になっていますので、廃藩置県になってから向うから送ってきていますから、その刀は全く使わないままに、陣屋の備品としてあったので、建具やなんかを売り出す時に、この大刀１振り、短刀２振りを一緒に売りたてた物だと思います。ただ、やはりお金を持っていたのは、伏黒とか保原の方々だったので、湯野近くの人が買えることは無かったのではないかと思います。だから向こうの方の人が買って、今でも持っているのではないかと。そしてその後、湯野陣屋の場所は明治５年にすべて取り払って、サラ地になっていましたが、その後明治１８年に「西根神社創建願い」を福島県に出しています。西根というのは、桑折の阿武隈川の西側の耕地のこと**西根郷**をいうのですが、そこが全く水の便が悪くて、水田ができなかったのです。桑折の西の半田山の裾野の辺り、そこからずっと北にいくまで阿武隈川は低いので水が取れませんでした。阿武隈川の東側というのが**東根郷**と言いまして、そこは水が割合豊かで水田を作るのには問題は無かったようでしたが、その西側の人達がどこからも水が取れないということで、江戸時代前期頃、摺上川の上流から延々と水を持ってくるという工事になりました。その時に功績があった**古河善兵衛、佐藤新衛門**を奉ろうと考えていたのですが、なかなか場所が無かったらしく、たまたま刈谷藩の敷地が空きますので、空き地になる陣屋の後に、**西根神社**を建てようとなったわけです。建てたのは明治１９年３月ということになっていますが、これも確かなことかどうかというのは結構問題になっています。県の記録によりますと、明治１８年８月１５日西根神社創建願いというのを福島県に出しています。明治２０年１月１５日に西根神社創立聞き届けという物を福島県知事から逆に与えられています。その時は折田平内という知事でした。それまでの明治５年から明治１８年では、サラ地になっていて売る時には刈谷県として売ったのですが、その後、西根神社を建てる時は福島県宛てに願いを出していますので、その後は福島県の土地になっていたのではないかと思います。西根神社や西根堰に関しては、まだまだ私も調べているのですが、あそこは芋がら山のかたかり（地形が難しく堅い）の難所といってトンネルも掘れなくて、外側に樋を作って川の上に水を回したというようなことも色々ありますが、そこを手伝った畠一族、吉川屋さんのご先祖の方々達ですが、あそこで西根堰を作る時に一生懸命働いて、その功績によって上杉家の裏紋をもらったというようなお話もあり、その紋をお墓に使っているそうなのです。今日はこんなところで時間がきましたので終わりたいと思います。　　ありがとうございました。

◆閉　会　点　鐘　　会　長

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第２回 ～
『　赤川の流れを辿る　』

小柴様を紹介する佐藤喜市郎会員

◆ ゲストスピーチ　　飯坂史跡保存会　会長　小柴俊男　様 (2013. 11. 14)

独自の資料を使って飯坂の歴史を語る小柴飯坂史跡保存会 会長

「お久しぶりです」と言うことと「初めまして」と言うことが今日は重なりました。この度、私共の史跡保存会で標柱と案内板を作成するために協賛金をお願いして参ったのですが、本日はロータリーの皆様から協賛金をいただきまして、併せまして御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。どのような物が出来上がるかということで、まだ原本が来たばかりですが、これは東屋国神社の案内板と大鳥城の釜跡の案内板です。大鳥城の上り口に、平安時代の中期の瀬戸物を焼いた釜跡がありました。それを駐車場に潰してしまったものですから、もったいない話だということで、釜跡の案内板（説明板）を作りました。それから、**西原廃寺**については、教育委員会の方に申し込んでいたのですが、教育委員会の方では、この説明板と標柱が年に２つずつの作成なのです。そうしますと、飯坂だけで１３０いくつの名所旧跡がありますので、それを全部やってもらおうとしたら、おそらく１００年位かかるのではないかと思います。福島市全体ですから、とても待てないので、少しずつでもやっていこうということです。こちらは標柱ですが、今まで木で作っておりましたが、とてもじゃないですが木では２年位で白アリにやれてしまいます。それで、偽木に変えていきたいと思っております。

さて、皆様のお手元にこの写真の上に張りつけました地名がありますが、どういうふうにお感じになられましたでしょうか。これは飯坂町にとって、本当に最後に残った大事な物なのです。今まで大事な物が全て無くなって来たと言っても過言ではありません。十綱橋の欄干は、大正４年に鉄骨アーチ式の橋になりまして、５年前に土木遺産に認定されました。本来だったら、来年で１００年です。大正時代の面影が残っていればですが、本来だったら、文化遺産として申請できたはずなのです。それが、現在のような手すりに変えられてしまったのですから、文化遺産としてはとても申請できません。それから堀切邸の石垣です。あそこは赤川が流れていたと証明する物があったのです。それは石垣の脇の洗い場です。玄関の脇に、また入り口があるのですが、あの入口というのは、洗い場の為に降りていく入口だったのです。それが洗い場を普通の玄関のように直されてしまったものですから、赤川が流れていたと証明する物が１つ消えてしまいました。

今日は、その**“赤川の流れ”**と“**堀切梅山太郎左衛門**”が何故赤川の堀を切らなければならなかったのか”というお話をしてみたいと思います。この写真の中を見ていただきますと、赤川が流れた形跡が見えると思います。これが赤川の旧流れです。それが現在の流れに変わりました。何故変わったのか、おそらく私の推測では穴原の活断層の活動の時に変わったと思われます。その活断層はどこにあったのかと言いますと、この写真の中で見ていただきたいと思いますが一番右端に、**「北原」**があります。その下に**五倫田**、その脇に**藤沢田、石倉、暮坪**と並んでおります。これが活断層線の地名なのです。その地名の由来をひとつひとつ調べていきますと、「北原」の地名の由来ですが、これはアイヌ語で私は調べているのですが「キピルタハチルラム」と言います。その頭文字をとって「キタハラ」になります。その意味は「水際からそそり立っている崖落ちて低くなる」という意味です。そんなことで、その“原”と呼ばれるような所では無いのです。「キピルタハチルナム」がピッタリ当てはまるのです。その次が五倫田。これもアイヌ語で訳しますと、音韻変化がありまして「ゴリンタネ」になります。「コリアンタウシ」が音韻変化で「ゴリンタ」になります。それによって「高くなるそこにある断たれた所」と直訳するとそういう意味になります。五輪田のバス停の道路から、１段低くなりますが、地形があそこで落ちたということが分かります。アイヌ語と地名が、ものすごく合ってくるのです。

藤沢田にしても「フジコッペルコチコフ」と言います。「古い川のあと、とひょうする所、絶たれた」となるのですが、あそこに川が流れていたのかという疑問が皆さんにあると思います。天王寺の山の下に、鍋沢という地名がありますが、これは川を渡る所なのです。「ナンペサワ」と言いまして、これは川を渡る所、前の冷たい所、とひょうする所という意味になります。鍋沢は、この場所と湯左衛門さんの下にあります。摺上川を渡る場が、この鍋沢と言います。摺上川を渡る場ところは飯坂に２箇所あり、この鍋沢と湯野の三番坂ですが、これは「サンパヌッカサワンカス」と言いまして、開けた所に出て浅瀬を渡る所という意味になります。ですから、私は十綱橋の場所については、ものすごく疑問に思っております。先生方は、現在の所につり橋があったと言われておりますが、十綱のそのものが**「２つの谷川の出会う所」**という意味になり、「トゥトゥンナイナイホパケ」と言います。赤川から摺上の方に移りましたので、実際に赤川が流れていたという証明は、その堀切邸の洗い場、そして、**「湯沢」**の“湯”は「湯の前を通り歩いて渡る所」、そして“沢”という名は「歩いて渡る所」。それは、

我が郷土 飯坂の歴史に興味深く聞き入る飯坂ロータリークラブ会員

本当に山の沢の２つの意味がありますが、“沢”と“沢”の違いなのです。それが１つの証明するところです。あとは**夜行院坂**をご存知でしょうか。町田三味線屋さんの後ろの石垣の所です。崖なのですが、あそこからずっと**古館川の渓谷の崖**になって、斎藤薬局の所まで続いておりますが、間違いなく、あそこには沢が流れていました。その夜行院というのは「ヤコイエエン」これを続けていきますと「ヤコウイン」になります。これは「波鋭い所の陸地」という意味になります。そんなことで、その赤川が流れてきて、夜行院の崖にぶつかって、飛沫が飛んで波鋭い所という形になって参ります。流れが変わる前は、馬場から道場町、道場町から夜行院坂の脇に滝のように、おそらく赤川の水が流れ落ちていたと思われます。それは何なのだということになりますが、この“道場”というのは「トウトウ」で「沼」、「ショウ」というのは「滝」になります。それがあったということを証明するものなのです。そうして、その「トウ」である「沼」はどこにあったのかということを考えますと、佐藤喜市郎さんのお宅に伝承されている藤太湯の由来に出てきます。俵藤太がムカデを退治して、そして、その体を洗った所が鯖湖湯の脇にあったということが伝承されています。そうしますと、滝はその馬場から道場町を通って、夜行院の所に落ち、その脇の方に沼があったということが、おそらくそうではないかと予想されます。

そして、**堀切梅山太郎左衛門**が何故堀を切らなければならなかったのか、地名で**「御行檀」**(ごぎょうだん)という所があります。「ゴギョウダン」は「窪むこの岸」という意味になりまして、陥没した事を言っております。そこで陥没して、赤川縁となって、そこから流れた水がどこから流れておったのか、釜場から流れていました。釜場は聚楽の所ですが、一番低い所なのです。その聚楽から流れた水が、二手に分かれて流れている。１つは西滝ノ町と滝ノ町。そしてもう１つは、堀切邸の方を流れて二手に流れていった水が、堀切さんの家のすぐ近く三角の場所があります。大水が出たりすれば、それこそ自分の家の財産を守るために、どうしなくていけないのかということを考えました。その堀の水を、他の所に流さなくてはならない。そして、あの堀を切って、現在の摺上川に流していたというようなことが考えられます。これが、実際本当かどうかは分かりません。ただ、地名から**西滝ノ町、東滝ノ町**というのは、滝のある町のことです。滝の見える町でしたら、滝見町となります。滝のあった町だから、間違い無くこちらを流れていたと私は思っております。そんなことで、その堀切さんは歴史の資料には村の人の財産を守るために堀を切った（堀切と言う姓もこの事からか……）という話になっております。

簡単ですが、私のスピーチにさせていただきたいと思います。今日は本当にスピーチにお誘いいただきまして、ありがとうございました。

【　佐藤喜市郎パスト会長の卓話　】

今、小柴さんから家に伝承されているというお話がありましたが、実は私も親父から聞いたことがあるのです。以前、小柴さんの前の会長さんが、うちにしょっちゅう見えられて、**俵藤太の口伝**の物を、きちっとした物にしたということが残っております。実は、この吉川屋さんも**俵藤太伝説**で、色々とやっておられるようです。定かかどうかは分かりませんが、小柴さんのお話を聞きながら、私もこの地図を見ておりましたら、今の下水道工事をしているのですが、この地図だと八幡寺から湯町に通じる、八幡神社前の道路を福新建設さんで請け負って工事をしております。そこの現場監督さんが私にくどくのです。最初の見積もりは１週間もかからないでできるだろうということだったのですが、実に３週間ほどかかっています。実際に掘ったら、小柴さんの言う通り、この地図では飯坂小学校の裏から、うちの所を通って、湯沢から十綱橋の方に、１本の方は赤川に流れているという足跡があるのです。それはうちの前に井戸がありますが、それを見ると約3.5m深さの所に河原の層があるのです。家と蔵の方には、それは無いのです。あの辺が護岸なのかなと思っております。もう１つの護岸は、八幡神社に椹の木があるのですが、あれは何百年も立っていますから、あれが護岸にあったのではないか、この度、信陵さんが会員さんになられましたが、実は椹の木の所に階段があるのですが、その下の空き地、今だったらはっきり分かるのですが、あの当時、信陵建設さんが資材等を色々置いてくれてということで、あそこを取り壊したのですが、気づいた時には、現場監督さんが予算が合わないと言いました。掘ってみたら河原なのです。あの当時、**八幡神社さん**も文化財になっていましたが、ここの河原に神社があるのかという話になりまして、私もそれ以上言うと他に波及しますのでやめていたのですが、あの辺はすべて河原だったのです。赤川というのは、サラサラで、私もひいおじいさんの話を聞いておりますと、浅い川でちょっと大水が出ると、あっちに行ったり、こっちに行ったりという川だったそうです。そういうこともありまして、実際に工事されている方のお話では、中は本当に岩盤で間違いなく水が通ってあった形跡があります。今の小柴さんのお話は、アイヌ語の方から追いかけていったお話ですが、掘ってみれば、当時の地質が分かる訳です。そういうことで、飯坂というのは、やはり赤川が今現在の飯坂の真ん中を横断していたのではないかという、今のお話を聞いて確信した次第であります。

時間となりましたので、終わらせていただきます。ありがとうございました。

◆閉　会　点　鐘　　パスト会　長

WEEKLY REPORT OF IIZAKA ROTARY CLUB, DIST. 2530　広報委員会 謹製

飯坂ロータリークラブ 週報

創　立　昭和33年（1958）5月5日
ガバナー　渡邉公平
ガバナー補佐　紺野義人
会　長　堀切知之
幹　事　村田安啓

三月は識字率向上月間

<地区テーマ>
未来の子供たちの
輝く笑顔のために

2014~2015年度
RI会長　ロン D. バートン
ノーマン・ロータリークラブ（アメリカ、オクラホマ）

◆ 例会日／木曜日１２：３０　◆ 例会場／飯坂温泉「伊勢屋」
事務局/960-0201 福島市飯坂町字西堀切22（伊勢屋内）☎(024)543-1433 Fax(024)543-1433

第35回［2720］回目 例会報告　平成26年（2014）3月20日（木）

◆開　会　点　鐘　堀切知之　会長

◆ロータリーソング　〔それでこそロータリー〕　田村　宏 会員

◆四つのテストの唱和　梅津実明　職業奉仕委員

◆お客様紹介　❀飯坂史跡保存会副会長　斎藤康夫　様

§　今週の誕生日　♫♫ ♫ ♫ ♫　3月 24日 斎藤　孝裕　会員　♫♫♫♫

元気にロータリーソングのタクトを振る田村会員

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第３回 ～
『 ラジウム と 飯坂温泉 』

◆ゲストスピーカーの紹介　広報 会報委員　篠木 勝司　会員

広報委員会の「我が故郷、飯坂の歴史を辿る」というシリーズとして、今回斎藤さんにスピーチをお願いする事になりました。斎藤さんは83才で飯坂温泉駅前で明治時代から四代続く薬局店主です。まさに大正、昭和の古き飯坂の歴史を語れるただ1人の方です。昔ラジウム温泉で有名になった飯坂温泉の『ラジウムと温泉について』斎藤さんにお話を頂きたいと思います。　次回シリーズについては、西堀切の蒲倉さん、歴史学科専攻の女子大学生で卒業論文に“花町はいかにして表象されたか”を飯坂の明治、大正時代の温泉の繁栄の源について提出、飯坂が遊郭として繁栄したという見方で、芸者さんや女郎さんを研究し、京都民俗学会でもその論文を発表したという大変興味深いスピーカーを５月頃に予定しております。

…乞うご期待を……

斉藤さんの紹介 と 次回のゲストスピーカー蒲倉さんを紹介する篠木委員

◆ ゲストスピーチ　飯坂史跡保存会副会長　斎藤康夫　様（2013.3.30）

只今、ご紹介いただいた斎藤です。皆さんが納得出来るように喋れるかどうか、雑談形式でお話ししたいと思います。皆さんのお手元にある資料に詳細を書いておりますのでご一読下さい。このラジウムという問題が、日本で知れ渡ったのは飯坂が最初であるという点、しかも明治36年眞鍋嘉一郎先生によって、温泉源湯の分析を行なったという事、その前後関係を考えてみますと、飯坂温泉がそういった意味で、温泉発祥から明治時代も含めて温泉の治療効果が噂され白羽の矢に立ったという事、その頃は日本国中のどちらかというと、飯坂が結果的に有名だったということになると思います。今でこそ、当時のある意味での面影はありませんが、とにかく飯坂温泉はラジウムで一躍名を成して、そして、ラジウムの治療に対する効用も認められ、赤川を渡った天王寺街道から左斜めに今は無いが傷病兵の陸軍病院が、そして右斜めには鉄道病院が出来たという事、これが総合病院の始まりでした。そ

れを考えれば、もう少し今の飯坂が、そういった形で意を汲んでいただくと、旅館の業者さんからいったら、もっと生きるのではないかと思います。とにかく「他の温泉は素晴らしい」と言いながら「飯坂はどうなのだ」と聞くと「さあ」と言う人が多いと思います。しかも、業者の中でも非常にそれは多い事を考えると、とても残念でその点、ある意味で問題視しなければならないと思っておりますが、如何ともし難い思いもあります。

私は好きで好きな事を研究してきたのですが、ここに書くにもでたらめは書けませんので、私なりに徹底的に調べて、まとめ上げたつもりです。せめて飯坂について、この位は頭の片隅に入れておいていただきたいと思っております。これから回して見ていただきますが、これがその時の証明で、日本でも最初にラジウムの取っ掛かりとなり、眞鍋嘉一郎先生が飯坂に来て研究をして、疑問に思いながらドイツに行って、ドイツで勉強し、そしてドイツで研究してきたお土産として下さった物です。どちらにしても、現存するのは博物館にあるかどうか、せいぜい全国で２，３個だと思います。これは「**スピンザリ・スコープ**」と言いますが、夜の闇夜でこれを見ていただくと、ラジウム放射線が青白い色で跳ね返って来るのが分かる、私達の目に見える唯一の道具になる訳ですが放射能が光となって見える物的証拠で極端なところ、飯坂温泉での発見の**“きっかけ”**になったものです。日本で一番の取っ掛かりは、眞鍋嘉一郎先生が**“温泉はラジウムを含んでいるのではないだろうか”**　となった事です。

飯坂温泉の源湯にラジウムが含むことを明したスピンザリ・スコープを手にとって説明するゲストスピーカーの斎藤さん

貴重品の「スピンザリ・スコープ」

一応、具体的なラジウム線は、眞鍋先生とスピンザリ・スコープと温泉とを結びつけた事が飯坂が始めてだという事が分かります。そういった意味で、その立場は揺るぎ無い訳です。

歴史のロマンを感じて…　「スピンザリ・スコープ」　覗き込む会員

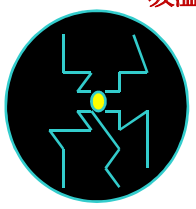
現在までの飯坂温泉のラジウム発祥の地の歴史はひっくり返る事はありません。**近代科学の出発点がある意味において、飯坂温泉にあった**という点を考えると、これは飯坂の人間として勉強しなくてはならないと思いますが、私も年ですので、そこまで勉強は出来ないし、これからは若い人達にやっていただきたいと思っております。これだけの歴史の重みが飯坂温泉にはあるという点はしっかりと認識していただきたいと思います。

飯坂の遊郭について、昭和に入って今の錦町、花岡町にありました。**錦町、若葉町には軒並み女郎屋がありました。終戦後何年間は、それが下宿屋に変わったり、旅館に変わったりして**おりますが、実に目まぐるしい時代の変化が、当時の目の前で起こっておりました。終戦直後は毎日の様に私の家の角に、アメリカ兵がＭＰの腕章を付けて立っておりましたが、若喜旅館のあった坂は、昔は二階堂写真館や百姓屋があって、大きな銀杏の木があって木が今もあれば、良い意味で飯坂のポイントになったと思います。花岡町の奥の十字路まで、戦後、急速に商店（お土産屋）が出来はじめ、カフェ何々、いわゆる今で言うと飲み屋でしょうか、戦後の飯坂が急速に観光地として変わり始めました。戦後６０年も過ぎて、現在はこの様な状態になってしまいましたが、町の一角一角が、飯坂の場合、時代ごとにころっと変わってしまいました。錦町、若葉町、花岡町辺り、字にすれば色々な字名が付きますが、大きな枠でひとまとめにされてきました。小学生は今の小学校の場所ではなく、**昭和１５年に今の場所に小学校は移転しました**が、その前は**今の消防署のある所（古舘）**にあって、私が小学校５年の時に変わったのでした。

明治 31 年(1898)	キュリー　夫妻　ラジウム発見
明治 36 年(1903)	真鍋、飯坂温泉源泉を分析 ラジウム存在を発見
明治 42 年(1909)	飯坂温泉大々的に ラジウム温泉を宣伝
明治 43 年(1910)	商品名ラジウム卵、売出す

キュリー夫妻の世界的発見、**５ 年後**に既に飯坂温泉の**ラジウムが発見された**とは、**歴史の驚き** ……

なぜ**「ラジウム卵」は日本の近代科学の母**なのだろうと首をかしげることだろう。勿論「ラジウム卵」がキュリー夫妻によって発見される以前から飯坂の人々によって食べられていたからではないが、**月崎縄文人等**、昔からそれが「ラジウム卵」とは知らずに食べていたのではないだろうか。飯坂温泉のお土産に有名な「ラジウム卵」がある。生卵を約６３度から７０度程度の温泉源湯に３０分から小一時間入れておくことによって、あの風味豊かな味をもつ半熟卵ができるのであるが、温度の高低と時間の長短の組み合わせが卵白と卵黄の凝固点の差とあいまって、その店特有の微妙な味の異なりとなってあらわれる。巷に売られている「ラジウム卵」なる半熟卵は私に言わせれば単なる「半熟卵」であり、機械的に作られた「半熟卵」で、決して「ラジウム卵」ではない。**飯坂温泉の「ラジウム卵」こそ、日本の近代科学の生みの親**である事を、科学史をとおして述べてみたいと思う。近代科学はメンデレィフによる原子の周期律の発表によってはじまったと言われている。ロシアの科学者、メンデレィフは原素（原子）の物理化学的性質の研究成果としての原素の周期律性を表にまとめた原素の周期律表を発表した。表の空白部分に入るはずの存在しなければならない未確認の原子や質量や性質が明確にされていた。***ピェル・キュリーは妻のマリー・キュリーと共に１８９８年ラジウムを発見し、近代科学を大きく前進させた。***ラジウム（Ra　Radium）は質量２２６、原子番号８８番の銀白色の放射線を有する金属であり、ピッチブレンド中にウランと共存しており、臭化ラジウムとして保存される。ラジウムの放射線は、各放射性原素のもつ放射線の標準（物指）として用いられる。また、医療面ではラジウムエマナチオン療法として、放射線のもつ組織破壊性を応用し、癌腫・肉腫等の悪性腫瘍の治療に用いる等、広く医療用として利用されている。明治３６年、東京帝国大学医学部を卒業した眞鍋は、春山胤直教授に師事、春山教室で医療研究生活に入る。この間、研究生眞鍋は飯坂温泉にやってくる。**私の曽祖父久助と祖父徳太郎**の案内で**鯖湖湯**をはじめとする温泉源湯を採取して分析を重ねた。その結果、ラジウムの存在を確認することになった。学界に於ける眞鍋の研究発表は一大センセーションをまきおこす。飯坂温泉はその成果をふまえ、**明治４２年から大々的にラジウム温泉としての飯坂温泉を宣伝**した。明治４３年、３３歳の眞鍋はドイツに留学し、先進ヨーロッパの内科学と物理療法学（放射線医学）を三年半にわたり勉強した。帰国後、名実共に日本の放射線医学の第一人者となった眞鍋は、私の曽祖父久助に**ラジウムのサンプル**、いわゆる**スピンザリ・スコープ**を**土産物として贈呈された。**スピンザリ・スコープは３５ミリフィルムのパトローネ大の、一見顕微鏡の接眼レンズ状の真鍮の筒の中の底部に蛍光板があり、その数ミリ前に臭化ラジウムをつけた針がある。そのラジウムから放射されるα線が蛍光板にあたり、線香花火状の美しいシンチレーション現象といわれる蛍光を簡単に見る目的で作られた装置で、内壁は鉛板で保護され、鉛ガラスのレンズからのぞく事が出来る。近年、いくつかの温泉でも「ラジウム卵」の土産物が販売されているが、あくまで飯坂温泉の「ラジウム卵」だけが　**本物の「ラジウム卵」である。**飯坂温泉は「ラジウム卵」の日本近代科学史に占めるゆるぎない立場に誇りをもち、天恵としての「ラジウム卵」に対して認識 を新たにするべきだろう。



闇夜で**スコープ**を見るとラジウムの放射がこの様に見えるという

Spin-thari-scope.
M42（明治 42 年）．　真鍋嘉一郎

と記入されている 105 年前の貴重な斎藤さん保存の科学品

「ラジウム」の発見は近代科学の求める人類の平和と幸福のためであり、原爆製造による人類滅亡の為ではない。近代科学の母「ラジウム卵」は、今日も声なき声を大にして反核を叫んでいるように私には聞こえてくる。

最後にキュリー夫妻の娘婿である　レデリック・ジョリオ・キュリーの言葉を記しておく。

『…ウランの分裂もまた、二つの利用方法を見せている。…創造的目的への利用と破壊的目的への利用。
いかんながら、科学の新しい勝利は大きな破壊力としての原子爆弾のかたちであらわれた。しかし私達は、そういう破壊的応用につながる危険は間もなく消えうせ、人類の福祉のためにこの応用が勝ちをしめるであろう事を信じてうたがわない。』

◆閉　会　点　鐘　　会長

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第 4 回 ～

『 花街 飯坂はいかにして表象されたか 』

◆ゲストスピーカー　紹介　　会報週報委員　篠木 勝司

本日は『我が郷土飯坂の歴史を辿る』Part4 ということで、今回女子大生の卒業論文として発表した

『 花街 飯坂はいかにして表象されたか 』 という内容です。

ゲストスピーカーの蒲倉さんは 東北学院大学文学部 歴史学科民族学 を専攻していて、飯坂町に生まれ育ち、この飯坂で働いていた芸妓さん達の、時代と共に変っていく環境変化等を分析して、卒業論文としてこの内容を提出しています。女性でありながら飯坂における女性史に切り込み、郷土の異色の資料として飯坂ロータリーの週報にも記録として残したいと思っております。

宜しくお願い致します。　　（ 平成25年2月 京都で行われた京都民族学会でも発表をしています。）

◆ゲストスピーチ　　東北学院大学文学部歴史学科 民俗学専攻　　蒲倉 綾子　様 (2014.5.29)

『花街としての飯坂の流れ　～～ 明治・大正・昭和 ～～ 』

時代の流れと共に苦悩する芸妓さんの想いを語る蒲倉綾子さん

それでは、花町としての飯坂の流れをご紹介していきます。ただ今、ご紹介にもありましたが、私は福島県庁の企画調整の情報政策課で現在働いており、その傍ら自分が収集した飯坂町の資料の展示会というものを並行して進めております。来月の７月後半には、東北学院大学の博物館で、私が収集した資料を２ヶ月位展示する予定でおりますので、是非、お時間がある方はご覧になっていただきたいと思います。

それでは、飯坂町の時代の流れを述べていきたいと思います。因みに、元禄２年（１６８９年、今から３２５年前）に松尾芭蕉が飯坂を訪れた時には、すでに飯坂には沢又楼・いずみや・綱屋・角久屋・広瀬楼・池田屋・石川楼などの多くの遊郭があり、その遊郭に娼妓の芸の不足を補って酒興を盛んにする芸者が存在していましたが、この時代の飯坂は観光地としての知名度が高いわけではなかったので、明治以降のお話から始めていきたいと思います。

飯坂町が世に広まったのは、明治１１年の新道（長岡～湯野道路）の工事、明治１５年から１６年の間に開かれた飯坂新道の開通によって、交通が便利になり始めた頃からです。また、飯坂町の誕生は明治２１年です。当時の名前は上飯坂だったのですが他の村との合併を拒否して信夫郡から独立し、飯坂の上の一字を取って飯坂としました。

しかし、この明治２１年の４月には大火災があり湯町の火元から西風にあおられて、十綱町一帯に延焼し、１７３戸が焼失してしまいました。私はこの火災を『第一次飯坂大火』と呼びます。これにより、各所に散在する遊郭を集めて移転改築させられ、摺上川清流を東に眺めて双葉楼・三更楼・銀波楼・石川楼・いずみや・沢又屋・米楼・池田屋・松月楼などの大きな遊郭が若葉町にずらりと並び、飯坂の中心街となったのです。

飯坂大火後に遊郭を若葉町に移転した件に

ついて、昭和２年発行のガイドブック

『*飯坂湯野温泉遊覧案内*』に 『 *遊郭 若葉之里（飯坂町の遊郭は之を若葉の里と称し）は名湯 波来湯 の直上、十綱橋より飯坂温泉の花の町、花のトンネル花岡町に至る飯坂第一の大通りの真中に位置し、摺上川の第一の景勝地を占め、各楼、皆な其の楼前の断崖に、専属の内湯を有し浴客、遊者をして、すこぶる奇異な念を抱かしめている。過去を按ずるに此の里、今こそ飯坂町の中心目ぬき場所に位置すれど、三十年前までは狐、狸の往来さへ、自由ならぬ場末への断崖で、明治２１年飯坂町の大火を機として、温泉町区内より此処に**おし込め**られたもので、飯坂が今日の形態に移り行き開け行くものとは、当時、誰も**想像**しなかったのである*』とあります。

つまり、この第一次飯坂大火の後、町内に散在していた貸座敷を町はずれに封じ込めたが、新しい道路の開発などによって、皮肉なことに封じ込めたはずの遊郭が逆に中心街になってしまった。さらに、観光地の中でも１番良い場所が遊郭を占めているので、観光客は妙な町だと不思議がっているというのであります。私は、意外な結果としての飯坂の繁栄と言うのも興味深いものと思います。

さらに明治２９年（明治２４年東北線全線開通）、**長岡駅（今の伊達駅）**から湯野駅間に運賃５銭でトテ馬車が通りました。それまで（明治初年）の飯坂温泉への近在の人々の交通は、馬車や人力車、徒歩であったため、長岡駅の開業は飯坂温泉の表玄関となって入浴客は急増したとも言われています。さらに明治３５年には、飯坂町役場を移転し、町の整備に努め、対外的にも温泉場として人々の誘致策を実施し始めました。明治３８年には飯坂・湯野温泉が日露戦争で傷を負った軍人の**転地療養地**に指定され、これを機に療養軍人のための娯楽施設として、飯坂八幡神社北境内に**「娯楽場」**が設置（今の公園内西側の所、昭和５１年頃解体）されました。これも飯坂町の発展に欠かせない出来事だろうと思います。

また、明治４１年福島から瀬上、長岡を経て飯坂温泉（湯野駅）への軽便が走り、これにより**年間７万人**を超す浴客が訪れ宿泊者も１万５０００人を超しました。電話交換事務が開始され、市外電話ができるようになったのも此の頃で、この時期こそ、飯坂温泉が**「東北一の温泉場」**として世に紹介された時期であります。

この時期には十綱橋も吊橋から鉄骨の永久橋（大正４年）に架け替えられました。一方で飯坂の発展のために多くの旅館が生まれましたが、それが原因で温泉の掘削が各旅館で盛んになってしまいました。そのため、湧出量の減少が起こり、温泉の枯渇を招いてしまいました。実際**「瀧の湯」**（前のますや、花水館、花月旅館〈今のホテル聚楽〉

界隈)などは大正１３年頃に枯渇しています。さらに大正７年には、福島に公設競馬場が開設され、浴客数と温泉旅館数が増加しました。また、飯坂の主産業が農業から温泉を主とする消費の町へと転換されていきました。特に大正１０年を境として農業戸数の減少と商業戸数の増加が現れています。勿論これは、飯坂温泉に来る浴客目当ての商店（みやげもの）の増加も考えられますが、町全体が人口の増加と共に都市的性格を帯びてきたことを指しています。また、いわゆる飯坂電車の始まりである飯坂電気軌道株式会社の電車が大正１１年１１月着工、大正１３年に花水坂まで片道３７銭で開通しました。これにより、遠隔地からの飯坂温泉の利用者を増加させると共に、地元利用者も簡単に利用できるようになり、入浴利用者は益々増加していきました。因みに、この飯坂電車ですが昭和２年３月２３日に終点が「飯坂駅」といった現在の花水坂駅から十綱橋下まで延長され「飯坂温泉駅」と改められました。

しかし、華々しく活動していた飯坂町も此の頃から衰退の一途を辿って行きます。ここから先は、飯坂町は「東北一」と謳われながら、何故衰退していったのか、その歴史的流れを述べます。

飯坂温泉の衰退は昭和６年から７年にかけて起こった満州事変によって生じました。飯坂町の第二師団が満州駐留を命じられて満州事変に加わったことがきっかけとなり、今どき花街で遊ぶような行為は非国民な雰囲気で、芸妓自身もなんとなく引け目を感じていき、温泉街で遊ぶ人も少なくなっていったそうです。そして、この沈滞する時期、**昭和１０年に西条八十の作詞と**中山晋平の作曲で**「飯坂小唄」**が発表されました。西条と中山という黄金コンビで作られた**「飯坂小唄」**は、おそらく不況で落ち込んでいる飯坂町に明るい風を吹き込むためのものであったのでしょう。

しかし、その後の昭和１２年から２０年までの日中戦争（及び大平洋戦争）により、飯坂湯野の花の町は火が消えたようになってしまいました。満州事変の頃は、自粛ムードで済まされたことが日中戦争になると、大げさ宴会は中止しろ、三味線は爪弾き（バチは使わず爪で）程度にして人の目に付かないようにしろなどの命令が国から出され、段々と芸妓の働く場所が狭められ、最後には歌舞音曲を一切停止をせよという命令が出されたこと

で芸妓の働く場所が閉ざされていきました。もっとも、この事変で旧飯坂だけで現役兵が陸軍３６７人、海軍８７人の計４５４人、応召兵３４８人で合計８０２人、人口約８０００人の約１割の２１歳から３８歳までの男子が戦争に参加したので（うち戦死者約１００人）良心的にも遊芸会を楽しむことができなくなり、こうして職場を失った芸妓達は芸妓をやめて実家に帰ったり、旅館の下働き等をしていったといいます。そして、この時に軍人援護会福島県支部から中国にいる郷土部隊の芸能慰問の要請がきていたこともあって、芸妓屋組合から**慰問団**を組織して皇軍慰問をすることになりました。

*ここからは簡単に**慰問団の行動の流れを紹介**します。慰問団団長　軍人援護会福島県支部　**主事　瀬川源助**、副団長　**飯坂芸妓置屋組合代表　高橋毅一**、**世話役　今井くに**（牡丹）、団員はお姉さん芸妓７名の総勢１０名で、因みに服装は白いワイシャツに小豆色のネクタイ、紺色のセビロに紺色のスカート、白いタイツに黒の短靴を履いて紺色の戦闘帽を被り、左腕に白にグリーン色で**福島県郷土部隊慰問団**と染め抜いた腕章をしていました。*

昔の大正二年の湯町二十三番地の建物

昭和１６年１０月初旬、八幡神社に勢ぞろいして、目的達成の祈願をし、町民に見送られて長崎港へ１０月８日長崎港から上海に向かって進み、上海に上陸するや休む暇もなく汽車に乗り南京を経てハンカオに行きました。

*ここで部隊長と面会し、すぐに軍用トラックに乗せられ、トラックの前方には機関銃が据え付けられトラック周辺には兵士達が人垣を作ってくれ、その中に７個の**「こおり」**（今でいう衣装ケース）を置きその上に腰を下しました。戦いの最中であるから道路は悪く、車の揺れは甚だしいものでした。こうして、毎日２０里（８０キロ）３０里（１２０キロ）と飛ばし、中支派遣の内山部隊の小林部隊、太田部隊など、郷土の兵隊さんの居られる所を次々に慰問しました。そこでは１００人、多い時で５００人、６００人と集まった兵隊さんに、唄と踊りをお披露目したそうです。レコードと三味線しか持って行けなかったため、レコード物や三味線歌だけしか、お目にかけられませんでしたが、それでも兵隊さんは大層喜んで時間いっぱい観たり聴いたりしてくれました。このようにして慰問を６０日間続け、昭和１６年１２月５日上海をたって、また長崎に着き大阪へそれから成田のお不動様へ御礼詣りをして、兵隊さんが凱旋するような気持ちで飯坂に帰ってきたと言います。*

その間非常に困ったのは、良い水が無かったことでした。水が悪いから注意しろと口癖のように言っていましたが、遂に２人の病人を出してしまったのです。また、食事にも最初は困りました。兵隊さんと同じく「ヒエ」や「コーリャン」のご飯で粘り気も何も無く、これがご飯かと思われるもので最初は嗚咽（おえつ）が止まらなかったのですが、食べないでは動けないから食べたので、後は何の苦も無く食べられるようになりました。また、蠅の多いのにも困ったそうです。食べ物の周囲になると土の色も分からぬほど蠅が飛び回っていま

明治後期頃から飯坂町には金融業、（無人講等含む）が誕生していた。

建物は現在　昔のままの姿の湯町二十三番地の建物

した。非常に驚いたのは、次の慰問場所に移動する時、護衛の兵隊さんから『砲撃があるかもしれないから驚くな』と注意されたということです。ズシーンという腸わたを揺さぶるような音がした瞬間、ものすごい音響と共に砲弾が炸裂しました。この時は誰も目をつぶって生きた心地がしなかったと言います。それから困ったのは、風呂に入ることだったそうです。風呂は土を掘って周囲に石を並べ、その上にドラム缶を置き、それに水を入れて下から火を焚いて湯を沸かして入るものだったため、身長が低い者は上がる時に湯の中に上がり台が無いから醜い格好で何とか上がるしかありませんでした。その上、大きな中国人が木を焚いていたり、水を足したりして、ギョロギョロ見ながら風呂の周囲に居るので、ゆっくり疲れを癒すことができませんでした。夜に寝る時は毛布を一人２枚渡されました。１枚は敷いて、２枚目は着て寝るのですが大陸は夜は寒くて安眠できなかったそうです。１番気の毒だったのは、郷土の兵隊さん方から、家族の人々に宛てた手紙を依頼されることだと言います。最初は、全部持って行けるものとしてみな預かって上海を出ましたが、全部持って帰国できないことが判明して、手紙を全部開封して、家族に必要欠くべからざるもののみ選び、各自三味線の胴の皮をはがし、その中に手紙を入れて皮を張って持ち帰って、それを帰国後郵送したと言います。

*なお、この慰問に要した費用は、県から２００円補助されただけで、後は全部組合で負担しました。この皇軍慰問団の派遣は、飯坂芸妓屋組合として、**全く前代未曾有**のことで、飯坂町としても画期的な出来事であったといいます。*

さらに、飯坂の衰退に拍車を加えたのが、昭和１６年から２０年まで５年間続いた太平洋戦争です。昭和１９年には、福島警察署内に疎開児童協議会が開かれ、飯坂、湯野に東京荒川区と中野区の児童３２５０人を引き受けるよう申し渡しがあり、あらゆる旅館や料理屋は全部疎開児童の寮になり、カフェは大衆食堂に代わりました。旅館の下働きに転じた芸妓達は疎開児童の寮母となって働いたといいます。『大鳥城余録』の著者・菅野先生は「*国民学校３年なので非常にあどけなく、わざわざ花水坂駅に下車させ、町に慣れさせるという配慮から、徒歩で桝屋まで歩かせたといいます。道路の両脇から町民が人垣を作って、彼らを見送っていたが親元から離れた可憐な子供達を見て涙を流さない者は居なかった*」と当時を回想しています。また、芸妓置屋は大体下宿屋になって、下宿名簿まで作って営業を開始したが、疎開児童の寮にも関わらなければならず、その準備に忙殺されたそうです。さらに、廃業する為には廃業願いを福島警察署長に出さねばならず、許可証が配付されるまで休業したり、電話を設置したりと様々な困難があったと言います。

現在も天井が昔のままの姿を残す内部

このように太平洋戦争下では、飯坂町の各旅館が疎開児童の寮として機能をはたしていたため、そこで働く芸妓はかなり忙しかったであろうことが読み取れます。昭和５８年の『福島の町と村Ⅱ』には「かつての温泉街は火が消えたよう」との記述があります。さらに飯坂町を追い込んだのは、昭和１９年７月の**『第二次飯坂大火』**でした。当時飯坂国民学校の女性教員であった茨城きよの自宅（橋本館の差し向かいにあった八百屋の2階）での出火が

原因でありました。茨城きよが突然訪問したお婿さんをもてなそうと、台所で火をおこして湯を沸かし、十能で応接間の火鉢に火をとり、お茶を入れて話をしている間にあやまって火を廊下に落としてしまった火で、台所と応接間の間から出火したことが原因ではないかと（一説には天ぷら鍋からの説もあり）考えられています。火は十綱橋より北方へ燃え広がり、**湯野屋**・**綿屋**・**信夫屋**・**前野屋**・**亀の江**等、湯野町の繁華街が次々に焼け、稲荷屋に至って一時火の勢いが衰えたのですが、亜鉛板葺の屋根が燃え落ち火柱は上がったそうです。また、消防手となる男性が皆動員されていて、**老年者ばかりなので住宅を破壊して火を食い止めることができず、**火は稲荷屋から川を越して若喜旅館に燃え移り、さらに南の十綱町に向かってしまいました。そして、３時間余り燃え続け、立町あたりでようやく鎮火しました。これにより飯坂では**住宅１３６棟、**非住宅が**３６棟**、湯野では**住宅６５棟**、非**住宅が１０棟**という被害が出ました。そして、まだ復興もしていない中、飯坂町は終戦を迎える事になった訳です。

終戦後は、福島にも進駐軍の司令部がおかれ、マグダモット司令官が乗り込んできて、今までの日本のしきたりの廃止や改正をしました。さらに進駐軍は芸妓と芸妓置屋の前借り関係に目を付け（戦争で芸妓が職を失った時も芸妓と芸妓置屋の前借関係はそのままであった）その関係を棒引きにし、芸妓置屋の解散を命じました。そして全部の芸妓を警察署に集め、今まで届けてあった署の書類を全部芸妓個人個人に渡してしまいました。これにより、組合も今後のことを恐れ、従来の記録や書類を全部隠滅したと言います。しかし一方で、**『大鳥城余禄』**に登場するＫ氏によると、進駐軍は「芸子ガールを出せ」と終始一貫しない命令を町長と組合長に出したそうですが、そんな感情にこだわっている時間もなく、当時の**町長**、**飯坂署長**、**芸妓組合長**らが協議をし、電力制限で電灯がついていない町内を提灯で各旅館の女中をしている元芸妓達を説得しに歩き、何人かの元芸妓を集めて間に合わせたそうです。

飯坂温泉の芸妓達の文化に聞き入る飯坂ロータリー会員の皆さん

そして、この頃から元の芸妓は自然と芸妓に復活し、度々進駐軍の慰安に出かけました。しかし、これは進駐軍のための復活であり、他の座敷には一切出てはならぬという鉄則があったのですが、これも段々緩くなり他のお座敷にも出るようになりました。また、進駐軍は極度に性病を嫌ったため、１８６人の芸妓の名簿を調整し、他の座敷に行ったもの、誰と行ったかなど、毎日芸妓の異動届けを出させました。また、身体検査を受けた者、受けていない者を調べ、これを毎日司令部に報告しなければならなかったそうです。このような事情から、先に解散させられた芸妓置屋を復活させ組合の活動を元通りにさせなくてはならなくなったのです。このように終戦後は、芸妓置屋が復活し、昭和４５年には**芸妓が１８０人、**芸妓置屋が**６７軒の大盛況**になりました。

『大鳥城余禄』では、「飯坂に芸妓屋が始められたのは、明治３０年代だが、その時代の芸妓屋は１軒も残っていない。大正年代は２軒、昭和初期は１軒、昭和１０年代に開業したものは４軒残っている。明治３０年から現在までに古い芸妓屋は旅館になったり、他へ転職したりしたのであろうか。昭和１０年代は、いわゆる飯坂町芸能界の受難時代で新たに芸妓屋を開業するという事は思いもよらない話だろうから、現在残っている当時の芸妓屋が少ないものも理解できる。ところが、昭和２０年以後、即ち終戦になると自由主義の波に乗って芸妓屋を開業する者が多くなり、昭和３０年代４０年代になると、我が国の経済発展と共に芸妓屋も多くなり、この時代に開業した芸妓屋は４５軒もあって、前記の大盛況件数の全体の６７％にも及んでいる」というデータを挙げています。

最後になりましたが、昭和５２年発行の**『大鳥城余禄』**について紹介します。これは、飯坂町史跡保存会が発行し、菅野円蔵先生が編集したものであり、飯坂温泉観光協会、飯坂温泉旅館協同組合、飯坂町芸妓置屋協会組合、飯坂町商工会の協力のもと山川印刷株式会社で印刷されました。重要なのは、この資料が作られた背景です。

この資料が発行された昭和５２年は昭和３１年５月に制定された売春防止法（因みにこれに伴い昭和３３年には赤線が廃された）の後で、飯坂町が花街として機能されていない時代と言えます。**著作の菅野円蔵先生**は「明治から大正にかけて、娼婦以外遊芸を為す者を一様に芸者と呼び、芸者の質が低下し、これらの者が売春を公然の秘密する者が多くなったので、芸者の売春が社会問題として批判され、売春は人間の尊厳を害し性道徳に反し、社会の善良な風俗を乱すという訳で、婦人解放に立ち上がった婦人達の熱心な活動によって国会を動かし、昭和３１年５月ついに売春防止法が制定されたのである。今こそ飯坂芸者は芸妓本来の妓芸と教養の向上に努め、東北唯一の温泉観光地の芸妓として立派に成長されんことを希望してやまない。」と述べており、東北一と謳われた花街・

飯坂町の向上を促す様な文章となっています。文章からすると、この時点でも芸者は存在しているようですが、飯坂の衰退の流れにおいて、昭和３３年以降のデータ量は決して多いとは言えません。さらに、菅野円蔵先生は**「飯坂芸妓屋組合誌」**で述べ、その沿革をたずねて、将来この道に進む者、飯坂街に存在する芸妓の養成に一役買うような内容であることも読み取れます。さらに「もし万が一にも芸妓自身にこの職業を卑下する心があるために長続きしないというようなことがあるなら甚だ遺憾なことである。人間の生活に必要な職業であれば、自由業であれ何の職業であれ貴賤の別はないはずである。従って、飯坂町にも社会の要求に応じて益々立派な芸妓を養育して、１００年も２００年も続いた古格豊かな芸妓屋であって欲しいと念願する。この点、誠に寂しく感ずる次第である。」と述べている点や、「最後には歌舞音曲を一切停止しろという命令が出た。こうなると、芸妓の働く場は閉ざされたことになってしまった」「どうにもならぬ者は、旅館の下働きになって糊口（ここう）をしのぐ者など、散り散りバラバラになってしまった」と、**著者の残念がる感情が表れている点**から、著者の菅野円蔵先生は飯坂町発展のための芸者について肯定していることが分かります。このように**『大鳥城余禄』**が発行された背景には、著者の**「花街として盛んな町・飯坂」**復活の芸妓肯定があると思われます。つまり、この時代の価値観は私達現代人の価値観とズレが生じており、花街やそこで働く芸妓へのまなざしというものが美化されてしまっているという興味深い内容とも言えるでしょう。以上で私の発表は終わります。　ご清聴ありがとうございました。

ゲスト蒲倉綾子様へ畠会員より謝礼、祖父様も同席孫の講演に聞き役活した

※　飯 坂 大 火 の 記 述

「明治２１年４月の飯坂大火後も、戸長堀切良平氏は自らの資産を投じて焼け跡の整備に奔走。何しろ字湯町の火元から西風にあおられて十綱町一帯に延焼し、１７０戸余りが焼けてしまったため、まずは焼け跡の旧道を広めることと、土地の凹凸を無くして古戸、東滝ノ町、湯沢の三字地の畑地に新道を開き、新町５カ所を設けてその北隅に貸座席（遊廓）を移転させた。これを受けて明治２８年３月に町長沢口重一氏は、町内の字名の改称及び区域の変更を郡町に報告した。その理由として、「町の人口も増加し浴客も年ごとに増え、道路が狭く車や馬では通るのが不便なこと、東北線鉄道開通以来、一層浴客も増加していることがある。さらに、貸座敷（遊廓）が町内各所に散在していたため、『新町』を設置し、貸座敷を一廓内に移して町全体の体勢を整えたのである」とある。また、大正１０年頃について**『飯坂湯野温泉案内』**には、「若葉町　滝の町方面　摺上川に沿ひて温泉の湧出するもの多く、若葉町には大澤温泉、『トンネル』温泉等の外、個人専属の温泉数多くあり、波来湯の下流には紺喜温泉あり、又滝の町には琴富貴温泉あり花月は飯坂随一の料理店として知られる」とある。

◆閉　会　点　鐘　　会長エレクト

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第５回 ～

『 飯坂のシンボル 十綱橋の歴史を語る 』　2015年9月で100年目

ゲストスピーカーを紹介する
菅野 会報広報委員長

◆ ゲストスピーカーの紹介　　会報・広報・雑誌委員長　菅野浩司

会報・広報委員会の**菅野**です。今まで、会報・広報委員会とプログラム委員会の方でタイアップして、何度か“***飯坂歴史シリーズ***”ということをやってきたのですが、今日はゲストスピーカーに飯坂町史跡保存会理事であり、また、旧堀切邸案内人の会の会長でもあります安斎鉄夫様をお招きいたしまして、皆様良くご存知の十綱橋についてお話いただきたいと思います。宜しくお願いいたします。

◆ ゲストスピーチ　　飯坂町史跡保存会　理事　安斎鉄夫　様　（ 元日本道路公団勤務 ）

ただ今、ご紹介をいただきました安斎鉄夫です。今日は、飯坂のシンボルでもある十綱橋が、今年ちょうど１００年を迎えるという節目にあたっておりまして、色々話題になるかと思いますので、話題作りに役に立てばということで、お時間をいただいてお話しさせていただきたいと思います。

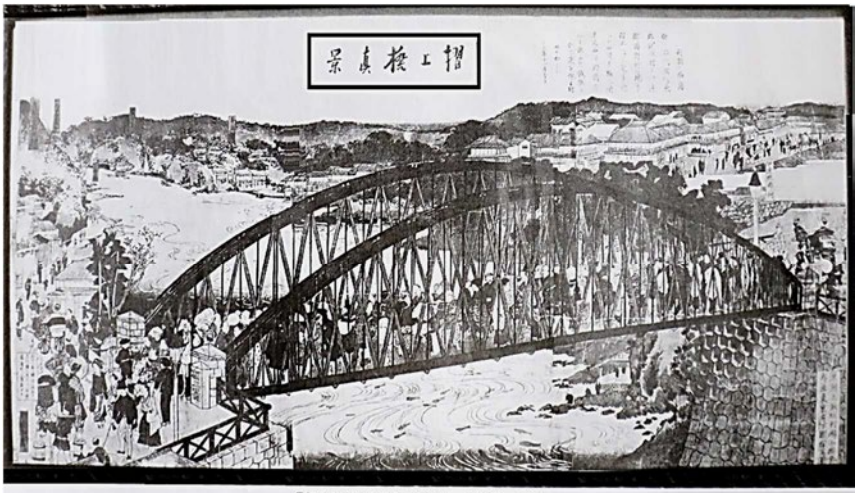
話の運びですが、お手元の資料として**「十綱橋年表」**、それからＡ３の色刷りの、**「十綱橋今昔」**これは「ＴＵＲＮＥＲ」という雑誌で、３ヶ月に１回の機関誌で今回、飯坂町史跡保存会として執筆してくれという依頼がありまして書いたものです。また、これからの話は主に十綱橋年表に沿ってお話をしていきたいと思います。

まず、昔々の話からいきますと飯坂に伝わっている話では、昔、**藤綱十筋（ふじつなとうすじ）**の吊り橋が摺上川に架けられていたというお話が伝わっています。その信憑性云々と言いますとちょっと問題があるのですが、１つの証拠として「 みちのくの　とつなのはしの…」という歌がいくつか残っています。レジメに１つ例を挙げておきましたが 『*みちのくのとつなのはしに　くるつなの　たへずも人に　いひわたるかな…* 』という歌が**「千載和歌集」**、これは西暦で言いますと１１８７年（平安時代後期）に出た歌集で、ちょうど大鳥城の戦いがあった前後でありますが「親隆（ちかたか）」という人の歌で、「千載和歌集」の恋の歌という中に歌われているそうです。意味は

十綱橋年表

平安末期		「みちのくのとつなのはし」（千載和歌集など・歌枕）
		藤綱十筋の吊橋が架けられていた
文治5	1189	*佐藤基治が綱を切断して橋を落とした*　（平安時代後期）
享保14	1729	上飯坂村(旧飯坂町)絵図に「綱渡しの渡船」の描画（江戸時代前期）
寛保3	1743	上飯坂村(旧飯坂町)村鑑に「渡船」の記事　（江戸時代前期）
天保12	1841	信達一統志に「十綱渡」の名　（江戸時代後期）
明治5	1872	７月　熊坂惣兵衛・片平伊達一　福島県に言上書を提出
明治6	1873	２月　架橋着工 12月21日　**「摺上橋」完成** （延長62.7m・幅6.4mの木橋　事業費4,926円）
明治7	1874	９月16日　摺上橋が落橋 皇居の「山里の吊橋」を参考に県費によって再建着手
明治8	1875	５月23日　**「十綱橋」完成** （延長69mの木製吊橋　事業費8,700円）
明治17	1884	*５月23日　伊達一　人柱として入水自殺*
明治43	1910	８月　橋面が傾いて通行禁止 仮橋脚・仮橋を設置
大正2	1913	８月　洪水で仮橋流失
大正3	1914	４月　新鉄橋の着工
大正4	1915	９月30日　**鋼アーチ橋「十綱橋」完成** （延長54m・幅6.8m　事業費35,685円） 11月23日　渡り初め式
昭和11	1936	トペカ式アスファルト舗装
昭和25	1950	塗装補修
昭和41	1966	９月　「新十綱橋」完成（愛宕山下）
昭和42	1967	アーチ部材の大規模補強工事
昭和43	1968	８月　伊達一頌徳碑建立
昭和54	1979	塗装補修
平成16	2004	土木学会選奨土木遺産に選定
平成19	2007	欄干・照明燈などの改修

斜字は伝承として取り扱うべき記事



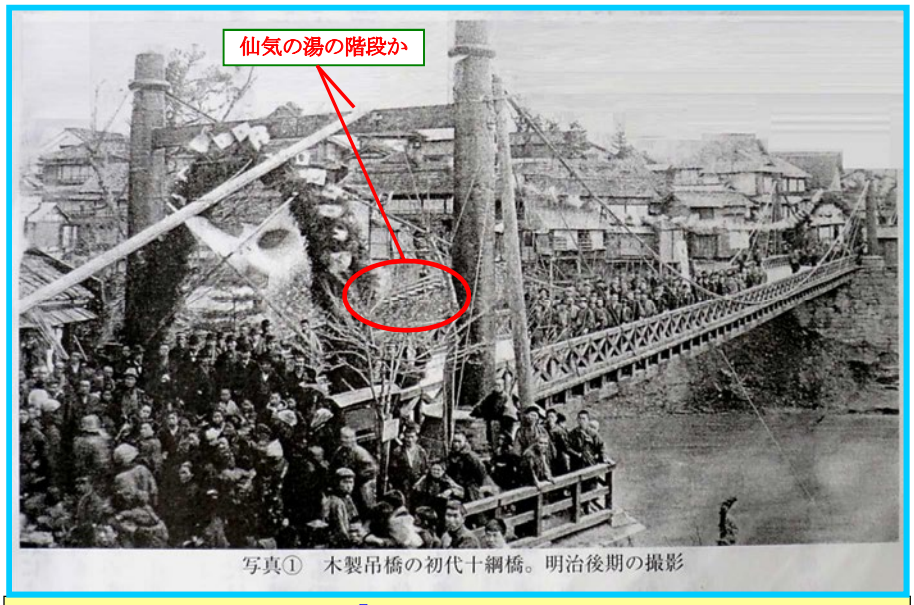
「摺上橋真景」の図。明治６年

明治６年完成の木橋の『 摺上橋 』、原本は多色刷りの錦絵で平成 24 年に江戸東京博物館の“日本橋展”に参考展示された。当時、国内最大級の近代的な橋として錦絵の題材となるほど世間の注目を集めた。 しかし完成９ヶ月で橋が落橋する

私も専門ではないので分からないのですが、例えば「 *いひわたるかな…* 」というのは、恋しい人に言い寄り続ける、いわばプロポーズをしつこくやったというニュアンスの言葉のようで、思っている人に呼びかける歌ということのようです。では「 *とつなのはし…* 」というのは一体何ぞやということになるのですが、この辺はちょっとややこしくなるので、最後に時間がありましたら詳しくお話ししたいということで、ここでは、十綱橋にちなんでこういった歌が残っているということだけに留めておきたいと思います。

また、伝承によると、佐藤基治が信夫の荘司に命ぜられ大鳥城に居城すると、城の防衛上、文治５年（平安時代後期）大鳥城の戦のおり、それまでの吊橋を切り落として渡し舟にし、ここを**「十綱の渡し」**と呼んだといいます。

この渡しは、飯坂側も湯野側も非常に急な坂道であり、特に冬場に坂道が凍ると此処を通る人馬は大変難儀をしたと言われています。今から３００年ほど前（江戸時代中期）からは飯坂側は白河藩、湯野側は三州刈谷藩、お互い他国でありましたが往来は活発であったようで、上飯坂村（旧飯坂町）の絵図面に摺上川を横切って綱が張られていて、その綱を頼りに船を動かしていたということが描かれております。また、**「村鑑」**という記録、これにも渡し船があったという記録が残っています。これによると、船の長さが６間ほどですから、かなり大きな船です。１１m近くあり、幅は４尺５寸（１３０ｃｍ）深さが１尺２寸（３６ｃｍ）ということだったようです。



写真①　木製吊橋の初代十綱橋。明治後期の撮影

明治 8 年完成の木製吊橋、初代『 十綱橋 』 湯野側に向かって撮影、湯野側 取付け位置は現在の橋より下流に設置。橋桁も立派で丈夫に造られ、当時としては名橋と云われる木製の吊橋であった。

それから更に時代が下がって、天保１２年４月（江戸時代後期）に**「信達一統志」**という本が出ております。これは鎌田の人で志田正徳という方が書いたのですが、その文章の中に**「十綱の渡し」**という、**「十綱」**の名前が初めて出てきます。これもレジメで書いておきましたが、ちょっと読んでみますと『 *いにしえは綱十筋を両岸に引っ張り、小木を綱の上にならべ繋ぎ橋となす　故に十綱の橋と云ふ　後世は津渡となす　故に渡綱の渡と云へり　十と渡と其音似たればなり…* 』と書いております。これについても最後にちょっと話をしようかと思います。そういう渡し舟がずっと続いていた訳ですが、この場所はちょうど今の十綱橋の

開通当時は水流も多く、高い断崖絶壁に架けた吊橋は壮観そのものであったろう…常に欄干には見物客がたたずんで居たと言う。左側に仙気の湯の館が、右は飯坂側まだ湯野より発展されてない模様。荷馬車や人力車らしきものも見える。現在は飯坂街道（笹谷、平野、経由）が中心だが、明治の初期頃は東方側、奥州街道沿い**瀬上、長岡**（今の伊達）、桑折が繁栄していた事（芭蕉が瀬上宿場町より飯坂へ来た事。又桑折郡役所の在所。そして軽便鉄道が早くから長岡より湯野へ開通した事など）から湯野側は旅館も初めは多かったと思われる。

した辺りに渡し船があったと言われており、その跡はしばらく残っていたようです。形としては両岸に大きな柱を立てて、その柱を綱１本で結んでいました。ここは流れの速い所ですから、船は流されないように綱に結びつけて、その綱を手繰りながら行き来するという動かし方をしていたようです。ですから当然、水が増えると船は止まり、あそこは非常に険しい崖の下ですから、船着場に降りていくためにはかなり道が悪く、特に冬になれば氷が張って、かなり危ない、**非常に不便な渡し船**であったというふうに言われています。

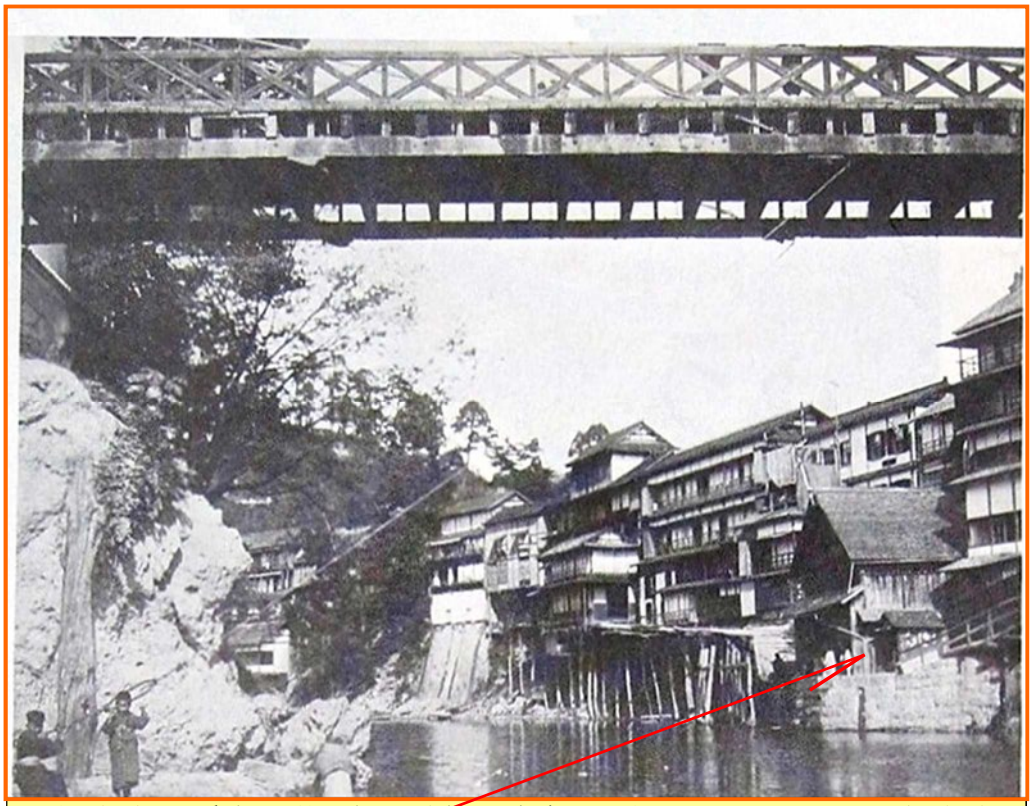
そこで、明治の初めになって、この渡し船を何とかしたいと考えた人が２人出てきました。１人は、**熊坂惣兵衛**という７９歳の老人だったそうですが、ところてんやお菓子を行商していた商人（末裔には飯坂で繁栄してる菓子屋あり）です。もう１人は、**片平伊達一**という当時４３歳で目が悪くて按摩様（昔のマッサージ師の呼名）をやっていた人物でした。この２人が何とか橋を架けられないかということを考えていました。明治５年のことです。たまたま、当時の安場県令が足を痛めて飯坂穴原で湯治をしていました。その時に按摩様であった伊達一が呼ばれ、これは良い機会だということで県令に**直接橋を架けたいと直訴した**のが発端になったというふうに伝わっています。明治５年７月７日付けで書類にし、惣兵衛と伊達一が発起人となり県に言上書を提出しました。この書類について私は見ていませんが、県庁文書と

現代の感でも木製吊橋とは思えない幅と長さの堂々たる『 十綱橋 』 以前は高い崖を下り、そして船で川を渡り又崖道を上がるという交通手段で荷物も限定されたが、それが人馬車で瞬時に渡れるようになった事。何ほどか湯野、飯坂の経済発展には寄与された事で、現在の近代的な飯坂温泉の礎がこの明治の開通にあつたことが歴史で接すると飯坂人として感慨深いものがあろう。

して残っているようで、これは実証できるようです。ただ問題がありまして、安場県令が県令に発令されたのは、その年の明治５年６月２日付けというタイミングでありますから、その６月から７月７日までの間に出願をし、この言上書には村の役人の添え書きがされているということが残っていますが、そういう手続きをして、果たして時間的に間に合うのかという微妙なタイミングではないかという感じがします。そういうことがありまして、この２人の願いが県に聞き届けられ、明治６年２月に橋の工事が着工されました。

そして、その時**伊達一**はかねてから蓄えていた**５０両**を差し出したいと県令に申し上げ、また、同志の**熊坂惣兵衛**に橋の話をしたところ、**惣兵衛**も共鳴賛同してくれて自分も**１００両**を寄付することになったと言われています。

その年の１２月２１日に橋が完成しました。この時の橋の**名前は「摺上橋」**と呼ばれていて、まだ十綱橋という名前は付いていません。これは、長さ６２．７ｍ、幅６．４ｍの木と鉄を併用した橋で、橋脚ない摺上川を一跨ぎするアーチ型の橋であります。当時、**国内最大級の近代的な橋**として**錦絵の題材**となるほど注目を集めたようです。材料は村の中の、あちこちの神社やお寺、そして医王寺の奥にある**鯖野薬師堂**などから切り出して調達したようで、八幡神社や医王寺、天王寺から主に持ってきたようです。しかしこの大きな喜びもつかの間、完成後９ヶ月の明治７年９月１６日の**洪水で落橋**してしまいます。設計上か、生乾きの木材を使ったためなのか。発起人の伊達一、惣兵衛は、悲嘆に暮れたのでした。この日はちょうど医王寺の奥にある薬師堂のお祭りだったようで、その薬師様の祟りではないかというふうな話も出てきたようです。



木造十綱橋下より愛宕山を望む。欄干と床組みの完璧なる木造りの明治時代の初期の吊橋十綱橋の雄姿、板張り造りらしき仙気の湯が見える。旅館の川への支えは石積み少なく、丸太木材使用であった。

この橋が落ちたという事について、県では非常に責任を感じたようで、県の費用で橋を造り直すということで動き出しました。当時、通常の工事は地元負担でやっていますので、県がお金を出すことは非常に異例だったようです。県では当時、皇居の中に山里の吊り橋という鉄で作った吊り橋があり、それをモデルに計画を始めたようで、両岸を深く掘って、ここに太い杉の柱２本で門型の塔柱を建て主索と吊索には鉄索を使い強固な床組みを持つという構造の長さ６９ｍ 幅５．５ｍの近代的な木造吊橋でした。明治７年９月着工、明治８年５月２３日に落成しました。わずかこの間８カ月と非常に急いで造った様子ですが、これは今残っている記録では、**我が国の近代的な吊り橋**として、**最初のもの**だと言われており、明治１４年に**東京上野公園で国内勧業博覧会**が開かれた時に、この橋の模型が展示されたという話も伝わっています。

この橋については、初めて昔の言い伝えに習って**「十綱橋」**という名前が付いた訳で摺上橋と十綱橋が非常に短い間に造られたという背景ですが、こんな話もあります。実は明治３年頃から、**茂庭村、湯野村、上飯坂**

村（旧飯坂町）の３つの村で新しい道を造ってほしいという動きが出ていたようです。これは俗に**山形街道**と言われています。ルートは瀬上で奥州街道（現在の国道４号線）から分かれて下飯坂を通って、小川を渡って上飯坂、それから**湯野に渡って茂庭の梨平から山を越えて、七ヶ宿町の湯原**という村まで通し、梨平から湯原まで

写真②　十綱橋上流側に架けられた仮橋

明治　43　年、木製吊り橋が壊れ路面が傾き通行止めとなり、その為に上流に架けられた仮橋、その後何度か仮橋も流されたが、その３年後に今の鉄製アーチ型の十綱橋が施工された。

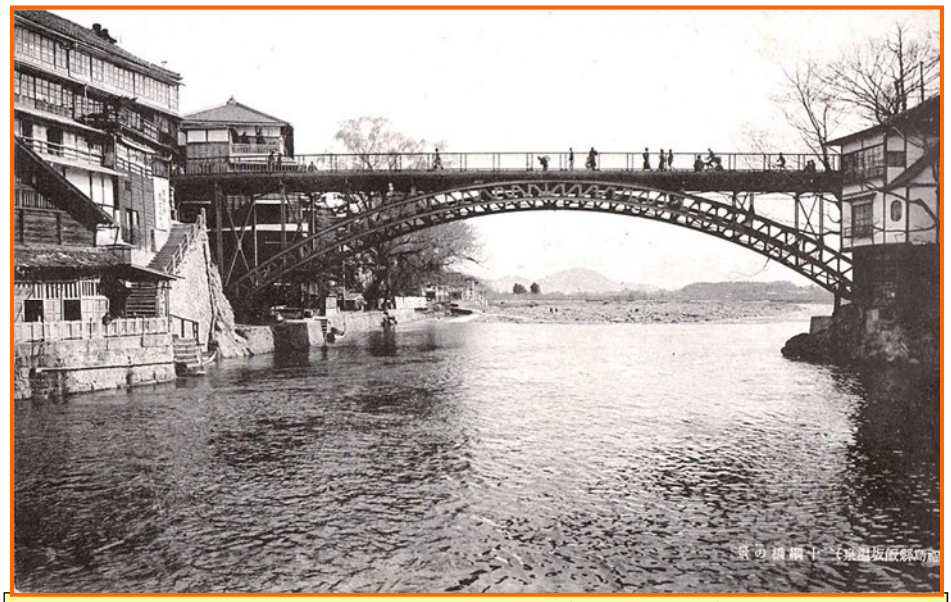
９キロ位の距離があったようですが、こういう道路を造りたいという願いがあったようです。**山形街道**は**明治７年頃には開通**したようです。いわば、国の道路としては国道に位置づけられまして、明治１４年に中野の方に**万世大路**が出来るまで、国道としての重要な道路であったと言われています。おそらく、この当時は太平洋から東北の日本海側までに抜ける道路は他に無く、例えば七ヶ宿を通っているのは羽州街道、小坂から萬蔵稲荷を越える道路があったのですが、非常に急な道路で、当時の日本海側には幕末からロシアの艦隊がちらほらしていたということもありまして、軍事的な意味からいっても、大砲の運べるような道路の必要に迫られたのではないか、そんな背景があったと推察されます。

ちなみにこの時、十綱橋もこの道路の一部として架けられた訳ですが、小川橋についても、その前は、大水が出ると流れるような橋だったのですが、明治７年頃、飯坂の**佐藤直右衛門**（現在のさなお）が、自分のお金でここに橋を架けたという記録が残っています。

この**初代「十綱橋」**は残念ながら、当時の設計施工とも、未熟だったせいか年々の修繕費がかさみ、明治１１年から明治２０年まで**橋賃をとって修理**を補うことにしたようです。

それから、年表にも書いておきましたが、明治１７年に伊達一の念願で十綱橋が出来たものの、橋の安泰を図るにはどうしても**「人柱」**を立てることが必要と、一大決心をして、川に**身を投げて死んだ**という言い伝えが残っています。　５月２３日というのは、十綱橋が完成したちょうど同じ日で、偶然の一致なのか、因縁があるのかというようなことから、人柱説が出てきたのではないかと思います。この事実についてですが、昭和４３年に今の新十綱橋の東側、愛宕山の下に伊達一の頌徳の碑が飯坂観光協会で建てられました。与謝野昌子の碑と一緒に立った訳ですが、**人柱説がしっかり文章**として書かれたのは、これが初めてではないかと思います。

その経緯については、**菅野円蔵**さん、戦中から戦後にかけて飯坂小学校校長を務められて、その後公民館長、教育長をやられた方ですが、その方が**「大鳥城記」**の中で、十綱橋の由来というものに書かれています。その中に、碑を作ったことも含めて人柱説について詳細に説明されています。ただ考えてみるに、目の見えない伊達一が川に身を投げる、その場所は赤川と摺上川が出会う所で、そこの深みに身を投げて死んだというふうに言われています。目の見えない人が、そこに身を投げるということが果たしてできるのかどうかというような気もしますが、いずれにせよ、そう伝わっています。

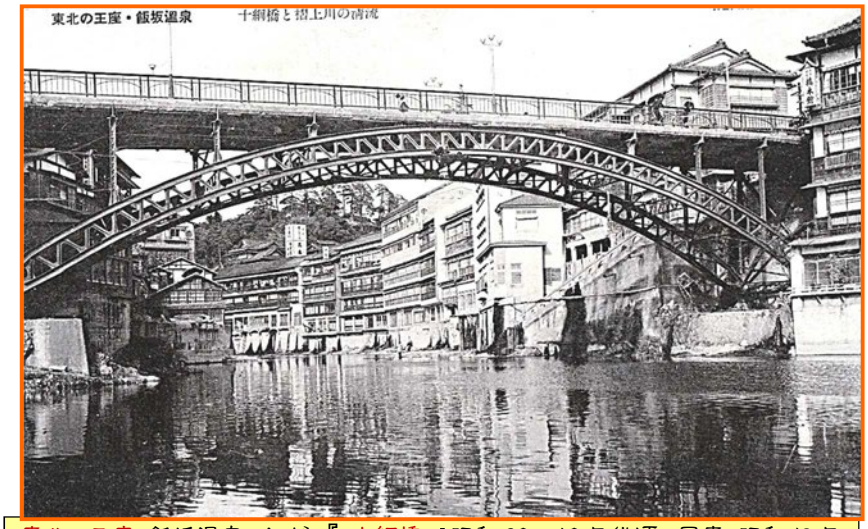


開通間もない大正初期の飯坂のシンボル鋼鉄製アーチ橋、石のアーチ橋は古代ローマによく見られますが鉄製アーチ橋は 18 世紀イギリスから始まり、日本では鉄の国産化が出来た明治末頃からで、十綱橋はわが国　鋼鉄製アーチ橋　の歴史の第１世代に当たります。

そういう形で、吊り橋の十綱橋が出来た訳ですが、伊達一が人柱になった甲斐もなく、その後もトラブル続きだったようで、あちこち痛んでしょっちゅう修理をするということが続きました。明治２７年にはメインロープが壊れたとか、３４年にも大修理をしたということで、ついには明治４３年摺上川の大洪水が出た後に橋が傾いて通れなくなったということがありまして、吊橋の下に仮の橋脚を５本立てたり、あるいは上流に仮橋を造ったりというようなことで凌いだようですが、それもまた流れるということで、いよいよ新しい立派な橋を架けなくてはいけないというような動きになってきたようです。

そういう動きがあったので、大正３年に新しい橋を架けようということが始まりました。その時に出来たのが、**今の鉄のアーチ橋の十綱橋**です。大正３年４月に着工して、翌４年９月３０日に完成しました。この橋の形式は、橋の専門書等に書いてある言葉で紹介しますと、「上路　２ヒンジ　ブレーズドリブ　アーチ」というものです。ちょっと分かりにくいのですが、アーチと云うのは、虹のような形です。これは上からの道路の重みを支えるのに非常に合理的な構造です。この構造のアーチの上に道路を通すのが上路という言い方です。２ヒンジのヒンジと言うのは、橋の下で橋台、橋の上と下の継手と言いますか、橋が暑さ寒さで伸び縮みしたり、地震で揺れたりする時に壊れないように柔らかく動きを弱める装置をヒンジと言います。ヒンジが２つで両方の橋台に付いているのが２ヒンジです。ブレーズドリブですが、リブというのは肋骨です。肋骨構造の中に肋材が２つあり二重になっています。その間を梁で結んで強化する構造を持ったアーチ橋をこう表すのです。この橋の特徴はリベット工法で、今では見られなくなりましたが、昔、鉄骨を組み立てる時に２つの鉄板の両方に穴を開けて、そこにボルトの親玉の様なもの（リベット）を入れて、真っ赤に焼いたものをそこに入れて、片方は頭が付いていますが、もう一方の方を叩き潰して固めます。そうすると、リベットが冷えることでしっかりと縮んで固く接着されるという構造で橋ができております。

その後、大正４年から１００年間の維持管理の歩みを見てみますと、１つは橋の路面の舗装ですが、以前はタールで処理された木材の丸太をぶつ切りにして同じ高さにして、それを並べて舗装するというやり方をやっていたのですが、**昭和１１年にトペカ式アスファルト舗装**が施行されたようです。トペカ式というのは、今では骨材に砕石を入れてアスファルトを舗装していますが、この当時はきれいな砕石を作る技術が無かったようで、もっぱら砂を入れて固めるという工法が取られていたようです。昭和３０年代になると、車がどんどん増えてきました。車が通る度に橋が揺れるので危ないといった苦情も出てきて、何とかしなければということになった訳ですが、解決策として**昭和４１年に上流３００ｍの所に新十綱橋**が出来ました。そこで、十綱橋の交通を新十綱橋に切り替えて、全面通行止めをして徹底的な補修をしています。鉄骨の上にもう１つの鉄板を被せて、そこを溶接して強化するという大修繕が成されました。もう１つの特徴は照明灯で、昔の写真を見ると十綱橋の上には照明が全く無かったようです。ただその後、昭和２０年代になると真ん中に一対、両端にそれぞれ一対の照明が立っていたという写真があります。その後おそらく、昭和４２年の改修だと思いますが、も



東北の王座、飯坂温泉のｼﾝﾎﾞﾙ『 十綱橋 』昭和 30～40 年代頃の写真、昭和 19 年の飯坂大火で残った荷屋旅館のｴﾚﾍﾞｰﾀｰの塔屋の宣伝看板が懐かしく、この時代頃が戦後の飯坂温泉の大繁盛期が続く時代であった。

のすごい数の照明灯が立ちました。昔の吊り橋のイメージを再現したようで、橋の両側の欄干にポールが立っていて、その上に２つずつ電灯が付いています。片側に多分２５本ぐらい立っています。それぞれ２つ電球が付いています。おそらく１００個位の電球が付いていたのではないかと思います。それが時間が経つと共に電球が切れると、橋の上ですからそれを交換するのは大変難しく、所どころ歯抜けの照明になってきて、非常にみっともないという声も出たようです。そこで**平成１９年の街づくり**の中で十綱橋の改修もありまして、照明を欄干の中に埋め込むという形に変わりました。それから、塗装についても２０年に１回ずつ、塗装のやり直しが行なわれています。

十綱橋は**平成１６年に土木学会選奨土木遺産**に指定されました。これはこの１５年間を平均すると１年に２０ヶ所位ずつ、土木学会から選定されていますが、飯坂では十綱橋の他に**西根堰**と**万世大路**の３つが土木遺産に選定されています。全国では今まで３０２カ所、その中の**１％の三箇所が飯坂にある**というのは、確率からいうと非常に高い確率です。ちなみに福島県内では、全部含めて５つだけで、この３つの他には**安積疏水**、土湯荒井にある**荒川の水防治水施設**のこれだけです。**飯坂として非常に自慢できる**ものを抱えていると評価できると思います。その様なことで、十綱橋について１００年という節目を迎えるということは、意義あることで賑やかにこの１００年をお祝いできればと希望しているところです。

前座で、**十綱橋**という名前が出てきた経緯ですが、辞書に「 綱橋 」という言葉があります。深い渓谷などの両岸や絶壁などを横切って綱を張り、これに車で籠を吊るして人や荷物を乗せ、行き来できるようにしたもの、という説明がされています。先に言いましたように、十綱の渡しは綱を頼りに動かしていた綱の渡しで**「渡綱（とつな）」**と呼ばれていたのではないでしょうか。

ある時、ここを渡った人、おそらく 『 *みちのくの　とつなのはしに　くるつなの　たへずも人に　いひわたるかな…* 』 の歌を知っていた人でしょう。土地の人が渡綱と呼んでいる船の中から、両側の険しい岸を見て「ここに例の歌にある『*とつなのはし…*』があったのか」と思ったのかもしれません。綱橋と渡橋が結びついた訳です。綱橋で吊るされた籠に乗って向こう岸に渡るには、一生懸命綱を手でたぐり寄せなくてはならない訳です。

一方、歌の「*とつなのはしに　くるつなの…* 」というのは、そうして手でたぐり寄せる綱のように『 *絶えることなくいつまでも思う人に言い寄り続けてきたことよなあ…* 』というような意味に詠んだ恋の歌ではないかと思います。こうして風流人の連想から**「とつなのはし」**がこの摺上川に位置付けられ、更に「とつな」が十本の綱と解釈されて十綱橋という名前が生まれてきたのではないかと私は想像しています。歴史というのは、応々にして様々な言い伝えで成り立っています。飯坂についての言い伝えも、真実かどうかと言うと議論はあると思いますが、少なくとも先人、昔の人達はそういう思いを込めて飯坂の生い立ちを思い続けてきたという、その証がそういった伝承、昔話に残っているのだろうと思います。**私達、史跡保存会も、物としての史跡を守るだけでなく言い伝えを、これが本当かどうかと問うことなしに守っていくこと**も、１つの役目ではないかと考えています。 【 敬称略 】

〔 菅野栄二様 執筆“十綱橋秘話”の一部を参考にさせて頂きました 〕

◆閉　会　点　鐘　　会　長

飯坂の歴史を辿る　～シリーズ第６回～

『西根堰 Part Ⅰ　西　根　堰　余話　』

◆　鈴木義治会員よりお祝い進呈

私は茂庭中学校第一期卒業生ですが、菅野栄二先生はその中学校時代の恩師です。去年の１１月３日の閉校式にも先生のお誘いで参加して、貴重な体験をさせていただきました。去年、春の叙勲を受賞されましたが、その時は分からなかったものですから、ここで改めて先生にお祝いを申し上げたいと思います。

今日は宜しくお願いいたします。

◆ゲストスピーカーの紹介　　篠木勝司　会員

ゲストスピーカーの紹介前に、前回の白虎隊の週報についてですが、私も色々と調べて、子供達に言い伝えたい思いで編纂いたしました。それは最後の部分でのイタリアとドイツから寄贈された像などの事柄です。日本とイタリア、ドイツの三国同盟、世界大戦の前夜頃であったためにこれを贈ってきたのかなと思っています。

戦後、進駐軍が駐留した時、全て壊してしまったのですが、時代の流れと共に会津の人々が翻弄された歴史の姿であるということで、詳しく調べて編纂しましたのでお読みいただきたいと思います。

さて、今日は飯坂でも飯坂の歴史全てが頭に入っていらっしゃる素晴らしい先生、菅野栄二先生をご紹介したいと思います。　今回は『　飯坂の歴史を辿る　』というシリーズ第６回ですが、今回は飯坂でも長く歴史に残る西根堰についてお話をしていただきたいと思います。菅野栄二先生は湯野町生まれ、湯野町育ちで飯坂近郊の学校の先生を長くお勤めなされ、最後には東湯野小学校の校長先生で退官された方であります。

◆ ゲストスピーチ　　『 西根堰の余話 』　　元飯坂史跡保存会　会長　菅野 栄二　様（2015. 5. 21）

今ご紹介いただきました菅野栄二です。西根堰について、記録にあるようなものを全てやれば３時間位掛かりますので私なりにまとめました。１番初めに、私もいつの間にか９０歳になりましたが、皆様ご承知のように飯坂温泉のシンボル十綱橋は１００年です。西根郷を潤す西根堰が今般、土木遺産として選定されました。この西根堰は約３９０年前（江戸時代前期）に作られました。郷土愛に溢れる飯坂ロータリーの皆様から老齢の私に西根堰の話をしてほしいと頼まれましたが、西根堰の裏話ぐらいはできると思って、『 西根堰の余話 』として題名を付けさせていただきました。西根堰関係の用水路がどの位あるかということを申し上げてから、私の話に入りたいと思います。

これが昔の湯野村です。これが東湯野、睦合や桑折はこの方です。　１番先に岡堰（西根上堰、下堰経路地図 A参照 現状は畑になったため、幾らかの面影が残っている）というのが出来たそうです。

自分で大型地図を作って、西根堰の経路を説明する菅野先生

いつ出来たか記録に無いそうですが、長岡に諏訪野（今は団地）という所がありまして、あの辺に使われる農業用水だったそうです。これが簡単に出来たものですから、西根下堰ぐらいは簡単に出来るだろうといって、今の緑光園のちょっと上の方（西根上堰、下堰経路地図　F参照）から取水し、前野の方を通って東湯野を通って、伊達町に行く下堰の工事となった訳です。これがわずか９ヶ月で作ったそうで、川を繋いでいったらしいです。これで３００ｈａだけの耕地が出来たため、もっと高い所から流せばもっと耕地が出来るだろうということで、穴原の奥十綱橋の下の所から取水しました。これが驚くなかれ、長さはこちらの約倍以上ですが、耕地は９００ｈａですから、長さが１.５倍なのに耕地は３倍になった訳です。その代わり、３年ぐらいで出来るだろうと思ったら、こちらも驚くなかれ９年も掛かり、資材も無くなって、古河善兵衛氏が自分が米沢にあげなくてはいけないところの、そういう物まで使ってしまったということです。

（現在は湯野、東湯野には畑灌と言う農業用水設備があり、鵜橋の下から湯野の一番高い所、500mの大船山、そこまで摺上川の水を揚水し各農地に配水出来る畑灌というものが出来ております。畑灌は東湯野まで行くので湯野と東湯野はどんなに干ばつが起きても干害にはならないという事です）

西根堰上堰、下堰と山から流れ出る米川、山田川の取り合いですが、この川を越すのにずいぶん当時苦労したのが明神のといごし（上堰、下堰経路地図 G参照）と、その下流の山田川といがし（上堰、下堰経路地図 K参照）で

す。ここも難所でありました。昔は川を越す時にどうしたかというと、谷は低いですからずうと長く湾曲していったのです。そうすると、谷を上がってきて、狭い場所に橋を掛けると良いので水を流す所を短くしたという事です。

さて、それではこのお話を頭に置いて私の次の話に進みたいと思います。

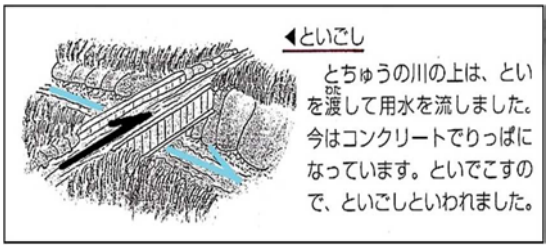
管野先生の講演に聞き入るクラブ会員

1. 西根郷の悩み

西根郷の地名が誕生したのは非常に古く平安時代だと言われています。伊達郡の中心を成すところの阿武隈川という川がありますが、その川の西の山麓を**西根郷**、東の方を**東根郷**と呼ぶようになりました。東根郷は平地が多く、西根郷は山裾です。東根郷は土地が早くから肥えていて水の便も良く、田や畑が早くから開けました。それに比べて西根郷は山が多く水の便も悪く、米も取れず苦労していましたが、摺上川の水を何とかしたいという願望は持っていたそうです。８５０年前の大鳥城の頃からも、そういう考えがあったようです。

◀しがらみでできたダム

コンクリートのない昔は、木のくいや枝を組あわせて水をせきとめ、小さなダムをつくりました。そうすると自然の川とせきの用水がよい具合にあわさって、十字路に流れたのです。

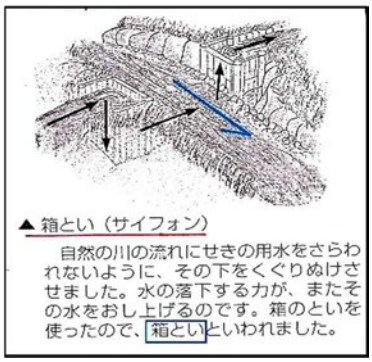


◀といごし

とちゅうの川の上は、といを渡して用水を流しました。今はコンクリートでりっぱになっています。といでこすので、といごしといわれました。

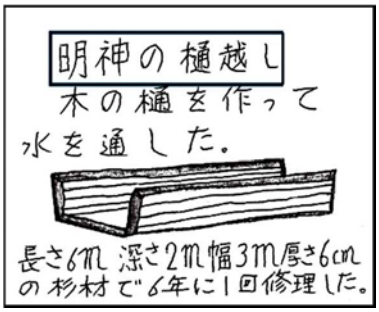
2、江戸時代初期の国情

初代将軍徳川家康が亡くなり、二代将軍秀忠の（１６１０年）頃、上杉家は訳あって会津１２０万石から米沢３０万石に移封されてしまいました。しかし、**上杉藩**（当時の湯野は上杉藩）の殿様は賢いですから、家来を首にしたり、農民を粗末にはしませんでした。藩の石高を上げ、領民に仕事を与えるために開墾を奨励しました。開墾して幾らかでも潤うと良くなるだろうと、**西根堰**はそのような目的の工事でした。そんな訳で、江戸時代は石高を上げれば、これにこしたことはない。それで、先ほどもお話した伊達町の岡堰ですが、その少しの上流ならば、農民相手でもできそうだと目論み、西根郷の**郡役**、**佐藤新右衛門**を中心として、わずか９ヶ月間で、秋から春までにできてしまったそうです。これが**下堰**です。湯野、東湯野、伊達を通り水路１４ｋｍ、耕地３００ｈａ。住民は大豊作に喜び、水が流れて行く時それとかけっこして行ったというお話もあります。



▲箱とい（サイフォン）

自然の川の流れにせきの用水をさらわれないように、その下をくぐりぬけさせました。水の落下する力が、またその水をおし上げるのです。箱のといを使ったので、箱とい といわれました。



明神の樋越し

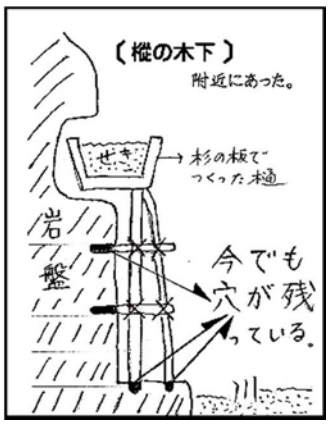
木の樋を作って水を通した。

長さ6m 深さ2m 幅3m 厚さ6cmの杉材で6年に1回修理した。

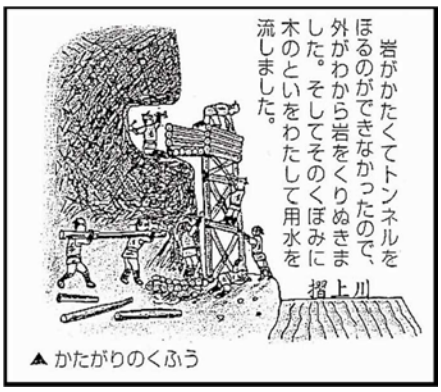
3、西根上堰を作る大苦心

①、上堰を作る時、穴原のどこから水を入れるか、ちょうど**鵬橋**の上の所から始めは上げたそうです。**大坊**という所、あそこの所は**旧飯坂浄水場**に上げる時も使いましたが、あそこから摺上川の水を上げたのです。しかし、あそこから上げるのもなかなか容易ではありません。中十綱橋辺りをどういうふうにしたかということですが、トンネルを掘らなければ高いところは流せません。しかしトンネルもあまりに長いと息苦しくなってしまいますから、何m置きに横穴を掘って、１１の工区に分けて、ここからここは何日までにやりなさいという、いわゆる受持分担をしてやったそうです。その**次に勾配**です。穴原が大体１００ｍ（海抜）だとすると、向こうの下の所は５０ｍか６０ｍぐらい、その間に、どの位の落差があるかというと、１０００m行って２ｍ下がるほどです。場合によって、もっと平らな所は**１０００m行って１ｍ下がる**ほどになります。黒板でいうと２つの黒板（４ｍ）で５mmの落差で水を流したというのですから、いかに苦労したかが分かります。その勾配を得るために**提灯測量**をしたといわれます。これは信夫山から見たと言われていますが、信夫山からではむりで、おそらく余目の高台辺りから見た方が良く見えると私は思います。

②、山側の川を横切る時に如何にして水をそこに通すかということですが、うまくやると山から流れた水を一遍使って、増やしていくことができるのです。そこでも色々と苦労はあったようで、今でも残っている**産ヶ沢**（現、藤倉ダム）から流れてくる川の交差の**芝堤という場所**（しがらみで出来たダム）を見ると本当に苦労したところが分かります。また、山から横切るようにするため、ある時には板で樋を作り、地下にはサイフォン原理を用いた**地獄洞**というものも作ったそうです。ゴミが溜まりつまると周りに水が溢れてしまうのですが、これは水を流すため



に本当に木で作られているそうです。上の方はあまりゴミが溜まることはなかったそうですが、地獄洞は溢れやすかったと言います。それも木製ですので６年ごとに作りかえないといけません。ですので、大きな木をいつでも切られるように、**明倉原御林**（みょうぞうはらおんばやし）という所があります。これは古い地図に載っているのですが、今でも杉林がありますからぜひ見てください。また、あっちこっちに竹林があるのですが、昔は**蛇籠**（じゃかご。竹で編んだ細長い籠に玉石を入れて堤防の役目をさせた）の材料として竹を利用していたのです。それから、運搬は当時全て人力で**畚担ぎ**（モッコカツギと言う縄で編んだ籠のような物に砂、砂利を入れ前と後ろ２人で担ぐ）というもので運んでいたので、なにほどか苦労したと思います。そんな苦労の末に作られたもの、それが**上堰**です。穴原から取水して東湯野、睦合、桑折、国見、梁川までの水路は２６ｋｍ。耕地は下堰の３倍となる９００ｈａに開けました。予想外にお金と年月がかかり、完成までに９年が費やされました。この堰を作った中心人物である**古河善兵衛**と**佐藤新右衛門**の関係は、学者の研究によると、建設に至っては意見が合わず悲劇に終わったということを言われていますが、私は西根神社を拝む時に、そのようなことよりもこの偉大な事業、西根郷に尽された２人の努力に感謝の念を表すべきであると思っています。



4、江戸時代における西根堰

江戸時代というと、今から２００年ほど前のことになります。その頃の上堰を作る材料は、**石**、**土砂**、**柵**（しがらみ）、**蛇籠**（細長い竹かごに石を入れ流れを止めるもの）でした。運搬に使われたのは専ら**畚**（もっこ）だったようです。私も戦時中には**畚担ぎ**をやらされたものです。

下堰の旧取入口の標示柱、摺上川沿いの 緑光園 〃 北部下堰沿いに有り

現在の明神の樋越し米川を横切る為、昔苦労した場所
（上堰、下堰経路地図 G参照）

幕末において国情が安定すると、特に半田銀山が活躍し、鉱石を掘る技術を持った人夫も多く集まりました。しかし、彼らは若いうちは良いのですが、４０歳を過ぎると使いものにならなくなってしまうそうです。その時にこちらの地域ではその技術を買って取水工事をしていました。今まで**大坊**の所（上堰、下堰経路地図 C参照）から上げていた水を、あそこも浅くなったために、今度は現在の奥十綱橋の下部、月の瀬の向かい（上堰、下堰経路地図 B参照）から取水することになった時は、これまた苦労したのですが、半田銀山の人夫がすごく役に立ったと言われています。その場所と、**堅刈**（かたかり）の**といごし**（上堰、下堰経路地図 D参照）、それから、弘化時代（1844 年頃）に作った**弘化新廊下**（廊下のような岩盤のトンネル、現在も利用されている）（上堰、下堰経路地図 L参照）に行ってみますと、やはり百聞は一見に如かずですね。すごい様子でありました。転ぶと危ないので転倒注意の立て札を立てなくてはいけないと思いますが、みなさんにもぜひお気をつけて行っていただき、その目で見ていただければと思います。

5、明治時代における西根堰

では**下堰**についてです。上流の茂庭では冬になると山の材木を切りましたが、その材木は摺上川に流していました。その頃は発電所も何も無いですから、ぐいぐい流れてきて、それがどこに止まったかというと、今の緑光園のちょっと上の方、小川の手前の浅瀬になっている所に流れ着いたそうです。

そこで流れ着いた材木を引き上げて、焚物にしました。流れた材木はもう材料にはなりませんが、焚物にはなったのです。柴木や割り木といって長さ４５ｃｍぐらいに切ったものを、下堰を利用して流して**東湯野**や**桑折**などへ堰の水を利用してひとりで運んでもらったそうです。

しかし、その場所もどんどん川床が下がって、**明治３０年**には５００ｍぐらい**上流の十綱橋の下に大改修**されました。しかし戦争中は金の使い方が戦争の方にばかり向いていて、そういう場所にはさっぱり金を掛けられませんでしたから、この作り方は私達が知っている昭和１９年位まで、昔の作りそのままだったのです。つくると

〔 文中のイラストは 菅野栄二様　提供 〕

きは川に杭を打ち水流を貯め調節したので、そこに水が溜まったものが子供達のプールになりました。そこで水泳ぎの練習をした人は湯野や飯坂に多数いたので、今８０歳以上の人は記憶が有るのではないかと思います。

6、大正、昭和、戦前の西根堰

管野先生の作った説明用の西根堰の各要所々々の写真（タクシーで各所を回って調べた様です）

この時代、忘れてはならないのは水田の収入より養蚕業の収入の方が多くなってきたことです。**蚕様**（カイコサマ 蚕は収入がおおいので様を付けて呼んでいた）は繭で売っただけでは駄目でして、糸を取って織物にしてやることで、利益を倍々にしていったのです。それで製糸工場が大正時代から昭和の２０年頃まであちこちにありました。その製品を運んだり、石炭をいっぱい使ったものですから、輸送に軽便が走ったり、伊達から電車が走ったりしました。そして、皆さんも聞いたことがあると思いますが、湯野には**日東**その後の**片倉**へ、桑折には**グンゼ**、伊達には**田勢**などの工場が出来ました、それらは沢山の水を使ったので、西根堰の水を利用したのです。これらの工場は良質な西根堰の水を使って、肥やしになる蚕様のサナギを流してやったので、上堰の水を下堰に流しても誰も嫌わなかったのです。現在の**トーアエイヨーＫＫ**は、ビスラーゼや注射薬を開発しています。

湯野にはめずらしい名前が３つあります。**鼻毛**（はなげ）、**毛字**（もうじ）、**毛勝**（けかち）です。**鼻毛**はその部落の向かい下にある上堰に岩盤のトンネルが掘られており、そこに草木がぶら下がり鼻の毛のように流れている様子から付いたと言われています。あそこに行って驚くのはこの岩盤をよく穴原まで掘っていったものだということです。現在は三面コンクリートになったうえ、フェンスを付けて下さったので、堰が怖くなくなりました。**毛字**という部落では上堰の田んぼの一番先に水が掛かります。あそこは、いつでも水がこんこんと流れて田んぼを作るには最高の場所でした。そして、その流れを利用して、**文字河原**（もじがわら）という、染物工場などもあったそうでして、今でも平川屋染屋は飯坂や湯野にその子孫の方がいるようです。**毛勝**は東湯野との境目です。これは、山田川という川の合流点です。大正時代に大改修がおこなわれて、もとの所が空き地になった所ができました。そういう空き地は聞くところによると色々と難しいそうなので、**『村長さんに預けておけ』**といって村長さんの名前に登記してある所もあるようです。昔の村長さんが湯野の村長さんではなく、隣村の村長さんということも随分あったそうなのですが、そういう場所があるということもやはり覚えていなくてはいけないと思います。

上堰の鼻毛の岩盤トンネル、飯坂特有の岩盤が露出して当時の難工事の様相が伺える。
（上堰、下堰経路地図 Ｊ参照）

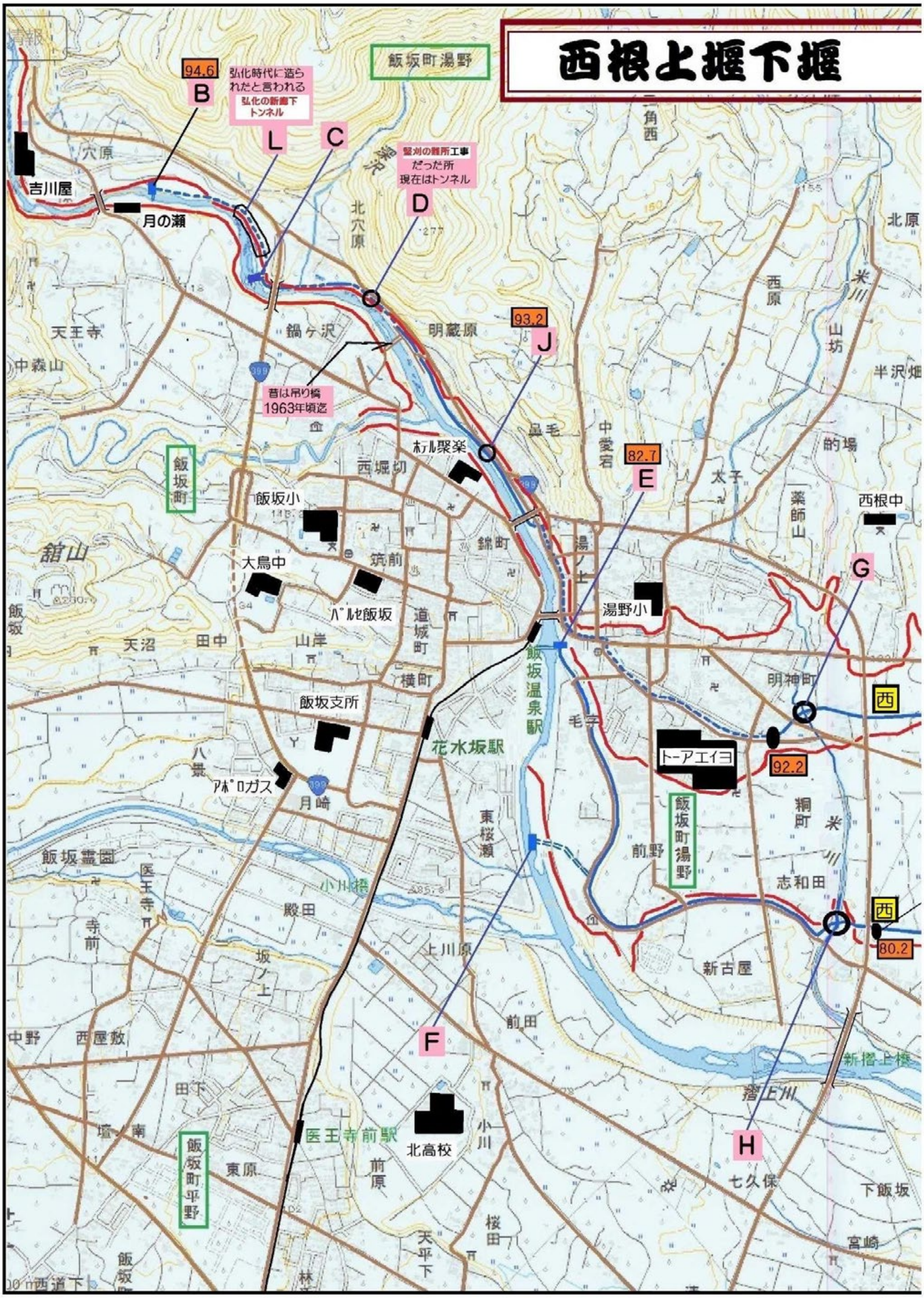
7、昭和の戦後６０年の西根堰

米川と下堰の現在の樋越し　昔ここも苦労の所だった。
（上堰、下堰経路地図 Ｈ参照）

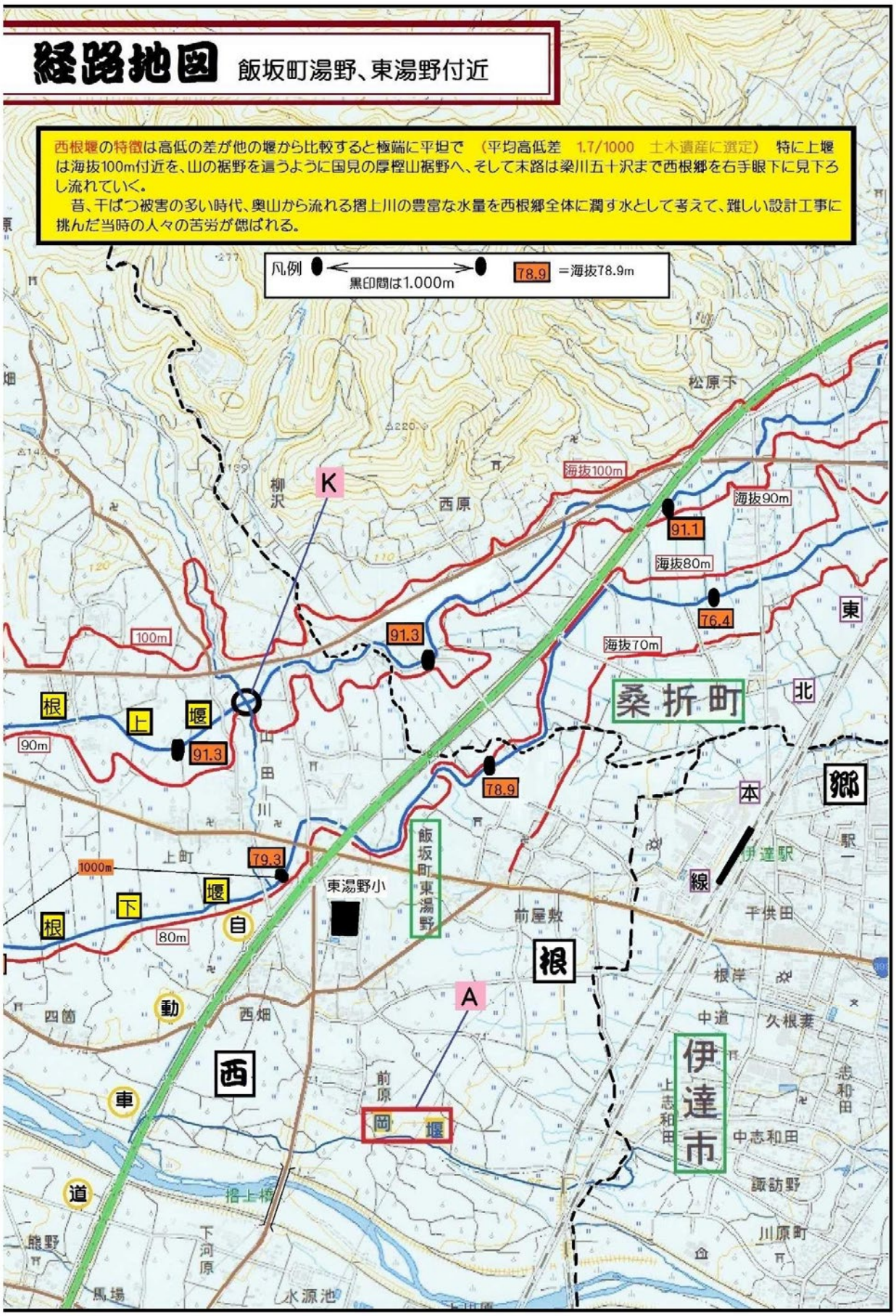
これは私の体験談です。私は２６歳で結婚して以来、上堰の恩恵を受けてきました。私は生まれが北原でして、水関係では北原は苦労していました。しかし分家して、こちらに来てからは上堰の恩恵を受けました。朝は６時に起きて、堰の水を朝バケツ２杯に水を汲み、顔を洗い、後で家内が洗濯に使って、飲み水だけは三軒長屋に１つだけの井戸を使って、それを使いました。堰では洗濯のすすぎ方に、**１０時頃までは**堰を汚さないように、汚い物を流すなという**掟が**ありました。この堰も１０月から３月までは必要ないのですが、防火用水には必要とされていました。水量が半分になりますが、５月の声を聞くと水量を３倍にしないと下々の方から水を余計によこせという声が上がってきます。**５月は水田**の準備、**６月は田植**え、７月になると堰は**子供の水浴び天国**になります。その頃になると、下流の方から水番の係が**とびくち**（穴を掘る道具のひとつ）を担いで、ゴミが溜まっていないか、水門が開けすぎていないか見にやって来ました。時によって堰が止まり、石垣や蛇籠の間からは毛ガニ、ウナギが出てきて大騒ぎになりました。「**川止めになったから皆な行け**」と、**ハヤ、ドジョウ、鮎**などが泳ぐのを大騒ぎで取りました。大きな魚を手づかみにして、摺上川は鑑札が必要だったのですが、ここは鑑札無しで、子供達まで喜んで取りました。

8、平成になるまでの西根堰

昭和３０年代頃からいよいよ田んぼも米をいっぱい取り過ぎて、米余り現象が出てきて、水田が**桃**や**リンゴ**の**果樹園**に、更に住宅がどんどん出来てくると生活用水に使われました。工場が出来ると工業用水に、そして４０


西根上堰下堰
飯坂町湯野
94.6
B
弘化時代に造られだと言われる
弘化の新堀下トンネル
L
C
難関の難所工事だった所
現在はトンネル
D
吉川屋
月の瀬
穴原
北穴原
天王寺
鍋ヶ沢
明蔵原
中森山
昔は吊り橋
1963年頃迄
93.2
J
ホテル聚楽
飯坂町
西堀切
飯坂小
82.7
E
大鳥中
筑前
錦町
湯野小
パルセ飯坂
道城町
天沼
田中
山岸
横町
飯坂温泉駅
飯坂支所
花水坂駅
毛子
トーアエイヨ
92.2
明神町
西
G
西根中
北原
西原
山坊
半沢畑
的場
中愛宕
太子
薬師山
アポロガス
月崎
八景
東桜瀬
飯坂町湯野
前野
銅町
志和田
飯坂霊園
医王寺
寺前
小川橋
殿田
坂ノ上
上川原
80.2
H
新古屋
中野
西屋敷
前田
F
新摺上橋
摺上川
田下
塩ノ南
医王寺前駅
北高校
小川
飯坂町平野
東原
前原
七久保
下飯坂
桜田
天平下
宮崎
西道下
館山

2018.01.13 SHINOGI



〔 国土地理院ウェブサイトより 〕

年代になると水がもっと欲しいということで、産ヶ沢という半田の奥のある所に**藤倉ダム**を作って、そこから水を流していました。

昭和５０年代に入ると上堰、下堰の水を少しでも無駄にしないように**三面コンクリート**にしたのですが、そこに思わぬ**後遺症が出て**参りました。水は流れるが魚も蛙も住めなくなってしまったのです。蛇も入ると上がることができないのです。本当に危ない堰になってしまったのです。

９．西根堰の上流に住む者として

流れの清かった阿武隈川の水も、いつの間にか流れが淀み飲料水に適さなくなり、そこで目を付けられたのが摺上川でした。数年に１度はやってくる洪水に対しても、ダムを作れば心配無く、県北の人々も飲み水に助かるということで、多目的ダムの話が持ち上がりました。昭和４５年頃話が出て、その頃、私は梨平の教頭をやっていたのでその頃の話はよく分かります。

現在の西根上堰、月の瀬うしろの取入
（上堰、下堰経路地図 Ｂ参照）

いつも皆さんのお父さんお母さんは１１月になると出稼ぎに行かなくてはなりません。出稼ぎに行って次の年の３月まで帰ってこない。それがこのダムが出来ることによって変わるだろうということで上流の人は賛成したのです。初め茂庭は全部ダムにするということで**軽井沢**という所を止めようとしました。ところが地質調査をしたら、反対側は半田山だったのです。天王寺層は固いですが、向こうの方はどうだか分からないと言うので、結局上流の**労振**という所に決定したのです。私も労振という所でロータリーの鈴木義治さんを受け持った頃に３年間住んでいたので、あの辺の様子はよく分かりますが、１５年間、反対、賛成、反対、賛成の激論が続けられて、１５年後に摺上川ダムの建設が決定されました。関係書類を紐解くと**昭和６１年に摺上川ダム**をこのようにつくる基本計画が出され、平成３年から５年まで３年掛けて家が水没してしまう**１５０人の住宅**をどこに移転するかということを相談して決めたのです。そして、平成１０年から１７年までの７年間にわたって、約２０００億円をかけて立派にダムが完成しました。完成した１７年６月に１００年に１度しか見られないという、ダムに１００％水を溜めて流す試験があったのです。その試験湛水を私も見てきました。その時の流れ落ちる水の音が凄いのです。茂庭の人は、「何だこれ。抜けたら大変だ。」ということを思うくらいでしたが、「これは１００年は大丈夫だから安心しろ」と聞かされました。上流に住む我々としては水を大切に使わなくてはならず、汚してはなりません。そして水の神様を祭る**西根神社**に進んで参拝をしなければならないと思います。

明治 20 年、堰の功労者、古河善兵衛〔1576～1637 当時の米沢藩家臣で福島奉行、信夫郡、伊達郡の郡代〕　佐藤新右衛門〔1573～1637 桑折の地侍、佐藤基治公 18 代の子孫、当時の米沢藩は信夫郡、伊達郡を信夫郷、西根郷、東根郷、小手郷（川俣、月館、飯野）に分け各郷に4人の郡役を置いた。その西根郷の郡役〕両氏の徳をたたえ祭神として祭られた西根神社

１０、結びとして

３０年前に茂庭の**住民約３分の１の方**が、他地区に移転して下さいました。当時の市長さんがその御礼として茂庭の湯（**広瀬温泉**）を掘って下さいました。私達夫婦も大好きで、この頃はパスも貰ったので、時々行って茂庭の方々を応援しています。皆さんも行ってくださることをお勧めいたします。また、西根神社の例大祭に信者の方がたくさん来るので車が込み合って、花水坂から繋がっていたとか、東湯野から繋がったなんて、湯野の人達は非常に「困った」「困った」と言っているのですが、神信心の人が来るのは１年にあっても３日か４日でしょう。車が込み合って困っているという話も聞こえますが、**“隣の家に、蔵が建つと腹が立つ”**というような小さな根性を捨てて、トイレを貸してあげたり、分からなかったら裏道を教えて案内すれば、皆に喜ばれます。このような**大らかな気持ちに観光地の人々が近づく**ように私は願っております。３０分以上になったかもしれませんが、約束の私の話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。　　◆ 閉 会 点 鐘　　会 長

〔 写真及びイラストは西根堰土地改良区 より提供 〕

t飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第7回 ～

『 今は深い森林の中に眠る 旧13号線　万世大路の面影 』

ゲストスピーカーを紹介する
篠木広報委員会 副委員長

◆ ゲストスピーカー紹介　　広報委員会　副委員長　　篠木　勝司

シリーズ 第7回 は明治、大正、昭和時代、東北の日本海側の経済にとって流通の大動脈として位置付けられた旧１３号線『万世大路』現在は深い森林の中に埋もれて、そこ此処に昔の交通の繁栄が偲ばれる建造物が取り残されています。この道路の繁栄と共に栄えた大滝集落の大滝会会長木村様をお招きして、大滝集落と万世大路の歴史と関わりなどについてお話を頂きたいと思います。実は私が高校生時代（昭和２７～３０年頃）親父に連れられて、栗子トンネル手前の、今は無き大平集落跡付近の山で柴山刈に野宿しながら１週間手伝いさせられた思い出があり、あの山奥深い熊や狸の出る場所での、近代的な栗子トンネルの壮観さは、今でも脳裏の奥に焼きついています。 それでは宜しくお願い致します。

◆ ゲストスピーチ　　大滝会　会長　　木村 善吉　様

ただ今、ご紹介いただきました木村と申します。このような大きな会合に席を取っていただきまして、誠にありがとうございました。私は山育ちで３０歳まで、炭焼きを行っておりましたので、歴史の勉強やこういった道路の勉強はあまりしなかったものですから、若干不安がありますが、今までの記録を中心にお話したいと思います。それでは、『大滝会』とは何をやっている会なのか、ここで紹介をさせていただきたいと思います。「大滝会の足跡」というプリントをご覧ください。大滝会は昭和４９年（１９７４）第１回大滝会を開催。昭和５２年「我が大滝の記憶」を３００冊ほど編集して本にし、県立図書館に所蔵していただいております。その年は開町１００年目ということで、飯坂婦人会館で大滝会を開催しました。昭和５４年（１９７９）集落が無くなる最後の１人、渡辺正義さんが、いよいよ一人では暮らせないということで、飯坂町中野の方に移住しました。

その時完全に廃村になってしまったわけですが、同年大滝記念碑を建立、除幕式を開催しました。毎年５月には、分校跡地で総会をやったり、花見を行ったり、草刈をして、秋には芋煮会を行って、出身者の親睦を深めています。平成元年になって記念碑建立１０周年「ふるさと大滝を偲ぶ集い」などを開催しました。

ゲストスピーカー木村さんの話に聴き入る
飯坂ロータリークラブ会員

平成１０年『２０周年記念大滝出身者の集い』を開催。平成１９年大滝会ホームページ「我が大滝の記録」を開設。平成２０年『望郷３０周年記念大滝出身者の集い』を開催しました。平成２２年「第１回大滝分校の集い」を開催。これは若い世代の人達が３０名ほど集まって、話をしようではないかということで開催しました。平成２３年大滝会及び観桜会開催、この時に初代と３代目の会長を２回やっていただいた前紺野会長さんが出席されました。今もご健在ですが、後を引き継いで、私が４代目会長ということで、やらせていただいております。

平成２４年（２０１４）『万世大路』が土木学会選奨土木遺産に認定されました。東北大学工学部や日本大学工学部の先生がご自分で足を運んで山を登って、ジャングルのような山を石垣や橋やトンネルの写真を撮って資料を作りまして、万世大路調査研究という本を出しておりまして、そういった資料を集め申請を出して万世大路が土木遺産に認定されました。この時、１３号線沿線に１番長く住んでおり、こういった会で活動しているのが認められ、自分たちが福島県を代表してその認定証名鑑をいただきました。

名鑑は福島市役所に現在保管されております。その後『３５周年ふるさと大滝の集い』開催しまして、約５０人ほど集まって開催いたしました。最後ですが２年前福島でも『万世大路』の土木遺産認定フォーラムを開催し「世代をつなぐ」ということで私もそこにパネラーとして出席し、何とか後世に残すという名目で、できる限り世代同士をつないでいく方針でお話しをしましたので、本日このような場所でもお話しさせていただいた次第です。

以上のような大滝集落は、福島と米沢を結ぶ『万世大路』の中ほどに有り、そしてここからが街道の１番の難

所だった様です。この集落は『万世大路』が開通してから出来た集落なので、**一時は２７０人位**住んでいました。

難工事を極めた『万世大路』も、５年の歳月と総工費２６万余円の巨費を投じて**明治１４年**（１８８１）９月栗子隧道、及び二ツ小屋隧道が相次いで完成したのを最後に前線開通となりました。翌１０月３日明治天皇は東北、北海道ご巡幸のおり、環路、米沢よりこの新道をお通り初めになり、その日の正午栗子トンネル福島口に於いて行われた開通祝賀式典に臨まれ、その帰路の途中では大滝にも御駕を休められました。大滝行存所は長老沢、渡辺要七氏（現渡辺正義氏宅）でその家の前には明治天皇の**『鳳駕（天皇の乗物）駐蹕之蹟』**明治１４年１０月３日と刻まれた記念碑が今になお残されています。

大滝会の主な足跡

西暦	和暦	月日	記　　録
1974	昭和49年	2月	第1回「大滝会」開催　（於：飯坂温泉、会場不詳・参加者不詳） 大滝集落の衰退を憂慮し、郷土史編纂を企画検討。
1977	昭和52年	1月末日	「わが大滝の記録誌」を刊行・・・大滝の記録編集委員会（委員長：紺野健吉様） 300部作成　（費用35万円 … 大滝会員浄財寄付金で賄う） 福島県立図書館へ所蔵（3部） この頃から廃屋を利用し観光地化を目的に江戸時代を模した「大滝宿」開発始まる　*1
1977	昭和52年	2月19日	第2回「大滝会」開催　開郷100年目　（於：飯坂町湯野　福島県婦人会館） ・開催委員長：高野孝治様 ・副委員長：渡辺角右エ門様、渡辺要一様、木村要吉様、紺野兵蔵様 ・事務局：紺野健吉様、渡辺清治様、斉藤源右エ門様 ・出席者全員に「わが大滝の記録誌」を配布 また、当日出席できなかった大滝会員全世帯には2月末日迄に配布することを決定。 ・大滝記念碑建立が提案される。
1979	昭和54年	5月	・最後の1人の住人渡辺正義氏(旧中屋当主)が離村し完全な廃村に至り 開郷102年で大滝集落の歴史に幕を閉じる。・・・中屋当主　渡辺正義氏談
1979	昭和54年	8月	・読売新聞、福島民友新聞、福島民報新聞等に相次いで掲載される。 「大滝の歴史を後世に・・・記念碑建立へ」等
1979	昭和54年	10月14日	大滝記念碑建立除幕式開催　建設委員長：高野孝治様　事務局：紺野健吉様 工事費190万円（大滝出身者の寄付および福島市補助金（50万円）） 物故者合同慰霊祭および大滝部落有縁、無縁三界の万霊供養を執り行う ・飯坂温泉ホテル清山にて記念パーティーを行う　〔 *大滝部落閉郷前後処理委員会解散 *大滝会初代会長に紺野健吉様を選出　*大滝会会則を制定する 〕
1989	平成1年	10月14日	記念碑建立10周年記念「ふるさと大滝をしのぶ集い」開催 実行委員長：紺野健吉様（初代大滝会会長） 実行副委員長：須田辰雄様、斉藤源右エ門様、渡辺清治様 顧問（相談役）：渡辺要一様、紺野兵蔵様、木村要吉様 飯坂温泉：旅館　清山　一泊　→　大滝集落跡地および記念碑見学会
1998	平成10年	10月11日	離郷20周年記念　「大滝出身者の集い」開催 実行委員長：紺野健吉様（初代大滝会会長） 実行副委員長：須田和市様、斉藤源右エ門様 顧問（相談役）：木村要吉様、紺野兵蔵様、 記念碑基礎部分を石積改修工事、および大滝記念碑敷地にタイムカプセル埋設 分校跡地　→　飯坂温泉　ホテル叶や　一泊
2007	平成19年	9月9日	大滝会ホームページ「わが大滝の記録」開設　　管理人：紺野文英
2008	平成20年	10月5日	望郷30周年記念「大滝出身者の集い」開催 実行委員長：紺野健吉様（第３代大滝会会長） ・特別会員として鹿摩貞男様（万世大路研究会幹事）と西田稔様（もみじ亭・すずめのお宿店主）がご出席される。・・・これ以前から大滝に多（他）方面で貢献されていた。 分校跡地　→　飯坂温泉：ホテル　叶や　一泊
2010	平成22年	7月17日	第1回大滝分校の集い開催　（S22～26年生まれ者対象） 実行委員長：須田信男様　（プロショップ信社長）・紺野文英 分校跡地　→　飯坂温泉　ホテル　「花の湯」一泊　　福島民報新聞掲載
2011	平成23年	10月1日	<万世大路開通130周年記念行事>　*万世大路開通は 1881 年(明治 14 年)10 月 3 日 万世大路を歩く会　　旧栗子山隧道　（滝岩上橋～米沢側坑口までトレッキング） ・大滝会から6名参加　（木村義吉会長・渡辺正義副会長・柾木新吉会計幹事 ・渡辺光義幹事・伊藤弘治幹事・鹿摩貞男特別会員）
2012	平成24年	10月6日	万世大路が土木遺産に認定される ・大滝会の万世大路遊歩道建設計画は成らなかったが土木遺産に認定されたことで、一応の区切りと考える。（万世大路研究会様の尽力大である） ・「万世大路」土木遺産認定フォーラム参加　（於：米沢市 山形県置賜総合支庁 2F 講堂）
2013	平成25年	10月26日	「万世大路」土木遺産認定記念フォーラム開催　　於：福島市 こむこむ ・主催 ：土木学会選奨土木遺産「万世大路」認定記念実行委員会 ・大滝会から木村義吉会長がパネラーとして参加。　大滝会から12名聴講参加 ・高野英治副会長が、「万世大路の整備」について提案発言した。

天皇の随員はときの参議**大隈重信**ほか３２５名、馬匹３００頭の大行列で威風堂々、おそらく沿道の草木もなびく壮観さであったろうと思います。開通式が行われた翌月に、この新道を大政官公達により国道３等に指定され、次いで**明治１５年２月９日勅駕により『万世大路』と命名される**など、全国的にも例を見ない誠に由緒ある道路というべきであります。なおこの道路は明治１８年（１８８５）２月内務省告示第６号によって国道３９号、大正９年（１９２０）国道５号、昭和１２年（１９３７）国道１３号に指定されています。『万世大路』の名があまりにも有名なためこの事を知る人は少なく、明治天皇は『*万世の永きに渡り人々に愛される道となれ*』ということで『**万世大路**』の名を命名されたと言われています。 このような大滝集落の創世期は古老の話や文献を総合するに『万世大路』の建設工事が始められた明治８年頃と推定され、

明治 14 年建立の大滝集落にある鳳駕駐蹕之蹟の碑
昭和 18 年 11 月建立の記念

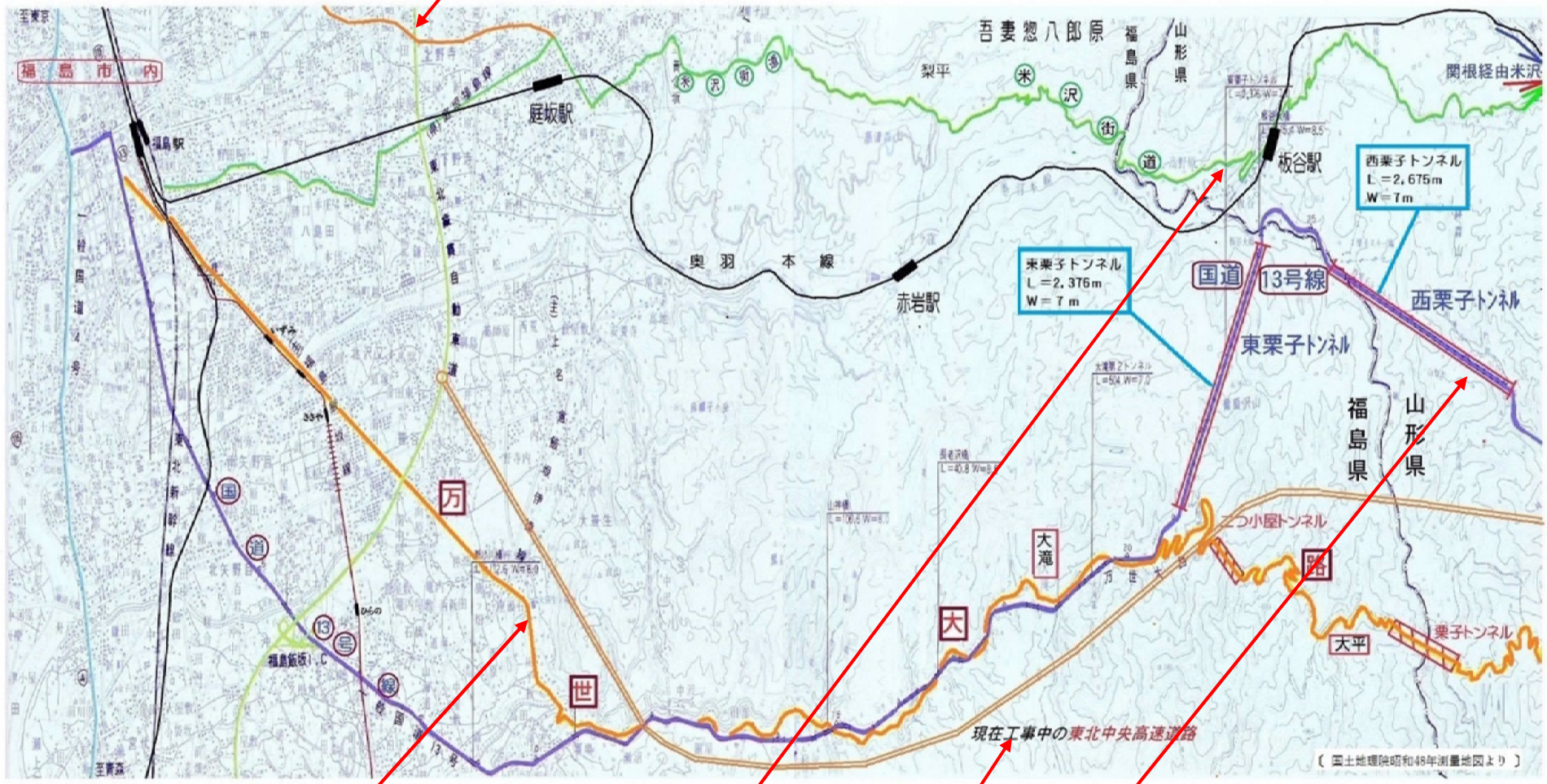
鳳駕駐蹕之蹟の記念碑は巡行途中御駕を止めて休憩した所の記念碑です。二つ小屋トンネル入口、大滝、円部の三ヶ所に有ると云われる。

【 時代と共に進化する万世大路（国道13号）の変遷 】

奥深い奥羽山脈を越えて米沢、山形へ辿る街道は明治初期まで**羽州街道**（桑折より小坂峠を越えて七ヶ宿、上山、山形）と、この**米沢街道**（松川及び福島から当時の**宿場町庭坂**より板谷峠を越え関根、米沢へ）の二つの街道が主であったといわれている。

1664年（江戸時代初期）頃福島町起点の米沢街道

1549年（戦国時代頃）の奥州街道/松川起点からの米沢街道。（板谷街道とも言われ大変難儀な街道であった。）



◆明治14年に開通した第１次　『**万世大路**』は人及び荷馬車中心の工事設計であった。

◆昭和12年に改修開通した第2次『**万世大路**』は自動車通行を想定した工事であった。

◆昭和42年に開通した第3次　『**万世大路**』いわゆる『栗子ハイウィー』は長い栗子トンネル2ヶ所新設、進化したモーターリゼイションの道路

◆平成29年に開通予定の第4次　『**万世大路**』は『東北中央自動車道』として最新鋭の自動車専用高速道路として進化します。

（※進化の過程を分かり易くするために 第1次 2次と表現した。）

明治 14 年開通まもない栗子トンネル、新しい大路に期待し、当時は徒歩での移動が主、洋装の人々、背に荷物を背負い、すげ笠わらじの人々、当時の賑わいを察することができます。

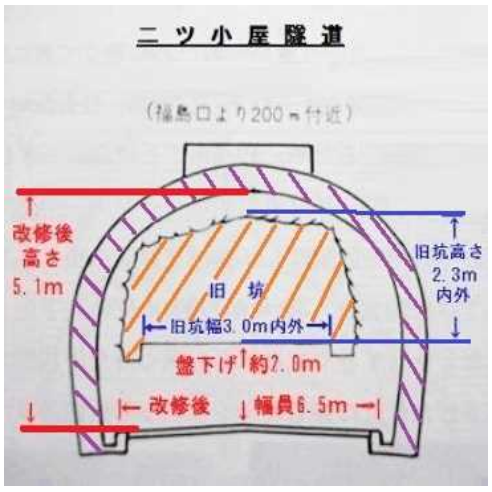
此の頃の集落は工事関係者の宿舎や人々の宿場として大いに賑わったのでありますが、この頃から既に大滝は我々の先祖によって着々とその基礎作りが始められたのです。明治１４年に『万世大路』**が完成し、開通**後は、大滝は道上の重要な拠点として新しい姿でスタートしました。これより先、県は信夫・伊達両郡役所を通じ、住民に対して大滝、及びその奥の大平への移住奨励の布令が出され、中野村及び近郷、近村から入植者が相次ぎ、その条件は１戸当たり耕地１町歩、山林５町歩の官有地を１０年間無償で貸し付け、のち払い下げるというものでありました。大滝集落初期の頃の戸数は、**「明治１４年万世大路事業誌」**の中に２８戸と記されています。また大滝と時を同じくして入植した大平集落は入植戸数が２０戸であったと記録されていて、昭和７年頃に大平集落は廃郷となっています。

（大平の入植者中20家族全員が元米沢藩士であると、昔から伝聞されていましたが、近年になり米沢市立図書館蔵の分限帳、その他等から大平集落図に名前がある17名中7名が元米沢藩士であることが記録されています。入植後わずか8年で、残って継続したのは7家族だけと言われ、奥山の高峰の地、大平集落（標高800m）の生活環境は厳しく、特に豪雪地大平の冬期間の厳しさは想像を絶するもので、戊辰の役后の藩士の身の振り方に農民への志を抱いて希望に満ちて入植した米沢藩士家族の想いは、いかばかりかと思うと胸が痛む思いがいたします。……）

〔 紺野文英様ＨＰより参照させて頂きました 〕

雪多い、冬の大滝集落の風景、昭和 41 年頃の風景か

大滝はそもそも『**万世大路**』の**宿場町**として開けました。したがって住民の職業も当時は旅人宿や運送に関する仕事、茶屋売店などに限られたものと思われます。**宮内屋、中屋、西村屋**などが早くから開業し、その後何軒かの**旅館**が開業しました。また大滝には馬宿などもあり何人かの**人力車**業を営む者もあり、大滝の**太見家、蒲倉家、須田家**などで明治、大正、昭和にかけて**代々荷馬車運送業**が営まれました。その他の者も或いは荷車を引くもの、また荷物を直接背に大滝部落と大平部落を６０～７５ｋｇの荷物を背負い１日で往復しました。その賃金は１２銭２厘で、荷馬車は福島～米沢を４日がかりで往復し、その賃金は４円でありました。勿論条件で酒代などの余禄もあったらしく金回りも良くこの頃、酒と賭博の悪習が集落に横行したとも伝えられています。



明治 14 年開通時の第 1 次『万世大路』のトンネルと昭和 12 年の第 2 次『万世大路』大改修のトンネルとの比較

初期の『**万世大路**』の交通量は「山形県史」によれば１日当たり交通人少なき時は７０人多き時は１１２人、人力車９～１８台、荷車６～２１台、荷馬５～１７**頭**に及び大滝は他の宿場大平、川越石（山形県側）などと共に峠越えする旅人と荷動きで連日賑わったのでありました。

『**万世大路**』を栗子トンネル、二ツ小屋の方へ登る所は七曲りの難所で、今は大きな木が道の真ん中に繁っていて歩くのに精一杯です。この新沢という所では明治２１年、森元さんという警察官が**二ツ小屋駐在所から囚人**を飯坂町の警察署に送っての帰り道に雪の中で遭難し、春になってから遺体が見つかったそうで、毎年**福島北警察署の方が行って慰霊**しているそうです。元々は碑がもっと上にあっ

当時、最大難所の栗子トンネル米沢側の入口。近年土木遺産に指定されて多数の人々の旧トンネル現地見学者も多い

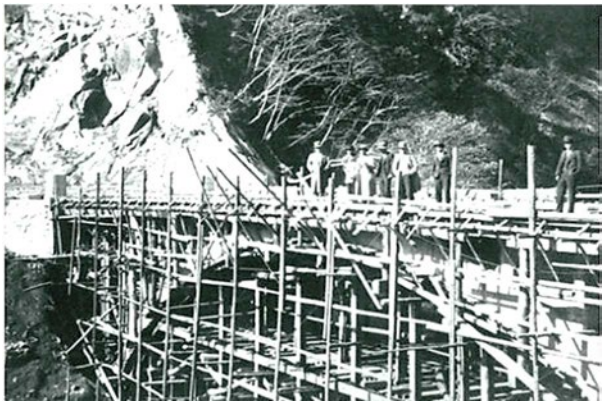
たのですが、**今は新沢橋**のところに移しました。

その後、明治３２年（１８９９）に奥羽線が開通したことで人も荷物も鉄道に代わり、大滝は『万世大路』の開通から２０年足らずで衰退一途を辿りますが、一方明治３０年代末から大正初めにかけて鉱山ブームが訪れ**中野鉱山、蛇体鉱山、大滝鉱山**などの銅鉱石が産出したが埋蔵量が浅く長く続かず、一部の鉱山は戦後まで続いていました。大正から昭和１０年頃までは、インフレと不況の大変な時代で借金を整理するための清算組合や副業組合などを作りました。また、木炭生産組合をつくり、国の山林を安く払い下げてもらい林産業（炭焼き）の普及増進に邁進した訳であります。

集落の最盛期の**１９３５年**頃には**世帯数４３、人口は２６６名**に達しておりました。しかしながら、時代の潮流の流れを大きく山村の過疎化を止めることができず、大滝は『**万世大路**』ができて**１００年**足らずで廃村になって集落が無くなってしまう訳であります。

福島から米沢の道路の歴史を要約してみますと、江戸時代前（文献によると天文１８年１５４９年、伊達晴宗の居城を伊達郡桑折の西山城から米沢城に移した頃から米沢街道が本格的に山道掘削されたという）から明治の初期頃まで、福島と米沢を結ぶ連絡道路としては庭坂、梨平、吾妻山麓北側を通り（前ページ『時代と共に進化する万世大路の変遷』参照）　板谷峠を越す米沢街道（板谷街道とも呼ばれていた）が利用されていました。これは極めて難儀な山の細道であったようです。明治になって山形県令三島通庸の新道計画に始まる「万世大路整備事業」は馬車が通る延長５０ｋｍの道路で福島と米沢を結ぶという大プロジェクトでした。当時の日本は貧しく、建設に伴う国民の負担は大きかったのですが、海外諸国に追いつき、国民生活を豊かにすべく、東北地方住民の大きな期待を受けて建設されたのです。明治８年の第１回地方長官会議において、内務卿**大久保利通**が東北六県の県令に産業振興策の意見を求めたところ、一致して交通運輸の便の増進が最重要と答申したと言います。こうして明治９年から明治１４年の５年かけて開通した**第１次『万世大路』**（大路の進化を分り易く**1次、2次**とする）も明治３２年に奥羽本線が開通すると人も貨物も鉄道に移り、沿道の荷馬車運送業や宿場が急速に衰退しました。大正から昭和の時代になると、馬車から自動車への転換に合わせた改良の必要に迫られました。大正初期には自動車の保有台数は微々たるものでしたから、道路の必要性が経済発展の観点から論じられることは無く、軍事的な重要性から維持補修されるに留まっておりましたが、昭和に入り自動車が普及するにつれて急勾配、急カーブの改良が急務とされたのです。そこで『万世大路』では、道路の幅員を６ｍに拡げ、勾配を緩にし、栗子隧道については抗口を２ｍ下げ、さらにトンネルの拡張と内部コンクリート巻きなどの改良が実施されました。これが昭和８年から昭和１２年まで４年間にわたる、いわゆる**第２次『万世大路』昭和の大改修**です。その結果このルートが山形県から福島・東京方面への最短路線となり、関東方面へは農産物、織物、生糸、酒、加工原料など、下りは塩、食料品、日用品などの貨物が多く扱われるようになりました。小川に沿う中野地内の区間には多くの橋が架けられました。このうち新沢橋はこの大改修の際にできた最も**近代的な鉄筋コンクリートの大型アーチ橋**です。鉄パイプの欄干は戦時中に外されて供出されたので戦後は間に合わせ程のものが取り付けられていて、今は橋面の一部に穴が開いているので渡るのに大変危険を感じます。現在の国道１３号線から７ｍ

昭和初期時代の日本の近代土木技術の粋を極めたトンネル及び橋梁工事で施工された第２次『万世大路』の“新沢橋”


驚きの目で高さを眺める当時の人々

―時は裏日本の経済の大動脈の要のトンネル。　今、なお深山の奥で壮観さを残す　二つ小屋 トンネル 入口

ほど上の旧道にあるので、その奥にある大改修されたコンクリート製橋台とともに、国道から当時の壮観さが偲ばれます。

戦後の本格的な自動車交通の時代を迎えたとき、日本海側から奥羽山脈の東に出るルートは冬期について言えば除雪によってやっと通行できる関山峠(現国道４８号)と仁井宿峠　(現国道１１３号)だけであり、『万世大路』は深い雪に閉ざされ冬期間は交通止めでした。そこで国は昭和３３年から調査を行い、各ルートの比較検討を行った結果、栗子峠の別線・隧道新設による改良を実施することとなりました。これが栗子東・栗子西の２つの２０００m級の長大トンネルを含む昭和３６年から昭和４２年まで**7年**かけた現代の**国道１３号線、第３次『万世大路』**の進化でした。いわゆる「栗子ハイウェー」です。「栗子ハイウェー」の出来る前、昭和 35 年～37 年頃の私の体験をお話しします。

二ツ小屋トンネルを抜けると鳥川があり、その道路沿いにある国有林のブナ林で炭焼きをしていましたので朝夕の行き来に山形の運送会社のトラックに便乗させてもらうことがありました。幌がかかった荷台に乗せてもらうと、朝の上りの車には山形特産の果物、穀物、加工前のせんべい原料などがあり、夕の下りの車には食料品、電化製品、雑貨などが積んでありました。乗せてもらったお礼には３０円か４０円ぐらいのタバコをさしあげていました。『万世大路』沿いの集落、大滝で不便な生活した経験を持つ私たちは**「大滝会」**という会を作ってそのような『万世大路』の歴史的な価値と文化について多くの人々の関心の高いことを知り毎年数回の探索調査などに協力しています。また平成２１年と翌年の「ふくしま県街道交流会」の大会に出席し、また**「万世大路開通１３０周年記念フォーラム」**にも参加しました。２６年3月２２日に「東北中央自動車道」の新栗子トンネルが貫通しました。トンネルの延長８９７２mは東北で最長、国内では 5 番目の長さで、**第４次『万世大路』**の最新鋭化した近代的な高速道路の完成が楽しみです。貫通式には母校である中野小学校の児童たちが樽神輿を担いで祝いました。栗子峠をはさんで福島県側は中野小学校、山形側は万世小学校双方の児童たちが『万世大路』に大きな関心を持っていることを聞いて喜んでいます。

中野小学校では大滝会会員の鹿魔貞男さんを講師に招いて当時の様子や道路のことを学んでおり、また万世小（山形県側）でも旧道を歩いた体験の感想文を発表していて頼もしく感じております。この**旧万世大路**の役割を知り忘れることがないよう、次世代につないでいってくれるものと確信しています。

ご清聴ありがとうございました。

◆　閉 会 点 鐘　　会　長

〔 HPわが大滝の記録 の一部を参照させて頂きました。また写真はゲストの木村大滝会会長様より提供 〕

【 『万世大路』について 】……お答え　大滝会　会長　　木村 善吉　様

質問 ： 古い万世大路はまだ車で行けますか？

回答 ： 車では行けません。歩けば行けますが、かなり道路が荒れています。米沢川から行けるには行けます。

質問 ： 大滝集落の明治天皇がお泊りになった所がありますが、あの碑はまだありますか？

回答 ： まだあります。

質問 ： 大滝集落は昔宿場町だったのですか？

回答 ： 宿場と荷物の取次所でした。多い時には 260 人が住んでいました.
小学校は中野小学校大滝分校で、中学校もありました。教員住宅もありました。

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第8回 ～

西根堰 PertⅡ『 西根堰がもたらした 西根郷への効用 』

◆ ゲストスピーカー紹介　　会報、広報 副委員長　篠木 勝司　会員

シリーズ第 8 回 は、前回の西根堰 PertⅠとして飯坂付近の上堰、下堰の事柄について、ゲストスピーカーの菅野栄二先生よりお話がありましたが、今回は*西根堰 PertⅡ* といたしまして、西根上堰の広い地域にわたる人々への恩恵や意味合いなどについて、ゲストスピーカーとして桑折町にある『西根堰土地改良区事務所』の事務局長 石川様をお招きしまして、この広い**西根郷**と呼ばれていた藤田、桑折、五十沢まで流れている西根上堰の管理やはたらきなどについて詳しくご説明して頂きたいと思います。　宜しくお願い致します。

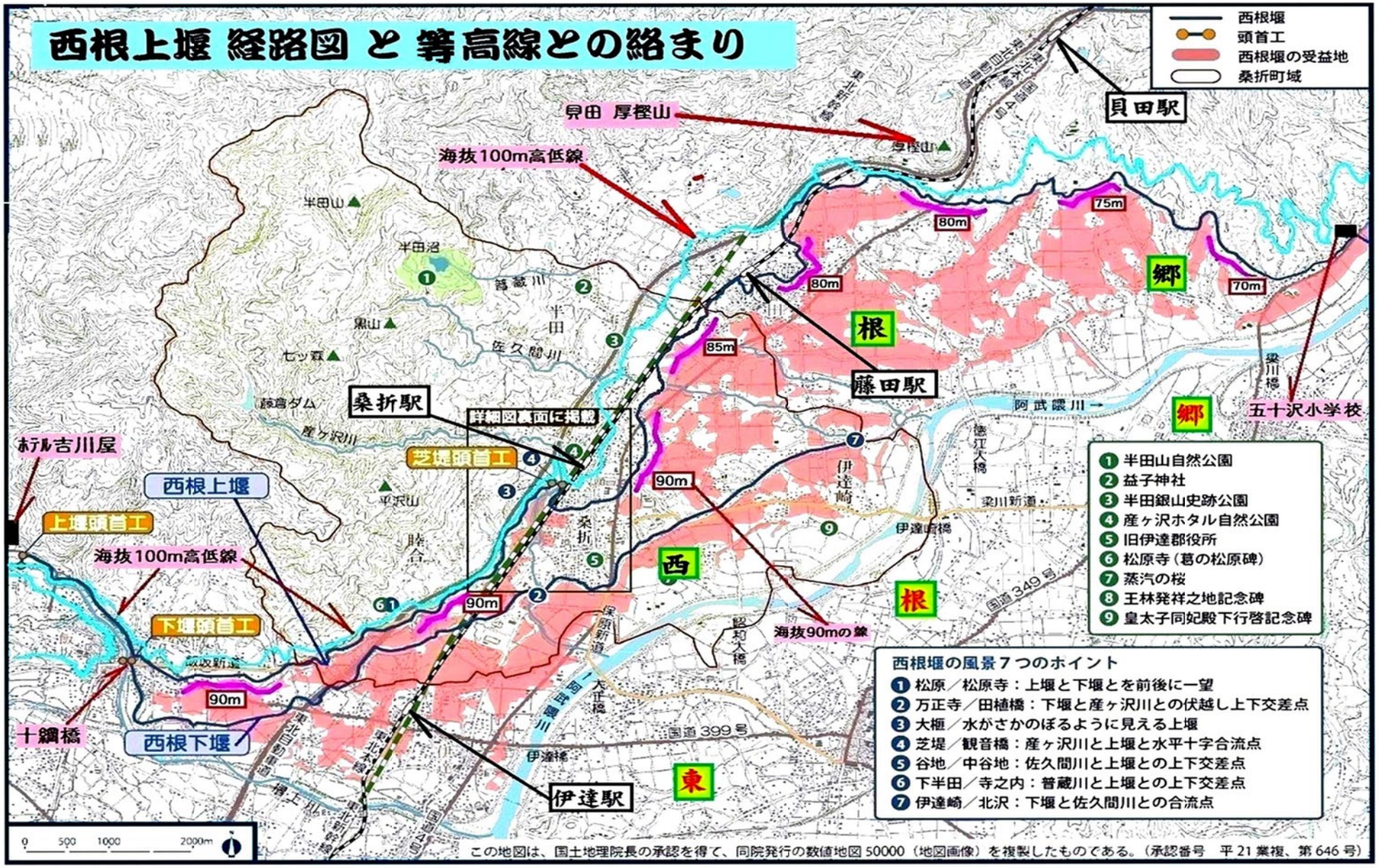
◆ ゲストスピーチ　　伊達西根堰土地改良区　事務局長　　石川 博利　様

ゲストスピーチをする 石川 博利　様

ただ今、ご紹介いただきました伊達西根堰土地改良区事務局長の石川と申します。今日は宜しくお願い致します。まず、**西根堰**についてお話をさせていただく前に、お手元に資料を準備させていただきました。はじめに、西根堰の効用についてお話しさせていただきたいと思います。西根堰を管理する土地改良区という組織は、全国津々浦々、色々な所で農業用の施設を管理している組織であり、『水土里（みどり）ネット』という愛称で呼ばれております。これは造語で、**水**（農業用水）、**土**（農業に必要な土地、土壌）、**里**（農村人とのつながり）、それがネットワークにつながるわけですが、私達は「水土里ネット西根堰」と呼ばれています。県内には同じような団体が約８８団体があります。**西根堰自体は約３９０年前**の江戸時代に造られておりますが、明治時代に水利組合となって、昭和２６年に土地改良区という名称で施設の管理を行っております。土地改良区の組合員は現在湯野、東湯野に３２２人、旧伊達町２６０人、桑折町９７７人、国見町８９２人、旧梁川町３１３人の総合計2,７６４会員の規模で運営されており、また水量の状況によって操作管理しなければならない上堰、下堰の**水門**（一部は電動自動開閉水門あり）は湯野、東湯野に６ヶ所、桑折町１２ヶ所、国見町８ヶ所、旧梁川町３ヶ所の合計２９ヶ所の水門を管理運営しております。その管理の仕方は、水門近くの人に『**水門監守人**』を委託し、急激な豪雨による溢水被害時の対処をお願いし、また『**水路監守員**』を数名常駐して、全ての水路を担当者別に分けて**午前１回、午後１回、堰の水量や水路の環境**を見廻り事務所に随時報告を行っています。

また、土木遺産についてですが、まず**選奨土木遺産西根堰**は社団法人土木学会が、平成１２年から認定制度を行っており、西根堰は一般公募という事で応募して、平成２２年度に認定を受けております。西根堰の他に福島県では安積疏水が平成１４年に、**十綱橋**、**荒川治水**、そして**西根堰**、**万世大路**ということで４つ、また西根堰と十綱橋はこれほど土木遺産が近くあるというのは全国的にもありません。この農業の用水路で、よく子供達に言いますが、『雨が降って昔から自然に出来たのが川で、人の力によって作られた用水路が堰で、西根堰もその１つですよ』と話をしております。西根堰は**約３９０年前**の江戸時代に**古河善兵衛**と**佐藤新右衛門**によって造られ、明治２０年にはお２人の功績を称え、西根神社が造られました。そして**上堰**、**下堰**２本の用水路でありますが、**１番長い上堰**についてはこの飯坂から桑折町、国見町、伊達市五十沢まで、現在の**長さは２６ｋｍ**、短いほうの**下堰が１２ｋｍ**あります。１００ｍの等高線の地図で説明いたしますが、穴原温泉、吉川屋さんの下流の奥十綱橋付近から水を取っているのが上堰で、水色の線が１００ｍの等高線で、この辺は平行するような形で、途中少しずつ低くなっています。実際今の高さで言いますと、取り入れの本当の川から取っているのが**標高９５ｍ**です。延長２６ｋｍで約５０ｍの高低差しかありません。五十沢で５０ｍに下がっていますが、この上流の桑折町付近までには**1/1,000**（1,000ｍの長さで1ｍ下がる）や**1/3,000**（3,000ｍの長さで1ｍ下がる）の勾配で、今の測量技術であれmm単位ですが一部はほとんど水平に近い所もあり、これが江戸時代に造られているというのですから、まず大変高度な測量技術がなけ

大型の西根堰全体の画像を利用して詳しく説明する石川様



西根上堰の水流が昔から、一般の堰、小川堰や井野目堰の流れと違い、流速が速くなくゆっくり大量に流れている状況を人々はクエッションに感じていた人も多いのではないだろうか？

この図を見ると厚樫山の裾野、そして五十沢地区の末路の延長26kmまで、雅に海抜100mの高低線に沿って均衡に掘削された水路であり、西根郷の広大な耕地に恵みの水を完璧に供給された姿が確認され、390年前の偉大な工事に驚くばかりである。

上堰と産ヶ沢川の交差場所、現代と昔の姿
昔、水量の少ない時代いかにして上堰に水量を増やすか　江戸時代初期の工事の工夫が偲ばれる

れば出来なかったことです。

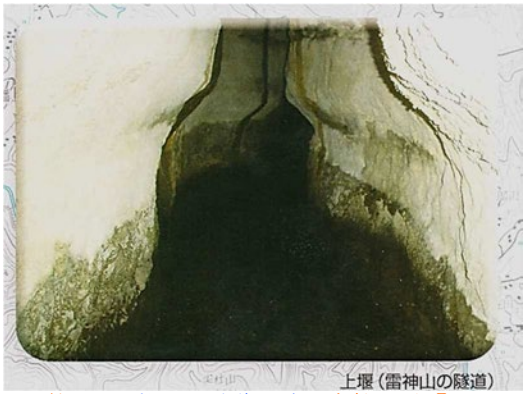
私共でも、改修工事の時、この路線の勾配選定が１番難しいのです。途中に高い所もあれば低い所もあり、私共でもこういった所を見極め、できるだけ遠くに行くためには水平に造る。一気に下ってしまえば　当然それを再度持ち上げる事はできません。かなり高度な測量技術を要します。

また、今と違って大型機械が無い時代ですので、途中の川を横断する工事や岩を削るといった技術、その道具を作る技術もなければなりません。そして途中に西根堰より低い河川、飯坂での米川という河川、桑折の産ヶ沢川、こういった川を交差しながら工事を行っており、特に上流については固い岩盤の掘削途中は水平に、そして１番技術的に難所だった所が、**産ヶ沢川との交差場所**で、この川の水流が多いときは堰に最大に利用するという方法のため、これを交差するのに西根堰が河川を渡って大きく迂回（芝提頭首工、地図参照）しています。ここが丁度、桑折の駅ですが桑折の駅は特異な場所で新幹線とＪＲが同じ高さになっており、この辺は地形的に高くなっています。当然、このまま真っ直ぐ行けば楽なのですが、高い所をトンネルでつなげることもできないので大きく迂回させながら、尚且つ、狭い所を渡って、その河川の水も利用するという**工夫の工事**でした。産ヶ沢は北から南に流れ、西根堰は南から北に行くという地形に沿っているとはいえ、川と西根堰は全く逆の勾配を持って交差をして、今度は高い所を迂回しながら更に続いております。摺上川と阿武隈川、この二大河川の中で阿武隈川については勾配が南から北ですので、水を上げる事ができなかったために、長大な阿武隈川があっても水を利用できないという地理的事情があり、そのため用水路を摺上川に求めて西根堰が造られたわけであります。

この様な水門が、全部で29ヶ所 堰に設置されており、これらの運用管理を全て行っている

（福島県中通り北部の阿武隈川左岸、この土地は西根郷と呼ばれ肥沃な土地であったが水の便が悪く稲作が出来ず農民の永年の願望であった）

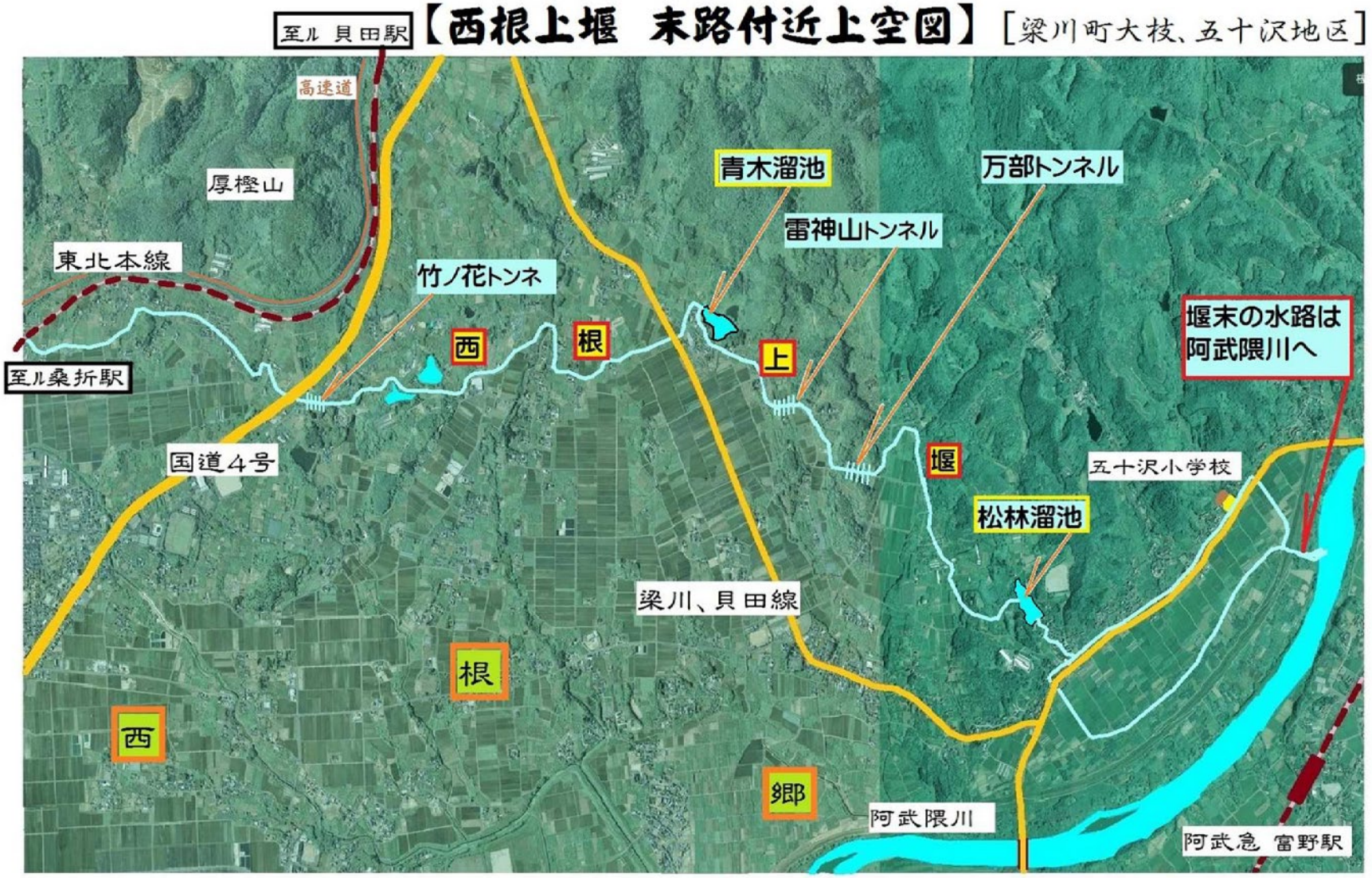
その結果、阿武隈川と西根堰の間の西根郷は全て西根堰の水で耕作することができたのです。これを逆に考えれば、この間がもっと広ければ、現在西根堰は水田だけで１，１００ｈａ。その他に果樹もありますので１，４００ｈａ弱ありますが、単純に２倍あれば３，０００ｈａという大きな受益が確保できますので、そのような広がりをも見せたのではないかと思います。この地図でさえも、西根堰がかなり曲がっているのが分かると思います。直角に曲がりながら地形に本当に沿っていますので、この技術も然ることながら、こういう選定をして、なるべく高さを一定に保つことで幾らかでも水を多く利用できる耕地を確保するという工事が**１６００年代**に行われております。また、本線から水路が分岐しますが、場所によっては１度川に落としたものをもう１度上げながら利用するといったことがなされておりますが、本線から数ｋｍ離れた所にも水を配分しながら、阿武隈川までの間は全て西根堰で賄って現在も耕作されています。全体では５０ｍの落差がありますが、やはり下流にいくと若干き



上堰（雷神山の隧道）
大枝地区の迂回路改修工事で直結にした長さ50ｍの隧道の中間付近、　明治の工事そのままの姿

上堰（国見町）
上堰の末路、国見町付近、ここでも上流と同じく、水がゆっくり大量に流れていく

つくなりますので、上流は1/1,000とか1/3,000の勾配、部分的には本当に平で、今から３９０年前にできている場所を、現在はコンクリートの水路で、江戸時代にできた所と同じ所を流しながら使っております。この西根堰は自然流下の水路ですが、この鵬橋の上流約５００mから水を取って、この鵬橋の下までがずい道



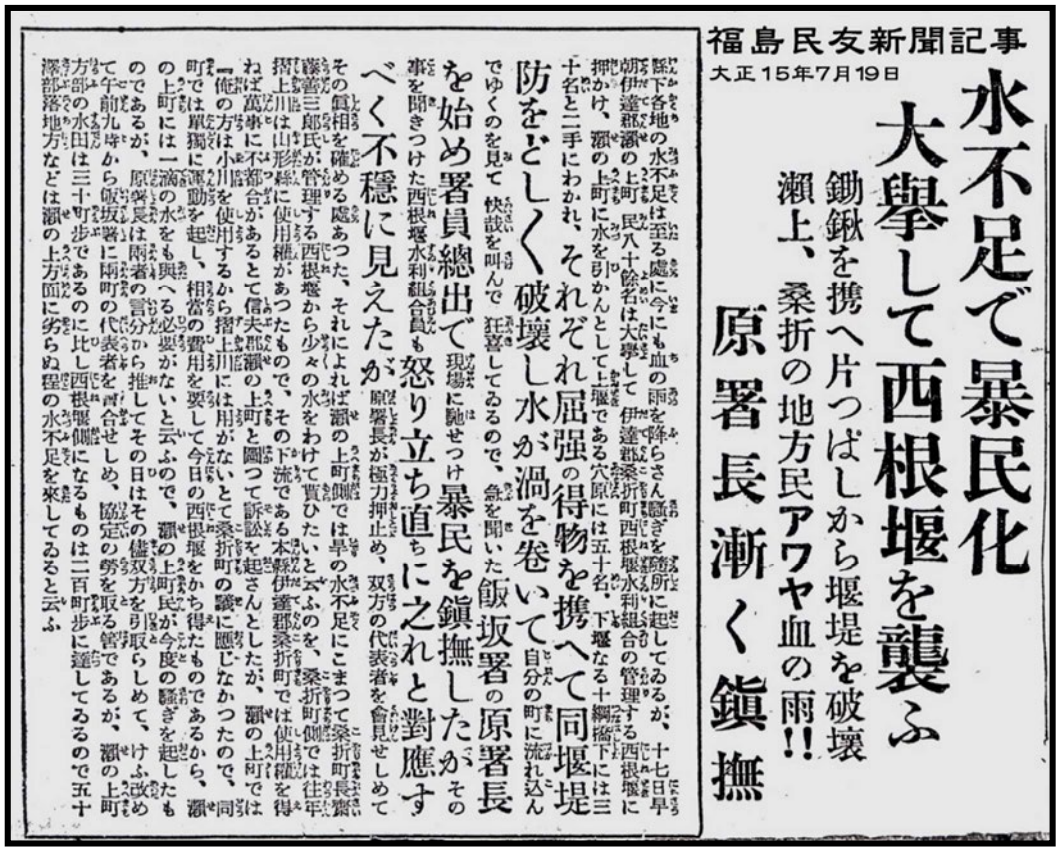
西根上堰の末路になると、水量の減少の問題から大枝地区の溜池2ヵ所を調整池として活用していることが分かる。 上堰は最後は梁川町 五十沢小学校 前方の阿武隈川にそそぐ。

〔 国土地理院ウエブサイトより 〕

クラブ例会場で西根堰の土木遺産について説明を受ける飯坂ロータリークラブ会員のメンバー

（現在はコンクリート）となっています。西根堰には江戸時代に作られた土のずい道がそのまま残っている場所が１ヶ所ありまして、その他には明治時代に２ヶ所のずい道が造られています。国見町の近くに１ヶ所、梁川との境に１ヶ所、江戸時代最初に作った時に、高い所を大きく迂回して作った所は流れが悪く、明治時代に２ヶ所江戸時代の３ヶ所については、その当時のまま、土のずい道として使われています。

西根堰の役目と働きということで、ここで少し**西根郷**と**東根郷**についてお話をいたしますが、西根堰の対をなすように阿武隈川の東の方を東根郷といいます。福島県には安積疎水という長大な国営の事業がありますが、安積疎水で有名なのが**ファンドールン氏**（オランダの土木技術者で明治政府のお雇い外国人）です。彼は安積疎水だけではなく、技術者ということで色々な所で技術指導をしておりますが、この東根郷においても明治１０年にファンドールン氏が、**東根郷の水不足を解消するための揚水**について助言をしております。その時には、自然に流すのは無理なのでポンプでの技術が良いということで実際ポンプでの揚水を行っておりました。ただ、その当時のポンプの電気料金やポンプ自体の技術的なものもあって、なかなかポンプでの揚水は大変で、その後、昭和１０年今の信夫発電所よりの自然流下となりました。



福島民友新聞記事
大正15年7月19日

水不足で暴民化
大擧して西根堰を襲ふ
鋤鍬を携へ片つぱしから堰堤を破壊
瀬上、桑折の地方民アワヤ血の雨!!
原署長漸く鎭撫

大正時代の干ばつの年の水争いの新聞記事、戦後数年まで干ばつ時、水争いは続くが、摺上ダムや藤倉ダムが建設されてからは、ほどんと争いは無くなった

このように阿武隈川を挟みまして、西と東、**西根堰**と**東根堰**、２つの堰が県北地方の西根郷と東根郷の農業を支えてきたと言っても過言では無いと思っております。この西根堰は摺上川の上流に摺上川ダムや藤倉ダムが出来て、その用水で今は安定した用水となっておりますが、最大の取水は**西根堰**の場合、上下両方合わせて**最大毎秒４．５ｔ**の水で、季節によって変わりますが、それに対して**水道**は**毎秒１．８ｔ**、**発電**が**４．５ｔ**と、このように摺上の水が利用されています。ダムが出来る前はやはり干ばつだと水が不足して、古い新聞記事が資料としてありますが、大正１５年７月の新聞のタイトルが『水不足で暴民が大挙して西根堰を襲う　鍬鋤を抱え片っ端から堰堤を破壊　瀬上、桑折の地方民あわや血の雨』これは飯坂の原署長の仲裁で血の雨は降らさずに済むとなっていますが、なかなか名文だと思います。この記事の中で、なぜこうなったかという記事があるのですが、そこには水不足のため県に解決を求めたという記載があります。これに対して県は『**耕地整理課の所轄**

だ』とか『土木科の所轄だ』とか、「擦り合い,あるいは水掛論争と言って、無責任にも放任した事が大なる誤りで、むしろ県は暴動も仕方あるまいと暗に教えもうしたものである。」といった記載がありまして、このように水争いというものがよくあったと言われています。その後、昭和２５年７月にも「あわや血の雨　伊達睦合の水争い　やっと折り合う」または「伏黒側が納得ぜず　西根堰水争い」という記事もあります。続いて、２６年８月にも「深刻な渇水で県北で早くも争い始まる」。また、「**水争いの危機、瀬上の水田１５０町歩が仮死寸前**」と、新聞記事になるようないろいろの水争いがありました。

毎年8月にはボート（タイヤチューブ）でトンネル内見学体験同時に堰の果たす役割や重要性及び堰に於ける水難防止の啓蒙などの勉強会も行っている。

今現在は摺上ダムや藤倉ダムの効用で、そのような事は無くなっております。西根堰自体もコンクリートにする前は、９日１０日に番水がありました。それは下流の方になりますが、桑折までは常水（いつでも掛けられる）、その下の方は番水ということで、９日に１度しか水が掛からないでやり繰りをしていたようでして、大正の頃は瀬上と西根の水利権の取得の関係があって、色々な経緯はあるのですが、そのような事もあったという記事がありました。このように長い歳月の中には色々な事がありましたが、**西根堰**があることで農業の繁栄は続いておりました。また、現在養蚕業は衰退しておりますが、桑折町近辺も養蚕の頃は蚕糸の工場がありまして、西根堰を利用して工業用水を運んで、紡績の工場をやっておりました。現在その**桑畑が一大果樹園**となり、湯野、東湯野、桑折、国見は**桃**や**リンゴ**、そういった物に利用されております。ハウス栽培などもありますので、１年を通して水を利用する施設などにも利用されて、農業経営の変動も西根堰の水を利用しながら現在に至っております。

佐藤新右衛門と**古河善兵衛**の経緯は色々ありますが、TV で一度『水戸黄門』が福島の中でも西根堰を題材として放映されたということは、それだけ皆様の心を引くものがあったのかなというふうに思います。このように地域の農業に役立ったということで、現在も小学校からの見学、福島を始め伊達地区からの見学があり、こういった機会をもって西根堰の説明をし、子供達へ水と云うものの大切さや山で汚せばその水が自分の所に返ってくるということを、また、この施設の安全対策というのもありますので、水難事故防止ということを子供達にも伝えております。**２２年に選奨土木遺産**になったということもあり、西根堰の健康ウォークや８月には隧道探検なども行なっており、一般の方にも知っていただけるような取り組みをしております。

最後に総括となりますが、農業もそうですが昔であれば生活用水にも隅々まで水が利用されておりました。そして、現在は農業について、中々農家でも自分の所の関係するものについて、よく分からないということも増えてきています。しかし、**“水はどこからか来ている”**という認識ではなく、西根堰はこういう歴史があって、この地域に重要なもので、その水の大切さ、農業の大切さ、食べ物の大切さを知っていただければという思いで、このようなお話をさせていただきました。

拙い話ではありましたが、西根堰の事について、幾らかでもご理解いただければ幸いと存じます。

ありがとうございました。

◆　閉　会　点　鐘　　会　　長

〔 写真及びイラストはゲストの西根堰土地改良区 事務局長、石川様より提供 〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第９回 ～

『飯坂温泉の江戸、明治、大正、昭和、そして平成の歴史を辿った、なかむらや旅館の想い』

◆ゲストスピーカーの紹介　　会報・広報・雑誌委員長　　小松　淳 会員

本日は、飯坂温泉のなかむらや旅館の女将をされております高橋武子さんをゲストスピーカーにお招きしております。なかむらや旅館さんは、今年１１月で創業１２６年目を迎えられる飯坂でも歴史のある旅館さんとお聞きしております。旅館の歴史はお手元にお配りしております民報サロンで寄稿いただいた時の原稿がございます。これを読んでいただければ皆さんに知っていただけるのではないかと思います。本日は、東日本大震災以降の話を中心にお話しいただきたいと思っております。お聞きしたところ、一時、被害もかなり大きかったということで旅館を辞めようかと思った時期もあったそうですが、そんな中、今まで旅館を続けてこられた覚悟やお客様との触れ合い、なかむらや旅館への思いをお聞かせいただければと思っております。　　宜しくお願い致します。

スピカーを紹介する会報広報委員会の小松委員長

向かって右、3階建て江戸時代建築の土蔵造りの江戸館、左は明治時代土蔵総ケヤキ造りの明治館、Dの白漆喰なまこ壁土蔵造りは江戸時代頃から始まり、当時大火が多い時代、耐火作りの土蔵壁造りは、最高の建築様式であったと云われています。 玄関前のDとAはデザインが異なっています。 又Cには なかむらや の家紋が、Bには前創業の花菱屋の家紋が表示され、 なかむらやの想い『創業の心』 を大事にする姿が表れています。

◆ ゲストスピーチ　　なかむらや旅館　　-女将　高橋 武子　様

なかむらや旅館の女将をさせていただいております高橋武子と申します。今日はこのような席にお招きいただき、本当にありがとうございます。

また日頃、公私共に皆様には大変お世話になっておりますこと、この席をお借りしまして改めてお礼申し上げます。ありがとうございます。

今日はどのようなお話をと思ったのですが、小松さんからもお話いただきましたように震災のちょうど１年前に民報サロンで書かせていただいたのですが、今までの１２６年の歴史はそれを見ていただければ大体分かるかと思います。また、ここに小笠原先生もいらっしゃいますが、小笠原国太郎さんは先生の曽祖父にあたる４代前の方で大変な名棟梁であったことを、一言申し添えたいと思います。

旅館の中から出入りできる 耐火蔵の入口。昔は大火が多かった時代、泊り客の避難用にも使用を考えたのだろうか……この通路は昔、鯖湖湯の入浴客に使われた。

当館の**初代阿部與右エ門**は、明治２０年に現在の福島市郊外の土湯温泉から、ここ飯坂に出てまいりました。当時の土湯村で１８代にわたり旅籠屋（はたごや）を営んでおりましたが、度重なる洪水や大火に悩まされ**『このままこの地にとどまっては家運が衰える』**と判断。当時の**花菱屋**（花水館の前身）を買い受け、飯坂に進出することを考えました。土湯の真ん中あたりで営業を続けていました**『なかむらや』**の屋号をそのまま掲げて**明治２３年１１月に創業し、今年で満１２６年**を迎えます。

厚さ 25 ㎝近くある、超耐火の蔵入口、黒漆喰化粧の重装な扉、当時の豪華さが偲ばれる。

明治２１年の飯坂大火では飯坂温泉街の湯町や湯沢町内、旧鯖湖湯などが焼失しましたが、なかむらやの**江戸館**（玄関側の建物）は土蔵造りのため類焼は免れました。２階の漆喰（しっくい）には花菱屋（創業は江戸元禄時代１６８８年といわれている）の紋所であった**「花菱」**となかむらやの紋所である**「丸に違い鷹の羽」**が２つ仲良く並び、家を大切にした昔が感じられます。

明治館は明治２０年代中頃に２年間かけて増築。**総けやき造り**で**１００年以上**の風雨にも揺るがぬ頑丈さを示しています。現代ではあまり見られない**香木紫檀**（こうぼくしたん）や**黒檀**（こくたん）、**鉄刀木**（たがやさん）の木を使った書院造りの床の間、つり天井、地震から建物を守る**円垂柱**（つり柱）、手洗い場の**ガラス絵**、**折り上げ天井**など、１つ１つに伊達市保原町の旧亀岡邸、旧花水館の御殿の間なども造った当時の**名棟梁・小笠原国太郎氏**（現、小笠原歯院の先祖）の仕事の見事さが感じられます。

二百数十年（江戸時代後期造り）の踏板のすり減りがわかる玄関近くのケヤキの階段。目線の高さに描いて見せた木目模様の踏板が　棟梁の匠の技がうかがえる。

創業当時、**「*赤瓦や白壁の土蔵造り３階建ての珍しい建物を見よう*」**と近郷近在の大勢の人が訪れたということが語り継がれています。明治３８年には日露戦争の傷痍（しょうい）軍人が多く滞在しており、亡き叔母たちが子供時代に凛々しい軍人さんと一緒に撮った写真も残っています。

昭和となり、第２次世界大戦の時には手すり、蔵の周りの鉄柵、お墓の扉など家中のほとんどの金属を供出しました。その名残から戦争の愚かさを感じてなりません。そして東京都荒川区の男子児童七十数人の学童疎開の

宿となりました。今でも訪ねてくださる方がいますが、苦しかった当時を思い出し、涙を浮かべられる姿がみられます。戦後は近郷近在の農家の方たちが仕事の合間に**鯖湖湯へと通う湯治宿**として営業を続けてまいりました。さまざまな激動の時代をくぐり抜け、多くのお客様に支えられながら長い歴史を刻み、現在まで旅館一筋でまいりました。先人たちがこの家を守り受け継いできた思いが結実し、平成１０年、**国登録 有形文化財に指定** されました。

大正 3 年の三越呉服店（現在の銀座三越デパート）新館落成の宣伝用大型ポスター

明治の、初代阿部與右衛門時代金張りのなかむらや旅館の看板

なかむらやの四つのたからもの

1階の全ての手洗いに、壁及び折上げ天井等は明治時代の豪華さを風靡した花模様ガラス絵があり、見事な芸術品を想わせる。

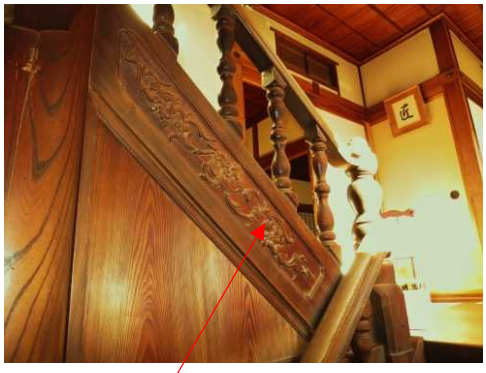
大正時代から平成時代まで、いつも帳場を見下ろしている貴重な大福帳

現在は七代目へと引き継がれています。なかむらやはこれからも、飯坂温泉の近世から近代へ、そして現代へと続いてきた宿として癒しを求めてこられるお客様のために在り続けます。宿を守り、先祖と多くのお客様に感謝の心を込めて営業を続けていくことが、**なかむらやを受け継ぐ者の使命**と考えて頑張っていきたいと思っております。今日は、震災後の事をお話しさせていただきたいと思いますが、東日本大震災はどのよ

3 階の『書院造りの床の間』 には、今ではあまり見慣れない香木紫檀や黒檀及び鉄刀木（タガヤサン）の木を使い、そして二間（3.6m）通しの床板にはケヤキの一枚板を使用、そこには人生の長寿を願う亀の彫り込みをあしらい、正に日本建築の伝統的な本物の書院造り。 書院の障子側 柱は吊り天井柱（これも地震の振動より建物を守るための工法）その上、下柱には柾目を利用した見事な幾何学模様の施工、これぞ 棟梁の芸術作品。 おそらく明治の日本建築の粋をきわめた見事な遺産ではないだろうか。

うな人でも百人百様のドラマがあったと思います。なかむらやはなかむらやなりの大変なドラマがありましたので、その辺をお話して、これからに向かってどのような事で腹を括ったか、お話をさせていただきたいと思います。

2011 年 3 月 11 日、震災の揺れでびっくりして表に飛び出しました。建物は崩れていなかったので、これからどうにかこのまま仕事が続けていけるかなと思っていたのですが、大工さんや建築士さんに建物の健康診断をしてもらうおうと中に入っていただきました。上がって見ていただいたら、江戸時代の玄関の２階と３階の間の天井裏の太い梁が５、６本折れていました。余震があれば**二次災害が起きる**からという事で、避難された方を泊める事が出来ない状態が続きました。震災後、止まっていた電気がついたら１番最初に温泉が出てきたのです。**“ああ神様はまだ見放さなかったのだな”**と思い本当にありがたかったです。この近所の人々は銭湯があるので家にお風呂がある方が少ないものですから何人かに入ってもらいました。そんな時『**お風呂に入れて下さい**』という方が来られ入って頂きましたが、その人がパルセに避難して来た方だった様で、帰ってから誰かに話をしたと思うんですが、そしたら避難した人達がどんどん来て玄関が黒山の人だかりになったのです。それでうちの周りの、**なかや**さんや**ほりえや**さんも、天からの恵みで温泉が出てきたのだからという事で、**避難している人達に無料でお風呂に入っていただきました。** ３軒で１日 約千人近くの人々が入浴に来たようでした。おばあちゃんが最後に手を合わせて『**ありがざいました**』と、それがとても印象的でした。その日は寒い日で、厚手の服も何も無い様子、お帰りになる時に毛布で包んで帰っていただいた記憶があります。そういう事が７日位続



階段の欄干下板まで、彫刻化粧されている階段

ケヤキの床板の木目の流れをうまくとらえて、大亀、子亀を彫り込んで絵をえがく、**匠のワザ** が光る。

3階迄の廻り階段、直角曲がりでなく内側に鋭角に少し入って造られている。　上がる人が上がり易い様にとの工夫と云われている。

いたでしょうか。その事が東京の朝日新聞の夕刊に載って息子が中心になってやっていたので名前も載り、次の日は**朝日新聞の全国版**に出たので、全国から支援物資を送りたいとたくさん電話が掛かってきた事もありました。

その後、さてこれを直さなくてはならないとなった時に、一応、国の登録有形文化財にはなっているのですが、震災後に国や県からの大工さんや設計士さんに見てもらったところ、江戸館を壊さないとだめだという事になりました。なかむらやの前身が、『花菱屋』で江戸時代の建物の方を『花菱屋』として営業しており、その後うちの先祖が買い受けたものでした。どの位掛かるのか聞いたら『**１０億円以上掛かる**』と言うのです。１０億払うという事は天文学的な数字で、震災で気持ちも萎えてしまっているし、辞める事が一番簡単だし、今まで曲がりなりにもどうにかここまできたのだから、もう辞めようと思いました。その時に、いつも来て下さっていたお客様が『何回電話してもやっていないとはどういう事なんだ。今までのお客様を泊めないとう事なのか。よく考えてみなさい！』と真面目に叱られました。叱られてありがたかったというのは、本当にあの時が初めてでしたし、その時に我に返りました。私は六代目ですが、親の時代、祖母の時代、戦争を含め、決して景気の良い時ばかりではなく、大変な時代の方が多かったと思います。このまま、私が辞めてあの世に行ったら『*今まで**俺達がどんな思いで**ここを守ってきたと思うのだ。**浜通りの人の方**がもっと大変なんだぞ。*』と叱られてしまうなと思って、**もう一回仕事をしようと思った訳です。**さてどうしようと言う事で、県や国から来た人に『周りがしっかり残っているのに壊せとは何事なんだ。それを直してくれるのがあなた達の仕事ではないか。』と言いました。結局は直すという事になって補助金をいただいて、それでは足りないので福島信用金庫さんが貸してもいいよとおっしゃっていただいたのでお借りして工事に臨みました。３月の震災から翌年の２月まで掛かったでしょうか、どうにかこうにか**元の形を残して営業が出来るよう**になりました。ここまできてみると、小さな仕事を続けていくという事に意味があり、辞めようと思ったのは本当に私自身がしょげてしまっていたのだと、**自分の事を慰めたい気持ち**もありますが、今は腹を括ってぶれる事なく頑張って行きたいと思います。修道女の渡辺和子さんの**『置かれた場所で咲きなさい』**というベストセラーになった本の通りに、私はなかむらやを守る為に、**神様やご先祖様がここに使わせてくれたのかな**、と自分の身の丈にあったように決して背伸びするのではなく、いじける事も無く、これからもなかむらやを守る為に真面目に一生懸命私なりに置かれた場所で懸命に咲きたいと思っております。これからも皆様にご指導を頂きたいと思います。　どうぞ宜しくお願いいたします。

〔 一部民報サロン抜粋 〕

現代の旅館建築では、ほとんど見られない3階からのケヤキの直径20cmの吊り丸柱、地震の振動から建物を守る造りで2階と3階の階段を支え 120 年過ぎても揺るがぬ頑丈さがあり、まさに　名棟梁の傑作の技

3.11 東日本大震災で江戸館の梁が壊れ多大な資金がかかり一時廃業を考えたが、120年続いたなかむらやの家業、その間幾多の艱難があったのに 6 代目の私で廃業とは情けないと、そしてお客様の激励の言葉で奮い立ち、この震災事故の三本のケアキ柱の支え柱と共に再起を決意したと言う。

明治から現代まで壊れず残っていたガラス絵は、文献によると透明なガラスに裏から描き表から見る書法で江戸時代に西洋から伝播され、絵師が特殊な方法で書いていたと言われている。
当時は大変貴重なもので旅館のお手洗いに描かれているとは……驚きである。

◆ 閉　会　点　鐘　　会　長

〔 後日となりましたが“**なかむらや**旅館”様が平成２７年１２月に福島県建築文化賞（復興賞）を授与されました。〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第10回 ～

『 芭蕉の辿った飯坂細道 』

◆ゲストスピーカーの紹介　　会報広報委員会　副委員長　　篠木勝司

それではご紹介申し上げます。今回は**飯坂の歴史を辿るシリーズ　第10回目**となります。本日は、芭蕉が飯坂のどこに来て、どう辿ったかについてお話を頂きたいと思います。飯坂の歴史ついては、昔、秋山先生が作った厚い本と、もうひと方の先生が作った素晴らしい歴史の本がありますが、歴史書として今の子供達には読みにくく、今回は画像を**ふんだん**に使い読みやすい、分かりやすいシリーズ物を纏めて１冊にして発刊を考えております。今回の高橋先生はわたり福祉会の理事長ですが、県立相馬女子高等学校の教諭をなさっていました。その後、福島西女子高校（現福島西高）でも教鞭をとっており、最後に福島北高校の教諭をされ退官されていらっしゃいます。その後は、**社会福祉法人『わたり福祉会』**の**理事長**をなさっています。私もその福祉会の役員をしており、お世話になっております。事業所は「はなひらの」「**はなゆまち**」「はなしのぶ」「はなみずき」、また、「さくら**保育園**」「南さくら**保育園**」も運営しております。皆さんもご存知の米倉先生は芭蕉について場所を辿って絵を描いていらっしゃいますが、高橋先生は米倉先生とも懇意になさっています。もう１人の方は大学一先生という弁護士の先生で、１冊の本を発刊していらっしゃいます。芭蕉の辿った所をお１人で辿って、遺跡の写真を撮って**『わたしの歩いたおくのほそ道 』**というタイトルで本を出していらっしゃいます。この本の**発行責任者は高橋先生です**。その辺を含め、芭蕉がどんな思いで飯坂に来て、どんな思いで去っていったのかという、今まで誰も触れていない内容にもお話をして頂き、**シリーズ第10回** として編集して残していきたいと思います。　宜しくお願い致します。

◆ ゲストスピーチ　　わたり福祉会　理事長　　高橋重久　様（2016.1.21）

本日は例会にお招きいただいてありがとうございます。実は、**奥の細道**、芭蕉と飯坂の関係を話してくれないかと篠木さんの方からお願いされたとき、どうしようか迷ったのです。今まで色々な方が色々なふうに、この**奥の細道**については書いていらっしゃいますので、今さら僕がと思ったのですが、では引き受けましょうということでお引き受け致しました。何を参考にしてお話をしようかと色々考えたのですが、僕も教師をしていたので、**『芭蕉文集』**という書、ほんの一部、**『奥の細道』**がこの中にあるのですが、こういう物を読み返したり、又先程紹介がありました**『わたしの歩いたおくのほそ道 』**という本についてですが、大学一先生は、弁護士をしながら仕事に行った時に寄って写真を撮ったり、分からない事があると調べたり、そういうことをしながらこの本をお書きになりました。米倉先生には、西女に赴任したおり、山女釣りを習いました。私は釣りが駄目だったのですが、この先生は非常に釣りがお上手だったのです。そういう関係で深い交流がありました。米倉先生は高校の教師を定年前に辞めて、色々なシリーズの絵をお描きになりました。それを**三越本店の特別ギャラリーで展示**したのです。三越本店の特別ギャラリーというのは、本当に有名な人しか展示できない所なのですが、米倉先生が退職後、釣りを描いた絵を持って行って、実はこういう訳なのですがと言ったら、当時の社長が惚れ込んで、特別ギャラリーで絵を発表することになり、７、８回は本店で個展をやっていらっしゃいます。そ

飯坂温泉駅前に立っ芭蕉の銅像　1982年建立
日展評議委員彫塑家　太田良平氏作

月の輪のわたしを超て、瀬の上と云宿に出づ、・・・・・
（米倉先生書の絵）

芭蕉文集

佐藤庄司、飯坂編

佐藤庄司旧跡

一 信夫郡の庄司、佐藤元治。藤原秀衡の臣。文治五年、頼朝が泰衡を攻めた時、福島の南方石那坂に戦死した。継信・忠信の父。二飯塚の里、鯖野のあたりだと聞いて。三館(やかた)の跡。四城の大手門。ハ行下二段「教ふ」のヤ行化。五。六瑠璃光山医王寺。七継信・忠信兄弟の妻の碑。八けなげだという評判。継信・忠信が義経の軍に従って戦死した後、二人の嫁が甲冑に身を固め、兄弟凱旋の姿を見せて歎き悲しむ母を、慰めたという。九原本「墜涙」と誤る。曾良本も同じ。中国晋の襄陽の太守羊祜(こ)の没後、人々その徳を慕って、そのゆかりの峴山(けんざん)に碑を建てたが、その碑を見る者皆涙を流したので、詩人杜預が堕涙碑と名づけた(晋書、羊祜伝)。一〇遠く中国に求めるまでもなく、今まざまざと眼前にあるのだ。「それ地獄遠きにあらず、眼前の境界」(謡曲「鵜飼」)等と同じ用法。一一『日記』には「寺ノ門ヘ不入」とし、「寺ニハ判官殿笈・弁慶書シ経ナド有由」とあるので実際には見なかったらしい。一二宝物。一三折から端午の節句も近いことにて、義経主従の笈や太刀も紙幟と一しょに飾ったらふさわしいことであろうよ。曾良本は初め「弁慶が笈をもかざれ帋幟」とし、後直す。初案の句形か。一四『日記』によれば、五月二日。曾良本は「也」を消し「にや」と改める。一五飯坂の誤。一六曾良本初め「出湯」と書き、のち「温泉」と改める。共同湯に入ってから投宿したもの。一七土間。一八賤しい。一九火明(ほかげ)りをたよりに。カミ、ナリとよむ。二〇曾良本「ふしたる上に雨もりて」を消して直す。二一刺されて。二二胆石症のための発作腹痛。二三気を失うばかりであった。二四昨夜の持病の気(け)が残っていて。二五ハ行下二段動詞のヤ行化。二六旅、それも辺鄙な片田舎の行脚の事ではあり。二七俗界の身を捨て去って、世の無常を悟り覚悟をしているからには。二八路傍に野たれ死するようなことがあっても、それは天命である。二九縦横無碍の意。力強く踏みしめた威勢のよい足どりで。勇み立つ意の「伊達」に言いかけてある。

飯坂

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。一佐藤庄司が旧跡は左の山際一里半計に有。二飯塚の里、鯖野と聞て、尋々行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が旧館也。三禁に大手の跡など人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。四堕涙の石碑も遠きにあらず。五寺に入て茶を乞へば、爰に義経の太刀・弁慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ帋幟

五月朔日の事也。

其夜飯塚(一六坂)にとまる。一七温泉あれば湯に入て宿をかるに、一八土坐に莚を敷てあやし二〇き貧家也。灯もなければ二一ろりの火かげに寝所をまうけて臥す。夜に入て雷鳴、雨しきりに降て、二二臥る上よりもり、蚤蚊に二三せゝられて眠らず。持病さへおこりて消入計になん。二四短夜の空もやう〳〵明れば、又旅立ぬ。猶夜の余波心すゝまず、馬かりて桑折の駅Aに出る。二五遙なる行末をかゝえて、二六斯る病覚束なしといへど、二七羇旅辺土の行脚、二八捨身無常の観念、二九道路にしなん(死)、是天の命なりと、氣力聊とり直し、三〇路縦横に踏て伊達の大木戸をこす。

A 昔、旅人の移動は、徒歩か籠、馬であった。その時代に街道の主な所に旅人の便を図って馬や人夫、宿などが在った所を駅と呼ばれていた。

の先生が『**奥の細道**』という題で、絵をお描きになりました。絵を描くにあたっても色々調べるのです。よく調べて、そういう中で自分も歩いて、そして絵にしていきました。その当時の米倉先生を、思い出しながらお話してみようかということで、僕は本日ここに立った訳です。

皆さんのお顔をみると、日頃お世話になっている方もいらっしゃいます。僕は湯野ですから、湯野の方もおいでになって、本当に皆さんにお世話になっているのだなと思います。僕は高校で、体育ではないのですが、バスケットを教えていたということもありまして、家にはあまり居りません。朝早くに出かけて夜に帰ってくるので近所の人達も分かりません。うちの家内しか分かりません。近所の人達とはお祭りの時にようやく顔合

わせをして、ああ高橋先生かということになりました。うちの家内は相馬で東邦銀行に勤めておりましたが、結婚してそれを辞めて、飯坂支店の嘱託として何年間かやっていましたので、近所の人達についてはうちの家内の方が色々分かるのです。そういう訳で僕はあまり知られておりませんし、これから高齢化を迎えますので、ひとつ宜しくお願いしたいなと思っております。

著者、大学一先生の書『わたしの歩いたおくのほそ道』発行責任者 高橋理事長の本

そんなことでお話致します。芭蕉があちらこちら歩いた紀行文というのは色々ありますが、多くは書いた物をそのまま発表しています。しかし、**『奥の細道』**だけは歩いて、それから５年掛けて**和文脈、漢文脈を交えた独特の文体**での文学作品として完成しました。そこから、いかに**『奥の細道』**に芭蕉が力を入れたかということが分かることでしょう。だから『奥の細道』には**フィクションが多い**のです。虚構が多いのです。一緒に歩いた曽良の日記と違うこともありますし、場所も時刻も日にちも違うことがあるのです。だけども、紀行文を文学として高めるためにそういうふうに書き上げたと言って良いのではないかと思うのです。ですから、色々な議論を皆さんがしますが**「ここは曽良の日記にはこう書いてある」**「いや、ここはこうだろう」**「こっちに来たんだ」**「時間が違う」**「晴れか」**「曇りか」と、色々な議論をするのですが、専門家でない私どもには議論は必要ないのではないかと思います。芭蕉の歩いた所に行って、そこで芭蕉の**『奥の細道』**を思い出して、*「あぁ、そうか」*というふうに感動すれば良いのではないかと思います。山寺の句に *“閑さや 岩にしみ入る 蝉の声”* とあります。この蝉は何蝉だと議論するのですが、議論してもどうにもならないのではないかと思います。その人が山寺に行って、静かなその山寺の中で聞いた蝉。なるほど、これが岩にしみ入る蝉の声かと感ずれば何蝉であろうと良いのではないでしょうか。

其夜飯塚（坂）にとまる。温泉あれば湯に入て宿をかるに、土座に莚を敷て あやしき貧家也。……　（米倉先生書の絵）

そういう意味では、飯坂に泊まった時のことは、飯坂を**侮辱しているのではないか**と言われていますが、**そういうふうに思わない**ようにしていただきたいと思います。そもそも、芭蕉はその地方地方に俳人の友人が居たのです。**連歌師**が居たのです。知り合いも居りました。そういう人を辿って旅をしました。だから、割合良い旅をしております。飯坂については、**医王寺**に行くということは最初から予定していましたが、泊まるというのは予定外だったのです。ですから、こんな文を書いて、と思わないでいただければと思います。知人も誰も居ない中で起こったことです。例えば、須賀川には**『相良等躬（とうきゅう）』**という俳人が居りまして、芭蕉はそこに泊まったのです。そこで俳句会をやったりしながら過ごして、芭蕉の旅の中で１番長い期間逗留したのです。そういう弟子を辿って行って、そこで優遇されたので、須賀川は非常に良い印象の文章になっています。須賀川を辿って来て、そこに５日間居て、須賀川を出発して郡山に泊まります。普通は旅籠に泊まりますが、須賀川の**等躬**の紹介で、紹介を受けた人が案内をしてます。郡山に行く前に田村の方に案内されて行っています。そういうふうに次々とそういう人達に紹介されながら歩いたということもあります。郡山を発って、そして二本松に出て、福島に入るのですが、福島には金谷川から松川の方を通って入ってきます。**福島では郷の目に『神尾』**という村の名主が居りましたが、その人を訪ねて、そこに厄介になるはずだったのですが、たまたま、その方が旅に出て居なかったのです。**それで福島まで来て福島の旅籠**に泊まりました。その当時は福島堀田家１０万石の町だったのですが、本町が大きな問屋などの町で庶民は柳町や荒町、あの辺で買い物をして北町や豊田町近辺に旅人が泊まっていたという記録があります。芭蕉はどこに泊まったのかはっきりしませんが、**おそらく北町に泊まった**のではないかと言われています。とにかく福島では旅籠に泊まったので気に障るようなことは無かったと思います。次の日に福島の旅籠を発って、岡部橋の

医王寺境内にある芭蕉の句の碑
“笈も太刀も五月にかざれ帋幟”

《奥の細道と曽良の紀行日記から辿る飯坂の細道》

“奥の細道”
路縦横に踏んで伊達の大木戸をこす。

芭蕉はこの郷野目村の村名主『神尾』という家を村内の俳諧師の関係で尋ねたのでしたが、あいにく主人は不在そのまま福島に夕方早く宿をとったのでした。

曽良は『福島町ヨリ五、六丁前郷野目村ニて神尾氏ヲ尋……スグ福島へ到テ宿ス。宿キレイ也』としるしています。

福島に住む“奥の細道”研究家の人々は『もしかして神尾氏が在宅であったなら、此処までの旅の様に芭蕉は幾日か宿して福島地を歩き廻り、必ず元禄の福島を細道の中に、残してくれたろうに……』となげくのです。

瀬ノ上から医王寺に向かった芭蕉は、沖高を通りAの道のりを又はB C の道のりを辿ったと云われています。
Bの道は最短距離で星ノ宮神社(大鳥城築城の際、館ノ山から南の極の星を祭り、大鳥城の安全を祈願したお宮と伝えられている)そして五郎兵館跡地を通り医王寺へ。Aの道は瀬ノ上から案内した人が居たと云われ、飯塚村の代々村名主の中村岡衛門ではないかと思われ、曽良が中山温泉(石川県)に着いてから思い出した様に紀行日記の九十八丁裏に「福島郷野目村神尾庄衛門」「同入江野村中村岡衛門」と記るされていると云われています。
A、B C いずれかの道を通った様に思われますが今だ不明のようです。

医王寺付近の井ノ目村、佐場野村、入江野村、飯塚村、平田村は寛文11年(1671年)〔芭蕉、深川出発元禄2年1698年〕徳川直轄時代、国領半兵衛地検せし時、信夫松川以北、摺上川迄の21村を余目荘とした。古書、赤田正徳著「信達一統誌」(天保12年1841年)の中に井ノ目村、佐場野村、入江野村、飯塚村、平田村の5村があった。そして、明治9年の地租改正により 井ノ目村、佐場野村、合併して井佐野村。飯塚村、平田村 が合併して、平塚村となり明治22年 井佐野村 平塚村 入江野村 が合併して平野村となった。

〔 参考図書 『奥の細道抄』佐藤久右エ門氏 著 〕
『私の歩いたおくの細道』大学一氏 著 〕

地図作成者 篠木の実家は昭和20年頃までの住所は
福島縣信夫郡平野村大字井佐野字佐場野(鯖野)段ノ腰48番地 であった。

石巻にある芭蕉と曽良の銅像と『奥の細道』全行程
深川(五月十六日)-日光-白河-須賀川-郡山-二本松-福島-飯坂-白石-仙台-塩釜-松島-石巻-登米-一関-　平泉-岩出山-尿前の関-尾花沢-立石寺-羽黒山-酒田-象潟-鶴岡-新潟-弥彦-直江津-金沢-山中-永平寺-敦賀-大垣(150余日、約2400kmの旅であった)

下に淀んだ所があるのですが、岡部の渡しを渡って、信夫文知摺を見て**月の輪の渡し**へ向かいました。米倉先生が絵にしておりますが、現在は橋が出来ており（*橋が無い昭和64年頃か、平成元年か、そこらはっきりしませんが、その下に瀬上の渡しを造ったそうです。　そこには渡し船があって、その渡し船を渡すのは市の職員だったそうです。市の職員が渡し船で、学校へ通う子や用足しにいく人を渡していたという記録があるようです*）

その月の輪の渡しを渡って、瀬上の宿場を通って、摺上川沿いにずっと歩いて**医王寺**まで来ました。北高の前の道路を通ると、片側に高い坂（星の宮神社の坂か）になっている道から、今の医王寺の駅付近（星五郎兵館）までずっと歩いて、そこから**医王寺**まで行ったといいます。

その後、芭蕉は医王寺よりも前に、**舘ノ山の佐藤荘司の舘**に行ったということになっています。佐藤荘司というのは佐藤基治という藤原秀衡の家来で非常に信任に厚く、藤原家と佐藤家は同じ一族に属しています。その佐藤家が奥州の南の方を藤原家に代わって治める役目を担っていました。それが佐藤荘司と言われていますが、**本当は基治のこと**なのです。その舘に行ってその跡を見て、そこから医王寺に行き、それから温泉に行って泊まったことになっておりますが、曽良の文章によるとそうではなく最初に医王寺に行って見て、それから舘ノ山に行って、舘ノ山から下りて来て、**あの鯖湖湯**あたりに泊まったというふうになっています。芭蕉の**医王寺**の文章はフィクションなのです。何故かというと、芭蕉にとって医王寺が１番の目的なので、医王寺を見て、それから舘ノ山に行ったためです。芭蕉は義経を非常に**ひいき**しています。義経に感動していました。それを**庇う**藤原秀衡にも感動していて、それを見て歩くことはひとつの目的だったのです。ですから、医王寺に行くということは、瀬上からのひとつの目的でした。源氏が旗揚げした時、佐藤基治、いわゆる**舘ノ山の館**に居た基治は、自分の２人の子供、**継信、忠信**を義経の家来として遣わしています。**継信**は**八島の戦い**で矢を向けられた時に**義経を庇**って、そしてその矢に打たれて**身代わり**になって亡くなりました。それから、忠信は義経が頼朝に追われて逃れて来る途中、京都の吉野という所で**義経に化け**て戦い**義経を逃**したのです。そして義経に代わってそこで**自害**しました。それで義経は逃れることができました。義経は継信と忠信の遺髪を持って、逃れる途中に医王寺に寄って納めたと言われています。

猶夜の余波心すゝまず、馬かりて桑折の驛にでる。…
（米倉先生書の絵）

そういうことを知っている芭蕉は、どうしても医王寺に寄らなくてはならないということで、医王寺に寄って舘ノ山を下がって飯坂に泊まったのです。その医王寺の表現も、みんなフィクションなのです。 **乙和姫**は継信、忠信のお母さんですが、その碑があります。基治のお墓も、継信と忠信のお墓もあります。継信、忠信の母親である乙和姫は年老いて息子が帰って来ない、いつ帰ってくるのかと待っていましたが、その時に、継信、忠信の妻である『楓』と『若桜』２人が鎧を着て、そして老いた母親の所に『ただ今帰りました』と言って、悲しんでる母親を慰めて、病床にいた母親が喜んだという話があります。その話は、**白石市にある甲冑堂が出所なのです**。そこには芭蕉も寄っています。ですが凝縮しています。芭蕉の医王寺の文章の中には、その２人がそういうふうなことをしたと、その印があると書いてあります。実はそれは無かったのですが、芭蕉は、石碑もあり、袂を濡らしたということを書いています。つまりフィクションなのです。どう凝縮して文章的に高めるか、そういう視点から文章ができています。そこ

この鎧摺石は義経が馬にまたがり、この難所の坂道を通ったとき鎧が
あぶみすりし
この岩に摺りこわした所から命名されたと云われています。

【奥の細道】『鎧摺、白石の城を過ぎ、笠嶋の郡に入りば……』

に句も残っています。“*笈も太刀も 五月にかざれ 帋幟*”という句ですが、これはお寺に行って茶を乞うたら、そこにそういう義経や弁慶の笈を置いて、宝にしているということを書いています。実際は寺に入ることを断られ、中に入れなかった。ただ、そこにそういう弁慶や義経の形見があるということは聞いていたので、そういう句を詠んだのです。そして、この時５月２日だったのですが、５月１日と書いてあります。ちょうど５月節句は５月から始まるため、５月２日より１日の方がその句も生きてくるのです。そういう意味でフィクションなのです。文章を読むと、継信や忠信、そして基治一族の悲哀を感じ取って、どんなに**芭蕉が感動**したのかが伝わってきます。だから医王寺でお茶を断られたなんてことは書けません。そういう事情があったものと思います。

その後、芭蕉は飯坂に泊まります。湯に入ったと書いてあります。今の**佐波古湯**（鯖湖湯）でしょうか、米倉先生の絵のように筵で囲った湯だったのではないかと思います。旅籠もなかったでしょうから、芭蕉は貧しい農家に泊まりました。ある人の**説によると、花水館の所から下った川縁の湯に入りその湯守りの家に泊まったともあります。**家の土間に泊められたと芭蕉は書いています。雨が降り出し雷さえなり雨漏りし、蚤や蚊に刺され眠れず持病さえ起って気を失うばかりだと書いています。大変ひどい目に遭ったとの印象です。

飯坂温泉協会に置いてある飯坂散歩という本に、西根堰、伊野目堰を開削し新田開発した**上杉藩治下６０有余**年「 *わけもなく村に立ち入るもの。不審のもの村に置くべからず、宿貸すまじき事* 」との厳しい布令が出されていたと記されています。その後領主が堀田氏となった当時もその厳しい布令が領民の心に残っていたのでしょう。

そうした事情からすれば、土間であっても泊めてもらえたことからは農夫の温かい心使いを今の私共には感じます。「*夜に入り 蚤蚊に刺され眠られず。持病さえ……*」このことは曽良の日記には書いてありません。この表現は、医王寺で茶を断られたと書けずにいた煮え切らない、くすぶっていた心のどうしようもない気持ちを表したものでしょうか。桑折の大木戸を超す「*羇旅(きりょ)辺土の行脚……*」を強調するためのフィクションなのでしょうか。芭蕉は眠れない夜を過ごした翌朝出発し、現在の十綱橋の少し**下の渡し船**を使い、摺上川を渡り伊達に向かいました。そして、大木戸という所を通って白石の方に抜けていきましたが、国見峠の時には大変ひどかったそうです。眠れなかったので馬を借りて、その馬に乗ってその峠を越えたと言われています。その時の絵を米倉先生がお描きになりました。雑なお話で申し訳ございませんが、そんなことで**フィクションが多く、**だから真に受けないで、**芭蕉がこういうふうに通ったのだなと**、ここでこんなふうに**感動したのだな**と、ここは農家の家でこんなふうに苦労して泊まったのだな、しかし、泊めてやったというのが、ひとつの人情なのだなと、そういうふうに思っていただければ良いのではないかと思います。

【 追　記 】

上記のスピーチの中でも『**楓**』と『**若桜**』の物語(1185 年頃の古事)にかかわる**白石の甲冑堂**の話が出ましたが、聞くところによる宮城県や白石市では昔からこの物語は有名で広く伝承され、**戦前の国定教科書**にも取り上げられていたと言われています。これは飯坂の大鳥城にまつわる物語でありながら、 謎を解くために甲冑堂を管理する**田村神社**を訪ねました。

『甲冑堂が出来たのは鎌倉時代と言われ、初めは２間（３．６ｍ）四方のお堂で　古文献〔和漢三才図會。寺島良安 正徳2年(1712年) 江戸時代中期〕の中に“**甲冑堂、**在佐伊川(斉川)辺。佐藤**継信、忠信**二人妻著甲冑**木像有也**”と記され甲冑姿の女木像が２体が有ったと記載されております。

田村神社の宮司　中川常磐様から
甲冑堂の経緯を話して頂く、床の間の像は現存の甲冑堂の初めの像

芭蕉や蕪村の見た焼失前の甲冑姿の像の絵（蕪村の絵）

また、〔蕪村書安永2年（1773年）〕にも屏風絵として描かれています。
お堂が建立され２人を祀られた当時は、**高福寺**と**神社**が在ったとされていますが、江戸時代からは無人となっていて、明治８年に放火によって焼失しました。

佐藤**継信、忠信**の妻『**楓**』と『**若桜**』の物語は『*深き悲しみを抑えて、母を慰めんとした世にもめでたき例ならずや*』と斎川や白石、広くは宮城県全般に昔から広く伝えられ、**尋常小学校の国定教科書**にも焼失も含めて記載されました。そして、このような背景があって**甲冑堂物語**は全国各地から、その後どうなったかと永く問い合わせが有ったと言われています。昭和８年頃、斎川小学校校長先生が中心となり、この物語の人々に対する伝承の重要性を感じ甲冑堂の再建に奔走して、現在のような素晴らしい甲冑堂が**昭和１２年に建立**しました。現在の等身大の立派な甲冑姿女像の完成は２年後の昭和１４年で、７７年過ぎても今なお甲冑の女像から親孝行の想いが伝わってくる様な思いです』

では なぜ ？？……　物語の舞台は**飯坂大鳥城**であり、佐藤**継信、忠信**の**菩提寺が医王寺**なのに、上記のような素晴らしい物語の伝承が広くなされず、お堂もなく一寸**ミステリアス**の想いがするが・・・？

甲冑堂は木造六角形のお堂で、中には等身大の絢爛たる木像彫刻甲冑姿の女像が鎮座し屏風絵には大鳥城のｼﾝﾎﾞﾙ鵬の鳥２羽が描かれ、戦国時代の妻の意気込みがひしひしと感じられる

其の理由は……

『 当時の鎌倉時代は兄源頼朝の支配下に飯坂はなっており、弟源義経は追われる身であった。その義経の家臣の**継信、忠信**及び妻『楓』と『若桜』の**美談**は**飯坂地方**ではタブーであったと言われ、それがために２人の菩提寺医王寺の墓石には大きな自然石で名がなく、勿論当時は供養の集まりも大々的にできず、そのため頼朝の支配の少ない宮城県々境の斎川に建立したのではないかと言われています（田村神社宮司　中川様 談） 』

◆閉　会　点　鐘　　会　長

〔絵は米倉先生書のものを提供して頂きました。〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第11回 ～

『　明治、昭和の飯坂大火の真相　』

◆ゲストスピーカーの紹介　　会報、広報委員会　　副委員長　篠木 勝司　会員

『飯坂の歴史を辿るシリーズ』ということで、今日は皆様の記憶も薄らいでいると思いますが、飯坂の明治時代の大火と昭和１９年の終戦間際の大火について、飯坂消防署長　丹治様をゲストスピーカーにお迎えしてお話をしていただくことになりました。おそらくこの大火について、今の人々、又子供達はほとんど知らないと思いますが、ロータリーの『飯坂の歴史を辿る』この書は飯坂、湯野、東湯野、茂庭、中野、平野の116町内に無償（数量限定）で配るので、この11シリーズを読んでいただき、防災に対する再認識を深めていただきたいと思います。今日は大変興味深いお話が出ると思います。

宜しくお願い致します。

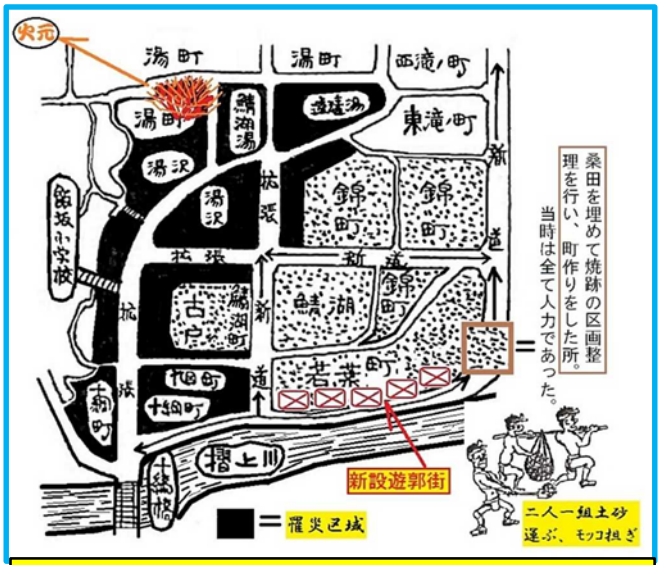
◆ ゲストスピーチー　　飯坂消防署　署長　丹治 正一　様

プロジェクターを使って飯坂大火を分かり易く説明する丹治署長

飯坂ロータリークラブの皆様には、常日頃から消防行政各般に渡りお世話なっていることに対し、改めまして御礼申し上げます。また、今日はこういった機会を与えていただきまして誠にありがとうございます。

実は一昨日に茂庭で火災があり、思った以上に延焼しておりました。ちょうど私が駆け付けた時に地域住民の方が消火栓から直結でホースを繋いでいたのですが、まさに隣の建物に延焼する直前の状況でした。２０年ぶりに私も管槍を持ちまして応援しました。今日は筋肉痛の思いが一寸といたしますが、そういった火災現場や災害のお話をしたいと思います。

炎に包まれる鯖湖湯　当時の人々の驚きが連想される



【 明治21年4月の 飯坂大火の罹災地図 】

災いを乗り越えて新しい町作り区画整理を行い飯坂発展の基礎

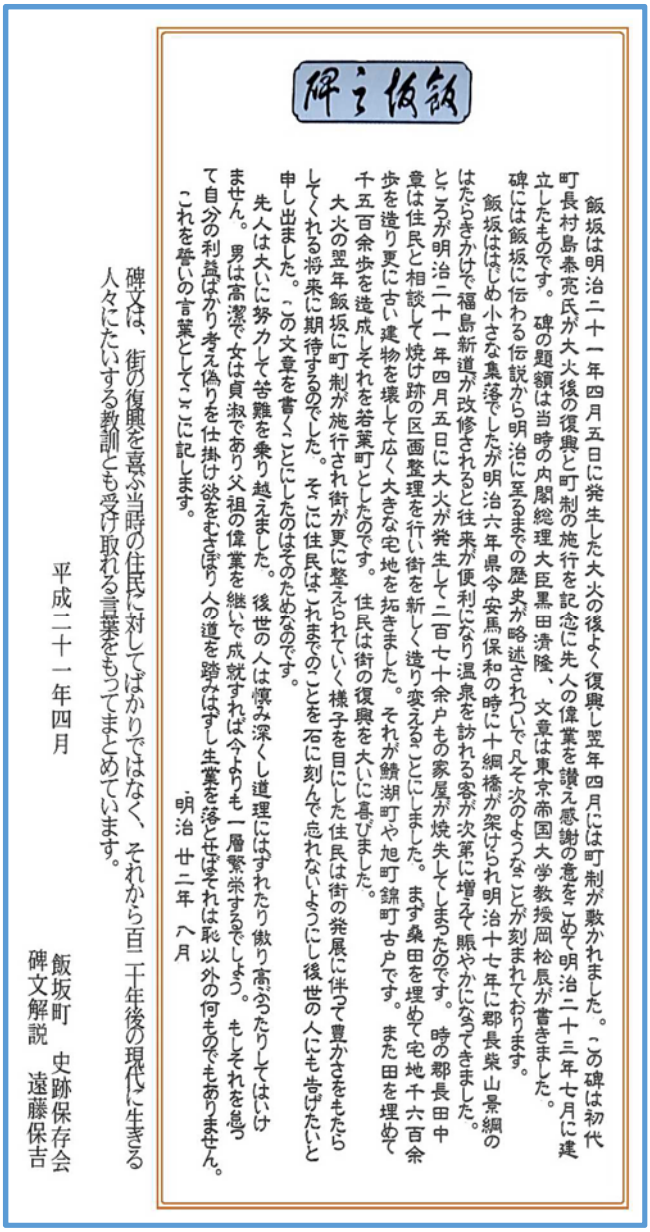
飯坂大火の真相ということですが、私は昨年４月に飯坂消防署長を拝命いたしました。実はその時から、この地域の火災のことをいろいろ研究中でした。この研究や調査の進化の途中のことを本日は色々とお話をしたいと思います。飯坂の火災というと、まず始めにイメージできたのは、古い話で舘ノ山の佐藤基治公の居城が落ちる時に、頼朝軍に攻められ火災があったのかどうかということ

地主の一人、二人は当時こんな事柄があったのだろうか……

碑には漢文で表示されている。要訳すると下記の様に記されているという。

八幡神社のうら北東にある　『飯坂の碑』125 年間ひっそりと佇んでいる。

が気になって色々調べました。お城自体の記述は無いのですが、実は天王寺のパンフレットの中に火災があったということが書かれています。ご紹介しますと、**『平安時代文治５年（１１８９年）に源頼朝の平泉攻めで、大鳥城落城の時に兵火により焼失、天王寺も巻き込まれて焼失した』**という記載がありますので、大鳥城は兵火で大きな火災があったということが分かります。



碑之飯飯

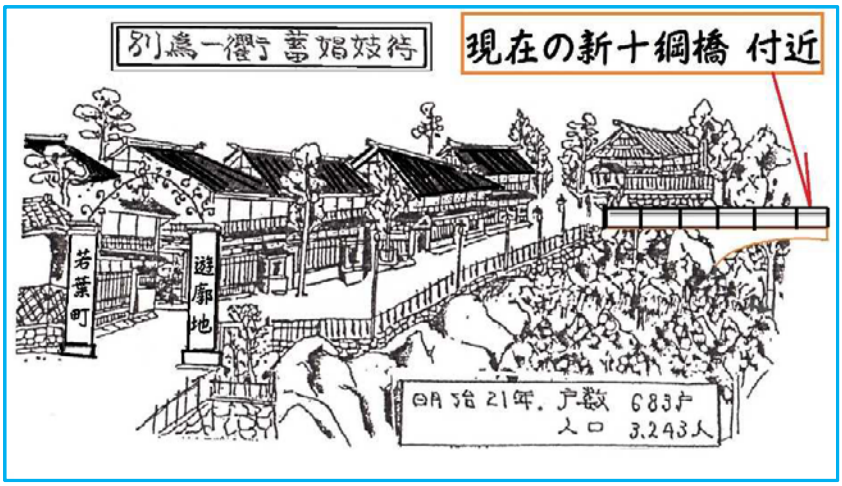
飯坂は明治二十一年四月五日に発生した大火の後よく復興し翌年四月には町制が敷かれました。この碑は初代町長村島泰亮氏が大火後の復興と町制の施行を記念に先人の偉業を讃え感謝の意をこめて明治二十三年七月に建立したものです。碑の題額は当時の内閣総理大臣黒田清隆、文章は東京帝国大学教授岡松辰が書きました。
碑には飯坂に伝わる伝説から明治に至るまでの歴史が略述されついで凡そ次のようなことが刻まれております。
飯坂はじめ小さな集落でしたが明治六年県令安場保和の時に十綱橋が架けられ明治十七年に郡長柴山景綱のはたらきかけで福島新道が改修されると往来が便利になり温泉を訪れる客が次第に増えて賑やかになってきました。ところが明治二十一年四月五日に大火が発生して二百七十余戸もの家屋が焼失してしまったのです。時の郡長田中章は住民と相談して焼け跡の区画整理を行い街を新しく造り変えることにしました。まず桑田を埋めて宅地千六百余歩を造り更に古い建物を壊して広く大きな宅地を拓きました。それが鏡湖町や旭町錦町古戸です。また田を埋めて千五百余歩を造成しそれを若葉町としたのです。住民は街の復興を大いに喜びました。
大火の翌年飯坂に町制が施行され街が更に整えられていく様子を目にした住民は街の発展に伴って豊かさをもたらしてくれる将来に期待するのでした。そこに住民はこれまでのことを石に刻んで忘れないようにし後世の人にも告げたいと申し出ました。この文章を書くことにしたのはそのためなのです。
先人は大いに努力して苦難を乗り越えました。後世の人は慎み深くし道理にはずれたり傲り高ぶったりしてはいけません。男は高潔で女は貞淑であり父祖の偉業を継いで成就すれば今よりも一層繁栄するでしょう。もしそれを怠って自分の利益ばかり考え偽りを仕掛け欲をむさぼり人の道を踏みはずし生業を落とせばそれは恥以外の何ものでもありません。
これを誓いの言葉としてここに記します。
明治 廿二年 八月

碑文は、街の復興を喜ぶ当時の住民に対してばかりではなく、それから百二十年後の現代に生きる人々にたいする教訓とも受け取れる言葉をもってまとめています。

平成二十一年四月

飯坂町　史跡保存会
碑文解説　遠藤保吉

いったイメージから地域の伝承の話になってきますが、実は総務省消防庁で全国の災害伝承情報ということで数年前からデータベース化しようという試みがありました。各地域、個々に色々な教訓が残されているのですが、これは国レベルでは統一されておりません。この災害時情報データベースは、整備に関わる情報収集調査表というのがありまして、その定義をお話しますと『本調査における災害伝達情報は、様々な形で現在の人々に伝えられる全国各地の過去の災害、事故に関する言い伝え、災害対応に関わる記録、資料であり、今日における教訓として活用することができる情報を定義する』ということで、そういった情報をデータベース化して後世に残そうといった動きがありました。勿論、その中には色々な災害があるのですが、大規模な火災や個数でいうと戦前と戦後の違いは有りますが、１００個以上の定義があります。その定義にかかわらず上記の程度を満たさない規模であっても、現在に語り継がれている災害がありましたら、対象に加えてくださいといったことで国が運動しているということをご紹介致します。それを踏まえまして実は飯坂町にもそれに匹敵するような火災がありました。



若葉町に新しく再建された遊郭街、当時は新名所として**絵ハガキ**に記されていた。

それは**明治の飯坂大火、**明治２１年（１８８８年）４月湯町、湯沢地区から出火し２７０戸を焼失しております。この災害の復興から、今の若葉町などがつくられたという記録があります。皆様ご承知かどうか分かりませんが、八幡神社の北東側に石碑があります。

〔 飯坂の碑の碑文解説資料　遠藤よね子様　提供 〕

昭和 19 年の火災状況

初め A に広がり B まで湯野旅館街を類焼し、稲荷屋の高層が崩れ若喜旅館 C へ、そして飯坂各町内を焼きつくし D まで類焼し鎮火した。

これは『**飯坂の碑**』と言われていますが、この石碑の中に詳しく書いてあります。ただしこの石碑はすべて漢文です。何が書いてあるのか、一寸分かり難いので皆様のお手元に資料配布しておりますが、そこに現代語訳が書いてあります。

『明治21年のこの大災の復興のために、桑田などを埋めて新たな町をつくった。この復興からの立ち上がりと将来に期待して、この石碑を後世に伝えるために残した』と

若葉町の古い写真を見ると若葉町は**遊郭街**として再建されました。古い写真ですが福住旅館さんから提供されたもので、資料としていただいております。こういった形で火災の復興から新しい町がつくられています。若葉町の中の**遊郭**の様子を見ると（前記イラスト参照）当時見事に火災から復興したことが伺えます。

皆様のお手元に配りました資料の最後の方に私が個人的に１８８８年からのメッセージだなと思っている部分があります。要は、色々な苦労をして自分達が新しい町をつくった。これをぜひ後世の人に伝えていきたいというもので、こういった物を残しています。読んでいくとその業績を継いで、より一層繁栄するでしょうということで、先人の人々が伝えてくれるありがたいメッセージなのかなと思います。（ 前記飯坂の碑参照 ）

以上は明治の話ですが、ここからは**飯坂の昭和１９年の火災の**お話に移ります。１９年

７月１日午後７時３０分（１９４４年）、湯野側の高台（現交番の北西）から出火したと記録が残されています。湯野の方７１戸を焼き尽くし、その後、飯坂の方に摺上川を越えて燃え移り、翌日の午前２時４０分頃にほぼ鎮火したといった記録があります。これが（Ⅰ）(前ページ参照) その火災の延焼状況図ですが出火建物が記されています。ここです。ここから出火して、まず湯野側を焼失し、その拡大していった火災の様子です。次は当時の写真①ですが、摺上川渓谷沿いに、こういった木造の荘厳な建物が立っている姿が**当時の飯坂温泉**の姿だった訳です。これが１９年の火災の直前と言われている写真です。この背景を見ると木造の５階建ての建物がずっと立っている状況です。この上記（Ⅰ）の地図は当時の火災の類焼を復元した罹災地図です。火元は、現交番裏、ここから広がっていったと言われています。後に摺上川を超えて飯坂側に燃え移っていきました。当時の火災の現状写真を、寄贈していただいておりましたので、この大火の写真をご紹介したいと思います。これは延焼後の亀屋の３階から十綱町を撮ったと言われている写真④ですが奥に十綱橋が見えていて、建物が完全に焼失して無くなっています。まだくすぶっているようです。次に火元側の焼け落ちた**湯野温泉旅館街**⑥の様子です。高層建て旅館の雄姿の面影は消え失せています。⑤は湯野高台から稲荷屋方面を見下ろした写真です。燃え尽きて稲荷屋のエレベーターの塔屋の部分だけ残っているといった状況です。説明だと角屋と稲荷屋にエレベーターが当時あったそうです。次に、**十綱橋下方面**から飯坂側を見た②と③の写真では②の白いハイカラな建物がありましたが、③では見る影もなく、全て焼失して無くなっています。これを見ると一般的な火災なら、有効な放水があれば柱ぐらいは残っているのですが、この火災の焼け跡を見ると全くありません。疑問に思うのは**“放水されているのか？” “これだけ燃えるためにはかなりの熱があったのではないか？”**ということがこの写真から伺えます。④の写真は下流の方ですが、飯坂側はすべて壊滅状態、ほとんど橋の周辺などは建物が無い状態です。これも十綱橋を中心として、ほとんど建物が無くなっています。

この写真を見ていただければ分かると思いますが、木造建物が全て焼失して無くなっています。飯坂温泉駅付近、十綱橋を見ていますが、建物の柱は確認できない状況で焼け落ちています。

昭和１９年７月２日の福島民報には戦時時代ですから当然出てこないのかもしれませんが、飯坂の大火の話は全く出てきていません。戦時下なのでしょうがないと思いますが**「空母２隻を撃沈。マリアナ海域に敵の大艦隊がいる」**とかそういった話です。地方紙であってもそういう時代だったのかなと思います。調べますと、実はマリアナ沖海戦がありました。１９年６月１９日から２０日にかけてだったのですが、日本軍は壊滅的に負けているのです。壊滅的に負けているのですが、そういた事実は全く報道されていません。そう

いう時代だったのかと思われます。　ようやく３日後になって、福島民報の朝刊記事に当時の警察部長の話が残されています。自治体消防発足が昭和２３年ですので、当時の消防は警察の一部分でした。当時、消防団は警防団といいました。「こういった活動にかかわらず大火になったのは残念だ」とあります。大火になった原因をどういうふうにお話をされたかというと、飯坂、湯野側共に南北に走る道がひとつだけ、それを繋ぐ橋が１つしかないということで消防機械の出入りが塞がれた。摺上川側を挟んで３０ｍを超える断崖が河川の両側にあった。全く水を取ることができなかったということを話されています。後は、湯野側の旅館が倒壊して飯坂側に延焼したと、今後どうすべきかという話もされています。高層建築物を造る時には十分配慮すること、道路の幅員拡張、橋の拡張をしてもらいたい。また、消防水利を計画的に作ることが必要だと当時の警察部長がお話されています。ここでもう１度、これは当時の火災の平面図(Ｉ)ですが、考えていただきたいのは、私の推測ですが火元はここです。ご承知のように、摺上川の西側から、こちら東側に向かって傾斜して高くなっています。ここの道路沿いに西根堰がずっと通っていますので、推理すると一般住宅の出火であれば、ある程度の消防力、当時飯坂にはあったと思いますが、正常な機械力（動力型消防ポンプなど）があれば、西根堰に部署して、高低がありますから、延焼方向はこちらに行くと思います。うまく守れば、この火点だけで、この周辺だけでくい止められるのではないかと私は考えます。季節的には７月１日なので、北西の強い季節風はおそらくこの時期はまだ無いと考えられます。少し話はずれますが、要はある程度拡大してしまった摺上川を挟んだ両側の火災というのは非常に防御しづらいということです。輻射熱によってどんどん延焼していきます。このことは、平成６年に若喜の火災がありましたが、その時に湯野側から消火に当たった消防団の方も、若喜の本館が火の海になった時に３０ｍ離れていましたが、**『輻射熱で顔が熱くなって大変だった』**とお話されています。では、その背景に何があったのかということで、機械力は無かったのかといった話になりますが、当時戦争も末期です。要は帝都東京を守るために比較的空襲の危険の少ない東北関東の各市町村から消火ポンプ車**３１７台**、手引き**ガソリンポンプ９２５台を**首都に集めていました。

これは疎開の話に関連するのですが、１９年６月３０日に学童疎開が決まって、空襲が無い安全なエリアに子供達を避難させていました。飯坂温泉にも荒川区のお子さん達が来ています。この地域は安全だと、先ほどの比較的空襲の危険がないという部分に、実は飯坂町も含まれていたのではないかと考えております。

大きな規模の火災になってくると、**『火災旋風』**といった強い風が発生するという学説があります。これは、発生した火災が酸素を必要として火災の発生しない周辺から空気を取り込むことで上昇気流が発生するというものです。それが火災旋風の原理ですが、この火災を考えると湯野側の連立する木造の３階４階の建物が一気に燃え上がっています。ちょうど空気の通り道が摺上川だと考えると、そこから空気が入ってきて、かなり高い温度が発生していると思われます。この火災旋風ですが、実証されているのは地震や空襲などの大きな火災ですが、それに伴う旋風が発生します。その旋風の温度は１０００度を超えると言われています。輻射熱も同じで、こういったことが考えられております。３月１０日の東京大空襲では、そういった火災旋風が発生したという記述があります。

また、前年に荒川区のお子さん達が飯坂町に疎開をしています。ですが３月には年度が変わるということで戻っています。せっかく飯坂町に避難していたのですが、戻ってしまって、この大空襲に遭遇した方もいらっしゃるのではないかと推察します。

〔後日、湯野在住の当時19歳の方に大火のお話を聞くことができました。当時の消防力ですが、手引きガソリンポンプが**1台**、旧式の腕用ポンプ**4台**が機械力で成人男子(20～30歳)が多く出征していて、これを動かす人員も居なかったということでした。また当日は晴れで風はなく火災が、大きくなるにつれて風が俄かに吹きまくり、飛び火が藁屋根に落ちて拡大し、その後湯

野側の旅館街が焼けて、**5階建ての稲荷屋**が崩れ落ちた時に**対岸の若喜旅館に延焼**すると風が飯坂側に吹き始め飯坂の旅館街があっという間に炎に包まれていったということでした。
この証言から、**『火災旋風』**が起きていたという推測は間違いで無かったように思います〕

次に昭和３９年の話ですが、飯坂町で火災がありました。３９年３月、鯖湖町という所で６棟４５０㎡が焼失する火災がありましたが、新聞記事を見て非常に興味深いなと思うのが、野次馬が４０００人も居たと、今ならどうなのだろうと、ある意味でファイヤー祭りの原点がここにあるのかなと思ってしまいます。消防的には、複数の消火栓を一気に取ってしまい水圧の低下によって、益々悪い状況になって延焼したと思われる火災です。消火栓の共倒れが起きてしまって、その先から水利を確保せざる得なくなったという状況が発生しました。

また、次の年の昭和４０年**3月**にも発生しております。１７棟、まさにこの月は恐怖なのです。これから、この地区に吹く風の影響でこれだけ燃えています。日にちが同じですが、３９年**3月**１４日。これも４０年の**3月**１４日で、**まさに３月という時期**が過去の歴史を紐解いていくと非常に注意すべき月だと思います。この時は完全に消防力がありますから、２３台の消防車が駆け付けたと書いてあります。野次馬のところに目を留めると３０００人の野次馬がいました。水圧の低下があったということのようです。

【 飯坂の於ける大火 】

名　称	発生　年月	罹災状況	出火場所　原因	そ の 他
御庵の火事	文政8年（1825年）12月18日	詳細不明	飯坂町梅町御庵より出火 原因不詳	梅町横町延焼、飛火は摺上川を越え湯野村刈谷落陣屋に類焼
常泉寺の火事	明治13年（1880年）3月13日	寺1棟外32戸	常泉寺より出火	寺内に開校されていた飯坂小学校は、八幡寺に移転開校された
明治の大火	明治21年（1888年）4月5日	280戸	飯坂町湯町地内　原因不詳	罹災者、詳細不明 火災後湯町の遊郭街村境に移動
昭和の大火	昭和19年（1944年）7月1日 19:30出火	202戸	飯坂町湯野上地内、ｺﾝﾛ不始末	罹災者、1300人 戦時中、人員機械力不足、類焼
平野の大火	昭和33年（1958年）4月1日 10:20出火	128戸	飯坂町平野石堂、平野小学校用務員室、マキ風呂ヨリ	罹災者、278名 【死者1名】 春の強風時の火災
鯖湖町　火災	昭和39年（1964年）3月14日 18:20出火	10世帯	鯖湖町地内、　石油コンロに火を付け中給油、引火転倒	罹災者、25名
夜蚊坂の火災	昭和40年（1965年）3月14日 6:55出火	13世帯	夜蚊坂、げた工場 焚火の不始末	罹災者、64名

昨年のこの日には６棟。３年前、**3月**には湯野の亀屋が燃えました。町民は**『魔の３月』**と呼んで警戒をしていました。一昨日の茂庭の火事も、たまたま風が無かったのです。風があったら、当然隣接の建物やすぐ裏が山なので、ここに延焼したら歴史に残る大火災になっていました。風が無かったので助かりました。これからなのですが、飯坂町に吹く風と焚き火の関係を甘く見ていると大きな災害に繋がっていくということが過去の歴史からはっきり分かっています。ちなみに３３年４月の平野の火事についてもやはり強風です。かなりの平野地区の建物が焼失しています。春先の焚火はこの町においていかに危険か伺われる火災です。では、どう考えていくか、まとめとして飯坂地区にはこういった先人が残した貴重な遺跡があります。これは個人的には、全国災害情報伝承登録レベルではないかと考えています。何とか全国に発信し、先人達の思いを伝えていきたいと思います。昭和１９年の火災は太平洋戦争末期という時代が非常にまずかったのではないか、大火になった大きな要因がそこではなかったかと思っています。これを研究していくうちに、災害情報の第２弾として、登録しても良いのではないかと個人的に最近考えるようになってきました。後は、魔の３月です。これからの時期は北西の季節風があります。飯坂町は周囲が果樹地帯ですので、この季節になると剪定等の焼却で、皆様届出を出して焼却されるのですが、そういったことを十分注意していただければと思っています。

〔前記の大火では怪我人や焼死者はなかったようです。これには、戦時下で地域住民の団結力が強く世帯ごとの人員や消防弱者の世帯が把握され避難誘導が確実に行ったことが功を奏したようです。これに比べ現代の消防力が格段に違うのは、一般家庭への消火器や火災警報の普及によって初期段階での対応能力が向上して小火で鎮火できるようになったことです。しかし、避難となると**核家族化が進み**、町会での各世帯の把握が難しく火災が拡大すると**避難誘導が遅れて**しまい焼死者が発生すると考えられます。これを防止するために、高齢化社会を踏まえ地域自主防災組織での**『自助』『共助』**の在り方が問われる時代に成っていると思います。〕

時間になりました。私の話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

〔 参考資料イラストは　椎野健二郎氏　イラスト集絵図ヨリ 〕

◆ 閉 会 点 鐘　　会 長

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第12回 ～

『　飯坂電車 東線、西線の歴史　』

◆ゲストスピーカーの紹介　　会報、広報委員会 委員長　　小松 淳　会員

こんにちは。今日のお話は、現在の飯坂の交通の主は**飯坂電車西線**ですが明治時代後期頃は、日本では二番目の総路線距離をも**軽便鉄道**（路面電車時代の前の簡単な小型蒸気機関車での列車）があり信達平野各地に運用されていて、飯坂町（湯野駅）にも路線がひかれていたことは、皆さんはあまりご存じないと思います。その後、路面電車に変わるのですが、今日はその歴史について**路面電車を偲ぶ会**の会長でいらっしゃいます安齋武様をお招きいたしまして、この**飯坂西線**と**東線**の歴史や写真をご覧いただきながら、懐かしい話に耳を傾けて頂きたいと思います。

◆ ゲストスピーチ　　路面電車を偲ぶ会　会長　　安齋 武　様

電車の案内表示板を持ってお話をする
安齋会長と副会長の小野さん

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました路面電車を偲ぶ会の**会長安齋**と申します。そちらに座っているのが副会長の**小野義征君**です。宜しくお願い致します。

私も小野君も福島電鉄福島交通に勤務した人間ではありません。私は民間の会社で約５０年近く勤めておりました。当初は漆の材料を販売していたのですが、漆では食べていけない、定年まで勤められないのではないかと考えておりました。日本の国が農業から産業に変わっていきましたので、産業の方を発展させて、海外に出てアメリカからヨーロッパ、イギリス、ドイツ、アイルランドに、塗装ロボットや印刷機械、諸々のシステムを販売していました。海外では一式数億円の商品を約１００台セッティングさせて、頂いたことがあります。

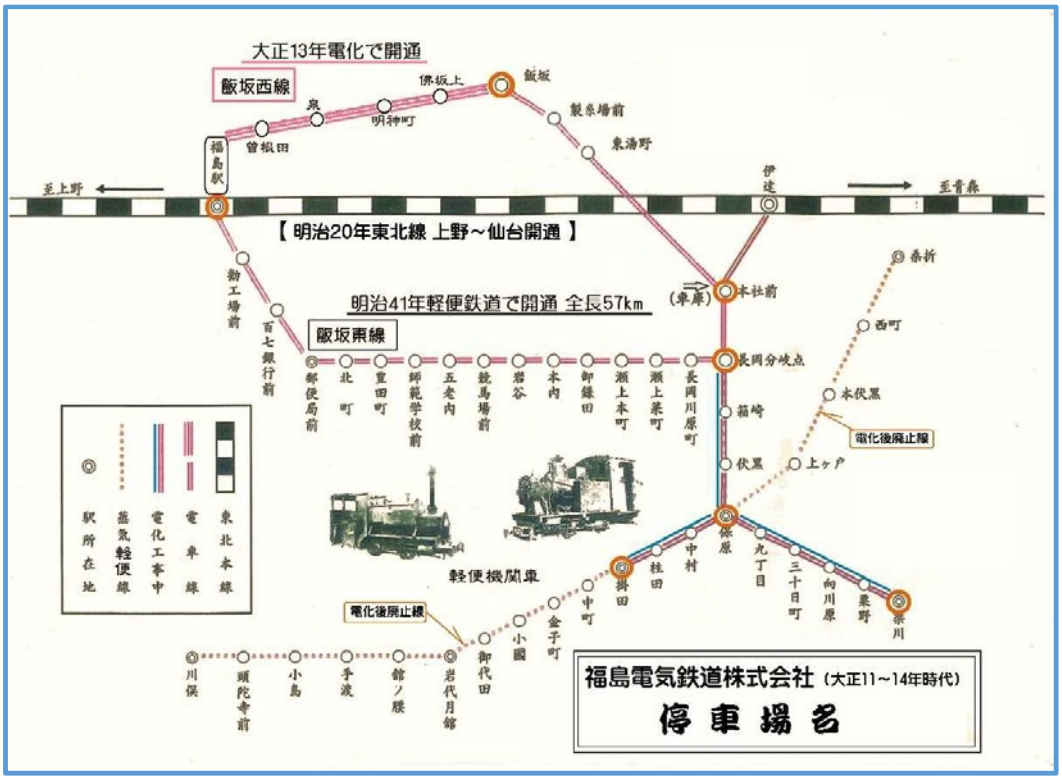
信達地方の明治、大正時代の産業を支えた軽便鉄道57Ｋｍの総路線、当時の日本では規模は大であった。

福島市内本町日本銀行前を走る軽便列車
明治42年頃

当時の軽便鉄道の機関車、煙突の高いのが特長

私は小さい頃から鉄道が好きで、電車についても近くの道路で走っておりましたので大変興味がありました。福島交通さんの路面電車に関しましては、特に昔からお世話になりましたし、今でも**路線の車両の警笛の音**が耳に刻みこまれております。そんなことで外国と全国の路線電車も撮りました。また、他の人からも譲っていただいております。会社を退職してから写真を撮り始め、**信達平野の福島と伊達の界隈**は、これほど路面電車の歴史のある地域は他にないのではないかと思いまして、写

真展の依頼を受けると喜んで展示し**約１００回ちかく**は受けているのではないかとおもいます。今年も５月６・７・８日の３日間は朝１０時から夕方４時まで、コラッセさんで写真やイラスト関係色々と展示させていただき、特に六魂祭では全国からお客様がいらっしゃって、福島のＰＲになったのではないかと思っております。また、小野さんは旧伊達町役場に長期に勤務し退任されました。町の発展のために何かとご活躍されております。



路面電車を偲ぶ会というのは、福島電鉄福島交通さんのＯＢの方々、約１２人おります。最近は若い方もいらっしゃいますが、今後もこの会に何かとご協力を頂きたいと思っております。伊達のふるさと会館や県の文化センター、福島市のデイサービスさん、教育委員会さんからも展示のお話を頂いております。

本内大火のイラスト　昔は藁屋根が多いので煙突からの火の粉で、大正 11 年大火になった。

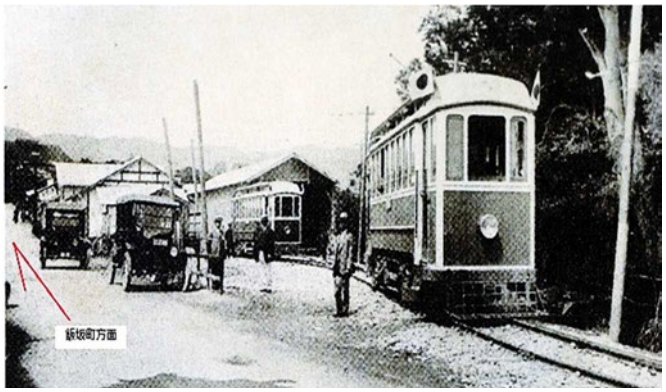
東線の路面電車については当時、雨の日や雪の日が多いと、色々な所で電車がスリップで、すぐ止まってしまったと言われています。特に東線では松川橋が流され、折り返し運転があって苦労したというお話でした。**昔は養蚕業のおかげで電車が発展**していた事もあり、色々な意味で福島と伊達には電車の歴史があります。この歴史を皆様に知ってもらうことは大変良いことだと思うので、小学校でも何度かお話をさせていただきました。そうしますと子供達が鉄道に大変関心がありまして、電車通りがどこか分からない３０代から５０代の先生方が子供達より先に勉強したいということで、先生方にも特別にお話をしております。**飯坂西線の電車**は、路面電車としては早く、飯坂西線に走ったのが（福島駅から西町、曽根田、森合）大正１３年のことです。昔は福島駅前の**飯坂西線**、から別れた東線はずっと伊達、保原に行って、更にその昔は**桑折町**に行った路線もありました。その時は**軽便**（小型蒸気機関車牽引の軽便鉄道のこと。線路の幅が狭い簡易な規格の鉄道を指す）で**保原**から**梁川**方面と**掛田**方面、更に**月舘**を通りまして**川俣**に行っておりました。これが明治４１年のことで、**総路線距離５７ｋｍ**で、路線としては全国ではめずらしく長かったったようです。これを立ち上げた方は、山梨県の雨宮敬次郎さんという方です。福島と熊本、小田原、広島に工事を手がけたようです。雨宮さんは鉄工屋さん

火災後は樽の中に水を張り、水をかけて走ったと言います

掛田の生糸が世界に輸出されていた印の貴重な輸出ラベル

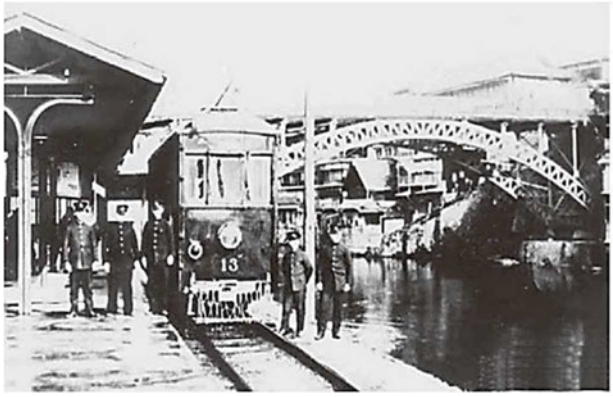
【軽便鉄道から始まった東線、西線の歴史と信達地方の産業の発展】 shinagi

年　号	事　項
江戸時代中期終り 明和3年(1763)	掛田、川俣の佐藤友信、(1716～1763)　養蚕帳50冊作り、発表 (すでにこの時代に掛田地方では、養蚕が行われていた。)
江戸時代終期 安永2年(1773)	奥州福島(信夫、伊達)が全国で唯一ケ所「奥州種本場」の名称使用、幕府より許される (信達地方一帯は日本有数の養蚕業中心地となっていることが伺われる。)
明治12年　(1879)	掛田、金子町において、第二回全国蚕糸業共進会開催さる (日本全国から集まって養蚕業振興が掛田で行はれた事は、信達地方の養蚕業にとって意義深い会合であった。)
明治12年　(1879) 明治16年　(1883)	保原町に郡役所設置されたが 明治16年　桑折町有志が誘致運動で桑折町へ移す。
明治20年　(1887)	川俣において軽目羽二重の試織に成功する。　(明治20年12月　東北線上野～仙台(塩釜)間開通。)
明治25年　(1892)	川俣の羽二重が最盛期。　(当時、川俣は製織戸数は500戸前後あったといわれる。)
明治32年　(1899)	『汽笛一声新橋を…』の鉄道唱歌発表され「奥州線集」24番で「長岡おりて飯坂へ…」と当時を歌われていた。 当時は　(長岡は飯坂の玄関口)であった。　(当時人力車　長岡～飯坂、33銭)
明治32年　(1899)	東北地方初の日本銀行営業所として開設、当時重要輸出品生糸の集散地、東北の金融の中心地であると言われていた。
明治41年(1908)東線 (軽便鉄道)	蒸気動力(燃料は無煙炭)の小型機関車、軽便鉄道が(軌幅762mm)福島～長岡(伊達)～湯野村(湯野駅)開通 同年長岡～保原～梁川。　保原～掛田～川俣、開通　(福島～梁川所要時間2時間) 開通前は人、馬車にて掛田、月館、梁川、保原より生糸製品が伊達、福島へ運ばれていた。
大正11年(1922)東線	保原～桑折が開通。軽便鉄道全路線　57km　(養蚕業の繁栄によって営業が確保された。)
大正11年(1922)東線	縣田集落で軽便機関車の火の粉で火災46戸、旅居87戸全焼、住民線路に座り込んで抗議18日間運休
大正13年(1924)西線 (電化)	福島駅～飯坂駅(現在水坂駅)電化で開通。(直流600V、軌幅1067mm、集電装置はトロリーポール) 福島－西町－曽根田－兵庫田－森合－道下－泉－成出－前谷地－瞬神町－佛坂上－佛坂下－飯坂　の12区間
大正15年(1926)東線 (電化)	福島～長岡(伊達)～湯野村(湯野駅)軌幅1067mmと電化変更、(直流600V、集電装置はトロリーポール) 同時に掛田～川俣、保原～桑折の赤字路線は廃止。東線が電化され全線で31.5kmで営業する。
大正15年　(1926)	国鉄川俣線、開通。　(川俣、飯野は絹織物の産地で、これらの産品を輸送する路線として営業した)
昭和2年(1927)西線	現在の飯坂温泉駅まで延長、旧飯坂駅は花水坂駅に改める。
昭和13年(1938)東線	長岡車庫工場火災発生、電車5輌焼失。　当時は近くに長岡分岐点駅があり、福島、飯坂(湯野)、長岡(伊達)駅、そして保原、梁川、掛田(霊山)と信達地方の交通として路面電車で活躍し長岡分岐点駅はその要衝であった。
昭和17年(1942)西線	福島駅ホームに専用軌道で乗り入れる。　駅前通りから北に分岐していた路面軌道は廃止されて東線から分離された。
昭和27年(1952)東線	集電装置はパンタグラフに変更、東線も随時パンタグラフに変更した。
昭和30年(1955)	戦後産業の発展から旅客輸送と共に、貨物輸送も増大し、福島駅前と東線の各主要駅を貨物専用列車が運行した。　(又電車の便に貨車を連結して、輸送の便を担った。)
昭和38年(1963)西線	大型(現状)車両　5000系を導入し、輸送力増強を図った。
昭和42年(1967)東線	伊達～湯野、間は西線のスピード改善や車の普及により、湯野に向かう人々が減少し廃止となる。
昭和46年(1971)東線	車社会の進化や道路環境の変化によって、路面電車の運営は困難を極め、ついに東線全線が廃業となる。



飯坂西線は路面電車(当時は福島駅前～森合区間)では一番早く電化され大正13年　現花水坂駅迄　開通した。開通間もない花水坂駅

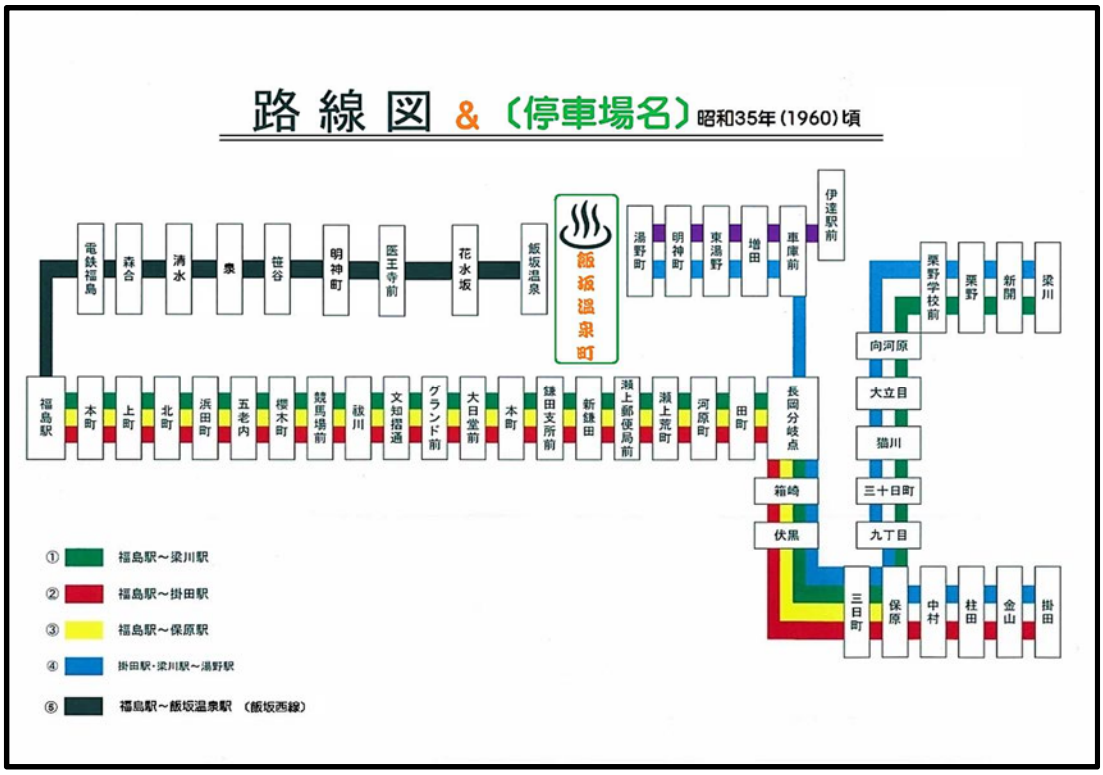
のようでして、機関車といっても薪を焚く軽便な小型のもので石炭を焚くような立派な物ではなかったのですが、大体これを２０両造ったそうです。そのうち、１２両は福島の方に配車して、その他の８両は熊本と小田原、広島に配車したそうです。どうして福島に熱を入れたのか、それはやはり**養蚕**があったからです。私は伏黒出身ですが、幼い頃に畑で迷ったら阿武隈に出ろと言われていました。それぐらい桑畑が多く、**絹織物が江戸時代から盛んだった**のです。今、群馬の富岡に製糸工場跡がありますが、当時は山梨や長野、群馬からもこちらの方に買い出しに来たというお話も聞いております。そのために福島市には**産物屋**さんと言いまして、養蚕の仲買人が数１０件あったというお話も聞いております。この福島には、富岡さんのような工場跡は残っておりませんが、江戸時代からなぜそんなに福島の養蚕が好まれたのかというと、どうやら絹織物で縦の糸と横の糸が福島の養蚕は最高に良かったためであると聞いております。この

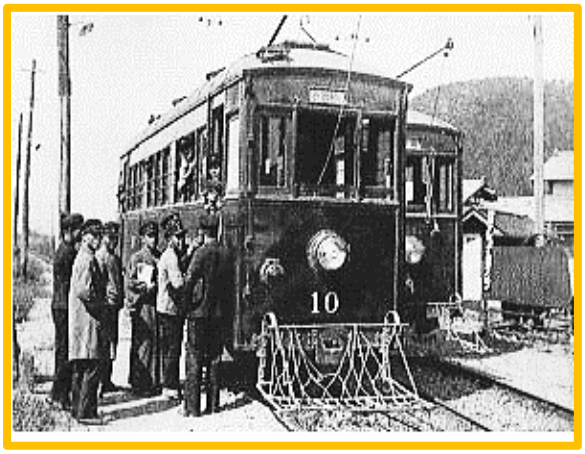


3年遅れて昭和2年、東北の 温泉郷、表玄関駅。 飯坂駅迄開通間もない飯坂温泉駅と電車

明治４１年から、軽便が走ることになりました。初めのページに本町を走る軽便のイラストが描かれているのが、当時の軽便列車です。これは福島の駅前本町通りをイメージしております。

　また、昔は藁ふき屋根が多かったのですが、軽便は煙が出ますので、火災が心配でした。**大正１１年本内で大火**があったのですが、軽便では薪を燃やしており、走った後に火災があったものですから、その後、水掛けて消しながら運行したという話があり、その模様がイラストにも描かれています。路線が多く各方面に行くので近くの農家の方はこの仕事で良いお金になったそうです。昭和元年を境に電車にしようということになり、軽便の時のゲージ幅は７６２ｍｍで、**電車になると１０６７ｍｍ**、それは国鉄、今のＪＲさんと線路の幅と一緒です。東京都電、秋田市電（今は無くなった）と函館市電が１３７２ｍｍです。　**１４３５ｍｍは世界標準**で、これが**新幹線のゲージ**です。ちなみにアフリカに行くと**２１００ｍｍ**というとんでもないゲージも走っています。





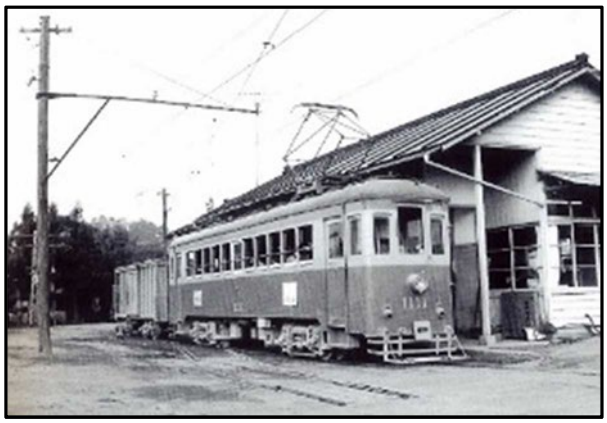
電化当時は、集電装置はポール式（先端に車が付いていて架線に付けて回転させて集電していた）　ポール式電車の貴重写真

上図、昭和35頃の梁川街道、砂利の道路にレールがうまっている。
下図、昭和35頃の湯野線、道路なのか、レールなのか、良くわからない電車交換レールと東湯野駅

昭和35年頃の福島駅前、東線電車乗り場、大正13年時代は、飯坂西線、東線は、全てここから発着し西線は森合まで路面電車だった。

朝夕のラッシュ時は、二輌三輌と続けて運行したため、交換時の衝突防止のため、続行ありの表示板を付けて走行した東線全盛期時代

飯坂電車西線は、大正１３年から電車になっていて、ゲージが国鉄と同じの為、泉駅に行く手前に福電工業 kk さんへ、電車で貨車を連結し、福島駅で国鉄さんが牽引してきたのを、福電工業さんまで２、３両を牽引していました。当時専用の赤い電車がありました１２０３号車とか１２０５号車とか、１２００番代の電車、５０００番代の電車でした。栗原電鉄に２両貸し出した形になっていますが、ここでも貨車を牽引していました。



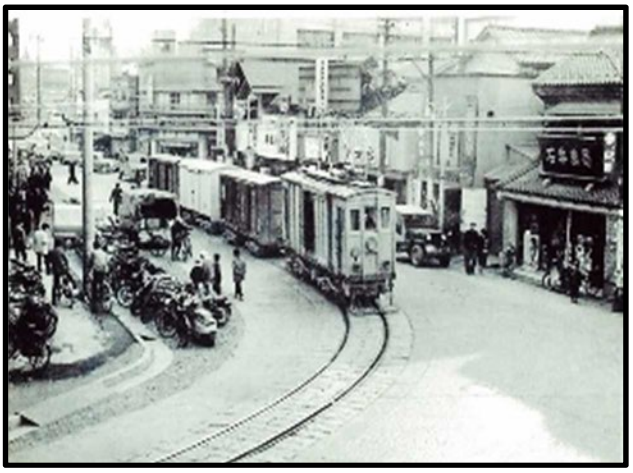
貨車1両を連結して、掛田駅出発待機中の電車　貨物と人員輸送の併用のローカル電車　昭和41年ごろ

西線は最初の頃は**花水坂が終点**でしたが、その後十綱橋の近くまで伸ばして**飯坂温泉駅**としました。

西線開通時代は福島駅東側栄町付近（昔の西町出発点）から、森合駅まで路面電車時代で**昭和２年に福島電鉄**という名前に変え**東線**と一緒になったようです。当時長岡が車庫になり電車が集約されたそうです。

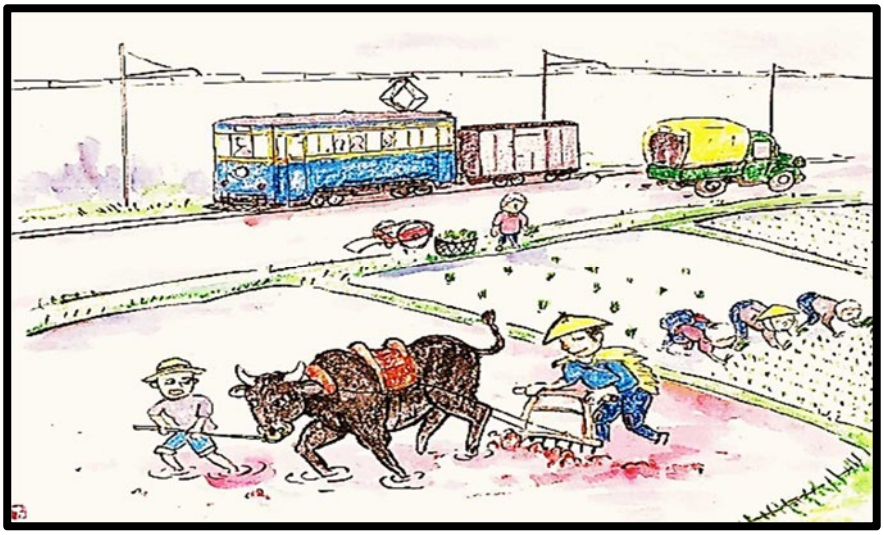
いつも、ここから朝一番の電車が、長岡から２両位が福島に来て、最初は飯坂線の電車に１番電車として向かいました。あと１両はこちらから、梁川行きや次は掛田行きになりました。大体１時間に４本位、飯坂線も大体１時間に４本から５本。特に森合には福島経済大学がありましたので、生徒さんがかなり多かったようで、電車に乗れないこともしばしばあったそうです。

永い歴史のある湯野線の終着駅 繁栄と衰退の面影を残す廃止前の湯野駅、昭和42年9月廃止、バス路線となる。



県庁通りから上町方面に向かう東線の貨物専用列車。トラック自動車があまり無い時代、保原、伊達、梁川、掛田、の貨物輸送を殆ど担っていた。昭和33年頃

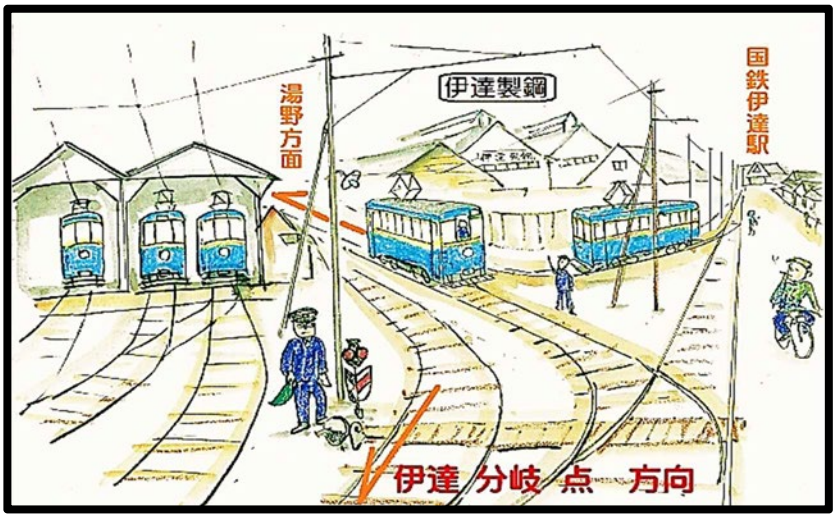
飯坂東線の路線は大体３３ｋｍ。仙台の市電が複線ですが１６ｋｍです。それだけの長さがありました。また、長岡の車庫から、湯野線が最初の**東線**で、福島から長岡経由の湯野線が最初の電化になったそうで、梁川から保原、保原から掛田に１年後に軌道幅を広げました。これを大体１年間でやったそうですから、人手はどうしたのかというと千葉や関東の方から来てもらって、**当時、騎兵隊や軍隊**の兵隊さんも工事をしたそうです。それ



子供が牛の誘導しているのを『はなどり』と言う。昔の田植えでは子供の仕事で、田植えになると学校を休まされるものだった。 田植えの中、電車と貨物車が走るのどかな風景

から、雨宮さんの顔なじみの方もお頼み申し上げて、そしてまず湯野町線を電化しようということで、後は随時保原、梁川、掛田と電化したようです。当時は、大したお仕事をなされたなと思っております。この電化と同時に保原から桑折までは４、５年しか走らなかったようですが、路線が赤字なので廃止しようと、また、掛田から川俣も廃止しようという話になり、電化になる前に軽便で終わったということです。

ただ電車になったと言っても、当時は単車と言いまして、電車の横から見ると車輪が２つしかないので、ちょっとスピードを出すと揺れまして、それが船のようなので**船電車**だというのを子供の頃に耳にしました。そのようにしてスピードを出すと脱線してしまうので、スピードはせいぜい**時速１６ｋｍ**から２０ｋｍでした。それと電車の前に編みがありますが、農家の方が急に飛び出してくると、今のようにエアブレーキではなく、鎖で巻き上げて止めるブレーキなので止まるまで時間がかかりました。それではまずいということでエアー式になったのが昭和２５年頃です。警笛もクラクション式になりました。それまでは電



伊達駅からの発着、湯野方面からの電車、保原、梁川、掛田行の電車等、この車庫駅と長岡分岐点駅は東線の要と成っていた。

現在の様に福島～飯坂間、電車や自動車が進化していない時代、飯坂から4.5km の伊達駅が飯坂の玄関口であった。 当時の伊達駅前風景

車の下に鍋を逆さにして、運転手さんが足で踏んでカンカンと鳴らしていたのです。昔は**カンカン電車**と言いました。飯坂西線は昔は**パー電車**と親に教えられました。スピードも速いし、ドアもエアーで閉まるのでよく母に連れてってもらいました。だんだん電車も進化し、昭和２７年にはポールからパンタグラフになりました。ページのイラストは**伊達駅前のイメージ**です。飯坂温泉のある旅館の番頭さんのはなしですが、仙台から国鉄列車で飯坂温泉に湯治に来られる団体のお客さんが多かったようです。

伊達駅から電車が１両、２両、３両と運行します。そうすると飯

坂温泉では歓迎のため花火が上がります。その時初めの１両目に「**続行あり**」を表示し運行し、次の電車の２両目も「続行あり」を表示します。これで、その後にもう１両来ますということを知らせます。

　これがないと、対向電車の定期電車と交換する場合に、真っ直ぐ行ってしまい正面衝突します。実際には無かったようですが、当時はバックしてまた線路に戻って交換したということを、ＯＢの運転手さんから聞いています。その他、電車のブレーキのハンドルについてですが、前進、切り替えする時に使うものをマスコンと言いまして、４ノッチより先はフリーとなりスピードが出ました。

最新の車輌を投入してお客の利便性をはかっている飯坂西線の車輌 7000系電車

飯坂電車通勤族のシンボル、昔の想い出が甦る福島電鉄マーク、

路面電車の写真を見てわかるように、**東線電車**は**車両のサイズが小**さく、上りは、おおかた福島に行くからいいのですが、下りは**掛田行**きなのか、**長岡止**まりなのか、*保原止*まりなのか、**梁川行き**なのか分からないので、乗り遅れたことが多々あったそうです。そのため行き先表示板をつけるようになりました。朝、晩は電車に乗り切れない時もあったようで、保原や梁川からは、最初から１両の定期電車の他に、もう１両来ますよという「**続行あり**」で時間帯によって走りました。それでも、乗れないお客さんが結構おりました。その他に電車は、昔は福島の信夫ヶ丘球技場が県内の野球の県大会がありましたから、朝早くから鉄道と電車を利用し、皆様ぞろぞろ降りて来たというお話です。電車の待機所がそこにありまして、６両から７両も待機しており、**高校野球や競馬開催**の時や、暁詣りの時も一晩中続行ありで、定期電車と一緒ですから、保原、梁川、掛田の方からも電車を利用して暁詣りや競馬に利用されたということがありました。**湯野線の路線が昭和４２年の９月に廃止**になりましたが臨時電車が結構活躍しました。

最後は会長の駅長姿でオーワリ‥‥

　それでは、お粗末ですが私の話を終わります。　　ありがとうございました。

◆閉　会　点　鐘　　会　長

〔 文中のイラストは東湯野東畑 伊東隆雄様　提供〕

〔 文中の車輌の古写真、経路図は路線電車偲ぶ会ﾖﾘ　提供〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第13回 ～

『妖怪大蛇 から茂庭を救った16歳の“猿姫”物語』と茂庭の旬景

◆ゲストスピーカーの紹介　　職業奉仕 委員長　　鈴木 義明　会員

スピーカーを紹介する鈴木会員

それでは、今日スピーチをしていただきます渡部永夫さんをご紹介いたします。渡部さんは長く市内の会社に勤めて定年退職され、現在は茂庭地区の滝野町町内会長として、また茂庭地区連合会会長、ダム周辺地域づくり協議会会長などの役職をされていらっしゃいます。常に茂庭の事を考え、一生懸命頑張っていらっしゃる先輩です。そして、特技の剣道は５段という腕前で、私も昔若い頃にずいぶんと厳しく鍛えられた記憶がございます。 今日は『 飯坂の歴史を辿る 』シリーズ13回　として昔から茂庭に伝承されている『 大蛇物語と茂庭の景観を後世に残す 』というタイトルでお話をしていただき、この伝承を本にして、又茂庭の素晴らしい景観を記録にして、後世にて残すという事を計画しております。よろしくお願いいたします。

◆ ゲストスピーチ　　茂庭地区 町内会連合会　会長　渡部永夫　様

飯坂ﾛｰﾀﾘｰｸﾗﾌﾞでスピーチをする渡部永夫 様

皆さん、こんにちは。ただ今、鈴木様の方からご紹介がありました。私は渡部永夫と申します。今日のお話と致しましては、茂庭の歴史、文化と共に、茂庭の旬景についてということでお話をさせていただきたいと思います。

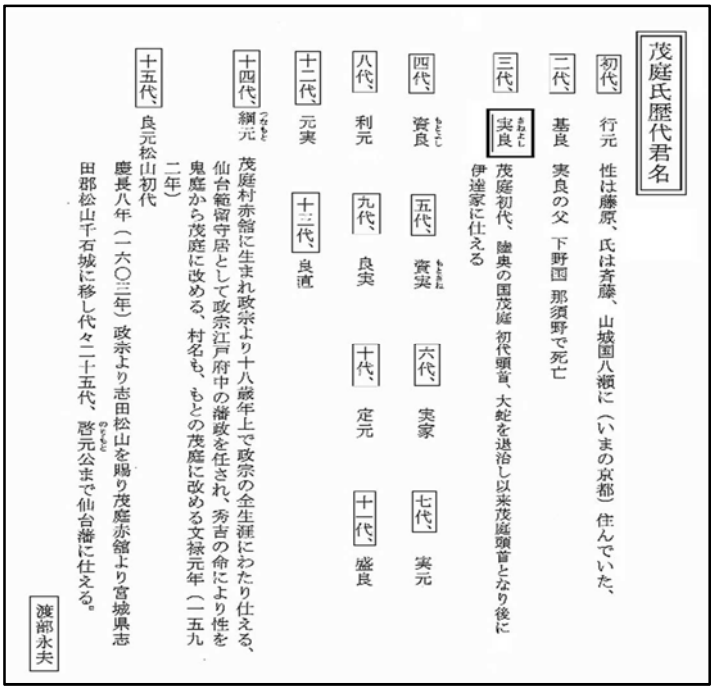
私は、茂庭生れ茂庭育ちで現在も茂庭に住んでおります。私の住んでいる茂庭は飯坂温泉より山形方面へ車で約１５分、北に宮城県七ヶ宿町、西に山形県高畠町の県境にあり、福島市の最北端にあります。春から初夏にかけての新緑、そして秋の紅葉、山々が錦秋の如くとてもきれいで、大変静かな山郷の集落でございます。私はこの四季を通して自然豊かな茂庭の大地を真より愛する者です。実はこの講演について、昨年８月に福島民報飯坂支局長小松様から、昨年３月の茂庭摺上川ダム周辺地域づくり協議会で作成した“茂庭の旬景”の冊子パンフレットについて話をしてほしいと依頼がありましたが、人前でお話をするのはとても苦手な方なのでお断りをしておりました。しかし、その後再度、鈴木義明様より是非やってくれないかとのお話があり、再三お断りしたのですが、彼の強硬な押しに断り切れずに今回このようなことになりました。皆様が満足できるお話ができるか、大変心配でございますが、皆様宜しくお願い致します。茂庭の歴史の中で、細かいところがあり、大変分かり難い話と思いますが、これが茂庭の歴史のはじまりと思いお聞きいただければと思います。

茂庭の摺上川の畔には約３千年前に人が住んでいたと言われておりますが、平成９年から行われた摺上川ダム建設に伴い、水没地内の遺跡発掘調査の結果、それを遥かに超える４千年から８千年前の縄文時代から人が生活していた証となる貴重な資料が数多く出土され、茂庭の歴史は更に深まったところです。

当時は原始の如く茂庭は草木の茂る山深き地であったろうに、どのような生活をしていたのか想像を絶するものがあります。

さて、茂庭に伝承されている物語を辿ってみましょう。

建久３年（西暦１１９２年）今から８２４年前、信夫、伊達、余目周辺一八の村々を荒らしていた茂庭の 菅沼（すげぬま）に住む 妖怪大蛇 がおり、身の丈は２０尋（≒３０m）余り、 二つの角（つの）は枯松柏の如く、 両眼は１０寸（径≒２５cm）の丸鏡の様で、時々雷鳴のように声を荒げて、



茂庭氏歴代君名

初代、行元　性は藤原、氏は斉藤、山城国八瀬に（いまの京都）住んでいた、
二代、基良　実良の父　下野国 那須野で死亡
三代、実良　茂庭初代、陸奥の国茂庭 初代頭首、大蛇を退治し以来茂庭頭首となり後に伊達家に仕える
四代、資良
五代、資実
六代、実家
七代、実元
八代、利元
九代、良実
十代、定元
十一代、盛良
十二代、元実
十三代、良直
十四代、綱元　茂庭村赤舘に生まれ政宗より十八歳年上で政宗の全生涯にわたり仕える、仙台範留守居として政宗江戸府中の藩政を任され、秀吉の命により性を鬼庭から茂庭に改める、村名も、もとの茂庭に改める文禄元年（一五九二年）
十五代、良元松山初代　慶長八年（一六〇三年）政宗より志田松山を賜り茂庭赤舘より宮城県志田郡松山千石城に移し代々二十五代、啓元公まで仙台藩に仕える。

渡部永夫

風を起こし、雨を降らせて、人畜を食べるのを常としていたという。

３年に１度、娘を**人身御供**（ひとみごくう、生身のいけにえ） にしなければ村々を水底に沈めると、大変恐れられておりました。建久３年この年は、ちょうど茂庭村から娘を人身御供に差出す年でしたが、自分の娘を村の犠牲にしようという者は無く、村の人々は困り果てて話合いをしました。

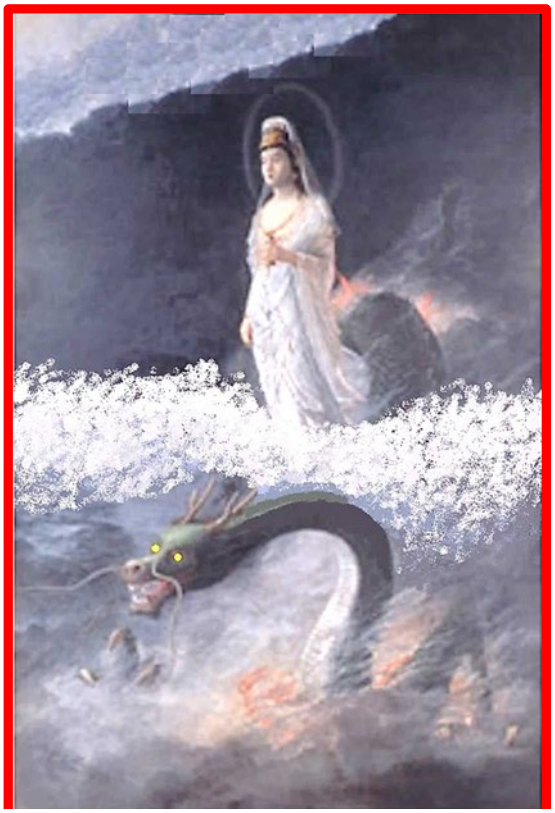
そして相談の結果、村中から金を集めて他国から娘を買ってくることになり、**労振**（なたぶり）**屋敷の文五郎**に人身御供の娘買いを頼みました。**文五郎**は村で集めた金を持って、米沢から越後と捜し求めましたが、娘を売ってくれる親は見つからず、やむを得ず会津を過ぎ関東を目指して**那須野ヶ原**（現､栃木県那須町付近）まで来ましたが日も暮れかかり、ある一軒家の農家に一夜の宿をお願いしました。

その家に入り、家の人々の立ち振る舞いを見ると、その生活は貧しくとも由緒ある人であったろうと見受けられました。出された栗のご飯に山茶を添えた夕食も終わるころ、この家の主人より、どんな用があってこの地にいらしたのか、との問いに文五郎は実はと、事の次第を話すと、主人は座を進めて私に１人の妹がいるので御所望であれば行かせましょうと奥から美しい妹を連れてきました。文五郎はあまりのことに驚きましたが、村の宿望を思い、心を鬼にして、その老父母にも事の次第を話し、親子の話も一夜にしてまとまり、１６歳の娘**『猿姫』**を買い受けることになりました。

（*この忠義のために血を分けた妹を売ったのは、当時平家の難を逃れ、下野国（しもつけのくに、現在の栃木県） 那須野ヶ原で、世を忍ぶ源氏方、性は藤原、氏は齋藤、藤原齋藤実良（ふじわらのさいとうさねよし）の家臣である今野佐七朗と今野図書親子でした。主君齋藤実良は、父亡君基良が那須野の地で亡くなりましたが、その身は山城国（京都）で宮中に勤めた武士であったので、それ相応の格式ある葬礼をと、常に嘆かれていたのを見るにつけ、１周忌の法要にはそれ相応の供養をしてあげたい、その費用に我が妹を売ることを決心したのでしたが、父今野佐七朗は労振の文五郎との約束には決心したものの、一人娘を陸奥の国大蛇の生贄に売ることに覚悟を決めかねておりましたが、『猿姫』は雄々しくも進み出て、**『**たとえ命あっても、もし**妾**や**情婦**となれば、この世の恥であり、たとえ毒蛇の口に入っても、この死をもって主君の恩に報い、多くの人達が安心するのであれば、死ぬこともまた潔しと致します**』**と申し出たので、***武士道を守る娘の義烈***に両親も気をとり直し、文五郎との約束を決めたわけでありました。）

主君のために身を売った『猿姫』は、親子の別れに臨みました。その時、母は肌の守りの**観音様**を取り出し、我が家に伝わる霊像だから、必ず御身を護る御佛となろう、肌身離してはいけないと数々の教えを授けて、親子は見送り、別れを告げ『猿姫』は文五郎と陸奥の国、茂庭へ向けて旅立ちました。

兄の今野図書は妹を売った金を亡君の１周忌、佛事の供養に供えてくださいと主君斎藤実良君へ差出しましたが、主君より貧しい暮らしなのに多くの金を得た不審さを尋ねられ、今野図書も隠す事ができず、事の次第を申し上げました。それを聞いた実良は**『*それはけしからん*』**と云い、たとえ主君のためといえども血を分けた、たった１人の妹を人買いに売り渡したことに、たいそう悲しみ、**『大蛇は神ではなく妖怪の類であろう』**と、一刻も早く退治をして『猿姫』を助け、村人を安心させようと旅立ちました。今野**図書**、鈴木**帝刀**、畑中**帰部**の**勇士３人**を供に『猿姫』の後を追い、陸奥の国、茂庭村労振屋敷**文五郎**の家にたどり着き、大蛇を退治して村人の嘆きを救い、人見御供の姫を助けることを申し出ました。



菅沼の妖怪大蛇は、霧の中から ありありと現れ 『猿姫』が法華経を読経し始めると妖怪が 一瞬動きが静まり、その瞬間実良公の矢が放され……

昔、妖怪大蛇が住んで居た云われる**菅沼**の跡地の現状

時は建久３年（１１９２年）６月１３日、齋藤実良は「*神事に人畜を用いて、まして生きる娘の身を御供えとする神がいるはずがない*」との言葉に、**村長**大枝屋敷の**参河**、労振屋敷文五郎ほか村人が話し合いをし、さらに

今から824年前、斉藤実良公が神のお加護をと･･･妖怪退治の祈願をしたと言われる中茂庭天香森にある白鳥神社

伊達、信夫の村々に相談しましたが、もし大蛇を打ち損じた場合、今以上にその怒りは更に大きな災いとなって我々を苦しめるであろうと反対を訴える者が多く、一概にまとまりませんでした。　齋藤実良はじっと事の一致を待ちましたが、時も経ち秋風の吹く頃になり、この上は神のお加護を受けるほかにないと、梨平、稲沢の**『稲荷神社』**と中茂庭天香森の日本武の尊を祀る**『白鳥神社』**に大蛇退治の祈願をしました。　その声が神に通じたのか、『稲荷神社』の神前に１匹の白狐が現れ、**２筋の白羽の矢**を実良に授けるように置いて立ち去りました。喜んだ実良はこれぞ神のご加護に間違いないと村民に伝えたところ、それを聞いた伊達、信夫の村々でも、神のご加護があるのではと、大蛇退治の評議がたちどころに一致したと言われております。

初代斉藤実良　二代資良の墓所

さて、いよいよ大蛇退治の準備も整え、建久３年９月１９日に齋藤実良を長とする一行は、労振の文五郎の道案内で大蛇の住む**菅沼**へ来ました。その実良の出で立ちは鉄の鎖を着込み、烏帽子鉢巻、小手脛当てと、みな鉄の筋入りで、４尺５寸（≒1.4ｍ）の太刀を差し、腕に覚えのある七人張りの強弓に稲荷神社より賜った**白羽の矢**を硬くにぎり、供の家臣今野、鈴木、畑中の面々も鉄の鎖を着込み、身を固め、後ろに従う村人も思い思いに斧等を持って実良に従いました。村長の大枝の参河をはじめ、大勢が人見御供になる**『猿姫』**を入れた棺を真先に**大櫓山、白岩の頂上**の祭り祭壇に供えると、**「人身御供、ただ今捧げ奉る」**と大声で唱え、村人達は木立の中に身を隠し、実良は御供えの『猿姫』より３股（≒２ｍ）ほど離れた陰に陣取り、妖怪を討たんと待ち受けました。すると鏡のように静まっていた水面が波立ったかと思うと、晴天の空はたちまちかき曇り、暗雲が乱れて雨が降り、風も吹いて立ち上がる霧に天空は雷鳴が響き、菅沼は荒波が高く巻き上がったと見ると、天に響く雷鳴と共に**菅沼の妖怪大蛇**が現れ、眼光はまさしく旭日の如く、炎を吐いて、その毒舌が今にも『猿姫』の棺に触れると思いましたが、その時に『猿姫』の護身袋に入れてあった観音菩薩の尊像から金色の光が辺りを照らし、何処からか白鳥が空高く飛び回り、不思議にも今まで菅沼を閉ざしていた暗雲が途切れ、猛烈とした大蛇の姿がありありと現れました。この時、『猿姫』は護り袋より法華経を取り出し**読経**を始めたところ、大蛇が一瞬経文を聞き入れたかに見えた時、実良は強弓七人張りの弓に神の御加護の白羽の矢を次げ、弓を満月に引き絞ってねらい定め矢を放ちました。　実良は古今の弓の達人、御矢は神よりの賜りもの、見事大蛇の舌の根深く射られ**大蛇七転八倒**し、菅沼深く沈んでいきました。烈風は草木を吹き倒し、暴風は砂石を押し流し、山も崩れそうでした。　やがて風雨が治まり、天も明るくなったので、邪神はすでに射止められ、姫を見よと言う実良の言葉に家臣の勇士３人と村の若者達が『猿姫』の傍に駆け寄ってみると姫は泰然として観音経を唱え、襟をもそろえた白装束に身を固め、その気高さはいかにも神々しいばかりでありました。こうして村人の災いを救い、今野図書は妹『猿姫』を救い、退治した大蛇は再び世に生き返らないよう、そして、例え妖怪の類であれ、遠い昔から神として崇られてきたのだから野ざらしにして鳥獣の餌食にすべきではないと、**蛇体を**３っに切り離し、**首は**田畑の**後山**へ、**尾は**梨平の上の**森**へ、**胴**は名号の**裏山**へ埋葬し、しるしの**祠**（ほこら）を建て、共に**『御嶽**（みたけ）**神社』**と尊称し、後の世まで信仰を集めました。**梨平、名号**の**『御嶽神社』**はダムの湖底となるため、同部落内の場にそれぞれ移転安置され、現在も移転された部

名号にある御嶽神社、退治した大蛇の胴を埋めた言われる神社

茂庭公 墓所　三代から十代迄の墓

田畑、後山にある御嶽神社、**斉藤実良公**が退治した**大蛇**を三断にし切首を埋めたと言われる伝説の神社、

ダム上空から下流にある中茂庭の方面を見る

落の方々によって祭られ、信仰されております。菅沼の犠牲となった『猿姫』は、主君のため、そして信夫、伊達二郡のために一身を悪魔の毒に打たれて、心の晴れることはなかったと言います。その後の姫は**尼が堂**にこもり、２年の月日が流れて建久５年１８歳にして帰らぬ人となりました。姫の秘蔵の護り尊像より金色の光が対岸の広瀬山に虹のようにかかった場所を清浄の地と選び、『猿姫』を埋葬して、近くにお堂を建て、護身の霊像観音菩薩を安置し、『慈眼視衆生広瀬観音菩薩』と尊称し、信達二郡の恩人の御佛と信仰され、『信達三十三観音十一番札所』となっております。藤原齋藤実良はその後、茂庭の地で人身御供の大蛇を退治し村民を災いから救った事が**伊達朝宗公**の耳に入り、実良君は拝謁の栄を得て、伊達家に召抱えるとの言葉がありましたが、元は宮中に仕える身であるので、都の月を見るまでは二君に仕える意志のないことを申上げ辞退いたしましたので、朝宗公は大変感銘を受け、それならば客人として茂庭の地を采地（領地の一つ呼び方）とし、永く当地に遊ばれよ（仕事から離れ心休まれよ）との御言葉がありました。　茂庭の村中は**実良**を神のように尊敬し、茂庭の主君となられるよう強く願い出たことで実良公は深く感激し、住居を茂庭に移す決心をされ、大枝に館を(赤舘と称する)築き、氏を齋藤から鬼庭と改め、この時に村名も茂庭村から鬼庭村に改めて末永く栄ました。**鬼庭**氏は後に伊達氏に仕え、**伊達家の重臣**となり、１２代綱元公まで３６０年間茂庭の地頭として住み、伊達藤五郎、片倉小十郎らと共に伊達家参謀となり、領地１万３千石領として仕えました。その名は伊達家**仙台藩筆頭家老茂庭周坊綱元**とあります。

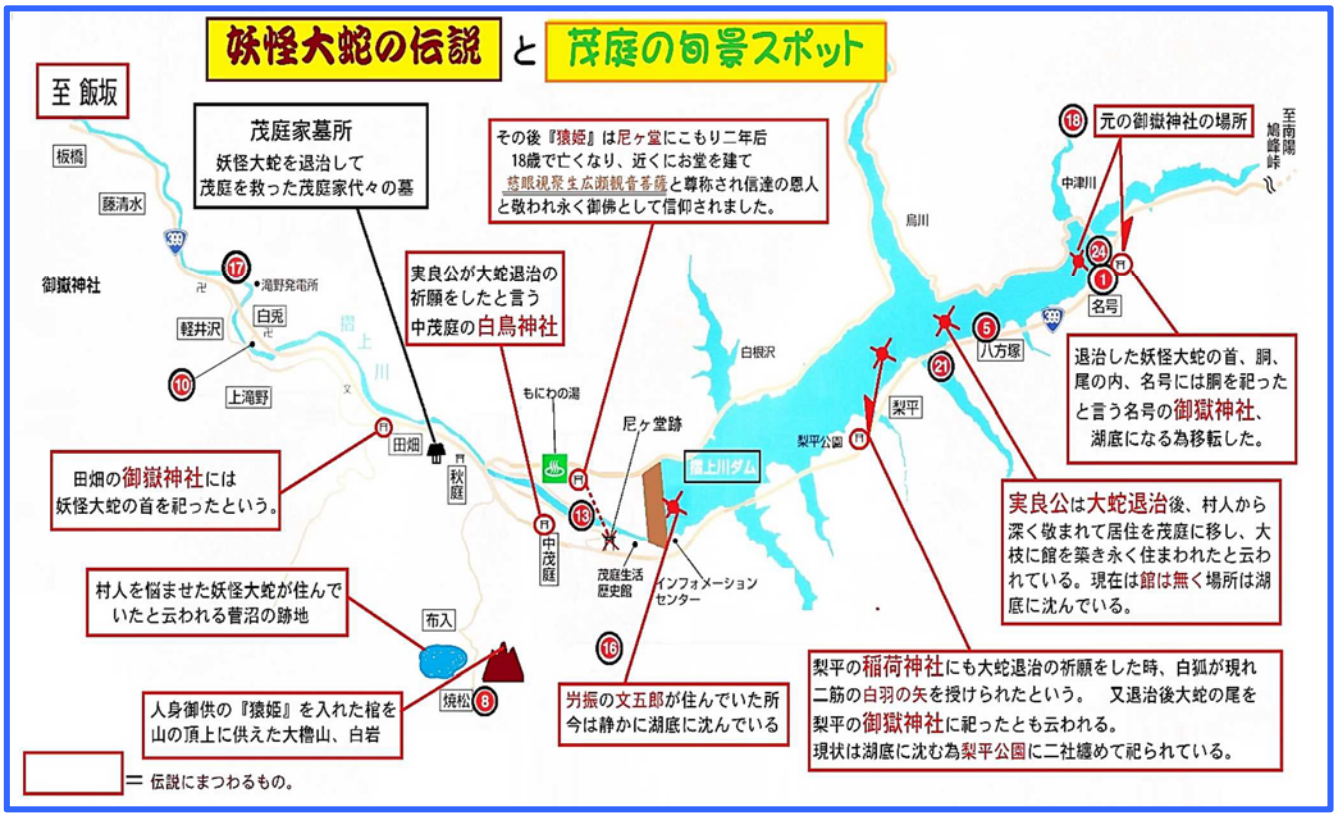
ダム下流にある中茂庭の現在の集落

天下は豊臣の世となり、文禄元年秀吉の朝鮮出兵に政宗の軍が加わり、肥前名護屋（佐賀県鎮西町）の留守居を務め、その間、**秀吉公の命により氏を鬼庭から茂庭に改め、**文禄元年（１５９２年）に村も鬼庭から再び茂庭村に改めたといわれています。

【 *１３代茂庭良元公は慶長８年（１６０３年）、伊達政宗より志田松山を賜り、茂庭の大枝の赤館を宮城県志田郡松山（現大崎市松山町千石）千石城に移し、２５代敬元公まで**代々伊達家仙台藩の重臣**として仕えました。これが建久３年より**８２４年**にわたる* **“茂庭の歴史”** *であります。*
*現在茂庭氏の子孫、茂庭初代実良公より数え２８代**当主茂庭元昭**氏は、現在も宮城県松山町に在住されております* 】

【 茂庭の旬景 】

摺上川ダムが昭和４６年６月、福島県が国に摺上川の総合開発調査の要望をしてから、３４年の歳月を費やして、**平成１７年９月　１市１１町**の県北地方の水がめとして完成し、１０年が経って今日に至ります。先に話しました齋藤実良公が茂庭に到着したのが６月１３日、そして大蛇退治の日が９月１９日と太古の昔から茂庭の歴史を変えたのが６月と９月にあり、これはほんの偶然なのか、茂庭の定めであったのか、たしかではありませんが、**茂庭不思議**のひとつでしょうか。この摺上川ダム建設については、先に述べたように昭和４６年６月に福島県が国に対し摺上川総合開発を要望したことにより、翌年４７年よりボーリング調査が実施され、この時に地域住民は先祖伝来の故郷をダムの湖底に沈めることに反対者が数多く、国や福島県、福島市との幾度もの重なる交渉の末、地域住民はこの事業の趣旨を理解し、茂庭地域水没移転者と残存者２組分にて、福島市及び県北地方１市１１町の水がめとして摺上川ダム建設に理解し調印の運びとなりました。昭和６１年国の基本計画が告示され総事業費１１００億円で建設に着手しましたが、平成１０年２月基本計画変更告示がなされ、総事業費**１９５５億円に変更**され、当初貯水量８８００万トンから、貯水量、１億５３００万トンの大幅に嵩上げされ、巨額の費



用と歳月を費やし、１市１１町の多くの方々の生命を育む巨大ダムが完成した訳です。ダムが出来る前の茂庭地域の状況は周辺が山に囲まれ、８つの町内から成り立つ、全体の戸数４３０世帯、人口１６４０人ほどで形成され、共に融和を諮り、親睦を深めておりましたが、現在は巨大なダムの下流に残った**４つの町内**となり、年ごとに少子高齢化と若い方の地域離れにより、人口が減少しつつありますが、ダムの下流は昔ながらの面影を残しております。そのような集落にもダムが完成してからは、平成１１年にオープンした**もにわの湯**をはじめとして、蕎麦や地元の山菜、農産物を販売している**ふるさと館**、**摺上川ダムインフォメーションセンター**などに多くの観光客の方々が訪れるようになりましたが、先の東日本大震災、東京電力福島原発事故の風評被害により観光客の落込みがありました。しかし、茂庭地区は原発事故の放射線量が低いため徐々に戻りつつあります。また、地区に於いては大和武尊を祀った白鳥神社祭礼をはじめ、ダム湖水祭り、そばまつり、飯坂茂庭っ湖マラソン大会などのイベントが地域の活性化の一環として開催されることは大変喜ばしいところであります。

また、**茂庭**には**大蛇退治**にまつわる**地名**や**史跡**、**名所**が多く今に伝わっており、ダムの周辺には太古から続く摺上川の流れによって作り出された景勝地や、茂庭にはその他にも四季折々の自然豊かな景観に恵まれ、春は冬の銀世界から解放され花燗漫となり、山々の自然の息吹を感じ、新緑を迎え初夏を迎えて日ごとに緑が増して、そのような風景は人々に安らかささえ与えます。そして、秋は１０月末頃より紅葉の季節となり、摺上川の渓谷と一致し、その展望はまさに茂庭ならではの美しさであり、このような風景がダム湖面に映えその景観はまさに絶景そのものであります。

茂 庭 の 旬 景

〔番号はダム地図の撮影場所〕

①

⑤

このような茂庭の**史跡**名所、**自然の風景**や環境をできる限り壊さないよう守り続け、そして、その地域の自然を未来永劫にわたり後世に残すのが私達の役目なのだと思うところであります。

今回、改めて地域を見つめ直すことができました。今後も茂庭地域を大切にしながら、地域の活性化と風景や環境の維持に努めて参りたいと思っております。　最後に皆様の益々のご繁栄と飯坂ロータリークラブ様のさらなる発展を願いまして、私のお話は閉じさせていただきます。

ありがとうございました。　　◆閉　会　点　鐘　　会　長

〔 写真その他はゲストスピカーの茂庭連合会 会長の渡部様より提供 〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第14回 ～

『 飯坂 街道 と 坂の町　飯 坂 の　謎 』

◆ゲストスピーカーの紹介　　広報､会報委員会 副委員長　　篠木 勝司　会員

飯坂の歴史を辿るシリーズ も**第14回** となりますが、飯坂を歩いてみて歴史を拾うというか、関心を持つというか、このことは後世に記録として残すべきだ、と思うものが色々あります。

皆さんは日々のお仕事がお忙しいでしょうから、通り過ぎたり眺めたり、そんな暇は無く過ごしていらっしゃると思いますが、私のような８０才を過ぎた年齢になると、飯坂に住んで歩く所、見る所が歴史観を感じたり、他の町と一寸と違うなと見えてくるのです。そんなひとつとして、住んでいる人はあまり感じないのですが、他から自転車でくると**飯坂はどうして坂が多い**のだろうと不思議に思っている方が多いと思います。実際に他の町と比べると飯坂は坂が多いのです。

今回は、元道路公団に勤務され、地理学的な職業に携わっていた安斎鉄夫さんに、その辺の背景を含めまして、子供達にも地理学上分かり易い解説で、***坂の謎解き*** のお話をしていただきたいと思います。 宜しくお願い致します。また、飯坂にはこのような地質学的な切り口での内容の歴史書は無いので、大変貴重な書になるのではないかと思っております。

◆ ゲストスピーチ　　飯坂史跡保存会理事　　安斎 鉄夫　様

坂の町飯坂を説く安斎鉄夫さん

皆さん、こんにちは。このような席にまたお招きいただきまして、大変光栄に存じております。また、史跡保存会には日頃からご支援いただき、昨年の１１月に行われました十綱橋１００年の記念行事には、皆様方から多大なるご支援をいただきまして、誠にありがとうございました。改めて御礼申し上げます。その記念行事に先立ち、昨年１月１５日に例会スピーチの機会を与えていただき、十綱橋の歴史を語るということでお話をいたしましたが、その内容は記念事業の資料という形で実ったといいますか、いわばそのきっかけを、この例会で与えていただいたという意味になるかと思います。大変ありがたいことです。

立綱坂は佐藤Ｂ作さん刻名、　花水坂は王貞治さん刻名など、その他有名人が坂の石柱に刻名有り。又坂を回って拓本取りも出来る様になっている。

この記念事業にあたっては、改めて**十綱橋の意義**が再認識されました。十綱橋はいわば飯坂のシンボルであるわけですが、それを何とか**保存・保護**していこうという動きが芽生えております。ただ、文化財という位置付けではありますが、博物館入りということではなく、実際に使いながら保存していくことを目指しております。先日、ご紹介があった**なかむらや旅館**と同様に国の登録有形文化財という位置付けを目指して動きつつありますのでご報告させていただきます。今日は、もうひとつの**飯坂のシンボル**である**坂道**について、飯坂は坂の町というお話をさせていただきたいと思います。

飯坂温泉のシンボルの坂　“飯坂と云う名の坂”は飯坂の人々、あまり知る人が少ない。旧NTT前から鮎川町へ下がる道、旧飯坂街道である。　信夫山のシルエットがかすかに見える

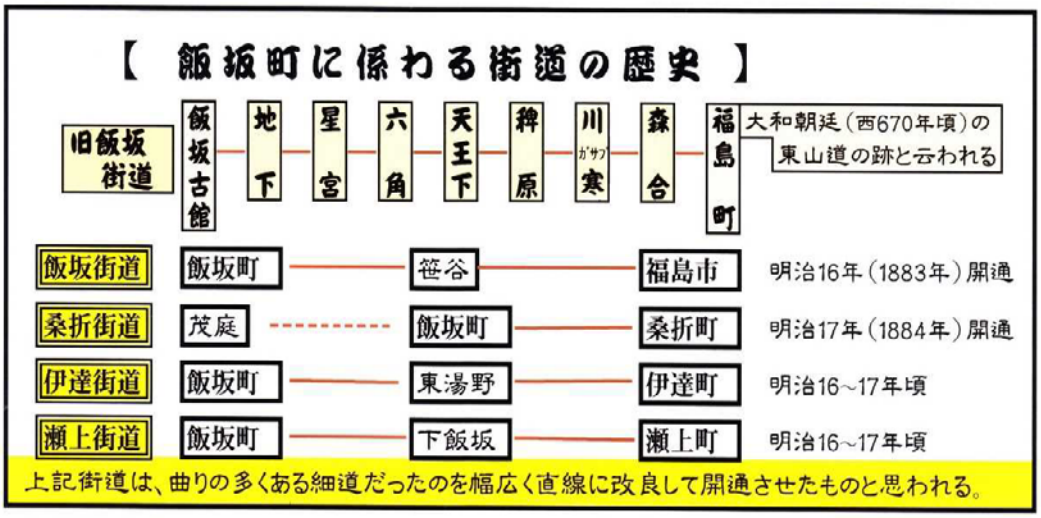
飯坂にとって坂というのは大事な観光資源です。生活の上では坂のために本当に大変な思いをすることもあるわけですが、お客様にとって飯坂のひとつの情緒としての役割をこの坂道が果たしているのではないかと思います。３０年ほど前、正確には昭和５９年（１９８４年）に、

坂道を活用した観光事業「ぶらーりんぐ飯坂」という企画が行われました。主体となりましたのは**商工会青年部**（第6代目 相良育男青年部長時代）**＆旅館組合青年部**（阿部部長）であったようです。その事業の主な内容は、色々な坂４８ヶ所を列挙し、その坂に坂の名前を刻んだ石柱を立てるというものでした。

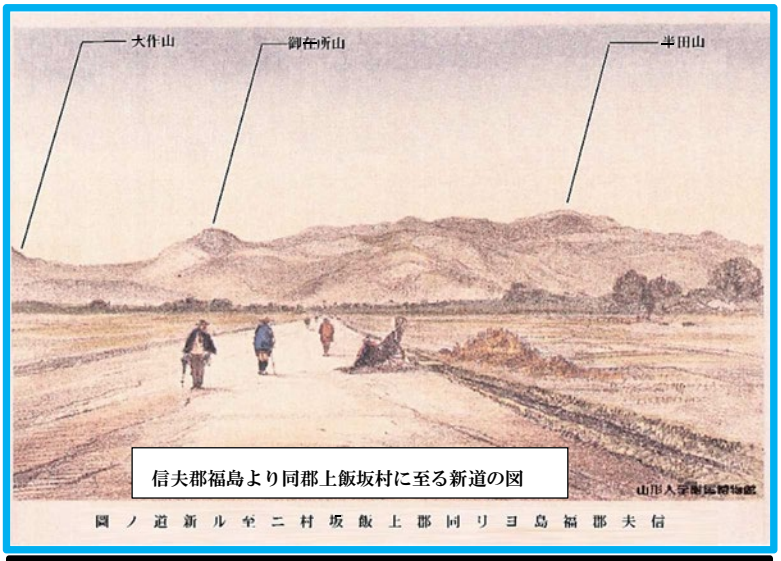
その中に、特に日本の著名人に文字を書いてもらったものがいくつかあります。野球選手の方が多かったのですが、例えば**巨人軍の王貞治さん**には「花水坂」の文字を書いていただきました。それから、ヤクルトスワローズの監督をされた**若松勉さん**は「古館の坂」に文字があります。また、中日ドラゴンズ**谷沢健一さん**は湯野の「橋本坂」。その他、「立綱坂」には**佐藤Ｂ作さん**が文字を書いてくださいました。もうひとつ、「権現坂」は**島倉千代子さん**が書いていらっしゃいますが、実はその石柱は車がぶつかって壊れて無くなってしまいました。そんなこともありましたが、外部から町を見学に来たお客様に、このような坂を紹介しますと非常に喜んでいただけます。こういう坂の中に１つ「**飯坂**」という**坂**（旧飯坂街道の名残りの坂道）があります。これは、どこかと云うと横町から曲がって立町へ進み（横町と立町はかって飯坂の主要な豪商が並んでいた町で繭や生糸の取引では隆盛を極めた所である）旧 NTT 前より南に下る坂で、元の農協があった場所の西側から、いわゆる**地下**（ぢした）という地区、電車の踏切に下りる南方向の坂（飯坂と云う名の坂”）です。また反対に北側を見ると古館の方にも続いており、地下から古館の上までだと高度差で２０m以上という非常に長い坂です。これは実は**古い飯坂街道**であったと言われております。昔の飯坂街道は飯坂古館から星宮を通って、六角、天王下、稗原、川寒（がさぶ）、森合、信夫山と一盃森の間を抜けて福島の方に抜ける一直線にほぼ南北の方向を通っている道です。昭和４０年代頃までは、はっきり道の跡が残っておりましたが、イオンのある辺りは区画整理が行われまして、一部跡が全く消え去っています。これは、古く辿ると**大和朝廷**の頃の**東山道**〔*650年頃、奈良、京都から東北地方まで続いた主要道路の1つ、内陸部を経由し、現在の米原、中津川、松本、軽井沢、栃木、白河、福島、宮城県に入って秋田及び岩手県までの道路*〕の跡であるという説があるほど古くからの道です。ちょうど**古舘**には伊達氏の一族であった飯坂氏が

“飯坂と云う名の坂”を昇って来て道路を横断して、旧 NTT の西側階段を北に進むと古舘にたどり着く。ここの階段坂は旧飯坂街道である。（古舘は明治時代の学校跡、それ以前は常泉寺が寺小屋学校だったと云われている） この旧飯坂街道は新飯坂街道が明治初期に開通するまで、長い間福島から飯坂までの重要な街道であった。

飯坂温泉の道路の玄関口にある代表的なシンボルの坂 『 花水坂 』



飯坂新道（現飯坂街道）開通時のスケッチ図



上図は明治 16 年の開通間もない飯坂新道の貴重なスケッチ図　当時、飯坂町は上飯坂村と云われていた。　道路の幅も広く、両側は家もなく田畑だけ、そんな中を洋装の人 、みの傘着物らしき人々が福島、飯坂を歩いていたのであろう・・・・。途中で休んでいる人力車の人夫の姿も見える。
（当時の人力車福島～飯坂間 39 銭、現 2,800 円相当）

場所はどの辺か？　下図の写真は桜水駅北の付近で山の稜線と道路の方向から推測すると、この辺の場所と思われ 133 年間の隔たりが如実に、この写真から読みとる事が出来る。

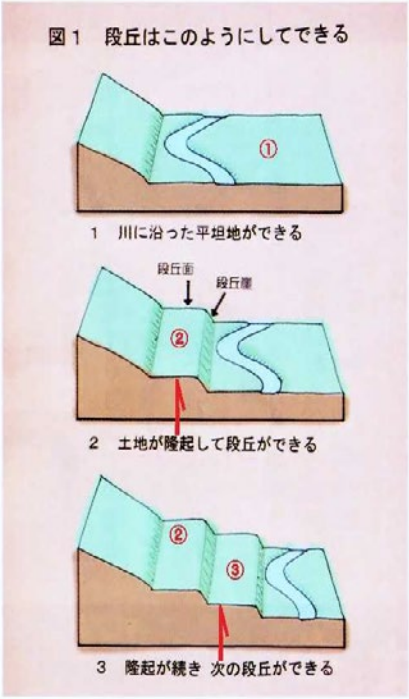
１４世紀の初めから約３００年にわたって、**湯山城**という**館**を構えて住んでいました。この飯坂氏と名乗った一族も、この飯坂の坂の名前から自分の名前を名乗ったのではないかと私は考えております。そういった**由緒ある坂道が、実は明治の初めまで福島と飯坂を結**ぶ唯一の街道で使われておりました。それが明治１６年に、今の飯坂街道、我々が小さい時は飯坂新道と言っていましたが、その道路が出来まして、交通はこの飯坂街道に移りました。そこに花水坂や仏坂が新しく出来ました。この道路はちょうど有名な**“鬼県令”**と言われた**三島通庸**が県令をやっている時でした。ちなみに、三島県令が福島県令をやっていたのが明治１５年１月から１７年の１１月まで３年足らずだったようですが、この時にこの**飯坂街道**、それからこの周辺では**桑折街道**、**伊達街道**（別名中村街道）、**瀬上街道**といった道路、ほぼ一直線に結んだ新しい道路が出来ました。三島県令は別名土木県令とも呼ばれていたようで、県内あちこちに道路をつくっています。そういう時代に出来た飯坂街道であります。その後、この街道の小川橋は長く木の橋だったようで、これが**昭和９年**に今のコンクリート製の橋に新しく出来ています。また、飯坂街道の舗装は、この辺の道路の中では非常に早くコンクリート舗装されており、これも新聞記事から見たところでは、おそらく**昭和１５年頃に舗装**されたと考えられます。それほど、やはり福島と飯坂を結ぶ道路は、非常に重要な道路として位置付けられていたのではないかと思います。この飯坂（旧飯坂街道の名残りの坂道）は、飯坂街道が出来るまで福島と飯坂を結ぶ街道であった大事な坂道であり、これは我々史跡保存会といたしましても、これからも大事にしていきたいと考えております。

この様なことで今日は主に坂についてお話をしたいと思っております。皆さんもお気付きだと思いますが、飯坂は坂を登るとその上は大体平らな土地が広がっております。例えば、東は旧消防署の古舘、そして旧支所の馬場、パルセ飯坂、八幡神社、小学校などは平らで、それに上がるための坂、**分署の坂**、**権現坂**など、各所に坂が繋がっています。またその上の段、大鳥中学校の付近も平らな所と考えると、そこにも坂がいくつか繋がっています。これらの平らな所を**段丘**（だんきゅう）といいます。我々が学校に通っていた時にも無意識に歩いて、花水坂を上がり、分署の坂、あるいは夜蚊坂を登り、坂を何段も

真新しい鉄橋を渡る飯坂西線の電車。集電装置はパンタグラフではなく、ポール式。隣の飯坂街道の小川橋は、まだ木造橋の様子（コンクリート橋は昭和 9 年施工）、館の山 と大作山の姿だけは今も変わらない（飯坂街道のコンクリート舗装は昭和 15 年頃施工）

登って学校に通いました。中学校になると**３つの段丘**に上がる坂を登らないと学校に行けず、小さい時から知らず知らずのうちに足腰を鍛えられたと思います。なぜ**坂が多いのか**。結論からいうと飯坂は段丘が重なって出来ているためです。あまり聞いたことが無い言葉かと思いますが、**段丘**というのは上の平坦な段丘面、それから縁になっている崖が**段丘崖**と呼ばれています。**段丘は一般的にどういう過程で出来るか**についてお話しましょう。まず川に削られた砂利や土砂が緩やかな所に堆積します。そのことによって川沿いに平坦な土地①が出来るのです。次にこの土地が隆起すると川が移動し川の強い浸食力によって谷が刻まれ、やがて崖が川に沿って出来、また新しい隆起した平地②が出来ます。残った平坦地は台地（段丘面）となって崖（段丘崖）の上に位置します。さらに何十万年後に隆起が続くと、新しくできた平地も川に削られて次の段丘が出来ます③。このようにして出来た複数の段丘は当然、高い位置にあるものほど古いということが分かります。

飯坂の段丘についても、地質学者の調査結果によると飯坂の地盤は日本列島が形作られる時に、浅い海や湖水に堆積した地層で出来ていますが、**３００万年前頃からは陸地**となって浸食が始まったとされています。さらに２０万年前頃から福島盆地を作る地殻運動、つまり山地が隆起し低地が沈降するという動きが始まりました。このとき盆地の縁の**山地と低地の境に立地する飯坂**は、山地部の地盤が削られ、その土砂が低地に運ばれて堆積することによって全体が平坦化しました。盆地を形成する造盆地運動が始まりその後も続きます。飯坂周辺では北部の山沿いほど隆起が大きかったようです。



ここを流れていた**川**（摺上川や赤川の前身）は流路を変えながら岩を削って山麓に平坦な土地をつくるとともに、川は深い谷を刻むこととなりました。川の浸食が及ばない部分は削り残されて段丘の面となります。次にまた川に近い部分に新しくできた平地面は、何万年かかってまた隆起することで次の段丘になるのです。このような過程が繰り返されることで**飯坂には何段もの段丘が**出来上がりました。

まず、**田中段丘**、**梅津段丘**がつくられ、これが高い位置に移った後に、広い**飯坂段丘**が出来ました。この飯坂段丘は上位面と下位面とに分けられて形成されています。最後に低い位置の**八景段丘**がつくられて現在の状況（上図参照）の段丘の縁を取る**段丘崖を横切って**いるのが**飯坂の数多くの坂道**なのです。数多くの坂道の長さや勾配は、段丘崖の高さや険しさによって異なっており、さらに、このような段丘崖の坂のほか、飯坂段丘の下位面には**湯沢**

夜蚊坂付近で飯坂段丘上位面を調べ確認する安斎鉄夫さん

の谷があり、この谷を埋め立てて道路が通されたため、湯沢に沿って多くの坂道が出来たのであります。

２０万年前ほど前から福島盆地をつくる動きが始まったと申しましたが もう少し詳しくお話をしてみます。

実は福島盆地の西側には断層が走っておりますが、断層という言葉はよく間違って使われることがあります。この吉川屋さんの窓からは摺上川沿いの崖に地層の断面つまり積み重なっている地層の様子が見えますが、これを断層と呼ぶ人が稀にいます。こちらは正確に言えば地層の断面であって断層ではありません。断層というのは地表を作っている地層の集まりが地球規模の大きな力で両側から押されたり引っ張られたりして、上下にあるいは左右にずれたものを指しまして、そのズレは地表では線状に続いています。今回の熊本の地震も古くから知られていた断層が大きくずれたことが原因と言われております。

福島盆地の西側 にもそのような**断層**が走っておりまして、その断層は平均すると千年に１ｍあるいは３０ｃｍ位動いていると言われています。つまり２０万年経つと６０ｍから２００ｍ位地層がずれるわけで、今のような福島盆地の姿は２０万年かけて断層が動き続けたことによって出来たものと考えていただければ良いと思います。

ところで飯坂はこの断層によってつくられた盆地と山との境にあります。山は奥州山脈の一部で中野あるいは茂庭から続いている山地です。一方で南の平野方面や東湯野方面には福島盆地の平らな土地が開けています。盆地をつくる動きは今でも続いていますから山の方はどんどん高くなり平地の方は沈み続けています。飯坂はそのような次第に傾きが大きくなっていく盆地の縁の不安定な場所に位置しているわけです。

さらにもう１つは段丘をつくる大きな力を持つ**川の出口に飯坂が位置している**ということです。摺上川はかなり広い流域を持っていて山に降った沢山の水を集めて飯坂から盆地に流れ出しています。その他に赤川や小川といった支流もあり飯坂は山から平地に出てくる川の出口にあって、段丘ができる条件が最も整っている場所にあたるのです。

先ほど申した福島盆地西側の断層は２つのグループに分けられています。１つは北側にある**藤田断層**と**桑折断層**の断層群です。もう１つは南の方で大笹生の台山という山の東側に**台山断層**と呼ばれるはっきりした断層があり、さらに庭坂から荒井にかけて土湯断層へ続いています。この２つの断層群はどちらもほぼ南北に走っているのですが桑折町と大笹生との間、飯坂付近でくい違っています。つまり２つの断層は繋がっていないわけですが、ちょうどこの部分に飯坂があるのです。

ということは飯坂の北側は桑折断層の西側の山地部にあたりますので常に上昇を続けており、南側は台山断層の下の盆地側にあたるので沈み続けている部分にあたるということになります。つまり飯坂では北側が上がり南側が下がりという動きが続いているわけです。このような地盤の動きと川の働きが組み合わさった結果として、この**２０万年の間に形づくられたのが飯坂の段丘**なのです。

最初に出来たのが**田中段丘**と呼ばれている段丘の面で１３万年前頃と考えられています。舘ノ山の花ももの里の辺りにあたりますが、ここを掘ってみると段丘を作った砂利層が出てくるはずです。ただ古い段丘ですから長い間に表土が流されたりして段丘らしく見えないかもしれません。

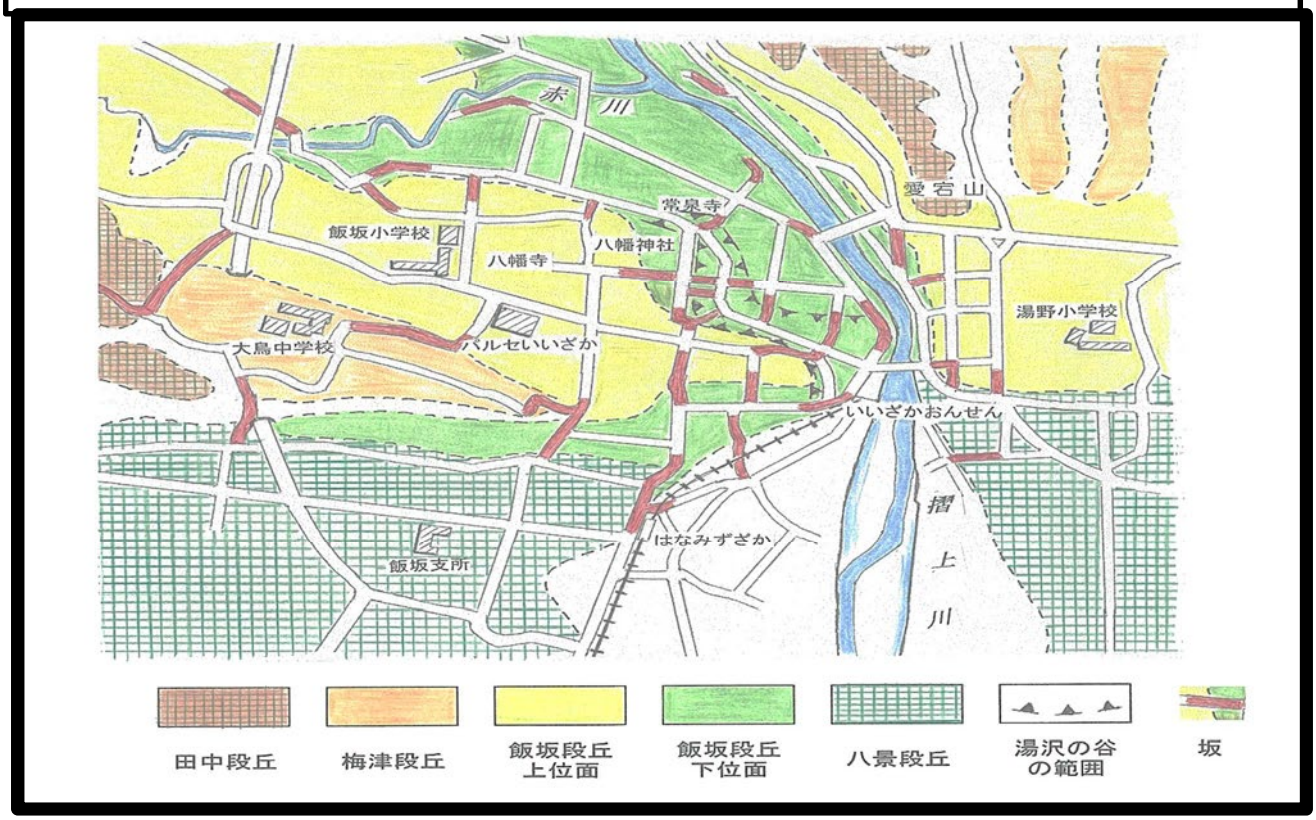
一方、湯野側では愛宕山の上、これもこの頃の段丘の面です。この辺が約１３万年前頃までに出来ております。

その後、１０万年位経過して、今から約３万年位前に大鳥中学校がある場所、及び湯野も段丘の面になり、ここは**梅津段丘**と呼ばれておりこれが２つ目です。その後２万年過ぎて、今から１万年前位に飯坂の町が乗っている**飯坂段丘**が出来ました。これはかなり広い面積を占めております。これも、実は高い方にある上位面と低い方にある下位面の２つに分かれております。さらにその後、１万年から５千年位前の間に、**八景段丘**が出来ました。これは飯坂支所や学習センターの辺り、これも川の方から見ますと１段上がっており広い段丘です。実はこの**八景段丘**の、**月崎**という町内から**縄文の中期頃の遺跡**が見つかっており、今から５千年前位にこの辺に人が住んでいたということが分かってきております。人が住むということは、当時の川の氾濫でそこまで水が行かないようになっていたということでしょう。だから、安心して住める土地が出来ていたということは、すでに５千年前には段丘が出来ていたという証拠になると思います。

A坂の多い、飯坂の 謎に迫る ？

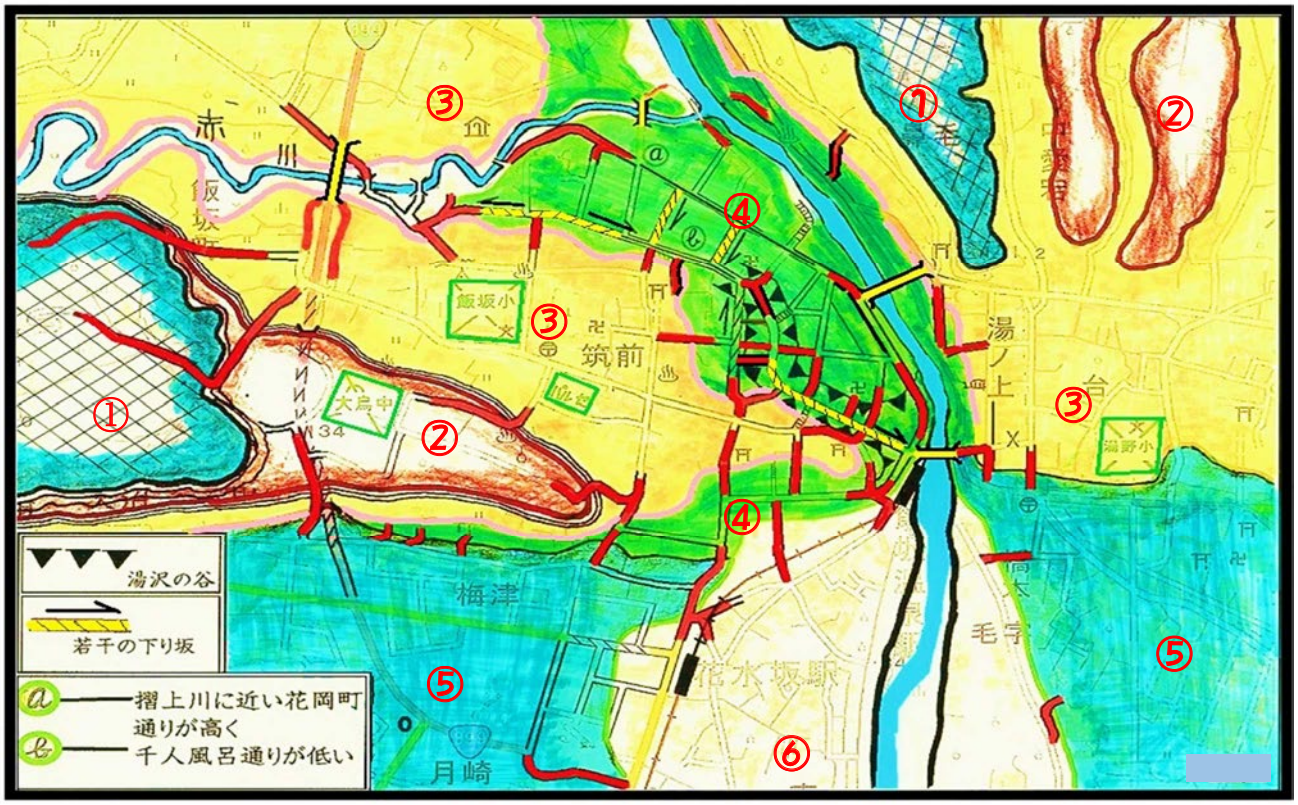
地質学的に見た飯坂の段丘区分図。階段状の崖とその上の平坦地からなる地形

〔 安斎 鉄夫 様　ゲストスピーカー　提供 〕



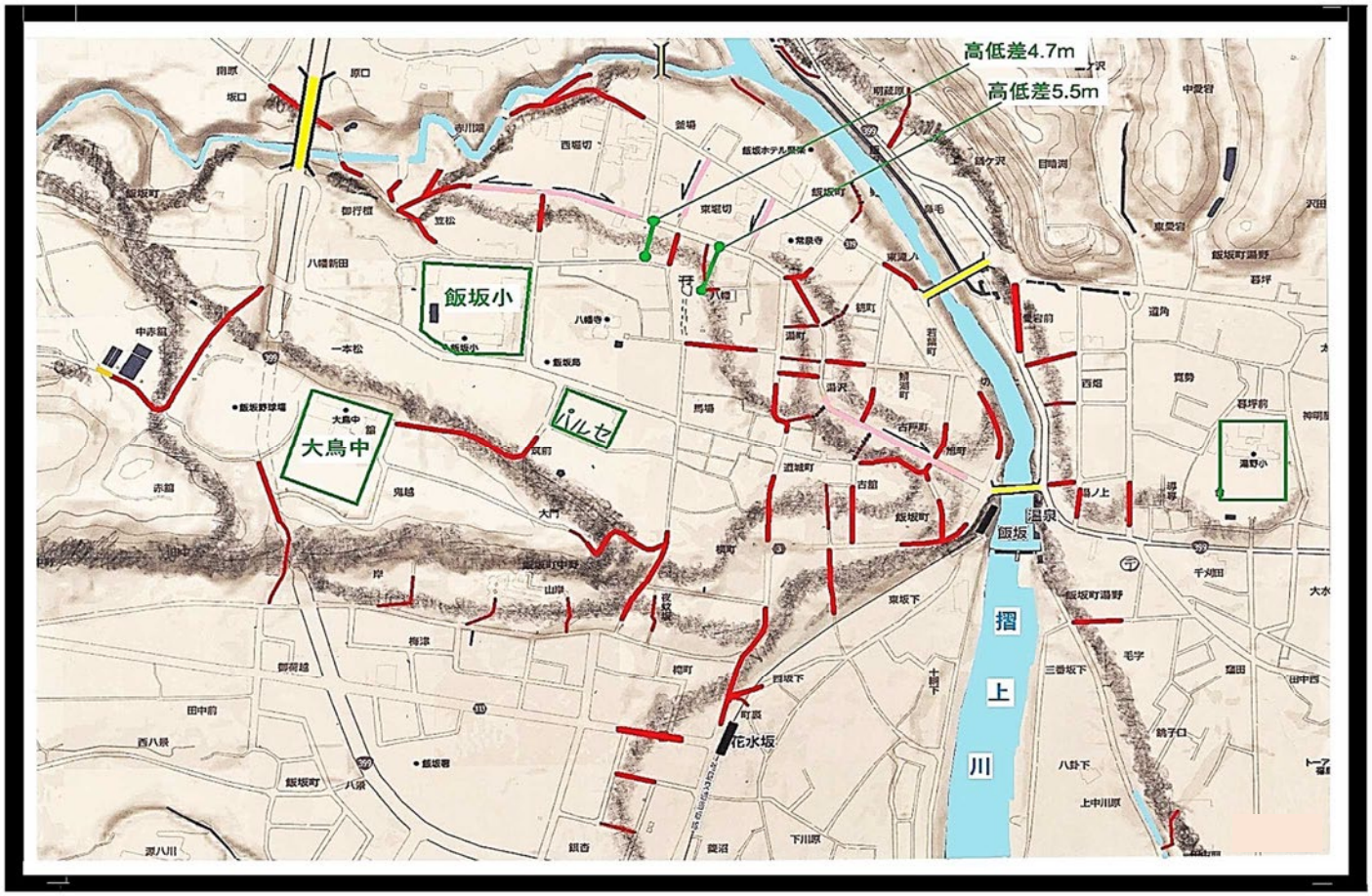
B　国土地理院地図の高低線から表した飯坂の段丘区分図。

① 一番高い所　　⑥ 一番低い所

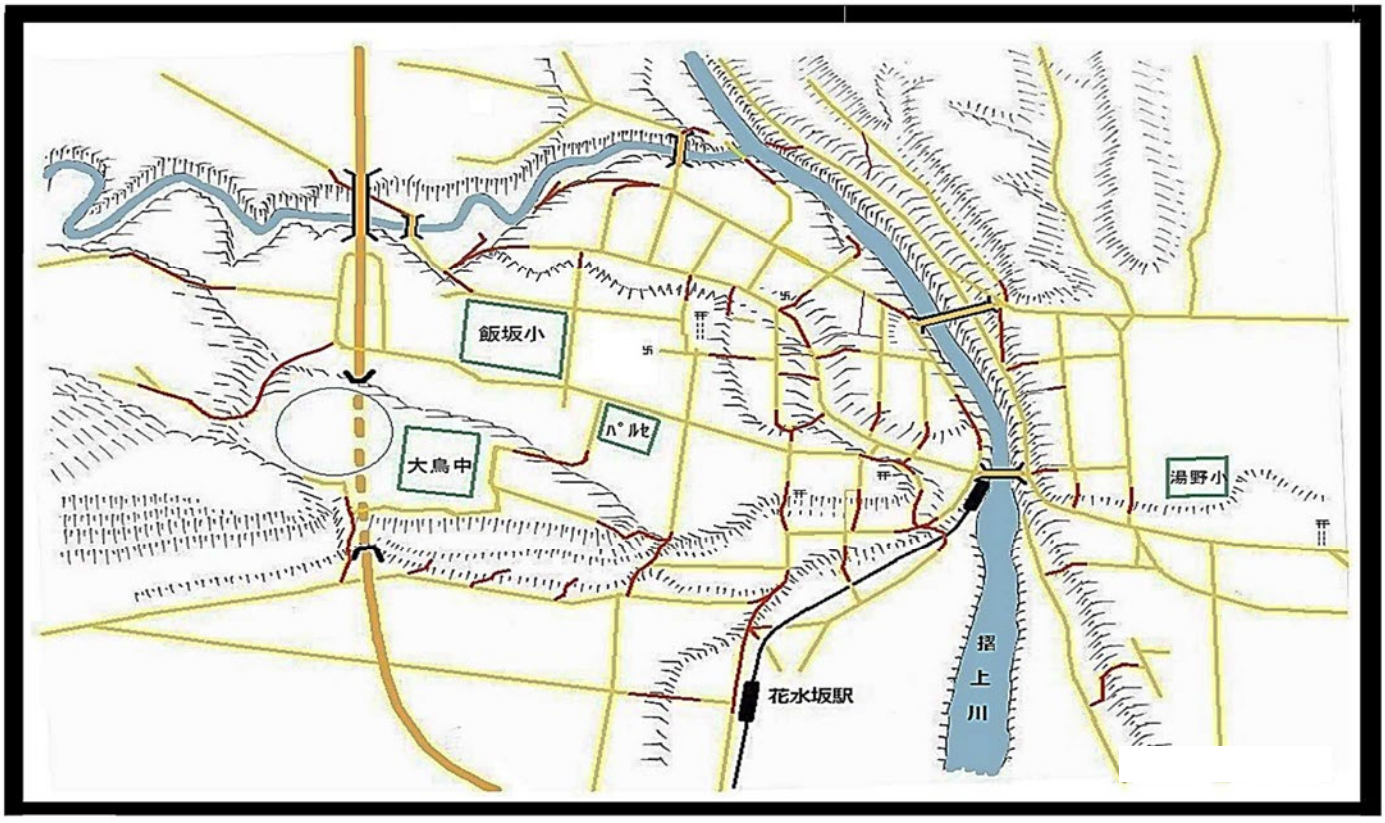


C パソコンの高低図から表した　飯坂の上空から見た図

建物を 全てとって上空から見ると、崖が有って、丘が有って、谷深き地形がわかり、そこに坂がはりついていることが分かる



D 飯坂の段丘を、分かり易く表した崖 と 平坦地 と 谷の　イラスト図



そんな段階を踏んで飯坂には、４段あるいは更に分けると**５段の段丘が出来上がった**のです。

ところで、先ほど申しましたように、飯坂の土地は北側の山寄りほど、大きく隆起する傾向があり飯坂段丘が出来た後も、そういう動きが続いてきました。飯坂段丘が出来たのは約１万年前と考えられますが、その後、北側が持ち上がりました。飯坂段丘が２つに分かれているというのは、上の段が今の飯坂小学校から八幡神社辺りを過ぎて古舘までが一連に続いている平面です。そこから１段下がって、千人風呂通りから古舘の北側の湯沢の谷を挟んで１段低くなっております。だから八幡神社の裏にも４～５ｍの崖があります。古舘と八幡神社は飯坂段丘の上位面。その下の千人風呂通り、花岡町、あるいは湯沢、その辺は飯坂段丘の下位面に分けられますが、**その下位面に問題があります**。本来であれば、この地面に降った雨は川の方に自然に流れるのが普通です。即ち、摺上川の方に流れるのが自然なのですが、北の方の花岡町の方が高くなっているので摺上川に流れません。逆に、南側の上位面の裾の千人風呂通りの方に雨が集まってきます。そうすると、八幡神社の裏から古舘の北側、湯沢の辺りにかけて水が集まって、そこを水が流れるようになってきたのではないでしょうか。そこでその場所に自然に水の流れ道が出来たというのが、**今の湯沢の谷の出来た原因ではない**かというふうに考えております。そんなことで飯坂には５つの段丘、そして湯沢という谷があります。そういう段丘の境目、あるいは谷を登り下りするのが飯坂の坂です。飯坂というのは川の氾濫も無いし住みやすく、昔から人が住んでいたと思います。ただ、住んでいる人達が移動するためには、どうしても坂道を上り下りしなければならないというところが、今に残っている飯坂の坂道とういうふうに私は考えております。

話はちょっと横道に成りますが　坂と温泉について　話してみたいと思います。

飯坂の地盤は水中に堆積してできた地層から出来ているのだが、その中に数百万年前の火山活動の痕跡が残されているという。さらにその後、盆地をつくる地盤運動に伴って**地下の岩盤に多くの割れ目**ができた。この割れ目に溜まった地下水が、過去の火山活動に由来する地下の熱で熱せられたのが飯坂の温泉の源と考えられている。

かつての**『名旅館花水館』入り口跡**、右の奥７３段の石段を下がると摺上川の川岸に続く。この石段は“**滝ノ湯ちゃんこちゃんこ**”と呼ばれていた。“**ちゃんこちゃんこ**”とは石段の意味で下駄の響きから来ているようだが飯坂特有の表現だろう。ここには岩盤からお湯が滝のように流れ落ちていた明治、大正に繁栄した滝ノ湯があったが、昭和になって湧出量が少なくなり、火事で焼けて廃絶した。

奥の細道の芭蕉が泊まった所はこの**湯小屋**との説もあるが、近年は**鯖湖湯**が有力になっているようだ。現在はポンプでお湯をくみ上げているが、名湯飯坂の名を天下に知らしめた古くからの温泉は、全て川岸の崖から湧き出していたものである。もっとも鯖湖湯は川から離れた場所にあるが、これも**湯沢の谷からの湧泉**で、かつての鯖湖湯の浴槽は道路面から階段を下がった地下にあって、お湯は崖から湧き出していたという。地面の下深くの岩盤の中に貯えられていた温泉は、川の浸食によって崖を作らないと地上に湧き出すことができなかったのである。飯坂の個性を代表する**坂と温泉**だが、これはどちらも、地層が川の働きにより削られたことによってできたという共通性をもつ。言うならばこの２つは、**悠久の大地**から生まれ、**川に育てられた兄弟**なのである。

色々とお話いたしましたが私たちは飯坂の坂道をこれからも楽しみながら、皆様と共に大事にしていかなければならないと思っております。　ご清聴ありがとうございました。

◆閉　会　点　鐘　会　長

〔 地図は国土地理院ウェブサイトより 〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第15回 ～

医王寺にまつわる『 悲劇の武将義経と佐藤継信、忠信物語 』

◆ゲストスピーカーの紹介　　飯坂ロータリークラブ広報委員　　佐藤喜市郎　会員

それでは、安達先生のご紹介をさせていただきます。先生は昭和２９年８月２４日に米沢市万世町川井小路という所でお生まれになりました。先生はお母様の影響もあり、歴史にものすごく興味を持たれました。他の歴史家もみな興味を持っておりますが、先生はそれだけではなく、歴史について本当に熱意を持ってお調べになり勉強されました。 特に**飯坂の地における佐藤一族**について、非常に詳しく勉強されております。そういったことで、飯坂ロータリークラブの『 *歴史を辿る 第15回* 』として**我が郷土の武将、佐藤 継信、忠信**について編纂したいと思います。今日は先生の素晴らしいスピーチを皆さんお聴きいただければありがたいと思っております。それでは先生にお話を頂戴いたします。宜しくお願い致します。

◆ ゲストスピーチ　　大鳥中学校　元教頭　　郷土史研究家　安達龍雄　様

ロータリーのの皆さん、こんにちは。安達龍雄です。今、お話があったとおり、私が生まれたのは米沢です。生まれて半年くらいで福島に来ました。父親が国鉄の職員だったので、転勤の関係で福島に来たのだというふうに親から言われていました。私が何故こんなに歴史にのめり込んでいったかというと、自分で思い返すといくつかの理由があります。１つは、私の父親は安達政雄といいますが、親父の弟が米沢のお寺のすぐ近くに、婿さんに入っていました。その近くにあったお寺は**常信庵**という立派なお寺でした。私は小さい時からこの常信庵で、『これが**継信、忠信**のお母さんの**ミイラ**なのだよ。』と言われて、それを見ながら育っていました。ところが、そのうちにふと、『あれ、おかしいのではないか。では、医王寺や大鳥城はどうなっているのか。』と気付きました。これが、私の歴史にのめり込んでいくようになるスタート地点でした。これらは、それぞれに歴史をもっています。例えば、飯坂については皆さんもご存知のとおりです。継信、忠信については飯坂説にも色々あります。**医王寺**があって、**大鳥城**があって、あるいは**基治**がいて、**乙和姫**がいて、信夫十八将がいて……ということです。その中には、斎川の田村神社はどうなのだということも以前にお話が出ていました。それは飯坂説の中にあります。ところが、私は米沢の継信、忠信説はどうなっているのかということから始まりました。と同時に色々調べていく中で、どうも継信、忠信の生誕説は４つあるということに気が付いたというか、そういうふうに思うようになりました。**福島説**、**飯坂説**、**米沢説**、有力な３つの説があるのですが、その他に**飯坂と米沢を繋ぐ説**も考えられます。そこに出てくるのが**常信庵**です。常信庵や八木橋館の中には色々な史跡があります。その史跡の中に三社様もあります。それは基治の弟の正信が自分の息子を米沢から、より有力な佐藤庄司基司であった信夫のお兄さんのところに養子に出したのだと、これが４つ目の説です。いずれにしても、福島も米沢も継信、忠信に深い関わりをもってきたのだなということを目の当たりにして、自分が米沢あるいは福島に愛着を持っていく、歴史にのめり込んでいく大きな理由になりました。

安達先生の斬新な歴史観の話に耳を傾ける飯坂ロータリークラブ会員

継信、忠信の功績と夢ということで大きくまとめてみました。皆さんは**藤原秀衡**をご存知ですね。この藤原政権で私は経清が好きです。経清がいて、清衡、基衡、秀衡、４代目に国衡、泰衡、忠衡、通衡、頼衡、高衡と出てきますが、私はこの経清が大好きです。この人はなかなかの人物だったと思っています。いずれにしても、どうして継信､忠信を義経に従わせたのかということについて、結論からいうと私は『 **継信､忠信は義経の家来ではなかった** 』という説を取ります。これについては、なかなかそう言い切る人がいません。ただ私が言えるのは、継信､忠信は家来ではないということです。これは後からまた言いますが、最初になぜ従わせたのかということを、**飯坂からの視点**と**平泉からの視点**でお話します。

さて、忠信をなぜ従わせたのか、飯坂からの視点で言うと、やはり継信､忠信は飯坂を代表する武将ですから、その武将を義経につけてあげる、ということは飯坂を守ることになります。つまり信夫の佐藤庄司を守ることになります。また、誇りです。これが飯坂からの視点です。では、平泉からの視点ではどうなのか。その時の最高

飯坂町商工会青年部の諸君たちの医王寺にまつわる佐藤継信忠信の仮装行列の出で立ち姿　【 飯坂町商工会提供 】

権力者は秀衡でしたが、秀衡は何故継信、忠信をつけたのか、私は色々な理由があると思います。大きくは２つ。１つは、それに見合うだけの継信、忠信が立派な人物だったから。実はその裏にもう１つ、秀衡ならではの政治的な駆け引きがあったと思っています。秀衡は大政治家でした。だから秀衡がいる時は頼朝も攻められませんでした。では秀衡は何をしたかというと、私はこう考えています。義経を迎え入れた時からどっちに転んでも、「平泉を守れる」ということを考えていたと……

義経を受け入れるということは源氏の流れです。ところが秀衡は平清盛から鎮守府将軍、後には陸奥守という官職ももらっています。それはなぜか。平家が藤原を自分たちの敵に回したくなかったからだというのが定説です。つまり、秀衡は平家に恩を売っている。一方では義経を受け入れたということで源氏の味方です。どっちに転んでも大丈夫なように布石を打っていた。これが私の説です。やはり大政治家ですね。私は秀衡とはそういう人だったと思います。ただ言えることとして、義経を旗印に持てば、平清盛にも源頼朝にも対抗できると思っていたことは間違いありません。やみくもに義経を受け入れたわけではありません。また、**金売吉次**がどうだった、こうだったというのはお話の世界です。実際に何故受け入れたのか、お話すると時間がかかるのでやめておきますが、いずれにしても政治的な駆け引きの中で受け入れました。その藤原の最も忠実で最も代表的で、しかも武将としても、人物としても、まさに義経以上の人だったのかもしれない**継信、忠信**をつけてあげるということが、**藤原と平泉を守る**ということだったと私は思っています。つまり兄弟はそれだけの素晴らしい人物だったのです。

数百年の杉の巨木の根が残っている飯坂町平野鯖野にある佐藤基治公の菩提寺医王寺、この参道の奥に佐藤継信、忠信のお墓がある。

飯坂からの視点は今言ったことと重複しますが、やはり福島、あるいは東北、陸奥平泉を代表する武将だった。あるいは平泉からすれば、やはり平泉政権を代表するような立派な武将だった。いずれにしても、そこは重なるところもあるけれど、基本的には飯坂からの視点で言うと、平泉あるいは東北奥羽というところまでは考えていなかったでしょう。始めはそうだったと思います。でも、秀衡にとってみるとそうでなかったでしょう。ここが大事なところです。**継信、忠信の最期、その死が意味**するところは何なのかというところです。皆さんは継信の最期、忠信の最期というのはご存知でしょうか。**継信の最期**は明白です。義経が木曾義仲を倶利伽羅峠で破ったあと、平家を破るために、大きな戦いでいうと始めに一の谷というのがあります。鵯落としという所です。**一の谷**、その次に**屋島**、そして最後に**壇ノ浦**と進みます。これは平家が滅びた所です。屋島の戦いの時に平家にとって当時一番の武将といわれた能登守平教経の矢に当た

“咲かずの蕾”で有名な乙和の椿の近くにある佐藤継信忠信のお墓

飯坂町平野に有る佐藤基治公菩提寺医王寺の基治公と妻乙羽御前の石碑の傍に有る椿の古木、息子二人を亡くした乙羽御前の悲しみと、そして母情が乗り移ったのか毎年つぼみのまま咲かずに落ちる。人々は、いつしか咲かずの椿『乙羽の椿』と言うようになったという。

って継信が亡くなったということが定説となっています。実際に屋島には継信のお墓もあります。一方、**忠信の最期**については大きく３つの説があります。実際にここで亡くなったという説もありますが、１つに限定するのはなかなか忠信の方は難しい。でも、私は２人の最期には全く違う意味合いがあると思っています。継信は、義経の腕の中で亡くなっていきます。そして、義経がこれからどこまで成長していくかわからないという、義経の絶頂期の中で継信は最期を迎えます。しかし、忠信は違います。忠信は義経が頼朝と不和になって追われる中で亡くなっていく。**これが忠信の最期です。**いずれにしても、私は２人がいたからこその義経だったと思っています。それはなぜか。これにも色々な説がありますが、いずれにせよ義経が平泉にいて、反平家ののろしを受けた時に、頼朝の下に馳せ参じて行きます。その時に継信、忠信を秀衡はつけてやったということになっていますが、はたしてどこからつけたのかということについてはよくわかりません。少なくとも私が調べている中では、はっきりと此処でつけたというものはありません。平泉からというのもあれば、飯坂からというのもあり様々です。ただ言えること、これだけは間違いないと思っていることがあります。それは、**継信、忠信**がいたからこそ義経の名前が残った、ということ。裏を返せば継信忠信がいなければ、私は義経の名前が後世に残ることはなかったと思っています。それは単に２人が義経の身代りになって果てていったからというレベルの問題ではありません。**継信、忠信**は**平泉政権そのもの**です。つまり、義経がなぜ京都鞍馬寺から平泉まで来て、その後は旗揚げをしていくか、それはすべて秀衡がいたからです。その秀衡は、まさか義経が兄の所に行くと言った時に自分はついて行きません。その**全ての代理人**としてついていったのが**継信、忠信です。**つまり義経にとってみれば、継信忠信は平泉政権そのもの、あるいは秀衡そのものと言っていい存在です。そうすると、はたして「**継信忠信は義経の家来なのでしょうか**」というところに行き当たります。継信忠信はただの家来ではありません。強いて言えば、平泉政権の全権委任者、あるいは統率者、あるいは**軍最高参謀、最高司令長官**という立場です。だから継信忠信は、家来などというレベルではありません。では、どうして２人は義経のために亡くなっていったのか、そんな平泉政権を代表するような武将が、なぜ義経の身代りになっていくのかということです。忠信についての説は色々ありますが、少なくとも**義経の凋落期において身代りになっていくという史実**については、私はそれなりに正しいと思っています。

　では、継信はどうなのか。平教経の矢を受けて屋島の合戦で亡くなったと、ひとまずしておきます。そんな含みのあることを言う理由について、また別なことを後でお話します。さて、継信は屋島の合戦で亡くなったということですが、どうして、そんな義経の矢を受け止めたか、家来だからでしょうと言うのが、今までの学者先生方の説です。しかし、私は違うと思っています。常識的に考えて、船の陰を辿って来て、突然放たれた矢に気が付いて、とっさに**義経の前に立ちはだかる**こと。そんなこと、家来にできるでしょうか。私はただの家来であれば１歩も２歩も下がったところにいると思っています。とっさの矢に対処できるというのは、主従などという立場ではなく、**常に身近にいる最高参謀、最高司令長官**のような人だったからこそだと思います。では、どうしてそこまでできたのか、私は武士としての誇りが成せるとっさの所作だったのではないかと思っています。つまり、結論に戻すと**『継信忠信は単なる義経の家来忠臣ではなかった』**というふうに私は思っています。さっき含みを持たせた理由というのは、能登守平教経の放った矢によって継信は亡くなったとされていますが、これは皆さんも聞いたことがあると思います。**『吾妻鏡』**という鎌倉幕府が後に作った第一級の資料があります。『吾妻鏡』の中では、能登守平教経は屋島の合戦の前に、鵯落としの一の谷の合戦で、すでに亡くなっていたと書いてあります。これらは矛盾していますね。すでに亡くなっていた人が矢を放つわけがありません。

　では、どうしてそういう説が出てくるのかということなります。極端に言えば、どっちが本当に正しいのかということになります。いずれにしても、**歴史は１つとは限り**ませんし、私は後世の人が自分の都合によって歴史を書き換えることがよくあると思っています。

　次に平泉にとって飯坂のもつ意味を考えましょう。どの時代から飯坂が平泉政権において最も大事な場所の１つになっていったのかということですが、古い物を紐解いていくと、こういう事件がありました。基治の父親か、おじさんあたりに季春という人がいました。その時、藤原政権は基衡でした。その２人の間でつながりができて

いました。そこに新しい国司として藤原師綱という人が赴任してきました。師綱は特に信夫郡の検地がうまくいってない、本当は国司ではないのに国司以上の力を佐藤一族が持っていて、ねこばばしているのではないか、あるいは平泉政権にやっていて、国に出していないのではないかという嫌疑がかかりました。実際にそうだったそうです。ただ、今までの国司がそれで検地に入ったことはなかった。入らせたこともなかった。そこですったもんだがあったけれども、結局師綱の軍が入っていた時に、湯野の庄司の季春と戦いになりました。そこで実際に、国司の師綱の軍には多数の死傷者が出ました。それによって最終的に季春は首を落とすことになります。ということを基にして、ここら辺から佐藤一族が、庄司が平泉政権下で、とても信頼が厚い部族になっていたのだということが、**『十訓抄』**や**『古事談』**に事件のあった３０年、４０年後に書かれたものとして出ています。非常に詳しいし、２つの書物にほとんど差はありません。それを基にして一般の方たちは『ああ、たしかにこういうことがあったのだ』と思う。私は本当にあったのかなと考えます。一般でいうと、信頼できる複数の書物に書いてあれば、普通は信頼できます。でも、これらには不自然な点が非常に多い。１つは結論から言うと、師綱は正四位上という官位を持っていました。京都にいた時の官職です。ところが、陸奥守は従五位下という官位です。段階でいうと５段階も落ちています。そうすると官位官職にことの他、目がなかったあの京都の貴族たちがはたして５段階も下の役職を承って、本当に陸奥の国に来たのだろうか、という素朴な疑問がわいてきます。

もう１つは、もっと大きな政治理論です。季春がいて、基衡がいて、その関係はまるで鎌倉時代の頼朝と後見人の関係にそっくりなのです。どういうことかというと、『**幕府関係は国の関係よりも上回る**』ということを頼朝は示したかった。実際に頼朝が**「奥州征伐」**に来る時に、大庭景義という重臣からの進言を受け入れています。その進言というのは、こういうことです。古来、『幕下にあっては天子の勅を聞かず、将軍の命をきく。』つまり、今戦っている時に『さあ、天子様いかがいたしましょうか…』と使いに行っている時間はありません。戦場の大将の言うことを聞く。これを頼朝は大義名分として平泉を攻めていきます。その天子よりも朝廷よりも、幕府の関係の方を優先すべきだ。これがちょうど今お話した、基治と基衡の関係に重なってきます。そうすると、頼朝が後に鎌倉幕府をつくっていく時の主従関係、**ご恩と奉公**という鎌倉幕府の体制にとても合います。つまり、のちによって作られたお話という考え方が出てくるわけです。ただ、これについてここまでお話をしている学者先生は誰もいません。私だけです。私は学者ではありませんが私だけです。これは十分に可能性としてはあることだと思っています。頼朝ならやりかねないとも思っています。

飯坂にとって、継信、忠信、若桜、楓はどういうことだったのか、あるいは実際に若桜、楓が凱旋して、義母乙和の前で『ただ今帰りました』という場面があったのかどうかということです。私の考えからお話しますと、やはりこれはフィクションのお話なのかなと思っています。ただ、知ってはいたという説に立たないとあの乙和の**椿の悲劇、母が子供を思う美談**というのは生まれてきません。だから、２人の死を知っていたからこそ、その嘆きが椿に移って、その悲しみの余りに**今もって蕾のままで落ちていく**。あれは、乙和姫、基治は２人が亡くなったということを知っていたという説に立っています。私が前に調べたものの中には当時、乙和姫は悲しみの余りに失明していたということを読んだことがあります。仮に目が見えなくても振る舞いや雰囲気、あるいは声によって、最後まで２人が生きて帰ったというようなことを親に見せるというか、振りをするということはできなかっただろうなと思います。つまり、**大事なのは**親が２人の死を知っていたとか、知らなかったということではなく、**なぜそのような話が伝承されてきたかという**ことです。

数百年前の悲しみの想いが、現代にまで伝えているという不思議な『咲かずの蕾』　*（５月頃の医王寺にて）*

私は大きくは２つのことを考えています。１つは、そのことを妻たちに演じさせた。あるいは演じさせるということ、その話を作るほどの継信、忠信です。２人はまさに奥羽を代表する人物で、２人がいなければ義経は名が残ることはあり得ない。それだけの**優秀な陸奥を代表する立派な武将**（義経の四天王の２人と古事に記されてる）だった。**これが継信、忠信の人物像です。**もう１つは、やはり、その２人に従って妻として、一緒にいたのはおそらく２年ぐらいだったでしょう。そこに妻として仕えた**若桜、楓**、この２人の若い奥さんたちは、やはりこれも大した人物だったと思います。それが親孝行であり、人物であり、その相まみえたところに、継信、忠信あるいは、若桜、楓の凱旋の話が出てきたのではないかなと。別

５月中旬頃です。医王寺にお出でになり、その想いに接してみては・・・・

の言葉で言うと、**それが正しいのか、間違っているのか、そういうことではない。そのレベルではなく、**やはり、**継信、忠信**や**若桜、楓**の人物が成せる人々の思いが、後にこのようなお話を作っていたのではないかというふうに私は思っています。

このお話は、人としての生き方、目の前にある利害ではなく、**何が人間としての真実なのかということ。これを、継信、忠信はいつも私たちに語りかけて**きます。あるいは、それを支えた人たちもそうです。若桜、楓もそう。その東北の誇りを受け継いで、さらに次の人たちにぜひとも伝えていきたいというのが私の思うところです。この継信、忠信や若桜、楓の話が正しいかどうかというレベルではなく、この心意気、人としてのあるべき姿を是非皆さんからも**福島の、東北の子供たちに伝えていっていただきたい**なと思っています。

別紙はNHKが２００５年に大河ドラマを放送した時に、こういうパンフレットを福島市と飯坂の観光協会で作ったものです。その中で私が１番気になるのは、この義経伝説の中で、「義経は肉親や部下に対して愛情が深かった」と書いてあるところです。そうでしょうか。私は全く違うと思っています。義経は愛情に飢えていた人です。なぜか、義経の父親義朝は自分が生まれた時に平治の乱で亡くなっていて、義経は父親を知りません。小さい時から命がいつまで永らえるかわからない。清盛の庇護の下に、やがては仏門に入ることを約束されて鞍馬寺にいきます。その前後には、母親が３回も結婚しています。義朝に嫁ぎ、清盛に嫁ぎ、そして一条大蔵卿藤原長成に嫁ぎます。何を信じていいかわからない。あの優秀な父親だって、有力な部下に簡単に裏切りにあって、命を落としています。何を信じていいかサッパリわからない。その義経が、愛情に目覚めていったというのは、私は**継信、忠信の存在が大きかった**と思っています。あるいは藤原です。あの藤原政権を代表する継信、忠信であって、秀衡との強いつながり、そして自分のために惜しげもなく命を投げ出していく、その品格の良さ、潔（いさぎよ）さ、その中で義経は人としてあるべき姿、愛情というものに目覚めていたのだろうなというのが私の考えです。ですから、初めから義経が愛情深かったかというと、そんなことはあり得ないと思っています。２年ほど前に飯坂町に関しての紀行文を福島信用金庫が募集しました。私も応募しました。最後を見て下さい。

私の短歌です。『*春は春　夏には夏の　湯のまちに　永久に伝えん　武士の名を*』　**継信、忠信の名を、この誇りを、生き方を、私は伝えていくこと**は、福島県人の責務だと思っています。

ありがとうございました。　〔 監修　安達龍雄様　　画像　篠木 〕

◆閉　会　点　鐘　　会　長

次の頁の 参考資料 のイラスト

7参照　義経と兄頼朝が平家打倒の誓いをして対面した時、腰を掛けたという対面石
静岡県清水町八幡神社に有るという。

【 壇ノ浦戦い図 】

10参照　壇ノ浦は関門海峡の最も狭い部分で潮流の速さ（≒19 km/h）が時間によって激変する。両軍は潮の流れを軍略にし戦ったが、義経の吐嗟の戦略と潮流が源氏水軍に最後は味方に働き、平氏水軍はことごとく敗れ平家滅亡となった。

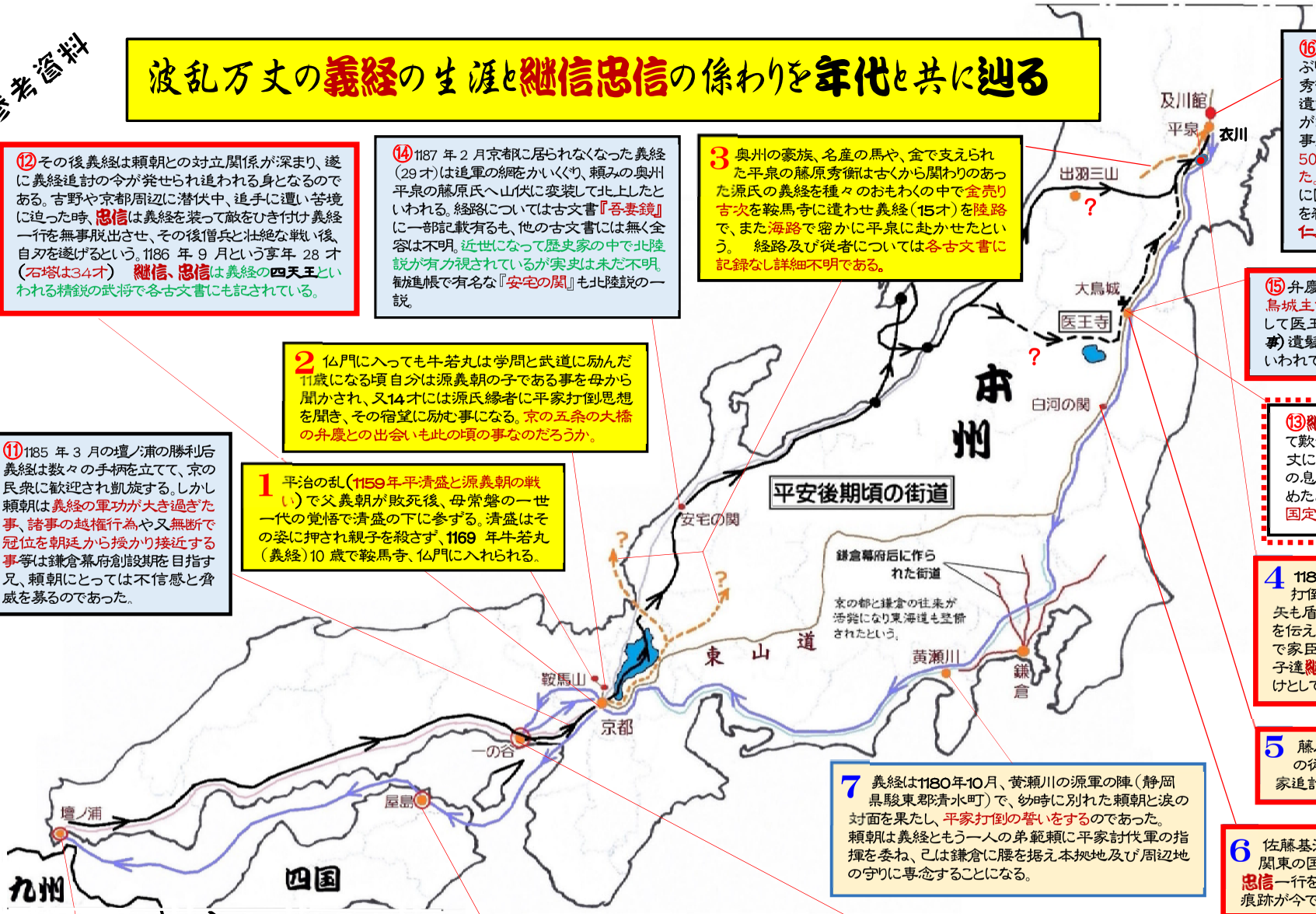
【 義経の有名な鵯越えの図 】

8参照　平氏軍は背の崖を盾に左右の源氏軍に激しく抵抗し、容易に突破出来なかったが、突如予想もしなかった**背の崖**より義経一軍が突入し平氏軍は大混乱、兵は我先にと海に逃亡したという。

〔 画像は義経関連ウェブサイトより 〕

参考資料

波乱万丈の義経の生涯と継信忠信の係わりを年代と共に辿る



⑫その後義経は頼朝との対立関係が深まり、遂に義経追討の令が発せられ追われる身となるのである。吉野や京都周辺に潜伏中、追手に遭い苦境に迫った時、**忠信**は義経を装って敵をひき付け義経一行を無事脱出させ、その後僧兵と壮絶な戦い後、自刃を遂げるという。1186 年 9 月という享年 28 才（石塔は34才）　**継信、忠信**は義経の**四天王**といわれる精鋭の武将で各古文書にも記されている。

⑭1187 年 2 月京都に居られなくなった義経（29 才）は追軍の網をかいくぐり、頼みの奥州平泉の藤原氏へ山伏に変装して北上したといわれる。経路については古文書『吾妻鏡』に一部記載有るも、他の古文書には無く全容は不明。近世になって歴史家の中で北陸説が有力視されているが実史は未だ不明。勧進帳で有名な『安宅の関』も北陸説の一説。

3 奥州の豪族、名産の馬や、金で支えられた平泉の藤原秀衡は古くから関わりのあった源氏の義経を種々のおもわくの中で金売り吉次を鞍馬寺に遣わせ義経（15才）を陸路で、また海路で密かに平泉に赴かせたという。　経路及び従者については各古文書に記録なし詳細不明である。

⑯1187 年 2 月平泉に辿り着いた義経は数年ぶりに穏やかな時を過ごすが、しかし 8 ヶ月後秀衡は病死、泰衡の時代となる。泰衡は父の遺言を守り、頼朝からの再三の義経引き渡しがあるも頑強に守ったが、度重なる鎌倉の軍事力背景の圧力に、遂に屈し 1189 年 6 月 500 騎の兵をもって義経主従の衣川館を襲った。義経郎党達は防戦したが討たれ、平泉兵に囲まれた義経は一切戦わず、堂に籠り妻子を殺害後自害したという。この時防戦の**弁慶の仁王立ち**は有名。　義経享年 31 才という。

⑮弁慶等と共に奥州に入った義経一行は大鳥城主佐藤基治に会い兄弟の武勲を伝え、そして医王寺に参籠し（*一定の期間こもって祈願する事*）遺髪を埋めて二人の追悼の供養を営んだといわれている。

⑬**継信、忠信**の妻、若桜、楓は息子二人を失って歎き悲しむ老母『乙和御前』を慰めようと、気丈にも己の悲しみを堪え、夫の甲冑を纏え二人の息子の凱旋の雄姿を装って『乙和御前』を慰めたという。この故事は孝心の鑑として、戦前の国定教科書に教材として用いられた。

2 仏門に入っても牛若丸は学問と武道に励んだ 11歳になる頃自分は源義朝の子である事を母から聞かされ、又14才には源氏縁者に平家打倒思想を聞き、その宿望に励む事になる。京の五条の大橋の弁慶との出会いも此の頃の事なのだろうか。

⑪1185 年 3 月の壇ノ浦の勝利后義経は数々の手柄を立てて、京の民衆に歓迎され凱旋する。しかし頼朝は義経の軍功が大き過ぎた事、諸事の越権行為や又無断で冠位を朝廷から授かり接近する事等は鎌倉幕府創設期を目指す兄、頼朝にとっては不信感と脅威を募るのであった。

1 平治の乱（1159年平清盛と源義朝の戦い）で父義朝が敗死後、母常盤の一世一代の覚悟で清盛の下に参ずる。清盛はその姿に押され親子を殺さず、1169 年牛若丸（義経）10 歳で鞍馬寺、14門に入れられる。

4 1180年8月配流の地、伊豆にいた兄頼朝が打倒平家を掲げて挙兵する。22才の義経は矢も盾もたまらず秀衡公に戦いに馳せ参じる事を伝えると、義経の覚悟に感銘し、秀衡は縁戚で家臣の岩代の国の大鳥城主佐藤基治の息子達**継信、忠信**ら数十人の郎従を義経に手向けとして与え送ったという。

5 藤原秀衡公の命を受けた佐藤基治は義経の従者として息子兄弟二人**継信、忠信**を平家追討軍に随行させる。

6 佐藤基治は要衝の地信夫庄から遥々と、奥州と関東の国境のある白河の関まで、　義経、**継信、忠信**一行を見送ったと伝えられ、白河の関にはその痕跡が今でも、まだ残されている。（庄司戻しの松）

7 義経は1180年10月、黄瀬川の源軍の陣（静岡県駿東郡清水町）で、幼時に別れた頼朝と涙の対面を果たし、平家打倒の誓いをするのであった。頼朝は義経ともう一人の弟範頼に平家討伐軍の指揮を委ね、己は鎌倉に腰を据え本拠地及び周辺地の守りに専念することになる。

8 1184年2月義経は範頼と共に平家追討を命ぜられる。義経と範頼は西と東に別れ平家陣の一の谷を挟み撃ちにする策を講じた。早朝からさっそく戦の火ぶたが切られたが、平家軍は浜の背後に聳える崖を盾に一進一退を繰り返す、義経は機を見て精鋭 70 数騎と共に馬ごと崖を駆け下り平家軍に攻め入る。不意を突かれた平家軍は大混乱、船で我先にと便乗し四国屋島に敗走したと言う。

9 1185年 1 月義経は平家の屋島陣に出撃の命を受ける。京を出て 5 隻の軍船を整え航海するが暴風雨と風に押され着いたのは勝浦で、日夜馬を走らせ翌朝屋島対岸に着く。義経は寡兵を悟らせない為周囲の民家に火を放し旗を立て大軍襲来と見せかけ内裏から攻め込んだ。海から予想していた平家軍は狼狽して海へ逃げる。艫で少数と知った平家軍は激しい矢戦で反撃、その猛攻に義経の身も危うく一本の矢が義経へ、その時**継信**が前に立ちはだかり義経の盾となり戦死する。源軍勝利する。

10 平家の逃れた先は関門海峡の彦島であった。前は玄界灘、陸は範頼、平家はここでの海戦に最後をかけた。源氏軍は 840 隻、平家軍は 500 余を集結する。初め平家軍は潮流を利用し有利に攻めたが、義経の機転と潮流が反転すると劣勢になり、源氏軍の大軍に次々と乗り込まれ夕刻までには平家船団はほとんどが沈み、長き源平の戦いは終結

＝**継信、忠信**のかかわり

〔 参考資料　源義経関連ｻｲﾄ、学校教材歴史教科書、佐藤継信, 忠信関連ｻｲﾄ、医王寺パンフﾚｯﾄ他。　古文書からの伝承多く、年代、年齢はその古文書により若干違い有り、又内容についてはフェクションが多いとも云われている。 〕

shinogi 作

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第16回 ～

『 八幡神社けんか祭りと太鼓屋台の歴史 』

◆ 会員スピーチ　　パスト ガバナー補佐　佐藤 喜市郎　会員

数百年の伝統ある八幡神社祭礼と時代と共に変遷したけんか太鼓屋台の歴史を語る佐藤喜市郎会員

今日は『 歴史を辿る 第 16回 』として八幡神社のお祭りについてお話をさせていただきます。昨日と今日と国際奉仕委員、また、親睦委員の方にお手伝いをいただきまして「まつりｉｎ飯坂」の準備を大変ありがたく思っております。『国際交流フェスティバル『ザ・まつりｉｎ飯坂』は実は今年で２６回なのですが、始まったのは２７年前です。１年だけはちょっとお預けの年がありましたが２６回続けたということは大変すばらしいことだと思っております。

飯坂クラブの佐藤喜市郎会員宅で外国人用神輿を組み立てる飯坂ロータリークラブの会員

実は、当時の私の新会員スピーチですが、何をお話するといったら普通は自分の生い立ちや家業の話になりますが、『あんたはお祭りの話をしろ』と、先輩に言われ新会員スピーチはお祭りの話にしました。

神社も近いせいもありましたので、八幡神社に関してはいろいろな想いがあります。そんなことで、この飯坂ロータリークラブ国際交流フェスティバル『ザ・まつりｉｎ飯坂』は２６回になりますが、最初にこのお祭り国際交流フェスティバル「まつりｉｎ飯坂」をやろうとなったことから話をしてみたいと思います。ここにいらっしゃる先輩の篠木会員が２７、２８年くらい前ですが、私が入会した時は、私は八幡若連でお祭りをやっていました。そちらで山車（だし）を出していました。その時に篠木会員がいらっしゃいまして、最初は分からなかったのですが、『あんたがやると言うとできるのだが』と言うのです。『だめだと言われると難しいのだが』とも言うのです。

私が入会した時のロータリークラブの会長さんでしたので、その会長さんにそう言われたのでは、下手な返事はできないなと思って『なんですか？』と聞いたら、『 実は国際奉仕委員会というのがあって、それで近郷近在に来ていただいている外国の若い人々に、ぜひ一緒になって日本の伝統文化に触れていただいて交流をしたいのだが 』という話でした。私は今お話した通り、別な山車を出していたので、忙しいなと思ったのですが、神輿はせいぜい１時間ぐらいで組めるなと、その当時はそんな考えでした。『そうであれば私もご協力をします』ということで国際交流フェスティバル『ザ・まつりｉｎ飯坂』が始まりました。そして、現堀切孝敏幹事さんが名付け親です。初めの頃は、やはりなかなか地域の認知度が低く外国人募集は大変でしたが、しかし、当時の飯坂には、会員の畠さんの吉川屋さんや聚楽さんの所

世界各国、アジア、ヨーロッパ、アメリカなどから集まった外国人達と共に日本の伝統文化の祭り神輿を一緒に担ぐ飯坂ロータリークラブ会員。拝殿の前での記念撮影

（神輿担いだ外国人全員にこの写真を記念に配っています。）

に外国の方がおりまして、何とか形にはなりました。その後は、国際交流協会や福大と輪を広げていきました。昨年辺りは１００名を超すような大事業になりました。おかげさまで２５３０地区では、飯坂のこの国際交流神輿はだいぶ浸透しております。ただ、遠い会津やいわきの方からは参加はできません。私も本年度地区の役員を仰せつかっておりますが、**『飯坂のお祭りって行ってみたいね』『飯坂ロータリークラブは凄いことをやっているね』**というように、皆さんに認めていただいていると思います。

〔*国際交流フェスティバルの* **“小型お神輿”** *は今から五十数年前『飯坂芸妓組合』がお祭りを盛り上げようと、資金をだし購入し芸妓衆が担いでいたものであると故人の芸妓組合事務局長の須郷さんが話しをしていたという事です。我々もその意思を継ぎ大切に扱い皆様と一緒に、このお祭り* **「ザ・まつりｉｎ飯坂」** *を成功させていきたいと思っております。*〕

今回で26回目になる国際交流フェスティバル、世界各国の若者達は、おおよそ累計で 250 名になり、異国のこの様な神輿を担ぎ、どんな想いを記憶に残し帰国したのだろうか？・・・・・

飯坂のお祭りは、今年は１０月の第１金土日１、２、３日になっております。以前は４、５、６日でした。その以前は１０月１日だったのです。またその前は、これは皆さんご存知でしょうか。

豆名月です。豆名月は旧歴９月１３日をいいますが新暦では１０月１２～１４日頃です。この豆名月の日にやっていました。なぜかというと、以前は電灯が無かったからローソクの灯でお祭りが夜遅くまでおこなわれておりました。月の光をあてにして行ったのです。ですから、皆さんもご存知の**忠臣蔵は１２月１４日です。それはそういうこともあって１４日（満月）に決行した**という説もあります。お祭りがなぜ１０月の１日になった時もあったのか。それは私の家でも養蚕もやっていましたから分かるのです。皆さんは“**秋蚕**（あきこ）”と聞いたことがないと思いますが、養蚕というのは以前、年１回か２回でしたが、養蚕の飼育技術が向上して、最後には秋蚕及び晩秋蚕で４回とれます。旧歴９月**１３日は秋蚕**とぶつかってしまって、どうしても農家が忙しいのでお祭りに参加できないということで、１０月１日にしたのです。その後、なぜ１０月１日が５日になったかというと、１０月の１日頃にすると例年**７、８割は雨なので**す。というのは、この時期は天気が固まらないのです。５日延ばしただけでもだいぶ固まってきます。福島のお祭りは大体１０日ですが、東京オリンピックも１０月１０日です。あれはデータ的に見て必ず晴天になるだろうという日が１０月１０日なのです。だから１０月の１週過ぎになると天気はだいぶ固まります。今年はいかんせん、その１０月の１日ですから、今まで雨天のために日にちを移動していたことなので、私もその辺は心配ですが。今はデータ放送で見ますと何とか明日、明後日はもつだろうなという感じでおります。天気にも恵まれ成功させたいなと思っております。飯坂八幡神社祭礼は、けんか祭りというようなことで、今は皆さんで一緒に楽し

みながらやっておりますが、**当時は太鼓屋台を本気でぶっつけあって喧嘩する事から『飯坂けんか祭り』**の名になり、このぶっつけあいによって一晩でけんか太鼓屋台が骨組みもないほど壊されました。そしてその屋台の損害代はその祭典事務所の**町司**〔(まちおさ) 昔はその祭典事務所の町内で有力者がなっていて、その町内の祭りの伝統や、やり方等を継承し伝えていた有力者。時には屋台の資金等も存分に出していた町司もいたという。〕がほどんと私財をだして作り直したと伝えられております。このけんか祭りは**ここ８０数年**の歴史があります。非常に勇壮なお祭りになっております。皆さんがそういったけんか祭りという異名といいますか、若衆が鼓舞する威勢の良いお祭りに進化、宣伝されたのも私個人的には、ここにいらっしゃるロータリー会員である民報、民友支局さんが非常にけんか祭りということで記事にしてくれたので、観光にも寄与しているのかなと思っております。では、以前はどういった名で呼ばれていたかというと、昔は飯坂八幡神社祭礼太鼓祭りは儀礼の太鼓祭りだったと故人の**斉藤満元宮司**さんが言われておりました。太鼓祭りでも儀礼を重んじる太鼓の打ち方なのです。だから１つの打ち方だけの飯坂八幡神社祭礼太鼓ではないのです。

八幡神社奥の院神殿、破風の頂点。鬼紋の所に万字の紋(卍)が昔の面影を残している。
〔一味庵、氏家浩資氏（特殊撮影にて）提供〕

① **三切り 太 鼓** (太鼓屋台が他町内に入る時、敬意を払って三切りを打つ)
② **下がり半太鼓** (御神体〔神輿〕と出会った時、奉る意を表し屋台を止めて下がり半を打つ)
③ **宮 入 太 鼓** (神社から御神体を神輿に移して各町内を巡行し夕方横町の御旅所に留まり、その後神社に屋台と一緒に戻る。その時の屋台が宮入太鼓を打つ、屋台に灯りが点けば宮入太鼓打つという)
④ **流 し 太 鼓** (お祭り中の移動、また自町内、町回りの時流し太鼓を打つ)
⑤ **山車(だし)太鼓** (町屋台以外の飾りつけ屋台、またはにわか神輿などの太鼓打ち)

以上が現在の飯坂八幡神社祭礼にての太鼓の打ち方なのです。勇壮なけんか祭りのなかでも儀礼を重んじる太鼓が伝統として残っているのです。お祭りの分かる人は遠くで聞いていて、今あの屋台はどこの町内に入っていくのだな。今出るのだな。神輿と遭遇するのだなというのが分かるのです。儀礼ですので太鼓の音色で分かります。そういったものが飯坂のお祭りの本来のお祭り姿なのです。

神輿が巡行に出るとすぐ鳥居の出た所で、八幡寺の方向に向きお祓いを致します。これは元々八幡神社の御神体が、**昔は八幡寺に安置されていた**といわれ、現在の八幡神社奥の院の破風最上の鬼の紋にも万字の紋(卍)が付いておりそれを物語っております。そして、このような飯坂の祭りの文化を後世に伝承し残そうという組織

*この祭りは、12世紀後半に大鳥城築城とともに舘山山麓に遷建した別当八幡寺で行われた祭りが起源とされ、その後の文政3年（江戸後期、1820）に寺院に最も近い**上町地区**が祭りに屋台を出して太鼓を打ち鳴らし、神輿と一緒に氏子地域を練り歩いたのが今の祭りの原型になっていると伝えられている。大正15年（1926）に屋台が神輿と一緒に宮入りするようになり、昭和2年（1927）には上町以外の町内も屋台を出して参加するようになった。屋台をぶつけるようになったのは昭和8年（1933）の祭りの宮入の際、社に神輿が納まってしまえば祭りは終わるという寂しさから、それを防ごうとする2町の屋台がぶつかってしまったことがきっかけだったとされる。中日の神輿渡御は町内を巡幸したのち、夜の帳が降りると大勢の若衆に担がれた6台の屋台を従えて横町の御旅所を出発し神社境内に入り乱れると屋台が激しくぶつかり合う。揺れる提灯の灯明が夜空を焦がし、負けじと打ち鳴らす太鼓の音が大地を轟かす様は圧巻である。*

*秋の例大祭は、五穀の豊穣を神に感謝し氏子崇敬者の隆昌を祈願する祭りである。中日の神輿渡御は町内を巡幸したのち、夜の帳が降りると大勢の若衆に担がれた6台の太鼓屋台を従え、御旅所を出発する。神輿を先頭に境内に入り乱れると、神輿の宮入を拒む屋台が激しくぶつかり合う。揺れる提灯の灯明が夜空を焦がし、負けじと打ち鳴らす太鼓の音が大地を轟かす様は圧巻である。**大阪・岸和田の『地車祭り』、秋田・角館の『飾山ばやし』**とともに**《日本三大けんか祭り》**の異名をとり、湯の町を祭り一色に染める。祭りの歴史は定かでないが、太鼓の調べは京都・祇園囃の流れを汲み、300年余りの伝統を誇る。「**下がり半**」「**三切り**」「**流し**」「**宮入**」の4種類の打法があり、儀式太鼓の風格と勇壮さを今に伝え祭りであり、**太鼓保存会**や**小学校の太鼓クラブ**によって郷土の伝統文化が受け継がれている。*

があります。飯坂の若者たちが作っている組織『**飯坂祭り太鼓保存会**』です。各地区に出て飯坂温泉をアピールし活躍しています。また、５０年近く続いている『**飯坂小学校太鼓クラブ**』という組織もあり、創立時は家の跡取り長男だけ入会という決まりで、祭り太鼓の打ち方を伝承目的だったのですが時代が変わり、今は一般の子供にもこの大切な伝統を伝え残そうと飯坂太鼓保存会の人々が指導育成しています。**祭りの前夜祭**には『飯坂祭り太鼓保存会』と『飯坂小学校太鼓クラブ』の**奉納太鼓**と女子の子供達の**剣舞**が町民に披露され好評をはくし

厳かで優雅な巫女舞を舞う子供達、前夜祭は拝殿の前で飯坂小学校太鼓ｸﾗﾌﾞ及び太鼓保存会の奉納太鼓や剣舞などが奉納されている。

飯坂八幡神社まつりは、昔儀礼太鼓祭りといわれ5通りの打ち方がある。『飯坂小学校太鼓ｸﾗﾌﾞ』では毎週水曜日にその伝統を守り伝承する為、練習に励んでいる。　打ち方を披露する小学生

ております。　飯坂ロータリークラブでも、今年で６年になりますが伝統の継承のため、『飯坂小学校太鼓クラブ』に支援をしております。

飯坂八幡神社はお宮の社格からいうと**郷社**です。**村社、郷社、県社、大社、官幣社**（明治になって制定された社格、皇族崇拝や歴代の功臣を祀る神社が多く、中、大、別格の四段階、戦後、廃止となる。霊山神社は別格官幣社と言われていた。）そして天照大神の兄弟は神宮です。　郷社八幡神社ですので八幡神社は全国に数多く（全国に稲荷神社３５，０００社、二番目に八幡神社２４，０００社ある）それで地名の飯坂をつけなくてはならないので飯坂八幡神社なのです。

では、現在の八幡神社祭礼の流れのお話しをしてみたいと思います。

◆**本祭り７日前**〔各町内８祭典事務所開き、宮元としての**上町**(千人風呂、鵬、湯町、湯沢、八幡、馬場、道場)、**若錦**(若葉、錦、鯖湖)、**滝の川**(花岡、滝の町、春日、赤川)、**横町**(横町)、**立綱** (立町、十綱)、**槍花**(槍町、花水坂)、**天王寺**、小川〕

◆**本祭り４日前**〔各祭典事務所、太鼓町廻り始まる〕

◆**本祭り　前　日**　〔11：00 **例大祭**、各祭典事務所大御世話人、氏子総代、神社関係者、出席　　17：30 **移御式**(神社の御神体を巡行するために神輿に移します)、各祭典事務所大世話人、他関係者出席、太鼓保存会や飯坂小学校太鼓クラブの太鼓、剣舞巫女舞等奉納する〕

◆◆**本祭り日**　〔5：00 触れ太鼓(各祭典事務所で町内を触れ太鼓で廻り本祭りを知らしめます)　8：20 発輿祭(神社へ屋台を宮詰めし行う)　8：30 渡御巡幸(神輿を先頭に鳥居を出た所で八幡寺の方角に神輿を向けお祓い後、各町内を1年に1度の五穀豊穣と無病息災を願いお祓いをし屋台と共に巡行する)　11：30 引継式(屋台は上町、下町に別れて神輿と共に巡行する。温泉駅前で上町と下町を引き継ぐ)　19：00 宮入出発(横町の御旅所を神輿と共に出発し主道路通り神社に向かう)　22：30 宮入終了(神社境内で無事神輿が宮入し、屋台の一連の激動が静まると終了となる)　22：40 還御式(神社神殿に関係者出席無事神輿が巡行後宮入したことの儀式)〕

◆　**後祭り日**　〔11：00 後鎮祭、各祭典事務所大世話人、他関係者出席、17：30 千穐楽仕舞太鼓　〕

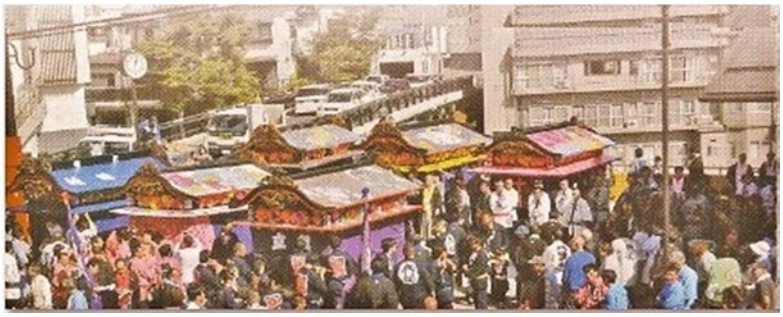
現在、行われているけんか祭りは本来の姿とはちょっと違うのであります。

それは今の八幡神社の神輿は神社境内に戻ってきて、２回３回廻ると神輿蔵に入ってしまいます。神輿蔵に納めてから神社に各屋台が入り、ぶつかりあって宮入りです。本来の意味からすれば、神輿が神輿蔵に入ってしまいますので納まってしまえば、もうお祭りは終わってしまうのです。神輿の御神体を神社に戻らせないために邪魔する訳です。昔は神社の御神体は神輿と共に拝殿の前から入りますから、その前に屋台を置いてぶつかって、神輿が拝殿に入らないようにする、入ってしまうと本年のお祭りが終わるので、それで終わらせないためにいろいろやっていたわけです。

飯坂の気質はやはり**勇壮な太鼓で燃え**て町を廻ってきて最後に**境内の中でぶつかり**あって、**勇壮なお祭り**になるのです。それで、いつしかけんか祭りというような異名をとっていますが、今は見せる観光にして飯坂温泉の観光にも寄与していると思っておりまので、若干宮入りの段取りが変わっていても仕方ないのかなと思います。

それでは、**『飯坂小学校太鼓クラブ』**がどのようにして出来たかというお話をしてみたいと思います。

私は今６７歳です。私たちが太鼓を覚えようとしている年は、大体小学校の２、３年生、そして高学年になると１年に１度のお祭りの太鼓屋台で経験してそれなりに覚えるわけです。今は飯坂小太鼓クラブで太鼓を教えると



静かに神輿巡行にお供する昼姿の各町、祭典事務所の**太鼓屋台**。昼の巡行途中の上町、下町の温泉駅前における引継ぎ式。屋台は各祭典事務所の大世話人、小世話人が取り仕切る。

いうようにしていますが、昔は本祭りから数えて１週間前に各町の事務所開きをします。そこで**太鼓好きの子供達が稽古太鼓**を毎日打つのです。好きな者はみんな行って練習します。

私が子供の頃はまだ明治生まれの大人の人々がいて『叩いてみろ』といわれ叩くと『お前だめだ』と後ろからバチで頭を叩かれ『なんだ、下手な子だな』といわれて。そういうような教え方ですから、**バチを手にとって丁寧に教えていただくこと**はありませんでした。人の太鼓を打つのを見て、それを**見て盗む**しかありません。叩かれても俺はやるのだというような情熱を持った子供はいなくなってきたのです。また、時代が進むにつれて子供達の遊びも多様化して、どんどん打ち手がいなくなってしまいました。当時、実はうちの親父も太鼓はかなりの名手でした。私は親父から見て覚えましたが、私の本当の師匠は、千人風呂通りの雑貨屋の篠木義雄お爺さんが師匠なのです。八幡の佐藤表具店のお爺さんの弟さん、佐藤 力さんも太鼓の達人で、そのような方々から教わりました。普通はみんな頭を叩かれながら教わりますが、私はあまり叩かれませんでした。何故かと言うと、私の大祖父は**佐藤三郎助**と云いますが、昔、横町の**桝権**からうちにきました。以前太鼓屋台は**上町**と**下町**(横町)の**２台**だけでした。この２台目の屋台の時、横町の桝権が結構大きく私財を寄進したといわれておりましたので、『なんだ、あんたは三郎助やんのひ孫でないか』といわれ、それで私は頭を叩かれることがあまりなくて覚えたのです。ですから、私の先輩も稽古太鼓が始まるとみんなうちに来るのです。みんな太鼓を叩きたくて、私は太鼓を優先して叩けるのを知っているからです。そんなことで、小学校から中学校１年生まで太鼓叩きをやりました。そんな時代を過ごしてきたのですが、打ち手がいなくなってしまった。それで**昭和４２年の年**に、うちの**親父**と笛の名手で**八幡**の**大橋正美さん**と**三八石屋の一郎さん**が集まって何とかしなければと、丁度その時の飯坂小学校の校長先生が大和田校長先生でした。大和田校長先生は初任で来た時にうちの親父が習いました。その方が校長先生だったので、うちの親父とみんなで学校に行き私も行きました。太鼓打ち手不足の現状を話して、今は打ち手がいないから、太鼓屋台をお祭りに出せないのだと。学校から帰ってきても、いつでもある程度の大人の人々だけが打っていたので、これでは飯坂の祭りの文化が継承できないということで、その話を校長先生に申し上げました。そしたら、そういうことだったら学校も協力するからということで、**昭和４２年に飯坂小学校太鼓クラブが創立されました。**ところが、うちの親父は仏を作っても魂を入れない人で、これは自分の親父ですから親父の気性をよく分かっていますが、太鼓クラブを作って教えていたのですが、さあ１年経つと『おれはこれはやっていられないな。毎週水曜日にこんなことをやっていたらとてもできない。』といって、『今後、お前行って教えて来い』と私に言うのです。私は福島の『ボーキ佐藤商店』に勤めていたのですが、『お前はボーキの息子ではないぞ。お祭りくらい協力しろ』と。新入社員が会社に “親父にこの会社の息子でないから、うちのお祭りの仕事やれ”とは言えないので、そんないろいろのことがあって、花岡町のカンキン商店のお父さん**菅野重夫さん**に話をもちだし、『カンキン君を呼んでお願いするから……。彼は真面目だから絶対に続ける。』と言うのです。そして、**本当に４７年続きました。**これは皆さんご存知だと思います。私は本当に彼を尊敬しています。うちの親父は１年やって続かなかったのだから。それが４７年続きました。大したものです。そういったことで、この飯坂小学校太鼓クラブの歴史がありまして、現在は**太鼓保存会の花岡町の寿司店『紫樹』の武山英樹さん**が中心になって毎週水曜日太鼓の打法を指導しています。飯坂ロータリークラブでも少しでも励みになってもらいたいとクリスマスのチャリティーオークションの浄財を、ここ何年かは飯坂小学校太鼓クラブの方に寄贈していただいているので、私も非常

各町内の*けんか太鼓屋台*が神社の周りを、勇ましい宮入太鼓で数台ぐるぐる回る。その内
ちょっとした思惑（前年度の戦いでの想い等）のある屋台に接すると担ぎ手が興奮、
担ぎ手の頭領、大頭（おおがしら）、中頭（なかがしら）が察して、
大世話人の提灯の動きを見ながら、担ぎ手屋台の呼吸を読む、**ぶつつけるか！**離れるか！

……けんか太鼓屋台　一触即発の様相……

にそういった経過が分かっておりますから感謝しております。そういうことで、最初の飯坂小学校太鼓クラブが出来た時、いろいろの人々にご協力いただき、**カンキン**さんにもご指導していただきました。また、ここにいらっしゃる忠作さんもその１人です。

初めは太鼓やバチが不足していたので、**私の家では**各所の神社から**古太鼓を集め皮を貼り直**して太鼓やバチを続けさせていただきました。忠作さんも記憶があると思いますが、大太鼓のバチは桐の木なのです。どこかで桐を伐採したというとその伐採した木をいただきに行くのです。太鼓のバチは何年か寝せなくてはいけないので、忠作さの所に預かっていただいて、バチ作りを続けていました。

（　**参考、**　大太鼓の貼り皮は馬の皮、小太鼓は 犬、つつみは狐、三味線は猫の皮です　）

だんだん太鼓クラブや保存会も出来て、ある程度、継続できる力がついたので、そういった支援はなくても今独り歩きしているというのが現実です。だから、飯坂太鼓クラブは非常に地域の方の色々な意味で、その支援があって今も続いているというのが飯坂小学校太鼓クラブです。私どもの**「*まつりｉｎ飯坂*」**も２７年ですが、２６回重ねております。私個人のお願いとしては、今後も飯坂小学校太鼓クラブを**飯坂ロータリーとして、是非ご支援を賜っていければ**と思っております。そういったこと飯坂小学校でも大変ありがたく活動させていただいていると思っております。まだまだ、この飯坂のしきたりなどもお話しがありますが、そろそろ時間ですので今日はこの飯坂ロータリーの**「*まつりｉｎ飯坂*」**と飯坂小学校太鼓クラブの、そしてお祭りの経緯をお話させていただきまして、今日のスピーチを終了させていただきたいと思います。　ご清聴ありがとうございました。

二台の屋台は負けじとばかりに入り乱れる宮入太鼓の勇壮な太鼓音に担ぎ手若者同士が
鼓舞し、ついに離れる事が出来ず、担ぎ手全員の力の集結力で屋台同士が威勢よくぶつかり、
けんか祭り最大のクライマックスを迎える、そして観客の興奮が最高潮に達する。
この時、どちらかの宮入太鼓が鳴り止まれば負けといわれている。

〔 上町祭典事務所、元大世話人 経験者の感想 談 （S63 年頃）〕 画像は近年のもの

〔 画像の一部は八幡神社祭礼パンフレットより 〕　〔 監修 佐藤喜市郎 様　画像 篠木 〕

◆閉 会 点 鐘　　会 長

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第17回 ～
『 古き飯坂の娯楽の殿堂「旭座」ものがたり 』

◆ゲストスピーカーの紹介　　会報、広報 委員会　副委員長　　篠木勝司　会員

飯坂の明治、大正、昭和初期時代、地域の方々が飯坂のただ１つ娯楽の場として親しまれた場所は、現在の東邦銀行飯坂支店の所にありまして、**『旭座』**という当時としては近在に無いハイカラな洋館建の物でした。現在の８０才以上の人々は、お爺ちゃんや御婆ちゃんに連れられて時代劇の芝居や、たまに放映される舞台の上の活動弁士説明の白黒の映画に心を弾ませた思いがまだ脳裡に残っているのではないでしょうか。このように当時の人々の思い出深い、そして歴史的にも価値のあるものがたりが、飯坂の歴史から消え去ってしまうということは大変残念な事であり、また建物についても色々記録されて残すべきではないかと思います。幸いこれらの歴史について色々と傾注されていた元北高等学校社会科教諭の佐藤先生にお話をお聞きして『飯坂の歴史を辿る』のシリーズに編纂したいと思いますので宜しくお願いいたします。

◆ ゲストスピーチ「古き飯坂の娯楽の殿堂 **“旭座” ものがたり**」　元福島北高等学校 社会科教諭　**佐藤 紀和 様**

ただ今、ご紹介いただきました佐藤紀和です。今日は飯坂の名士の方々の前で話す機会を与えていただきましたことを感謝申し上げます。

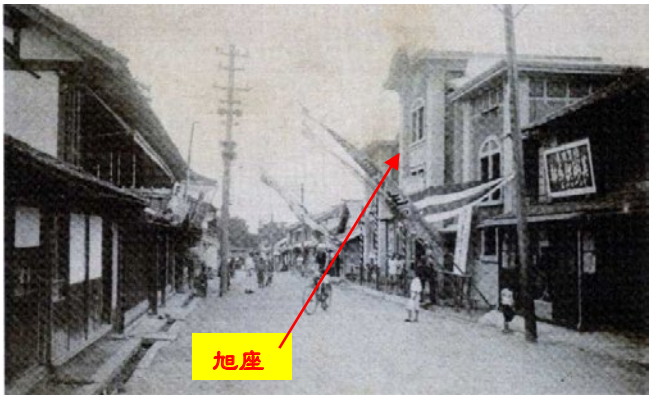
数年前から、この飯坂ロータリークラブが「**飯坂の歴史を辿る**」という題で、色々なテーマについて、ゲストスピーカーに話をしていただいていることは、先輩の篠木さんから聞いておりました。篠木さんが 5 年前に私が史跡保存会の機関紙に投稿した「**旭座展雑感**」をご覧になったことから、旭座の話を依頼されたものと思います。ただ、私は特に旭座のことを研究しているわけでもありませんし、この度依頼を受けてから資料を見直しましたが「旭座展雑感」に記載した以上の資料も出ませんでしたので、それをベースに私の思い出や感想などを話させていただきます。

写真１　新装された旭座の正面

当時は近在に見られないハイカラな洋風建築の姿を誇っていた『旭座』興行場、　再建築まもない姿

平成２３年に行った旭座展というのは、東邦銀行飯坂支店が飯坂温泉駅前の現在の観光協会の場所から現在地に移転して４５年目を記念しておこなったロビー展で、当時の旭座の資料や写真、映画のポスターなどが展示されました。またこの直前に、飯坂こけしの**名人渡辺喜平**さんの息子さんで**幸典さん**作のこけしを並べたロビー展「**飯坂のこけし展**」があり大変好評で、次の企画展ということで実施されました。

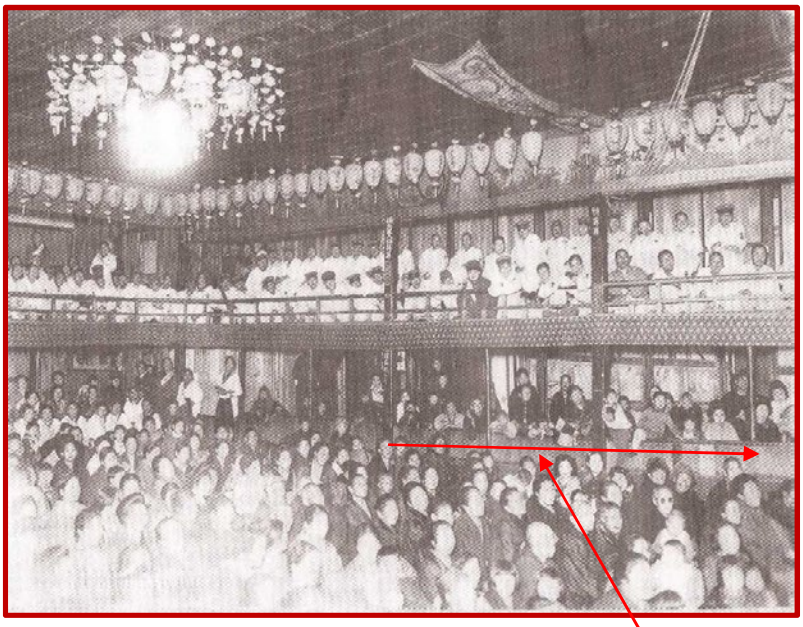
旭座は、今から５０年前まで現在の東邦銀行飯坂支店の場所にあった芝居小屋で、大正１１年頃再改築されたようですが、東邦銀行飯坂支店が昭和４１年に現在地に移るまで７４年間飯坂の娯楽の殿堂として続きました。テレビのない時代に小学生、中学生を過ごした私たちの年代は旭座で芝居や映画を見るのが最高の娯楽でした。小学生時代に年１回の映画教室で「**長崎の鐘**」を見て涙したことは今でも覚えています。もちろん私達の親や祖父母あるいは曽祖父母も旭座で芝居を楽しんだことだと思います。**旭座**は、「福島市史」によると、-今から**１２３年前の明治２６年**(西暦１８９３年)に造られました。福島市で一番古い芝居小屋は、この前年明治２５年に福島駅前に建てられた「**新開座**」です。その後「新開座」は新町の稲荷神社の北側に移りました。実は私は５歳の時まで福島市に住んでいましたので、１度だけ「新開座」に行った記憶がありますが、構造は旭座と同じでした。当時新開座には、梅沢清とその子武生、富美男親子が出演していました。梅沢清はその後、上京し浅草の「常盤座」で花形役者として活躍しましたが、次男の富美男も福島高校を中退してついて行きました。福島高校の１級上に**佐藤 B 作さん**がおりました。旭座展の資料の中に、「**旭座株金之謹**」なるものがありました。



当時の飯坂町の中心街は、湯沢、湯町、鯖湖町であったと云われ、その中心街の賑わいの中に建つ 大正16 年頃の『旭座』の雄姿
（右写真との比較参照）

戦後の時代は吾妻スカイラインが始まって温泉観光の時代で、花岡町、赤川、千人風呂通り等は全盛の時代。平成に入り飯坂温泉街が少しずつ衰退の一途、しかし堀切邸が出来て、また湯沢、鯖湖町が賑わいを見せ始めている。（平成 29 年 左の写真と同じ場所）

第５号とありますので数人の方が出資をして旭座が造られたと思います。第５号名義人の**堀切清右ヱ門**さんは、ロータリークラブ会員の堀切幹事さんのご本家です。１株金２０円也は今でいうと２００万円位だと思います。現在の**鯖湖町**、当時の**若葉町**は、飯坂町の中心地でした。旭座がつくられた２年後の明治２８年に出された**「飯坂温泉案内」**という本に、「*若葉町は遊郭にて数件の妓楼が並び、昼夜弦歌の声絶えることなし*」と書かれています。その後旭座は、１度作り直されています。大正１５年９月１５日の日付で、**旭座合資会社組織創立**という書類がありまして、そこには採進堂１５００、本家５００、自家１５００出資とあります。この金額の単位は円と思われますが、本家と自家が何を表すのか分かりません。採進堂という名前がありましたので、採進堂の奥様にお聞きしましたら、先代が旭座に関わったとお話しされていました。



旭座の内部、座り席の芝居小屋、当時の特長の客席を貫いて舞台に通じる花道が有り、2階は傷痍軍人（戦争で負傷した人）の慰安席に成っていた。

当時芝居を演じたのはいわゆる**「ドサ廻り一座」**といわれた旅芸人で、興行期間は１か月位だったでしょうか。演目は、**『瞼の母』**や**『浅太郎月夜』**など義理と人情が絡むチャンバラ劇で、主役の渡世人がやくざを斬りまくったり、お涙頂戴的なものでした。『*菅（すげ）笠３度に風よけ合羽、ドスを抱き寝の、旅鴉‥*』と主役の座長が大見え切って格好つけると、客席からお捻りが飛んだりしました。観劇料いわゆる木戸銭はいくらくらいだったかは覚えていませんが、入口で下足札を貰って入場しました。寒いときは毛布を持参し貸料で「火鉢」を借りた覚えがあります。戦前・戦後の混乱期を経て。**昭和３０年代は空前の映**第５号とありますので数人の方が出資をして旭「旭座雑感」にも書きましたが、**石原裕次郎**主演の**『俺は待ってるぜ』**など歌謡映画、**片岡千恵蔵**主演の**『入れ墨判官』**などの時代劇、吉永小百合主演の『愛と死を見つめて』などの青春ものをよく見たものでした。昭和３０年代半から４０年代、いわゆる「三町目の夕日」の時代は、飯坂温泉も最盛期で連日観光バスの団体が絶えなかった時代です。いま当時を振りかえると懐かしさがこみあげてきます。昭和３０年代後半からのテレビの普及とともに、映画ブームが下火になり、旭座もその役割を終えて取り壊されました。しかし私たち古くからの飯坂の住民の心の中には、昭和時代の温泉地の繁栄の記憶とともに、旭座とその周辺地が醸し出す雰囲気を今でも忘れることができません。旭座の再興は不可能ですが、飯坂温泉の賑わいを少しでも取り戻したいと思わざるを得ません。時間となりましたので終わりと致します。　ご清聴ありがとうございました。

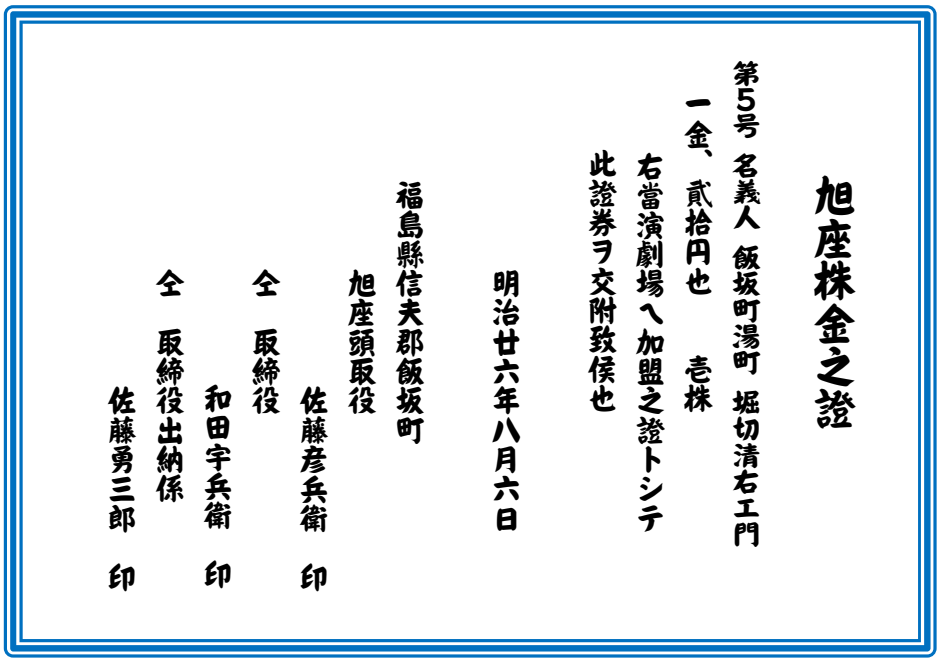
◆　閉　会　点　鐘　　会　長

『 旭 座 展 』雑 感

佐藤　紀和

〔 飯坂史跡保存会機関紙　寿里可美　第１７号に掲載 〕

5月27日から6月30日まで、東邦銀行飯坂支店のロビーにおいて、「旭座展」が開かれ、旭座の往年の写真や映画のポスターその他、旭座ゆかりの品々が展示されました。この企画は、東邦銀行飯坂支店が昭和41年5月に、飯坂温泉駅前（現在の観光協会事務所）から鯖湖町の現在の場所に新築移転してから、この5月で45年になることを記念して催されました。移転前、この場所には**「旭座」**という芝居小屋（後に映画館）があり、長い年月町民に親しまれてきたことは永く飯坂に住んでいる方々ならご存知のことと思います。私も芝居好きな祖母に連れられて、また、小学校の映画教室等で幾度か足を運んだことがあります。今回の「旭座展」の開催に関わったことを機会に旭座の時代を振り返りたいと思います。



旭座株金之證

第5号　名義人　飯坂町湯町　堀切清右エ門

一金、貳拾円也　壱株

右當演劇場へ加盟之證トシテ

此證券ヲ交附致候也

明治廿六年八月六日

福島縣信夫郡飯坂町

旭座頭取役　佐藤彦兵衛　印

仝　取締役　和田宇兵衛　印

仝　取締役出納係　佐藤勇三郎　印

さて、旭座については、そもそもいつ建てられたということすら良くわかりませんでした。平成元年発行の福島市史別巻Ⅶ**「福島の文化」**のなかでは『（福島市内の芝居小屋はまず明治25年に「新開座」が福島駅前に建てられた）福島周辺の町で、興行場としての芝居小屋が設置されたのは、飯坂町の**旭座**が早いようである。明治41年に福島,長岡（現伊達）湯野間の軽便鉄道の開通当時から話題となって、明治45年頃には開場となった。』とありますが、創設年代がよく理解できない記述になっています。ところが、今回の展示物の中に

「旭座株金之證」なるものがありました。それには次のように記されています。

ここには、はっきりと明治26年には複数の人物が出資をして旭座を創ったことが明らかにされています。

しかも、もしこれが株券出であって、旭座が株式会社としてつくられたとすると、日本で最も早い時期の株式会社となります。（ちなみに、日本で最初の株式会社は日本郵船でその設立も明治26年です。）

旭座が明治26年（1893年）にできたとすると、当地域では福島の新開座に次ぐ芝居小屋の草分けであり、閉鎖された昭和41年（1966年）まで、明治、大正、昭和の足かけ74年も存続したことになります。それに加えてもうひとつ、こんな資料がありました。

それは、大正9年9月15日の日付で**「旭座合資会社組織創立」**という書類です。それには、

採進堂	1,500	
本家	500	
自家	1,500	出支

と記載されています。数字の単価は金額（円）と思われますが、本家・自家が何を指すのかがわかりません。（採進堂は湯沢の酒屋でしょう。）合資会社とは、無限責任社員と有限責任社員とから構成されますが、それが誰かも不明で

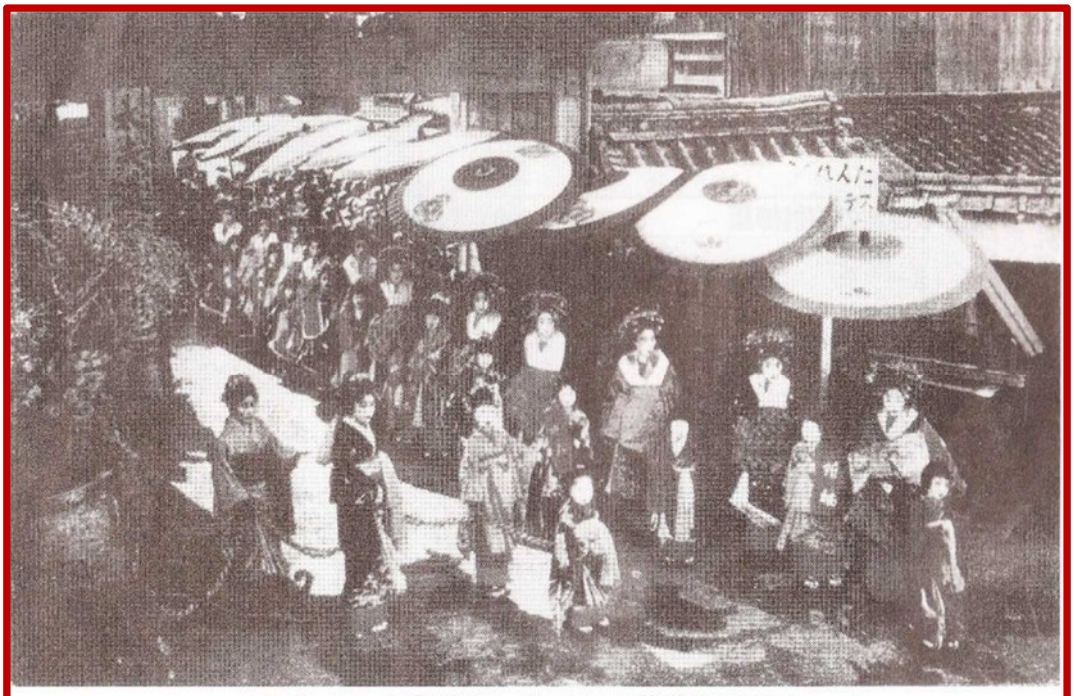


写真４　太夫道中　かつての若葉町遊郭か

太夫（たゆう）道中とは江戸時代後期花魁（おいらん：江戸吉原遊郭の遊女で位の高い遊女をいう）は茶屋又揚屋（花魁と宴席を共にする場所）を禿（かむろ：花魁の世話や雑用をする 10 才前後の少女）や振袖新造（15～6 才の遊女見習い）を従えて数人で行き来する事を花魁道中と呼んでいた。　その後その道中する姿に見せ場的要素を見いだし豪華盛装で練り歩く行列と進化したといわれている。　しかし、地方遊郭には花魁は存在せず、それに準じ遊女『太夫』という名の遊女が生まれ、それが江戸吉原の花魁道中を見習って各所で太夫道中が当時行われていたという。

す。この資料を読むと、どうやら旭座を買い取って改築したような記述があります。そのための資金繰りも記載されています。（「旭座改築決計」なる資料があり、参考までに書くと「改築総支出額は壱萬弐阡八百八拾弐円九拾参銭」とのことです。）また、新装開店したのは大正11年の頃のようです。展示された写真の1枚がそのときの記念写真と思われます。新装開店後の毎日の各種入場券販売枚数を記載した「木戸精算帳」や「金銭出納帳」が残されていたのには驚に、「旭座株金之謹」なるものがありました。常に詳しく、しかも筆で書かれていました。当事のものの値段を知るには、貴重な資料と思われます。旭座の組織とか経営についてはともかく、旭座は、映画を観る機会の少ない時代や、テレビのない時代に、町の人々の娯楽の殿堂として町民に夢と希望を与えてくれたことは間違いありません。

旭座展の資料の中

私も小学校の頃、芝居の興行前日にチンドン屋が町を宣伝して歩いて後を付いていった覚えがあります。昭和30年代の映画ブームの時には、石原裕次郎、美空ひばりなどの歌手が主演の映画、片岡知恵蔵、東千代之介などの俳優主演の時代劇、吉永小百合、浜田光夫主演の青春映画など、よく映画を観たものでした。展示された映画のポスターを見ると、当時が思い出されて懐かしさがつのります。展示物の中には「興行許可届」なるものもありました。昭和15年7月15日の日付で、当時の興行場主・本田寅吉の名で飯坂警察署長に提出されたものです。ここには、芝居の筋書きや出演者の住所・氏名・芸名、料金、さらに「興行ニ火薬其爆発質物品ヲ使用セズ」という文言もありました。展示された写真の中には、満席の客席の様子を写したものがあります。戦争中か終戦直後かわかりませんが、仙台陸軍病院飯坂分院（現在の特老飯坂ホーム）に入院していた傷痍軍人（しょういぐんじん:戦争で負傷し治療入院している人）が招待されていたようです。

旭座界隈は当時の飯坂の中心部で旭座前は町内の慰安旅行の集合場所でもありました。最後に旭座とは直接関係はないのですが太夫（江戸中期から花魁（おいらん、姉分女郎のこと、位の高い遊女）という）道中の写真がありました。若葉町に遊郭があった頃にこんな催しがあったかどうか、本当に飯坂の情景なのか、私には自信がなかったのですが、花岡町の旅館の元女将さんが、実際に太夫道中が行われていたということを教えてくださいました。

かつて「明治は遠くなりにけり……」と言われましたが、いまや大正はおろか、昭和も遠くになりつつあります。昭和30年代後半からのテレビの普及とともに、映画ブームが下火になり、旭座もその役割を終えて取り壊されました。しかし私たち古くからの飯坂の住民の心の中には、昭和年代の温泉地の繁栄の記憶とともに、旭座とその周辺地がかもし出す雰囲気を今でも忘れることができません。「旭座展」を見て、旭座の再興は不可能ですが、飯坂温泉の昔の賑わいを少しでも取り戻したいと思わざるを得ません。　　おわり

〔参考資料吉原関連サイト　監修　佐藤紀和様　　画像挿入　篠木　〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第18回 ～
『 古文書から辿る旧湯野村、穴原温泉の姿 』

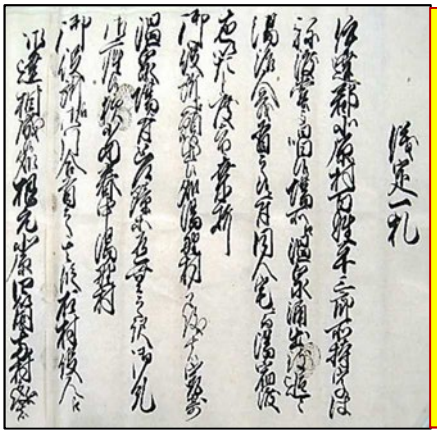
◆ゲストスピーカーの紹介　　会報 広報 委員会　副委員長　　篠木 勝司 会員

飯坂を辿るシリーズ　もいよいよ終盤に差し掛かってきました。第１８回シリーズ目です。現在は飯坂の西線の平野の方からの道がさかえていますが、江戸、明治、大正、昭和の初めは湯野が繁栄していました。その証拠として軽便鉄道が１番早く長岡から湯野まで走りました。飯坂の歴史を見る１つとして記録に残してみたいと思い、今日は研究をなさっている小野さんをお招きしております。どうぞ宜しくお願い致します。

◆ ゲストスピーチ　　福島県文化センター歴史資料課　学芸員　　小野 孝太郎　様

ご紹介いただきました福島県歴史資料館の小野と申します。篠木さんとは資料館で行っておりました湯野村の文書の展示の際にお会いし、お声を掛けていただきました。当館は湯野村の江戸～明治時代にかけての資料を収蔵しており、今回はその中から一部をピックアップしてご紹介したいと思います。話の筋としては、「湯野」というのは全国でも知られた名前でしたが、今はなかなか知られていないところがあります。今一度見直していただきたいと思っております。流れといたしまして、最初は江戸時代の湯野村の概況をご紹介いたします。その後で全国でも知られた湯野温泉のお話をさせていただきます。最後に明治時代の湯野温泉の賑わいをご紹介いたします。

当時の湯野村は、今の地域ですと福島市飯坂町旧湯野町の辺りになります。「湯」という名だけあって古くから温泉が流出していました。また、江戸時代初めには、開墾を行ない耕作地を広げて生産高が上がっています。そして北の山沿いの北原村、そして南側の、摺上川の北岸の丘陵地の四箇村という２つの村を分村した歴史があります。今でも「北原」「四箇」は小字で残っています。このシリーズの中でも刈谷藩の話をしていたとお聞きしていますが湯野村は刈谷藩が統治していた村です。それに対して北原村、四箇村、上飯坂村（今の飯坂町）は福島藩や白河藩、幕府代官などから統治を受けていたので異なった支配になっています。明治の初めになりますと湯野・北原・四箇の３村が合村して元の湯野村になっています。その後、東湯野と合併や分村を繰り返して、最終的に湯野村から湯野町そして昭和３０年に飯坂町と合併して飯坂町湯野という変遷を辿っています。



儀定一札
北原村百姓平三郎所持の土地より温泉涌出致し、追々湯治人も有り候に付、同人宅にて湯宿経営致し旨承折御役所へ願出候・湯宿経営の儀は前願出の平三郎に限らず同稼者相増し候も共差し構無き候・又温泉入湯人より取り集め候、湯銭内より、年々銀三匁、三ヶ村鎮守の新狐明神修復料に備え、其余りは温泉世話料として平三郎に取らせ湯野、北原、四箇の三ヶ村共、いささか申し分無く熟談候也
弘化四年七月　一八四五年江戸末期

江戸末期に初めて穴原集落に温泉宿経営が出願された古文書

それでは、江戸時代の湯野村の概況をご紹介いたします。はじめに天保７年（１８３６年）に描かれた村絵図（次頁参照）をご覧いただきます。村絵図とは江戸時代の絵地図で絵と地図の中間のようなものです。一般的な村絵図にはたくさんの情報が込められていますが、湯野村は村の規模自体も大きく、とりわけ多くの情報が込められています。村絵図は必ずしも上が北に描かれませんが、この村絵図ではたまたま上が北になっています。北部の山地は野中山や御在所山、茂庭へ続く山々です。この辺りは緑色で、険しい山々が描かれています。

また、西の方には太い青色線が描かれており、これが摺上川です。摺上川は北西から南東にかけて流れており、川の中には築場（やなば）というものが幾つか置かれています。江戸時代の摺上川は今以上に水量が多く、清らかな川だったので川魚がよく獲れました。特に鮎がよく獲れたので、鮎を獲るための築（ワナ）が仕掛けられていました。築は木や竹を簀子（すのこ）状に組んで、川の中を行き来する魚を川の流れを利用して打ち上げさせて捕獲する仕掛けです。これが絵図の中には３ヶ所造られています。次は赤い線ですが、これは道を示しています。多少は今の道なりを辿ることができますが、特徴的なのは現在の十綱橋の辺り、摺上川の上に赤い線が引かれています。これは実際には橋が架かっていたのではなく、渡し船を利用して飯坂・湯野の間を往復する交通網を示し

【　江戸時代 後期の筆書き 湯 野 村 絵 図　】

江戸時代後期の地図と現代の地図との比較

〔A 参照〕この村絵図は、天保 7 年 6 月（1836）に作成された記録があるが、明治 5 年正月に古記連名の上に、割印をもって新たに連名で書き換えられている。当時湯野村は三州刈谷藩の飛び領だったので福島県に変更になった時、湯野村代表が連名で署名捺印して県に提出した村絵図と云われる。

又、1810 年頃半田銀山が、再び銀の良鉱が発見されて鉱業隆盛を極めたが、当時米沢藩から半田村への最短距離は、山深い厳山の連なる茂庭からの人と馬だけの通る半田道（絵図上部）だったのであろうか。

ています。また、黄色に塗られた部分があります。これは湯野村の耕作地及び屋敷地です。また、湯野の茶色に塗られている部分は北原村と四箇村の範囲になっています。**北原村**は湯野村の北側に所在し、西部の摺上川沿いに飛び地があります。**四箇村**は湯野村の南側に当たります。北原村の辺りには米沢川（現在の米川）などから取水した溜め池が幾つも築かれています。飯坂町湯野の国土地理院の地図を見て

いただくと幾つもの溜め池が見られます。これは江戸時代から受け継がれてきた溜め池なのです。山あいの所々に赤い点々が描かれていますが、これは**野漆**（のうるし）といって自生している漆です。漆は商品作物ですので、お殿様や代官の許可なしでは勝手に切ったり売ったりしてはいけないということで、この場所を明確に赤い点で記しています。あとは、ちょっと判別しづらいですが灰色の部分もあります。例えば摺上川沿いや東部の辺りです。これが摺上川越しの上飯坂村の飛び地や板谷内村の土地です。そして、家のマークもかかれており集落を指しています。日光院や薬師堂も描かれており、**山伏が住んでいる所も２ヶ所**描かれています。不動寺も記入されていますが、不動寺の脇には３ヶ村鎮守の**新狐明神**（現稲荷神社）も描かれています。改めて摺上川を見ていきますと、川から２本の青い線が東の方に伸びています。これが摺上川から取水した**西根上堰・下堰**です。江戸前期～明治時代にかけての生活・農業用水として重宝されていました。両堰はそのまま東に伸び、阿武隈川左岸（西根郷）を潤しています。また、現在の十綱橋の辺りには３軒の湯家が描かれていますが、これが湯小屋です。あとでお話ししますが、**切湯、狐湯、仙気の湯**の**３共同湯**です。この絵図は天保７年（１８３６年）に描かれていたものですが、この絵図には穴原温泉が描かれておりません。この頃には湯が流出していたとみられますが、絵図にはまだ登場してい

江戸末期の全国有名温泉一覧、**相撲の番付**式で表した一覧表、奥州飯坂湯と伊達湯の村湯のニケ所が表示され当時の繁栄が偲ばれる。
これを見ると各地温泉の効用が表され当時の日本の湯治文化が栄えていた様子が分かる

古文書解読欄

湯野温泉全図

湯煙たつ里の地
花咲く半田峯のすその湯煙たつ湯野村の地は高燥に風清く気候温和で地味さいも豊かにして桑折を西に一里半福島北へ二里半餘りなる古き山里なれど、名のXXの温泉場入り来る人も繁きものおのずと道も開け開けて車馬も行き来して……

と医王寺の歴史の事柄、西根堰の偉業姿など詳しく湯野温泉近郊の案内説明が綴られている

湯野村鉱泉効能書

橋本湯（一名仙気の湯）効能

切湯効能

狐湯効能

穴原温泉全図

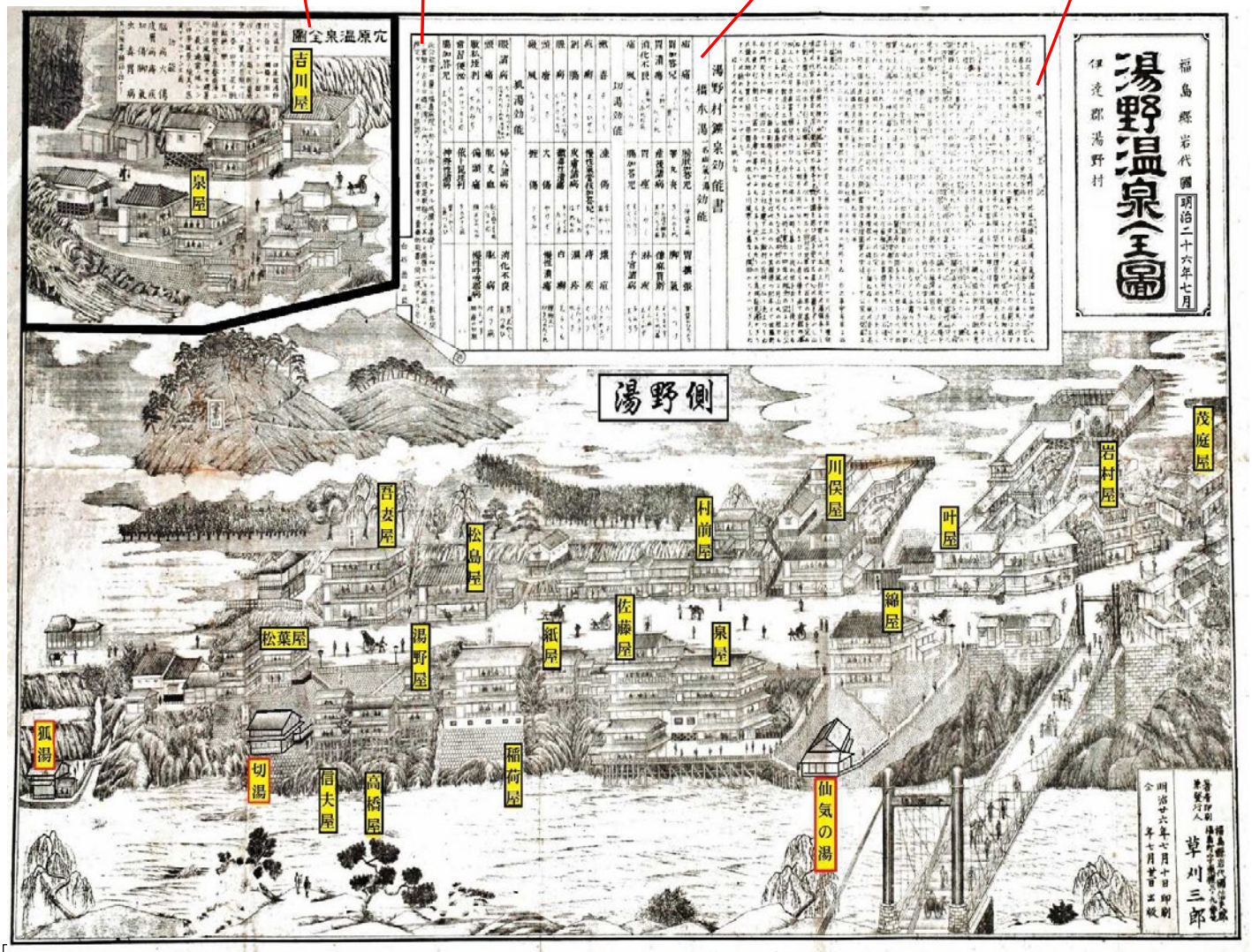
穴原温泉ハ伊達郡湯野村ニアリ十綱橋ヲ距リ僅カ十七丁ニシテ摺上川ノ急流ニ臨ム断巌絶壁川ニ接シ美景頗ル佳ナリ　春ハ四方ニ春ヲ眺メ鮎漁ノ楽アリ夏ハ緑樹繁茂シ泉声南漢ニ吟シ涼風吹キ避暑ニ最モ適当ノ地ニシテ四季風景ノ絶美ヲ感賞セザルハナシ云爾

効用
脳病　火傷　疼疾　切傷
脚気　虫毒　胃病　皮膚病
其他梅毒ノ一切ニ効アリ

此ノ効能書ハ先ニ福島病院ニ於テ分析セラレタル成績ヲ基礎トシ加フルニ余ガ数年間ノ実験ト古キロ碑ニ伝ワル所モッテアレコレ取捨シテ適応スベキ疾病ノミヲ選定セシメ敢テ誤謬ナキヲ信ズ

白石西三　記

A



この**湯野温泉全図**は明治中期（明治 26 年）頃の旧湯野村の原状を察することができる貴重な絵図であり文質も江戸時代の名残がある。昔からの共同浴場の効能表示がこの様に表示、そして周知されていたと言う事は、江戸時代からの湯治客の繁栄があったのであろう。

明治 20 年鉄道が開通、明治 32 年に『*汽笛一声新橋に…*』の鉄道唱歌が発表され 24 番に『*長岡おりて飯坂へ…*』と当時歌われていて**長岡駅**（現伊達駅）は湯野、飯坂温泉繁栄の玄関口だったのである。明治 41 年には軽便鉄道が長岡～湯野間が開通、又湯野、飯坂温泉は信達地方の生糸産業繁栄も効をなし大正時代に増々繁栄、そして東北の歓楽街と進化し続けるのである。

A　参照明治時代中期の医療環境を推察することができる。

ません。北部の山中にも道が描かれていますが、どうして山道が描かれているかというと、山林資源が非常に貴重なものであったことが影響しています。北部の山地は湯野村だけではなく、茂庭村のほか、湯野村よりも東部の村々など１０数ヶ村が共同利用する入山の山道で、その情報も重要でした。山地から切り出した木材には、摺上川に流して運搬する**「流し木」**という慣習が利用されていました。江戸時代の後半以降は、**西根上堰・下堰**を利用して流すようになり、桑折の宿場、藤田の宿場、その辺りの宿場までこういった木材が堰によって運搬される慣習が行われていました。このように、この村絵図は村の様子や生活背景、かつて行われていた慣習、及び現在

に通じる町並みなど**情報満載の絵図**になっています。

加えて、江戸時代中期ごろの村明細帳をご紹介します。村明細帳というのは、今でいうところの村勢要覧になります。村の主な概要をざっと紹介したものです。湯野村の生産高は、村高１８３７石となっています。石は米で表す生産力です。ちなみに上飯坂村の方は２千石あまりで、大体同じぐらいの生産力がありました。戸数ですが**１９５軒**の家が建っており、人口も**８９５人**とあります。江戸時代を研究している人からみますと、生産力、人口も大きな方の村です。

また、この湯野村は宿場ではありませんでしたが、町場として発展していた村とみられます。その証拠に、色々な職業の人が暮らしていました。江戸時代は基本的には百姓が中心ですが、**村明細帳**を見ていきますと湯野村には、木挽（こびき木材加工）、桶屋、大工、石工、鍛冶屋、紙漉（かみすき）きといった職人が暮らしています。この紙漉きは楮（こうぞ）を利用して和紙を作る仕事ですが、伊達地方の名産で、湯野村でも非常に盛んだった産業です。あとは魚屋、鳥猟師、川漁師もいました。また、男性は農業の合間に紙漉きや薪取りを行っていたことも記されています。その他に目を引く所では商品作物も結構作っていました。楮（こうぞ）、蚕、紅花を作っていました。更にちょっと驚くことは**「他国商人」**という情報も記載されています。他国商人というのは、遠くまで出かけて商売をする人です。何の商売だったかというと蚕種紙売りという商売です。蚕種紙売りというのは蚕の卵を紙に植え付けて販売する人です。

どこまで出かけていたかというと**上州**（現在の群馬県）、**甲州**（現在の山梨県）、**羽州**（現在の秋田・山形県）、遠くは**信州**（長野県）まで出かけて商売をしている人たちが６人も暮らしていました。また、魚がよく獲れるので五十集（いさばや）という魚の卸問屋も暮らしていたと記載されています。**村明細帳**で他の村と変わっているのは温泉が２ヶ所湧出しているとの記述がありました。村絵図には３ヶ所湧出しており、村明細帳には２ヶ所と異なっていますが、実は先ほどお話した**狐湯**、**切湯**、**仙**(むかしは疝と書ていた)**気の湯**の内、切湯は北部の山間の北原村の管理下にありました。そのために、湯野村が実際していたのは狐湯と仙気の湯でした。２つの湯小屋は、摺上川沿いの切り立った所にありました。川が増水してくると温泉にも被害が出ていました。また、湯にはいる所へは道側から降りないといけないですから、降りる所には手すりが設けられています。この手すりの維持管理のために、周辺の村々から米を徴収していた事が記載されています。こういったように村絵図や村明細帳を眺めると、湯野村はさまざまな資源やそれを生業に活かした職人が暮らしており町場として発展している様子が見て取れます。以上が江戸時代の村の資料から解る湯野村です。

次に全国でも知られている湯野温泉についてご紹介していきたいと思います。江戸時代の末期に出版された**『東講商人鑑**（あずまこうあきんどかがみ）」と呼ばれているものがあります。「東講」の「講」はグループですが、これは旅人の旅行を安全で安心な旅にするために作られたものです。東講が保証し旅人に推奨する旅館などを紹介したガイドブックです。全国の旅人もこの絵図を見て、遠く奥州を思い浮かべたりしていました。このガイドブックの中で、県北地方で唯一描かれているのがこの湯野温泉、飯坂温泉と医王寺です。湯野村温泉で東講が推奨するお宿は「叶屋文作」「川俣屋重兵衛」「松葉屋勇七」の３つの宿です。

また、川沿いには３つの共同湯小屋があります。「狐湯」「切湯」「下の湯（疝気の湯）」です。それぞれに効能があり**狐湯は一切に良し、万病に良い**とあります。**切湯は切り傷に効**きます。**下の湯は疝気**（昔の病の一種,現代の神経痛か）**に良し**とあります。また、左上の方には愛宕山が描かれています。こういったガイドブックもありますし、あとは「旅行用心集」という旅人に向けて旅の案内や心得などを記したものに、湯/村温泉と狐湯が全国に紹介されています。これだけでも**全国に知られた温泉**だったのですが、さらに嘉永５年（１８５２年）の「温泉功能鑑」という資料があります。

これは相撲の番付に見立てて全国の温泉を紹介した物です。当時は横綱という階級がありませんので大関が１番上にあります。東の大関は上州（現在の群馬）草津温泉、西の大関は摂州（現在の兵庫県）有馬温泉を筆頭として列記しています。福島の温泉としては左上の方に「陸奥嶽の湯（岳温泉）」が最上位です。続いて「会津天仁湯（東山温泉）」、「岩城湯元湯（いわき湯本温泉）」、「奥州飯坂湯（飯坂温泉）」、「会津熱塩湯（熱塩温泉）」、そして「伊達湯/村湯（湯野温泉）」、最後に「会津瀧の湯（東山温泉の一部）」が記されています。全国で９０数ヶ所の温泉が記されていますが、福島の温泉は７ヶ所も取り上げられています。そして、飯坂温泉と非常に距離が近い温泉でもあるにもかかわらず、湯野温泉が個別に認識され、全国に紹介されていたのは驚きです。それだけ湯野村の温泉には非常に多くの人を訪れていたのでしょう。当時は観光で来るというよりは**治療・療養で来る人**が主です。湯野村温泉に対して治療・療養に期待する度合いが高かったとも言えます。以上のように湯野温泉は、全国でも知られた温泉でした。あと紹介しておきたいのは湯野温泉に加えて、湯野温泉に付随するように描かれ

古文書解読欄

ることが多いのですが、穴原温泉の資料も残されています。これは弘化４年（１８４７年）の「儀定一札之事」という古文書です。儀定というのは村の中での取り決めです。北原村の百姓の平三郎さんが、所持する字刎渡堂（はねわたどう現在の穴原地区）という土地、今でも地名で残されていますが、そこから温泉が湧き出しており、次第に湯治客が

川沿いから見た、現在の吉川屋旅館全景、上記穴原真景図と比較すると・・・・

だんだんと訪れるようになってきたため、平三郎さんのお宅で温泉宿を経営したいと桑折役所に願い出たものです。ただ、新しく温泉宿を経営するのは非常に難しく、湯野村には既に温泉街があります。さまざまな障害となる可能性があるため、新規参入は結構もめてしまうのです。本件では、仲介もあり、湯野村、北原村、四箇村の３ヶ村間で、平三郎さんの温泉宿の経営が承認され、平三郎さんに限らず温泉旅館などを経営し

たい人達が増えた時の参入が認められました。さらに、温泉に来た人達から入湯料を集め、年々銀３匁を３ヶ村鎮守の新狐明神（現稲荷神社）に修復料として納め、残りは温泉世話料として平三郎さんが収得することも決められました。

大切なことは、これ以前に穴原温泉では湯が湧き出して使用されていましたが、温泉地として認知され、開発の着手が行われ、そして、温泉宿経営など温泉に携わる人たちを周囲が歓迎する立場を示したことです。

この一件が無ければ穴原温泉の発展は無かったかもしれません。この**古文書は穴原温泉を語る上で非常に貴重な資料**です。このように江戸時代でも全国に知られた湯野温泉ですが、明治時代に入るとさらに多くの人が訪れるようになります。

その１つには、交通網が整備されたことにあります。明治６年（１８７３年）には今の十綱橋が架けられて、その後の大正４年（１９１５年）には鉄橋になっています。明治１０年には中野・長岡間に新しく新道が築かれました。明治１７年には湯野・成田間に新道が築かれ交通網が整備されました。

また**明治２０年には東北本線の長岡駅**が出来ました。今の伊達駅です。そういった交通網も築かれて、明治４１年には軽便鉄道が福島・長岡・湯野間に開通しました。更に大正１３年には飯坂電車株式会社が、飯坂西線を開通し福島駅から今の花水坂駅まで繋がりました。それらと競い合うように、大正１５年には福島電気鉄道株式会社が、軽便を電化して、近代化の交通網が敷かれました。明治３８年には日露戦争の**傷痍軍人が傷を癒す場所**として**飯坂・湯野温泉が指定**されました。

こうした過程の資料としては明治２１年に**「福島県鉱泉誌」**が作られ、湯野温泉についてこう記されています。『*人、〆時絶える事はなし……*』非常に多くの人達が湯野温泉を訪れていたとあります。**１年間で３万４～５千人**は来ていたと記録されています。簡単に比較できませんが、同じ本の中では飯坂温泉の方は**明治１２年頃だと１万６～７千人が**来ています。飯坂温泉と比べて**当時は倍近くの人々**が訪れていたということが分かります。

こうした状況の中で書かれた絵図もあります。例えば、明治２６年には「湯野温泉全図」という銅版画です。手前の方に摺上川が描かれていて道沿いには温泉旅館が並び、１軒ずつ旅館の名前も記されています。切湯、狐湯、疝気の湯が描かれています。また、湯野の名産や風光明媚な所も紹介しています。その左には湯野温泉の効能も列記しています。さらに愛宕山が描かれていて、左上には穴原温泉の様子も描かれています。ここには「泉屋」や「吉川屋」も描かれています。これは広告として売られていた物です。また、これも穴原温泉の広告になりますが、明治後期に作られたもので**『穴原真景図』**という石版画があります。石版画はまるで描いたように非常に細かく表現できる版画です。**吉川屋さんが支店を新たに３階層とした落成記念**に、この広告を出したと記されています。（前頁参照）真ん中を流れているのが摺上川で散策をする人達も描かれています。川を挟んで右側が吉川屋さん、左には天王寺温泉が見えます。この中で吉川屋さんは、共同浴場に近く描かれており、多くの人が訪れ繁盛しており改装を行ったと記されています。

このように宣伝広告からも湯野温泉、穴原温泉が広く知られ、繁盛していたことをご紹介させていただきました。今一度、湯野・穴原を見つめ直していただければと思います。以上で終わりたいと思います。

ありがとうございました。

〔監修 小野様　画像挿入 篠木〕　◆閉 会　点 鐘　会　長

〔　古地図 及び 古文書資料は ゲストスピーカーの県文化センター歴史資料課　小野様より提供させて頂きました。〕

飯坂の歴史を辿る　～ シリーズ 第 19 回 ～

『 今、初めて明かされる館ノ山 “大鳥城” の面影 』

◆ゲストスピーカーの紹介　　飯坂ロータリークラブ広報会報委員　　佐藤喜市郎　会員

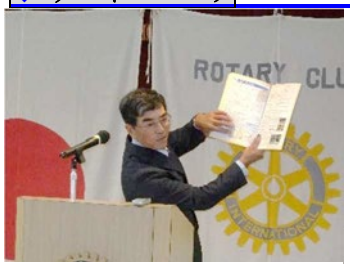
歴史を辿るシリーズは、三年前に**第1回** として 「 **刀から辿る旧湯野村三卅刈谷藩陣屋の姿** 」ということで、我々が飯坂にいても分からない歴史の話に興味が出まして、そこからこのシリーズが始まりました。

今回は **シリーズ第19回** になりました。シリーズの中で飯坂の歴史として避けて通れない史は**大鳥城**だと思います。昔は丸山と呼ばれていたのですが、大鳥城の姿はどんな姿だったのだろう、と思いを馳せます。

大体 1130 年頃の話になりますから、飯坂の人々には今まで詳しい歴史の資料もあまり無く、城は有ったのか無かったのかの想いで “ **幻の大鳥城** ” というようなイメージもあります。

今日ゲストスピーカーにお招きしました但木さんは幻の大鳥城を色々と専門的に調べられておられます。今回**新しい絵図が大分県で発見された**といわれていますので、その辺についても詳しくお願いいたしたいと思います。　それでは但木さん、宜しくお願いいたします。

◆ ゲストスピーチ　　福島市文化財保護指導員　　但木 秀徳　様　(2017..5..25.)



書にて説明しながら“幻の大鳥城”の姿の全容を説明するゲスト スピカーの但木さん

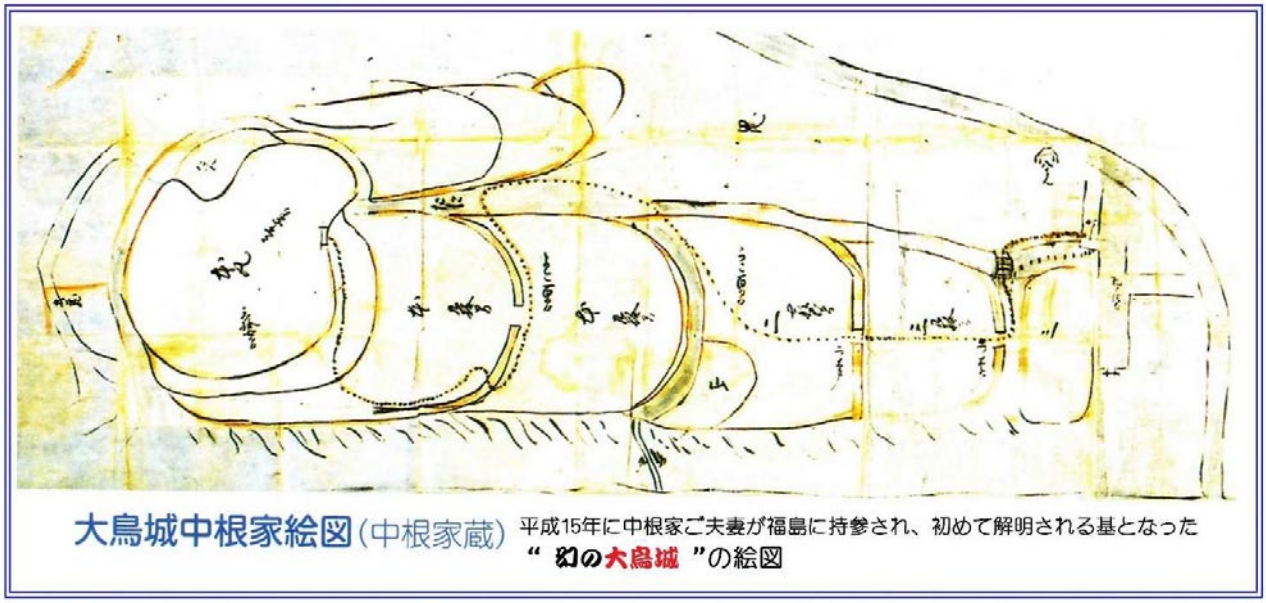
皆さん、はじめまして。私は福島市文化財保護指導員の仕事をさせていただいております但木と申します。宜しくお願いいたします。私は仕事柄、飯坂町の三大史跡は何だろうかと考えるのですが、私なりに考えますには、**１っ目**は平安時代初期の古代寺院でありました『**西原廃寺跡**』です。ここは昭和４６年に発掘されたのですが、その結果、南北二つの建物基壇跡が出土されました。北方基壇は７間（約２１m）×５間（約１５m）（当時、柱と柱の間が１０尺約3mの長さ）で大変大きい御堂跡でした。法隆寺の金堂よりも大きいということで新聞にもかなり大きく載り話題になりました。発掘の結果、ここは「**類聚国史**」(平安前期の 200 巻の歴史書で官撰の史書記事を神祇、帝王、歳時、音楽等に分類、年代順に編集したもの)という書物に出てくる古代寺院の菩提寺に指定されていました。菩提寺は８３０年に**定額寺**（国家の補助が入ったいわば準国分寺）になりました。定額寺では「鎮護国家」といいまして仏教の力を借りて国の安寧を図る祈願がなされていました。そこには定員１６名の定額寺僧という通常よりランクが上の僧がおりました。遣唐使の招来した金光明最勝王経を読誦していたといわれています。西原廃寺には現在のお寺とは違い墓地はありません。現代的にいえば**総合大学**だったのです。仏教教学に加え、医学、天文学等を勉強していた僧がいた（山坊、白山坊、薬師坊、暮津坊、太子坊など僧坊らしき地名が、昔残っていたといわれています）と考えられます。ですから、この信達の地に一大文化センターが出来でいたとおもわれます。

２っ目が今日お話をさせていただきます平安時代末の『**大鳥城**』です。**３っ目**は、江戸時代元和４年（1618 年）に出来ました「**西根下堰**」。　寛永元年（1624 年）より９年かけて出来ました「西根上堰」です。この二つの堰完成のおかげで現在９００ヘクタールの水田受益面積があります。当時において堰の工事によって大きな経済効果のあった大事業だったと考えております。

今日は**大鳥城**のお話をさせていただきます。話のポイントは２点あります。**第一点**は大鳥城の城郭の構造はどうであったのかという点。**第二点**は、ここに居館したであろう**信夫佐藤氏**はどういう推移を辿ったのかという点です。特に継信忠信の父にあたる**佐藤庄司基治**を中心にお話をしてみたいと思います。

大鳥城の城郭については、今までどういう構造だったのか分からない点が多かったのです。大鳥城は天元２年(1157 年)佐藤基治が築城したといわれ(吾妻鑑、信達一統志にて)　築城のとき生鶴を一羽城の中央に埋め、城の守護神とした。故に大鳥城といわれるという伝承があるようです。

舘ノ山頂上に平場がありますが、その周囲にぐるりと道路が回っております。あれが**帯郭**(おびぐるわ)といわれてきました。西の方には**土塁**（どるい．土を積み上げて築いた館や城の砦、又防御用土手）といって四方形に土手が高くなっている所がありますが**矢庫**（Ａ。大鳥城複合図参照）といわれるスペースです。東に下がって**二ノ平**という平場があります。本丸を中心にそこに付帯的に**郭**(くるわ)がついているというのは複郭式城郭といわれておりま



大鳥城中根家絵図（中根家蔵）　平成15年に中根家ご夫妻が福島に持参され、初めて解明される基となった“幻の大鳥城”の絵図

す。「福島市の中世城館」（福島市教育委員会）という本にも複郭式の城郭と出ています。しかし最近、「中根家絵図」という大分県の中根家が所有していました絵図から見ますと、城の形が今まで想定していたものより形の違う連郭式の城郭だった時があることが分かって参りました。

〔この絵図についての沿革をお話しますが、平成 10 年 10 月に姫路城が世界遺産に登録されて５周年を記念して、姫路城絵図展が開催されました。その中に中根家所蔵の 1.12ｍ×1.26ｍの「奥州桑折之図」と 1.56ｍ×1.06ｍの「奥州福島之図」があり、このことを知った桑折町教育委員会が平成１３年に大分市の中根家宅を訪ねたそうです。

それは姫路城の姫路城絵図が１５点ほど展示されたそうなのですが、その中に桑折の西山城の絵図があったそうです。それで当時、桑折町で西山城の整備計画を立てていたので、絵図をぜひ見たいということで行ったそうです。翌 14 年に、その絵図の中に福島城下絵図もあるということで福島市教育委員会文化課の係長さんと鈴木啓先生（福島市文化財保護審議会委員、元福島県考古学会会長）で中根家宅を訪ねられたそうです。

そんなこともあり、平成 15 年になりまして、中根ご夫妻が昔あったふれあい歴史館においでになり、福島関連の絵図を持参されたそうです。そこに鈴木啓先生も参加されたそうですが、中根さんが『*この絵図はどこのものでしょうか*』と尋ねられたものがありました。鈴木啓先生はそれを見て一目でこれは**大鳥城の絵図**だと分かったそうです。それは舘ノ山頂上部分が平場になっているのですが、上から鳥瞰的（ちょうかんてき。空中から鳥が地上を見下ろしたように見ること）に見るとキノコの形をしているそうです。それですぐ分かったと話されました。

この中根さんのご先祖は、**徳川四天王**である本多忠勝家の家老職を務められた**忠実**の末裔です。忠実の実父は織田信秀（信長の父）であり、妻が忠勝の妹ですから本多家では厚遇されたようです。本多家は江戸時代転封が１１回。今でいう転勤族のような大名です。その間に収集した３３９点の絵図があるそうです。

福島には延宝７年（1679 年）に**福島城主**として来ています。当時、福島城を桑折の西山城付近に移そうという計画があったそうですが、転封により姫路に移って実現しませんでした。この間、おそらく**大鳥城絵図**も収集されたのではないかと考えられます。〕

７年ほど前ですが、私は所用があり、鈴木啓先生宅を訪れた時がありました。その時『あなた飯坂だから、**大鳥城絵図**の写真があるのだけど見ますか』と先生から言われました。私は即座に『それはぜひ見せて下さい』と返事をしました。先生は書斎からその写真を持ってこられました。これが**中根家絵図**といわれる物でした。

ちょうど城全体が鯨のような形をしていました。頭のところが本丸で、これはまったくその通りに残っています。この写真を借りてきまして複写をし、舘ノ山の地図と二つを持って行ってだいぶ舘ノ山に通いました。分かる点、分からない点多々ありました。ちょっとお話をしますと、この山頂の本丸の図はそのままの形で残っています。本丸平場の南東に**坂虎口**（登り入口）（Ｂ大鳥城複合図 参照）があり、今も絵図と同じように残っています。この上り口に**冠木門**があったようです。冠木門というのは柱２本を立てて上の方に横に柱材を渡した簡単な門です。頂上の本丸から東に向かって**二段の平場**があります。絵図では土塁で画されていたようです。行ってみますと、現在はその痕跡はありません。この**二段**まで(本丸拾間､記の部分)が**本丸**です。この本丸の下に大きい**空堀跡**（Ｃ）があります。尾根を断ち切る堀切です。私が鈴木先生宅で見た中根家絵図が信憑性があると思ったのは、まさにこの堀切（Ｃ）があったからです。前にも舘ノ山に行った時、これが自然の地形なのか、人工的な空堀りなのか確信がなかったのです。しかし、この写真を見て即、空堀があったのだと確信しました。この堀切の東側の尾根には**二の丸**と**三の丸**がありました。だから全部で**六段**になっています。こういう

ことは、段を画する土塁も残っていませんでしたので、今まで分からないで来たわけです。
現地に行って今でも絵図のように残っている所を三ヶ所ほど述べてみます。まず一つ目本丸の北と南にある堅堀状地形（Ｄ）と （Ｅ）です。特に南側は深い沢になっていて杉林です。ここは元々の沢を利用したのか、人工的に掘って侵食されたのか分かりません。北の沢は浅く、人工的な堅堀構築の可能性があります。二つ目

は、今の大手門の駐車場より登る歩道（F）です。ここはかつての空堀の跡です。ここから下に野球場を通り、大鳥中学校のグラウンドの方に延びていたようですが、今は痕跡はありません。しかし本丸に通じる歩道は、自然地形も利用しながら空堀として機能していたようで、本丸と二つの平場の間の雑木林の土手にも堅堀状の痕跡があります。そしてそこを上ると本丸平場下の道路に出ますが、この北半分は本丸を守る空堀跡のようです。

三つ目は本丸の西にある矢庫（土蔵）跡（A）です。ここは絵図にある四方形が、土塁として明瞭に残っています。さらに本丸の北側に三段の**捨郭**（G）があったようです。今は雑木林、竹林となり行きにくくなりました。ここは、**北の防禦**のため戦時兵を置く郭でした。土塁の構築はなく柵のような施設はあったかもしれません。攻められれば撤退を前提にした郭のようです。

この大鳥城は東西に約 780m あるそうです。頂上が 230m。下から上までの高さ約 120m。本丸から東に延びる**尾根を利用した山城**です。この尾根の南側は急な崖になっています。切崖といいますが、多分城を造った時に人工的に施工したと考えられます。敵がよじ登ろうとするのを阻止するのです。ですから大鳥城の南側の坊禦線は大変優れているので、もし敵が攻めてくる時は北から攻める可能性が高いのです。

さて、この**中根家絵図はいつ頃のものか**という点です。絵図に「**土蔵**」「**田代**」と出ています。鈴木先生は古い時代に使われた言葉なので、この絵図は古いとおっしゃっていました。中世の絵図だろうともおっしゃられました。中世は鎌倉から戦国末まで、それこそ４００年もあるのです。**文化課の係の人と話してみると中根家絵図は戦国時代だろう**というニュアンスでした。私もそういう認識ですが、それを確かめるにはやはり、発掘して時代を特定出来る遺物が出土するのがカギのようです。**今の段階**では**中世の絵図**（1190～1580 年頃）と捉えておくべきだろうと思います。発掘は何回か行われております。昭和４７年や平成６年あたりに大規模に行われました。発掘から出土する遺物を見ますと、１４世紀後半、１５世紀から１６世紀の遺物が出ているそうです。ですから、**大体二度にわたってこの城が拡充され**ていったと考えられます。そうしますと、先ほど言いました**佐藤基治**（1113～1189）は１２世紀後半の方ですから、その時代の遺物がまだ出ていないのです。 佐

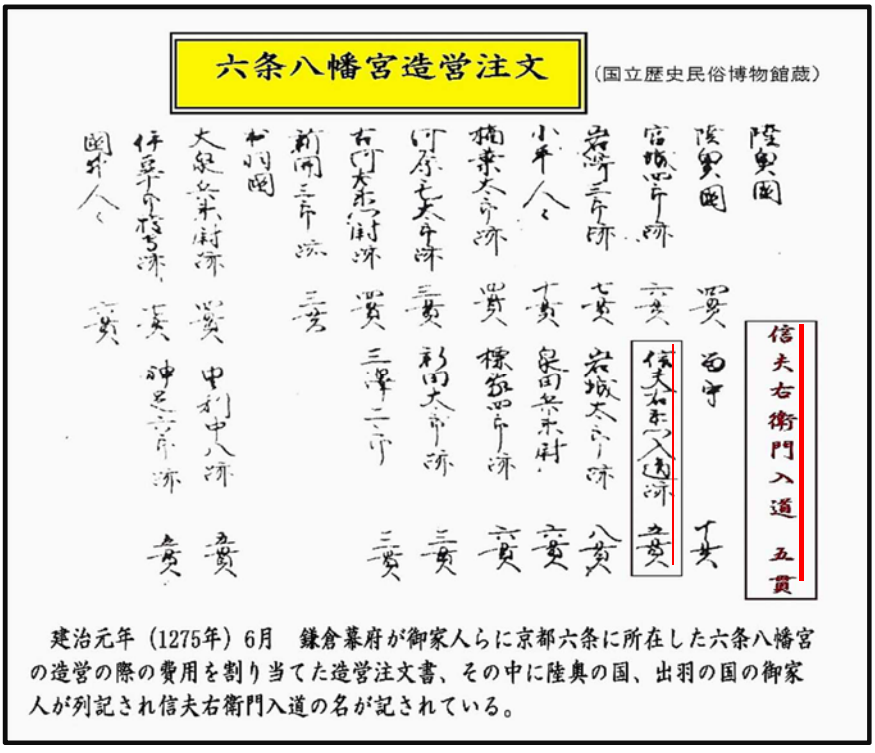
〔 画像は山城関連ウェブサイトより参照しました 〕

1180年頃の**見張り櫓門**（みはりやぐらもん）この時代は木造造りが主で色々な防御施設には木が主流であった。その後1550年頃鉄砲伝来によって、城の建築様式も変化して、現在残されている様な城の形態に進化したといわれている。

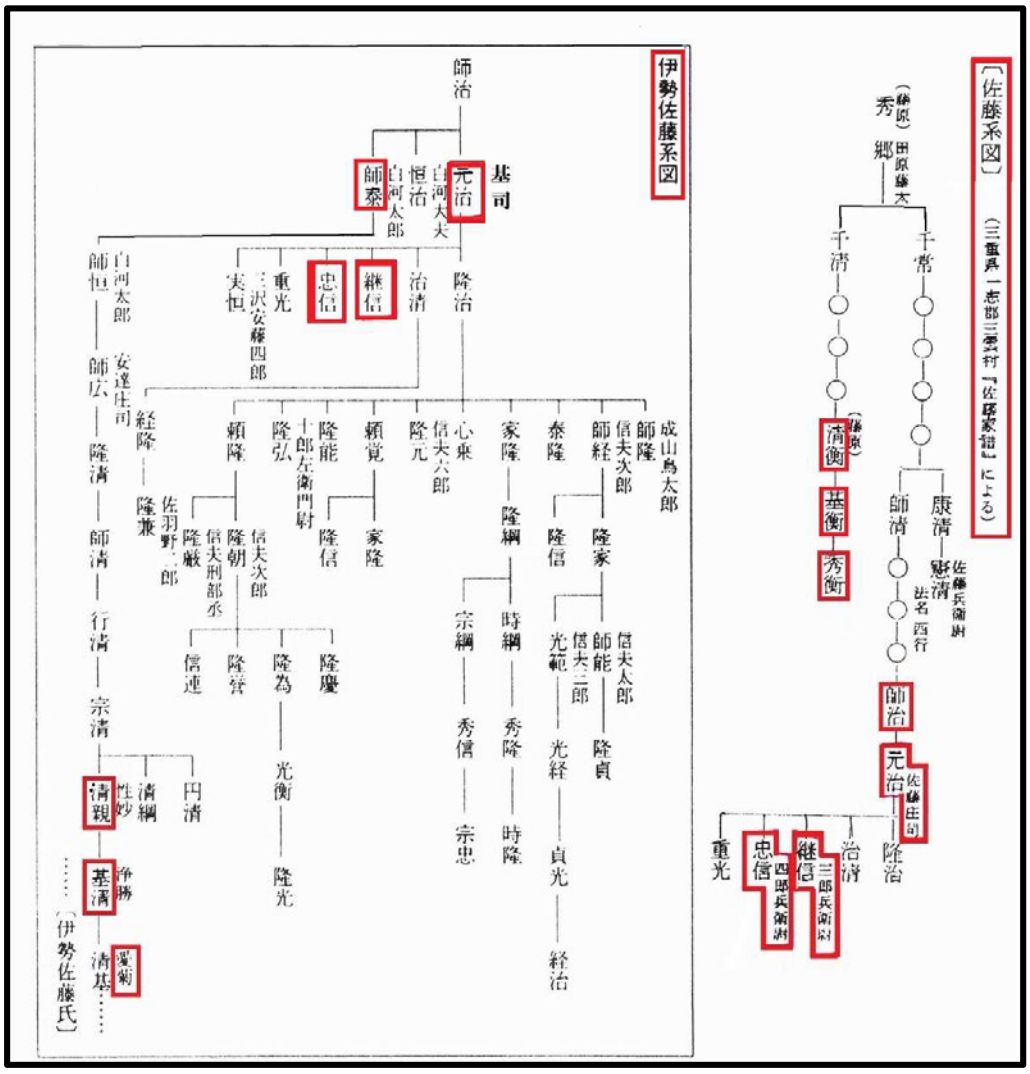
藤基治はどこにいたのだという話になるのですが、おそらくは大鳥中学校、グランドや校舎の周辺が想定されます。そこが平時における**根小屋**（ねごや。城のある山麓の館を中心とした集落）で、舘ノ山頂上は当時、現在のような平場ではなく、山なりの地形をそのまま利用して、戦時は小屋程度をつくり、そのスペースぐらい平場にし、辺りに柵ぐらいあった程度ではなかったか。中世の武士の館というのは、**安土城**や**姫路城**や**会津鶴ヶ城**のような**五層の天守閣のある城**ではありませんでした。それこそ、堀が回っていて柵や土塁で回りを囲む一辺５０ｍから１００ｍの方形館が多かったのです。中に母屋があって物置や**厩**（うまや）などがあった程度です。ただ佐藤氏は、信夫の庄司ですから、もう少し堅固な館を構えていたと思いますが、前ページの**イラスト**は中世の城はこんな感じなのかなとイメージを持ってもらうために表示してみました。**中根家絵図**はおそらく佐藤氏の時代ではない、もっと後の時代だと思います。

平安時代末、文治５年(1189年)に**奥州合戦**が起きます。佐藤基治一族が大鳥城や信夫庄に居館していた時です。鎌倉の頼朝が平泉藤原氏を滅ぼすために北上してくるわけです。旧暦７月１９日に鎌倉を出発して、藤田の**源宗山**（げんしゅうやま 国見小学校より西100mにある藤田城跡地、現在公園になっている）に８月７日に着陣します。８日から厚樫山から延びる二重堀と旧奥州街道との交わる**奥大道を中心に戦い**が始まります。その時、佐藤一族は現在の福島大学の北、石那坂周辺において、鎌倉軍の中村念西一族（伊達氏）と合戦に及びます。激戦の末、佐藤氏一族は１８人の首を切られ、厚樫山の経ヶ岡という所にさらし首にされました。ただ、**吾妻鑑**という鎌倉幕府の記録書によりますと後段、佐藤基治は厚免を被って**本所（大鳥城）**に帰ったとあります。(奥州合戦の際に芋名月の夜、落城の伝承もあり）佐藤基治は生き延びて大鳥城に戻った可能性がありますが、ただその後、翌年１月に**大河兼任の乱**が起きます。これは八郎潟の東にいた平泉方、在地の武士ですが、平泉の藤原氏滅亡後、関東武士の支配になった後、その支配のやり方が強引であったため、**反抗の乱**に至ります。頼朝は慌てて、和田義盛など鎌倉軍を追討に送るのです。この乱のため、それまで放免していた名取郡司や熊野別当を追放します。その影響のため佐藤基治も追放処分になったのではないかといわれています。ですからその結果、系図を見ますとこの後の南北朝時代に**佐藤清親**なる人物が出てくるのですが、この人が信夫佐藤氏の嫡流筋だと思います。

系図からすると佐藤基治の弟**師泰**という人の系統です。ですから、基治は追放され失脚して、弟が残ってこの系統が嫡流筋になったのだろうと私は考えているところです。佐藤氏は奥州合戦石那坂の戦いには敗れはしたものの一族の誰かは残り、鎌倉時代、合戦前の３分の１ほどの所領で信夫の庄に在地したようです。信夫北郷といわれる松川以北、摺上川以南を所領としていたと考えられます。建治元年（1275年）**六条八幡宮造営注文**という記録が残っています。そこには**信夫右衛門入道の跡**として５貫文が記されています。頼朝の先祖の為**義邸**の八幡宮造営に鎌倉御家人に寄付の割付をしたのです。この人が佐藤氏の子孫のようなのです。ですから鎌倉時代を通じて**佐藤氏は滅亡することなく鎌倉御家人であった**ことが分かります。当時、伊達氏は鎌倉御家人として１５



建治元年（1275年）6月　鎌倉幕府が御家人らに京都六条に所在した六条八幡宮の造営の際の費用を割り当てた造営注文書、その中に陸奥の国、出羽の国の御家人が列記され信夫右衛門入道の名が記されている。



貫目の寄付ですので、大雑把にみて佐藤氏はその３分の１の勢力だったのかなと思っています。

鎌倉幕府滅亡後、南北朝時代になります。南朝と北朝に分かれて戦いになるわけです。1333 年に鎌倉幕府が滅亡し、1335 年建武２年足利尊氏が建武政府に反抗するようになります。したがって後醍醐天皇とは敵味方となってしまいます。信夫佐藤氏は伊達氏が南朝についたので、失地回復の願望もあり北朝につきます。尊氏は奥州大将として一族の斯波家長を派遣してきます。家長は鎌倉で北畠顕家との戦いで討死するわけです。その後、奥州大将には石堂義房が就きます。信夫佐藤氏はこうした北朝軍に従い、各地を転戦、奥州の各地から伊勢、山城、摂津、播磨と全国各地で戦いました。1346 年佐藤氏の嫡流と考えられる**佐藤十郎左衛門清親**が、自分の軍功を奥州管領府に提出します。それは見返りとして恩賞を求めているわけです。なかなか戦っても恩賞が貰えない、私も老齢になってきます。早く恩賞をということで**軍忠状**を提出しています。結果、1353 年佐藤清親の子息基清がいるのですが畿内を転戦し、伊勢国一志郡に地頭職を得るのです。ですから佐藤氏はこの時点で**嫡流筋は伊勢の方に**移ってしまうことになります。ですから信夫の地には嫡流はいなくなり庶流(本家から別れた家柄、分家)の人たちがいたものと考えられます。したがって、だんだんと衰退していったのだろうと思われます。1378 年**佐藤基清**は子息の**愛菊丸**に信夫の庄北郷の譲り状を与えます。ですがこの時、南北朝の動乱で実質的な支配は出来なかったと考えられます。1383 年、伊勢国に移ってから 30 年後ですが、すでに奥州信夫の庄の支配は出来ない状況の中、なんとか失地回復したいということで、室町幕府に訴状を提出したり、裁判で所領回復を狙ったのですが、実力の裏付けがなければ失地回復は出来ないのが実体のようで、益々佐藤氏は衰退していったといわれ信夫の地、北郷の**佐藤氏一族**は、伊達氏の圧迫等もあって、武士を捨てていった者、他家へ仕官した者、さまざまな選択をしていったのだろうと思います。15 世紀を通じて、佐藤氏は本当に伊達氏の圧迫ゆえに、武士を捨てて農業をするという方が多かったと思います。私は前に、**飯坂町五郎兵館**を調べに行ったことがあるのですが、たまたまそこを通りがかった人に、ちょっと聞いてみたら、俺は佐藤氏の子孫なのだと、**大越五郎兵衛**(武士)というのだけども、大越氏はやはり名前を佐藤に後から変えたそうで、昔の話を聞くと伊達氏の圧迫を受けて、先祖は武士を捨てて百姓になったのだという話をしていましたので、おそらくそういう流れを裏付けるものかと思っております。

以上、時間でありますので終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

◆ 閉 会 点 鐘　　会 長

〔 古文書関連はゲストスピーカーの但木様より提供 〕

飯坂の歴史を辿る　～～ シリーズ 最終回　第 20 回 ～～

『 今は無き 銀杏の農林省蚕糸試験場が 日本の養蚕 を変えた ！』

◆ゲストスピーカーの紹介　　飯坂ロータリークラブ広報､会報委員会　副委員長　篠木勝司　会員

このシリーズは､『旧湯野村の刈谷藩陣屋の姿』シリーズ第１回から始まりまして、その後３年半続きました。今日はシリーズの最後 シリーズ第20回 を守谷さんにお願いをいたしました。守谷さんは教育委員会で今回発刊した「福島歴史絵巻」という福島市内の歴史に関する本の編纂にも携わっておられます。福島市内の信達平野における明治､大正､昭和の養蚕について研究された方で第一人者だと市職員の方にも聞き及んでおります。

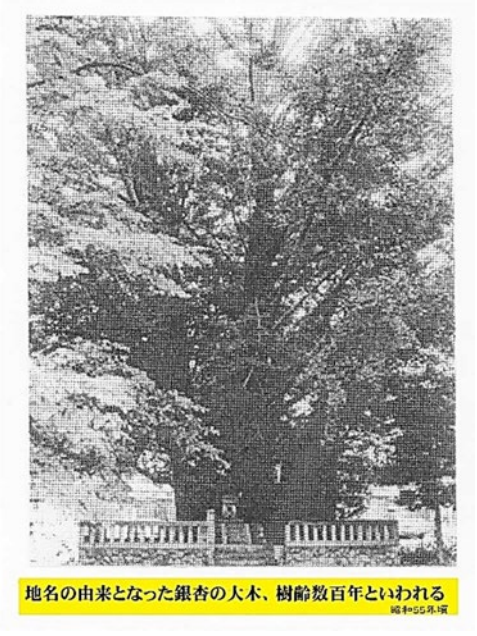
信達平野が養蚕産業として繁栄したのは、銀杏にあった旧農林省蚕糸試験場があったからといわれています。今の子供達には分からないと思います。私は今でも覚えております。桜並木の砂利道の先に赤茶の縦格子の門扉があり、平屋根のヨーロッパ調の白い建物に赤の瓦葺きであったことを思い出します。改めて歴史を辿りますと蚕糸試験場の偉大さ、そして信達平野の産業の要であったと感じられるものであります。今日は、守谷さんにそのへんも含めて詳しくお話を頂きたいと思います。

又、これは子供達にもこの本を通じて継承出来るお話だと思っております。　宜しくお願いいたします。

◆ ゲストスピーチー　「銀杏の研究が日本の養蚕を変えた」　福島市史編纂室　守谷 早苗　様 (2017. 6. 8)

改めまして、皆さんこんにちは。福島市史編纂室の守谷早苗と申します。親から“早苗”と付けられまして、今年で６５歳になりますが、20 歳になるまで非常に苦労しました。とにかく人前で名前を呼ばれるというのが本当にいやでした。教員になって「早苗ちゃん」と生徒がよく呼びました。覚えてもらいやすいので教員になってからは非常に良かったなと、ただなかなか名字の方を覚えてもらえなくて、３年を指導した生徒に「早苗ちゃん、名字何ていうの？」と言われ、ちょっとがっかりしたことがありました。

先ほどは過分なご紹介をいただきましたが、養蚕製糸業については、昔博物館で学芸員を務めていた時にも担当しており、それ以来３０年関わっております。今の支所がある所、福島市飯坂町中野字銀杏１５の２に本部があった農林省の蚕糸試験場飯坂支場は最後に東北支場で東北唯一の研究所になりました。あそこは区画整理で住所が変わりまして、今は福島市飯坂町銀杏で中野が消えてしまいました。これは非常に残念な事で、やはり中野という江戸時代からの村名が付いていることで、どこの村にあったか、どこの場所にあったかというのがはっきりします。最近は旧村名を省く傾向があって非常に残念だと思っております。


地名の由来となった銀杏の大木、樹齢数百年といわれる

福島市の繁栄というのは、なんといっても養蚕製糸業によるものです。明治 15 年に日本に初めて日本銀行が開設され、しばらくして出張所が東北地区で一番目に福島に出来ました。数年後の明治 44 年に全国で７番目の福島支店（ちなみに東北では秋田支店大正６年、仙台支店が 18 番目の昭和 16 年開設）に昇格して開設されました。日本銀行というのは発券銀行です。では明治１５年以前には誰がお札を出していたかというと、明治５年に国立銀行条例が制定され、株式会社の国立銀行が出来ました。日本で６番目の第六国立銀行に福島さん

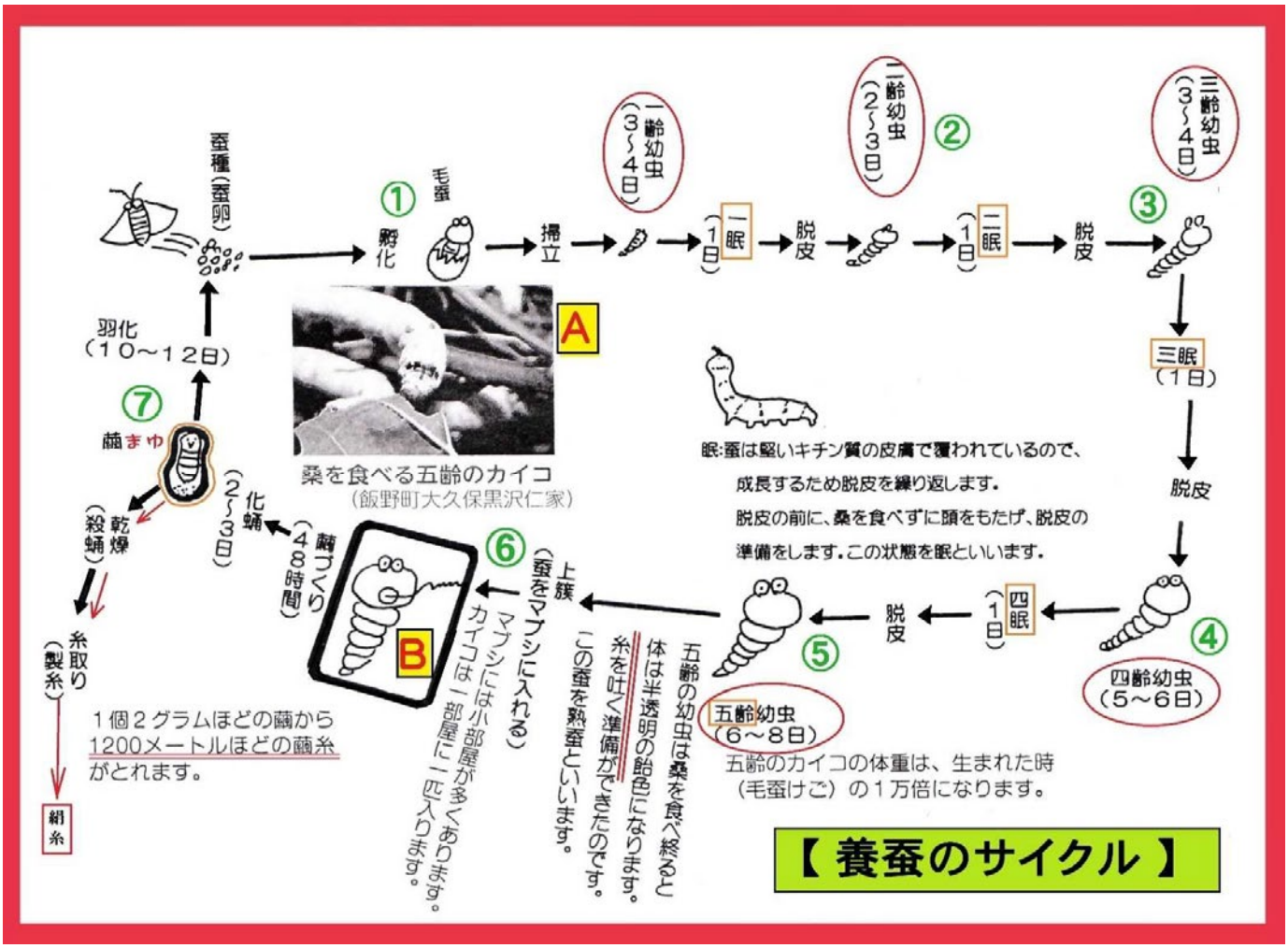
現在の銀杏の大木と乙和稲荷神社

と言う人が頭取をしています。当時は、全国で約１４０の国立銀行がありましたが、福島にはもう一つ**百七銀行**という国立銀行が出来て、そこでお札を出していました。信達地方にはもう一つ国立銀行があり**百一銀行**が梁川にありました。やはり、**信達の養蚕製糸業で得た富がみんな福島**に来るわけです。福島が商業、金融の中心地でした。その明治以降、県庁移転問題が度々起きます。福島が頑張れたのは商業、金融の中心地だったことが大きいのです。

当クラブの会長さんも安斎果樹園ということで今はフルーツ王国になっていますが、産業構造の転換は時代の趨勢で、当然起こる事ですが、そうはいっても福島の繁栄の基礎をつくったのは**養蚕製糸業**です。では福島に養蚕製糸業を思い出させる、教えてくれる、そういう施設があるのか。例えば、川俣町にはシルク博物館があります。伊達市霊山町も旧泉原小学校を**養蚕民俗資料展示室**に作りました。福島にはまだありません。非常に残念だと思います。先月、銀杏の試験場跡に行ってきました。写真に有りますが地名の由来となった銀杏の大木です。右の方の写真ですが乙和稲荷神社が出来て、４、５年前に大風が吹いた時に切ってしまったという説明がありました。この銀杏の大木がひとつのモニュメントというか、試験場の象徴だったわけなのです。私は非常に残念だなという感じがします。

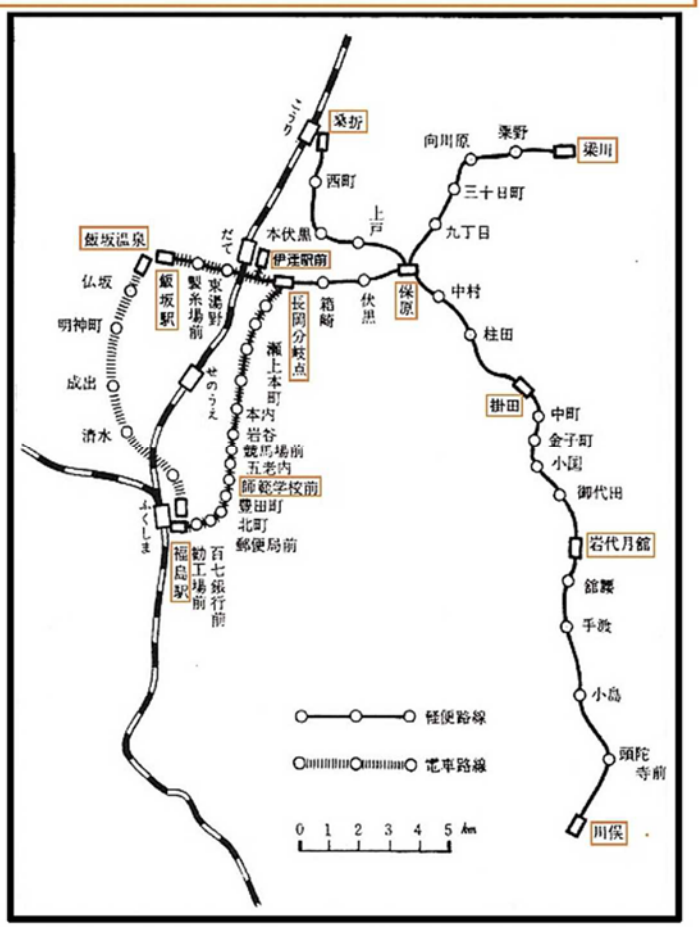
やはりあそこに昔試験場があったという名残は、蚕の供養碑がひとつあります。それだけです。あとは乙和神社の説明板の中に数行昔ここが試験場跡だったという説明が書いてあります。今日のタイトルは**「銀杏の研究が日本の養蚕を変えた」**としましたが、それだけの研究所が東北で唯一あそこにあったということは飯坂の誇りだと思います。あの公園も素晴らしい公園だと思いますが、あそこの中にやはりきちんと説明をして、説明板をぜひ作っていただきたい。ロータリークラブさんで作っていただきたいと思いますが、今日はそんな養蚕の話をしていきたいと思います。

蚕は赤ちゃんのお肌を触っているような肌触りです。ちょっと見ると「気持ち悪い」とか「ぬるぬるするのでは」と思いますが、全然そんなことはありません。本当に耳たぶを触ったような柔らかさです。人差し指ぐら



A 最大に育った食欲旺盛な五齢カイコ　　B マブシの小部屋に入り、口から糸を出して繭作りを始めます。

大正15年の飯坂軌道と福島電気鉄道路線図（ふくしま歴史絵巻3）



いの大きさに育ち A 【養蚕のｻｲｸﾙ】参照 ⇒ B ⑥繭作り⇒ 化蛹（さなぎ変化）⇒ 羽化（うか）⇒蚕種（さんしゅ）⇒ ① 孵化⇒ 一齢幼虫⇒ 一眠脱皮⇒二齢幼虫⇒⇒ 五齢幼虫（18～25日かけ脱皮を繰り返しながら成長します）⇒上蔟⑥（じょうぞくまぶしにいれて繭を作る）のサイクルとなります。

蚕は固いキチン質（昆虫の皮下物質の一種）の皮膚で覆われているので、脱皮を繰り返して新しい柔らかい皮膚になって成長します。脱皮をするとその時は桑を食べるのを止めて、眠（みん）という状況に入ります。首を上げて一昼夜じっと待って脱皮します。二齢（② 養蚕のｻｲｸﾙ参照）になって、２，３日するとまた眠に入り１日じっとして桑を食べずに脱皮の準備をします。脱皮をして三齢（③ 養蚕のｻｲｸﾙ参照）になり、また脱皮をして四齢になり、また脱皮をして五齢（⑤ 養蚕のｻｲｸﾙ参照）になります。五齢の蚕はものすごい勢いで桑を食べます。

そこに書きましたように、**五齢の蚕の体重**は生まれた時の**１万倍**になります。そのぐらい大きくなるのです。逆に言えば、生まれた時の蚕はものすごく小さいのです。その生まれた時の蚕に桑を食べさせる時に、大きな固い桑の葉では駄目なのです。だから、養蚕農家の方は、天候を見て温度管理をしながら、今年の桑の若芽がいつ出るか、それに合わせて蚕の卵を催青（さいせい）箱という箱に入れて温めて孵化させます。そういう温度管理が非常に難しいのです。この話を覚えていてほしいのですが、**五齢になった蚕は食欲旺盛で養蚕農家の方は**２、３時間おきに桑を採ってこなくてはいけないので**寝てる暇もありません**。今は福島市で養蚕農家は５軒しかありません。１０年前に飯野町と合併しなかったら福島市はゼロなのです。去年の秋に見に行ってきたのですが、桑の葉を取るには**条桑育**（じょうそういく）と言って枝ごと刈ってきます。会長さんの話だと昔は指に爪をつけて桑畑に行って桑の葉っぱだけを採ってきたから大変だったと、そうやって五齢になって、糸を吐く準備が出来ると蚕は透き通ってきます。そうしたら今度は（まぶし）（⑥ 養蚕のｻｲｸﾙ参照）というわらで作った網構造の物（次の頁参照）に入れます。ここで繭を作るのですが、今は回転まぶしといって蚕が入るぐらいのダンボールで出来た個室がたくさんあるものを使います。それに上から蚕を落とすと、蚕は必死に繭まって、部屋に入っていきます。蚕は非常に孤独が好きなので、一つの個室に１匹しか入りません。時々、仲の良い蚕がいて２匹入る時もありますが、２匹入ると糸が絡まるのでそこから糸は取れなくなります。これを玉繭といって、そ

昭和１１年福島市関係地図（蚕業試験所と製氷会社）

旧農林省蚕糸試験場東北支場 構内建物図

① 庁　舎
② 栽桑、養蚕、土壌肥料研究室
③④ 宿　舎
⑤ 経 営 蚕 室
⑥ 人工飼料育研究室
⑦ 病理研究室
⑧⑨⑩ 蚕品種改良研究室
⑪ 種蚕保護、冷蔵庫室

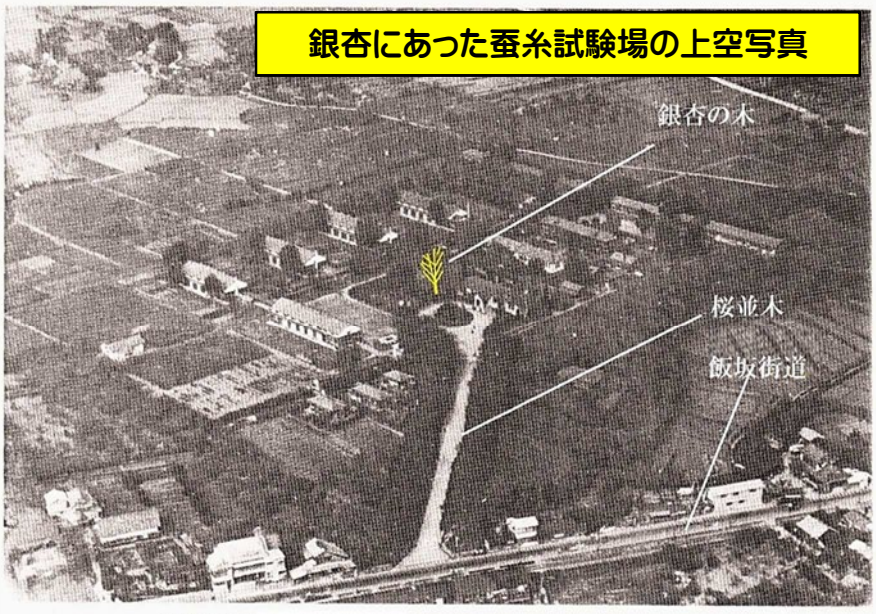
れはあとで**真綿**にします。

まぶしに入った蚕は４８時間糸を吐き続けます。首を八の字に動かしながら、壁に糸をくっつけて、だんだん中に入っていきそれで繭が出来上ります。繭の中で蚕は**蛹**（サナギ）に変態（蛹化、ようか）します。そのままだとサナギが蛾（ガ）になって、繭を食いちぎって出てきます。それでは糸が切れてとれなくなってしまいますので養蚕農家は自分の家で糸を取ったり、もしくは製糸場に繭を売る場合、その前に中のさなぎを蒸気や熱で殺処理します。卵をとる農家は、そのまま成長させて蚕の卵を取ります。ただ、卵を取る農家は蚕の段階で**オスメス全て振り分けます。その技術はすごいものです。**オスは卵を産まないので種蛾としてオス数匹だけを残して、あとは処理し繭だけ残し糸にします。メスは紙に置いて卵を産ませます。

私は**「吾妻の恵み」**と言っていますが、信達の発展の基礎は**養蚕と米**で、吾妻の恵みだと思います。吾妻の山々からくる水は田に入り稲を育てます。もう一つは冬の乾燥した空気です。ハエは桑に卵を産みますが乾燥した冷たい風がそのハエを生息させません。だから信達の桑はその寄生虫の**ハエの卵**が無いのです。それを食べて成長する蚕は健康な蚕です。ハエの卵がある桑を食べる蚕はお腹の中でそれが孵化して蚕が死んでしまいます。だから**吾妻から降りて来る冷たい乾燥した空気**が非常に役立ったのです。

前頁に、軽便鉄道(後で路面電車になる)の線路図があります。福島を出た路面電車は伊達の長岡に行きます。長岡分岐点から湯野に行く電車と東に行って**保原**から北に行って**梁川**、それから西へ行って**桑折**、**掛田**を通って**川俣**に行く電車。これは何のために結んでいるかというと全部養蚕、製糸、織物業の**在郷町**なのです。

現在、福島市は２８万人以上人口がありますが大正元年で福島市３万２０００人でした。次に信夫郡、伊達郡で２番目に大きい町は川俣町で７、７００人、３番目が梁川町で６、２００人、４番目が保原町で５、３００人、５番目が小手川（月館）で４、９７６人、６番目がここ飯坂町



旧農林省蚕糸試験場 東北支場全景　昭和55年頃

〔 第 20 シリーズ全写真。飯坂南部区画整理審議委員会 副委員長提供 〕

昔ながらの丸型ワラダに桑の葉を入れて蚕に食べさせている模擬姿を見学する篠木会員（梁川町"蚕の里"）にて

で４、７８０人、７番目が霊山で４、７００人、８番目が半田で４、７００人、９番目が福島の野田で４、６００人、１０番目が伊達伏黒で４、６００人。ベスト１０の中で７つは伊達郡の町村で今のバランスとは違います。即ち**伊達郡**は**養蚕製糸業**、それから**川俣の織物業で栄えて**いたわけでした。今申し上げた町々を繋いでいるのがこの路面電車です。この町から福島に富が集まりました。では何で**湯野**（飯坂）に来ているのか。伊達郡の人が儲かって休みに遊びに行くのが飯坂なわけだったのです。ですからここ飯坂へ来るためにみんな頑張ったのかもしれません。**その飯坂の繁栄の基礎**は養蚕製糸業です。

明治から昭和にかけて、桑畑の面積が増えていません。しかし繭の生産量はものすごく増えてきます。明治４３年で総面積が４万ヘクタール、繭生産量は８、８００トン。それが昭和１４年で桑の面積が３万４０００ヘクタールと下がっているのに繭の生産量は１万７５２５トンと倍になっています。すなわち、明治４０年頃からこれまでは春に養蚕する**春蚕**（はるこ）の３月がほとんどだったのが、**夏蚕**（なつこ）、**初秋蚕**、**晩秋蚕**、**晩々秋蚕**、この頃には晩々秋蚕までいったかどうか、とにかく秋の養蚕まで一年での**養蚕回数**が多く出来るようになりました。

なぜそれが出来るようになったのかというと、福島の町の中に養蚕に関連する企業が、当時点在しており福島中学校（今の福島高校）の前に**鐘紡製糸**があって、また**羽二重会社**があり、**絹燃会社**もありました。それから**蚕糸試験場**があります。これが今の付属小学校のところで、蚕糸試験場は農林省ですから国の土地です。だからそれが、飯坂に来たため、ここが空いて付属小学校という国立の学校が出来たのです。

鐘紡製糸の脇に**製氷会社**がありました。福島製氷会社は結構早くから出来ていまして、昭和３７年頃まで営業しておりましたが、この製氷会社は何のために必要だったのか。それは**氷室**（ひむろ）といって、蚕の卵を冷やすため氷室が必要だったのです。蚕の卵は普通６月ごろ生まれますが、卵は一度寒い冬を過ごして、次の暖かいシーズンになって初めて孵化出来るのです。つまり**一回寒さを経験**しないとだめなのです。夏蚕（なつこ）、初秋蚕、晩秋蚕、晩々秋蚕は、この寒い時期を長くして秋まで続け、秋に春だよといって秋に孵化させるのです。夏を通して秋まで卵の状態で保存させるために**山の風穴**や**人工的な氷室**に氷と一緒に卵を保存していました。（当時の**蚕種貯蔵用風穴経営**は湯野風穴、中野風穴、堀江氷室(渡利)などに有ったといわれる）そういう技術ができるようになりました。

ただ、生まれたばかりの蚕には柔らかい桑を食べさせなければならず、秋に養蚕をするためには秋に桑が若い芽が出るように桑を改良しないといけません。だから蚕糸試験場は、そういう桑の改良を一生懸命したわけです。それが明治４０年頃から出来るようになりました。**明治４４年に原産種製造所福島支所**を福島市腰ノ浜（今の付属小学校）に開設します。これは大正３年に蚕糸試験場福島支場と改称され、昭和９年には蚕業試験場福島支場**飯坂出張所**と名が変わり、この銀杏に出来ました。その後蚕業試験場は蚕糸試験場と改称され、昭和１６年飯坂出張所は飯坂支場として独立するわけです。戦後の昭和２３年に飯坂支場は福島支場と合併し、福島支場は飯坂に移転します。昭和２９年には今の付属小学校は空き地になりました。昭和３３年には蚕糸試験場福島支場は、蚕糸試験場東北支場と改称します。**東北の養蚕製糸業の中心、研究の中心地**が**ここに**なるわけです。

どういう研究をしていたかというと、**栽桑**研究室、桑の**品種**の育成、桑の**栽培法**などの研究、それから**養蚕研究**室、蚕の**飼育**方法、養蚕**経営**に関する研究、蚕品**種改良**室、蚕の品種の改良に関する**研究、土壌**肥料**研究**室、桑園の土壌及び**肥料に関**する研究、それから**人工飼料育**研究室、人工飼料による蚕飼育法に関する研究、私は博物館で学芸員をしていました昭和６０年頃に梁川の産業試験場に行きましたがやはり梁川の産業試験場も人工飼料の研究をしていました。昭和６０年になって、**稚蚕**（ちさん）つまり、一齢から三齢までの子供の蚕が人工飼料を食べるようになりましたが、まだ成虫には人工飼料を食べさせることはできていませんでした。この人工飼料が出来れば、桑を取る苦労が無くなり養蚕農家は一番大変な**五齢**の時期の桑を取ることから解放されます。だから人工飼料を作るというのは悲願だったわけです。

では、この蚕糸試験場東北支場、飯坂銀杏の蚕糸試験場での主な研究と**発明実用新案**をお話ししましょう。昭和２９年には桑樹伐採枝条の利用。これは枝のまま食べさせるその様な研究です。昭和４２年は多段階循環式蚕糸飼育機。それまでは部屋に３０センチ間隔で蚕の棚を作ってやっていたのですが、そうすると桑をやる時にい

ちいち出さないといけないため、それがなくて済むように観覧車のように回る大きなバケットの飼育機を発明しました。

昔はわらで作った上記の様なアミ構造の物（まぶし）に蚕を入れて繭を作らせていた。（現在はダンボール製の繭の大きさのワクに作らせる構造になっている。）

昭和４５年に人工飼料の水分含量が家蚕成長発育に及ぼす研究。蚕飼育箱自動搬送装置や、移動式船底型蚕飼育台。昭和４８年に桑の枝条伐採機、刈払型収穫機、蚕の人工飼料。家蚕人工飼料連続加熱装置。昭和４９年には二重蚕飼育装置。昭和５３年は稚蚕用人工飼料です。こういう特許を取っていました。

そのままいけば日本の養蚕を本当に変えたはずでした。平成元年福島県の**養蚕農家は１万戸**ありました。ところが、そこからがぐっと落ちて平成５年には半分の５０００戸。平成７年には２０００戸、平成８年には８３０戸、平成２７年では県内全部で４８戸。そして**福島市内では飯野町の５軒**だけになってしまいました。なぜなのでしょう。シルクの需要はありました。これには**紡績と製糸**が深く関係していたのです。産業革命は綿糸紡績から始まりました。綿糸紡績は繊維が非常に短いため、摘んでよりをかけて繋いでいくのです。

これは機械で出来たため綿糸紡績、木綿糸は機械を使って早くできました。ところが**養蚕製糸は糸取り**なので、ものすごく熟練の技が必要だったのです。明治になって、日本でも器械製糸場が出来ますが機械と書きません。器と書きます。道具なのです。これは製糸工女さんの技術によるところが多かったのです。昭和の始めからありましたが、絹紡績といって、中国から安い繭を買ってそれを紡績してしまう方法がありました。

これは糸を取らないで綿にしてそれを紡績します。だから日本の高い優秀な品質の繭は必要無くなってきて、外国製の繭で紡績をした方が早くなってしまいました。福島で今製糸会社はありませんが最後まで残っていたのはたぶん霊山の**阿部シルク**でしょう。あそこは中国から繭を買ってきて紡績をしていました。そういうことで養蚕農家が減っていったのです。これはしょうがありません。時代の趨勢ですから。ただやはり何かの形で残したいと思います。

この間福島大学の先生とお話しました時、３９歳の若い江戸時代の研究をしている先生ですが、福島は全然学校で養蚕をやらないのですねと。僕は東京の北千住ですが小学校の時に蚕を飼っていましたというのです。やはり民家園だけではなくて学校でも蚕を飼ってほしいです。大学で教える機会があって繭を持っていって、繭の中をカッターで切らせました。女子学生はだめです。中からサナギのひなびたのが出てくるともうダメなのです。見るのもいや、そういうことに慣れるという環境が必要ですね。**福島の繁栄は蚕様**のおかげですから、今は猫稲荷があちこちにありますが、もともと猫はねずみを捕ります。ねずみは蚕の天敵なのです。蚕を食べますから。養蚕農家は天敵であるねずみを食べてくれる猫を神様扱いしました。**猫稲荷は養蚕農家の信仰**なのです。そういったところも含めて、養蚕と言うのは福島の経済歴史文化すべての基本になっているということを改めてやはり教えていかなくてはならない。そういうものに触れる機会というのを作っていく必要があるのではないかと思います。

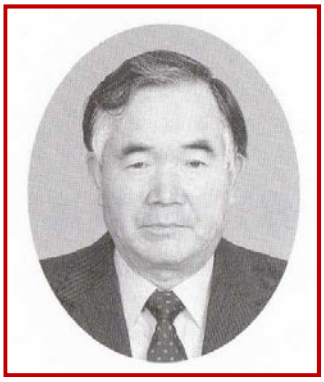
今回のお話が本の最後ですので、そういったこともぜひ付け足していただいて福島の繁栄と銀杏の蚕糸試験場跡にここはこういう素晴らしい研究をして、**日本養蚕製糸業を支えた研究所があった**ということをぜひ説明板を作って継承していただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

◆　閉　会　点　鐘　　会　長

【附記】

銀杏の『飯坂南部区画整理は100年200年先を見つめた計画』であった。



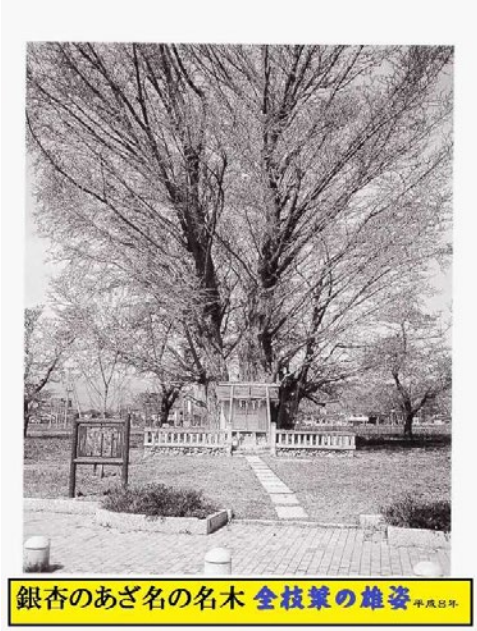
佐藤董一氏　区画整理の想いを語る　（2017.7.15 対談）

元 月崎町内会　会長
元 飯坂南部区画整理審議会　会長

佐藤氏：区画整理事業の完成が平成９年だから、今では２０年過ぎています。２０年で桜の木が成木になって、花見に毎年たくさんの花見客が来る大変な賑わいの場所になりました。この話はパークゴルフをやっている人達も話がいつも出ます。

この花見の場所については、区画整理の時に審議委員の人がどうもこのままでは寂しすぎるので、桜の木を植えて花で賑やかになるようにと、**又昔からの地域の人々に親しまれていた蚕糸試験場桜並み木通り**を再現してはどうかという話を提案されました。 その時には、だれも反対する者もいなかったのですが、大して関心の無い皆さんのムードでした。私は支所の東側の道路両側に桜並木として桜を植えて欲しいと区画整理課に申し入れました。 いろいろ難しい問題がありましたが道路の両側に桜を植える事に決定したわけであります。

今、復興住宅が出来て、益々あの付近の風情が整った。これはやはり先を見越す人でないとなかなかそういう話は出来ませんでした。今考えるとあのまま草原なら見通しは良いが、物足りない所になっていたでしょう。



飯坂町の 100 年後の繁栄は**花水坂駅から、銀杏、支所界隈である**という人がいる。確かに明治末期から昭和初期頃までは**横町、立町**は**豪商**が連なっていたといわれ、戦後は**“花町、飯坂温泉”**として**千人風呂通り、花岡町、赤川等**が花町や大型ホテルなど出来て昭和 60 年頃まで栄えていました。

（ 最大宿泊客数は S45 年度 / 177 万人 / 飯坂観光協会調べ ）

その次は、どうなるのか？？……100 年後の桜並木が楽しみです。

きき手：町の繁栄は時代と共にですね。桜並木発案の時、審議委員だったのですが**『古い桜並木保存会』**などが出来て、私が古い桜並木を保存し、新並木に反対したように思われたが実際は**“ あるグループ ”**の反対でした。

私が言ったのは『古い桜並木の寿命はいいとこ 80 年か 90 年で木が腐って駄目になるから、これ以上このまま守って**保存だ　保存だ**と、言っていてはダメだと。

このままだと、区画整理事業計画が実施出来なくなって予算が他に回されてしまう。**飯坂の 100 年の計も駄目になる。**

それよりも“**新しい桜並木通り**”をつくろう』と、あの当時提案しました。

（ *提案時、皆さんに理解を得る為に、当時山岸に在住していた絵の先生にお願いして書いてもらった絵があります* 前ページ参照 ）

そして、佐藤会長がうまく取り計らってくれて決定した背景もあって、今は本当に景観が良くなっています。今は古い桜並木の古木が公園に少し残ってあるけれど、将来は無くなってくるでしょう。

あと、銀杏の話ですが、あそこの**大銀杏の樹**は当時の会議の時に切ろうという話も出たが、曰く因縁があるので残さないとだめだ。と決まりましたが何かあったのですか。？？

旧蚕糸試験場桜並木通りが乙和公園にわずかに一部が残っていて静かに花が咲いている。

佐藤氏：枝を切ろうとした時に怪我したり死んだりした人が昔出たそうです。剪定をしようとした時に足場をかけないで上り落ちて死んだり、剪定が終わったら病気になったとかで『**乙和稲荷様**の祟りだな』、と噂され頼まれてもやる人がいなくなってしまったようです。それは斎藤実さんも、私も直接に聞きました。この**銀杏の樹**は、頼まれても近在の人は剪定する人はいないのだそうです。

昭和９年に国の『**蚕業試験場 福島支場 飯坂出張所**』の工事が始まって、今の公園にある桜並木の古木も昭和９年に植えたそうで、現に祖父達から“**子孫に残そう**”と当時の中野村（現在の月崎、山岸、銀杏、梅津、八景）の近在の人達が手で植えたと聞かされている人もいるようです。その頃は小川橋から道路沿に**八軒長屋**付近（蚕糸試験場入口電車通り側に細長く８戸の長屋で当時は**有名長屋**、昭和初期？から平成２９年迄存続されていた。）までは６軒の民家だけだったそうです。銀杏の樹の下は石塚だったらしく**昭和１２年**に『**蚕業試験場**』は『**蚕糸試験場**』と名が変わり、当時の高須兵司所長によって神殿と囲いが現在の様にコンクリートで造られた経緯があるようで、一時期 **銀杏の樹** は国の管轄になり蚕糸試験場の管理となった事もありました。

きき手：新しい桜並木通りを作るには支所東の道路の両側に桜並木の植え込み緑地帯を計画するしかないという事で、会長と市役所に行って交渉し、あそこに植え込み帯をとって、桜の木の植込み計画を決定したわけでした。

しかし、その後１ヶ月ぐらいして、今度は桜並木計画の北側交差点入口の東側に防火用貯水槽を作るということで工事が始まろうとしていました。

右に移動したマンホールが分かる。当時の移動騒動が分から無かった様に４月なると両側に綺麗な花が咲く

せっかくの新設の桜並木通りの大事な北の入口の東側、桜３本ぐらいが無くなり入口が歯っ欠けになってしまう。これは大変と思い、すぐに会長に連絡をとり市役所に行って交渉し絶対駄目と変更を申し入れました。

右に移動したマンホールが分かる。　当時の移動騒動が分から無かった様に4月なると両側に綺麗な花が咲く・・・・・・・

しかし、市役所担当課は一度工事を決定したことは変更無理といわれたわけであります。

それでも**私達区画整理審議委員**は此れからの町作りの為、子孫たちに永遠に残る立派な町作りも一つの使命である、と訴えて立派な町を残したいのだと各担当の部署に数回にわたって会長と一緒に交渉を重ねました。しかし役所は事なかれ主義的なところがあり、我々の想いを感じることは全く無く、ついに最後の手段、飯坂南部区画整理工事を審議する審議委員数人で意見書を議会に提出して全員辞任するという強行策をとり変更を促しました。

そのかいがあって各部署の部課長も少しづつ方向を変え、最終的には私達の要望通り工事が変更され、現在の様な入口が歯っ欠けでない立派な『　高舘桜並木通り　』が出来た訳であります。

今考えれば強引だったので市役所職員に顔を悪くしてしまったが、あとで考えると良かったのではないかと思っております。

佐藤氏:役所と対決しなくていけないのが役員の立場だ。よっぽど頭の回転が良くないと出来ないし役人とは渡り合えない。

今度は木が太くなってお宮が潰されるということで、**お祭りのグループ**が*市役所にたのんだら役所が切ってやるから*ということで、幹の上の方をぼつぼつ切ったようで脇の太い枝しか残っていなく安心しました。

冬になると別世界の景観をかもし出す**乙和公園**

〔花水坂 安藤信夫氏 撮影提供〕

きき手：銀杏の木はどこにあったのですか。蚕糸試験場のどの辺だったのですか

佐藤氏：桜並木通りがあって、その先に重装な鉄の門扉の中、屋根は洋式赤レンガ、白の洋風平屋本庁の玄関があり、その前には小さなロータリーがあった。その本庁事務所左側奥あたりだったと思う。

祠があって、祠が一段高かったのです。その高いところに銀杏の木が植えられて**乙和稲荷様**の祠の後ろに銀杏の木があった。

神社は動かないので桜並木道路などより、想像するしかない。区画整理は 29 町 6 反 29 万 6000 平米面積が。蚕糸試験場の面積 9 町 6 反、9 万 6000 平米。全体の区画整理をやったら、面積が町 6 反、29 万 6000 平米になった。

〔 乙和稲荷について 〕

*乙和稲荷の起源は定かでないが、**乙和姫**〔 奥州平泉の豪族、藤原清衛の末子の亘里十郎清綱の娘で信夫の佐藤基治（大鳥城主）の妻、**継信、忠信**の母君 〕に関係しているのは確かである。*

*　**乙和姫**は信仰心の厚い人で稲荷様を深く信仰したという。その乙和姫を偲んで後世の大鳥城下の人達は乙和姫が信仰したお稲荷様に乙和姫を祀り**乙和稲荷**と呼ぶようになった。ここの銀杏の樹は根の太さから推定するとおおよそ 3～400 年ともいわれている。此の銀杏の樹は乙和稲荷の御神木で、枝切りをしてとがめられた人もいたという。*

養蚕業発展に貢献した農林省蚕糸試験場の跡地に建つ乙和公園の繭のシンボルの碑

きき手：公園に繭のデザインされた物がありますが、あれもこの**対談の本**に出して飯坂の皆さんに**意味**を知って貰おうと思っています。

佐藤氏：この信達地方の養蚕繁栄の要となる 研究機関『**蚕糸試験場**』がこの場所にあったという事を残そうと役所が繭のデザインで計画していたが繭のデザインで作れるのかと思ったが出来上がってみると素晴らしいデザインだったと思う。**公園内の碑**のために 100 **年** 200 **年過ぎても子孫に伝承されるもの**であり素晴らしいものだったとおもいます。

佐藤氏：地元で銀杏のイチョウの葉がみな落ちないと飯坂は雪が降らないと言われてきました。霜害に合わない場所を役所が『**蚕糸試験場**』に選んだ。銀杏の場所は桑が霜に合わない場所なのです。ある人が『**蚕糸試験場**』で５０人や６０人の職員で１０町歩も使っているのはもったいないからどこか移転しろ、と交渉したら役所では霜の降らない冷害の無い場所ならどこでも行きますと、そういう答えがあったそうです。区画整理の前に、目を付ける人はつけていて、あの広い土地を５０～６０人の人々を雇っているだけだ。トーアエイヨーは何百人もいるのにと、そういう企業誘致を考えた人もいた。

佐藤氏：完成までにはいろいろ難題があったが、当時の区画整理審議委員の人々の協力で素晴らしい未来に向かった事業を成し遂げたと思うし、この事業にたずさわった審議委員の一人一人が、今ふり返ってみて誇りを持っているのでは無いでしょうか。　本当に有難うございました。

きき手：やはり時代の趨勢の波だったのですね。

〔 飯坂南部土地区画整理審議委員会 副委員長より写真提

月崎、銀杏、八景の開発前の昔の姿

▲平成７年撮影

区画整理後の月崎、銀杏、八景の新しい姿

〔 飯坂南部土地区画整理審議委員会 副委員長より　写真提供 〕

メ　モ

メ　モ

我が郷土　飯坂の歴史を辿る
――2018年5月21日発行
発行　飯坂ロータリークラブ
福島市飯坂町湯野字新湯6（吉川屋内）
TEL　024-543-1433
印刷・製本　株式会社山川印刷所
住所　福島市庄野清水尻1-10
TEL　024-593-2221

ご感想をお寄せください

Rotary